

ちや 北 たん 谷 ぐすく 城

—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—

<付篇> 拾得遺物—伊礼原遺跡調査区内—

2010(平成22)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会



巻首図版1 北谷城 (南側より)



no.1 トレンチ (南側より)



no.2 トレンチ (南側より)



no.2 トレンチ 井戸(チンガー)周辺



no.1 トレンチ
A-3 グリッド西壁



no.1 トレンチ
C-4 グリッド
西壁と近代石列



no.3・4 トレンチ
C-3 グリッド
礎石と層序の状況



no.3・4トレンチ(C・D-3・4)
遠景



no.3・4トレンチ(C・D-3・4)
石列遺構1及び発掘状況



no.3・4トレンチ(C・D-3・4)
礎石の位置(人物)



no.1トレンチ(A-1)
落ち込み状況



no.3・4トレンチ(C・D-3・4)
石列遺構 1 の検出状況



no.1トレンチ(D-1)
石列遺構 1 と円形炭混じり遺構



土壙墓上部の堆積状況(B-3 グリッド西壁)



①土壙墓の検出



②埋葬状況



③人骨取上後(北側より)



④人骨取上後 - 俯瞰(南側より)



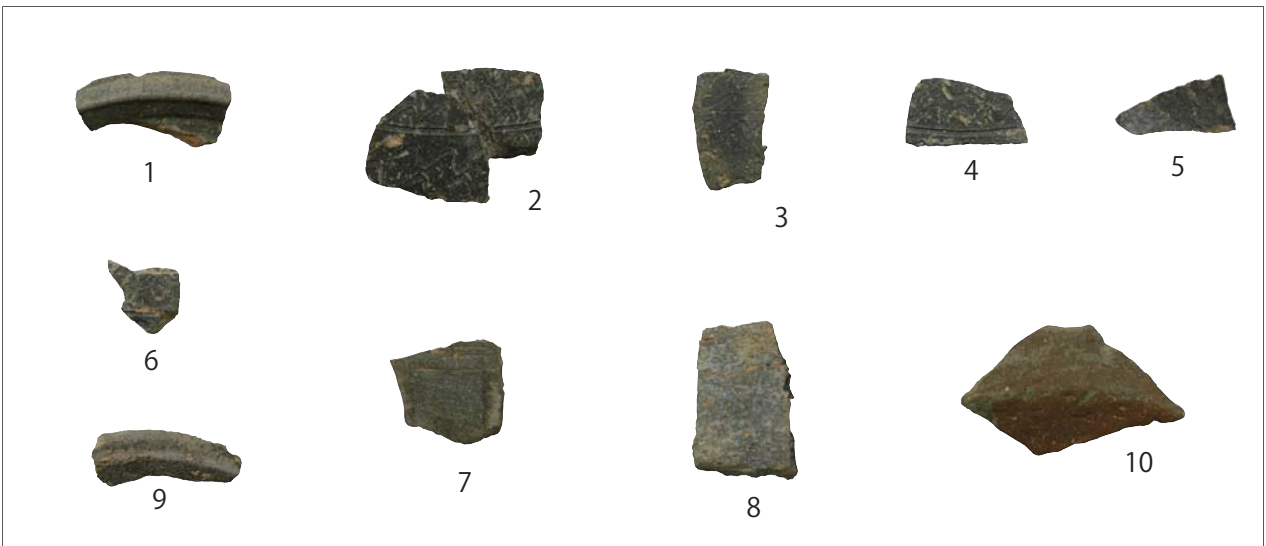
井戸(チンガー)全景



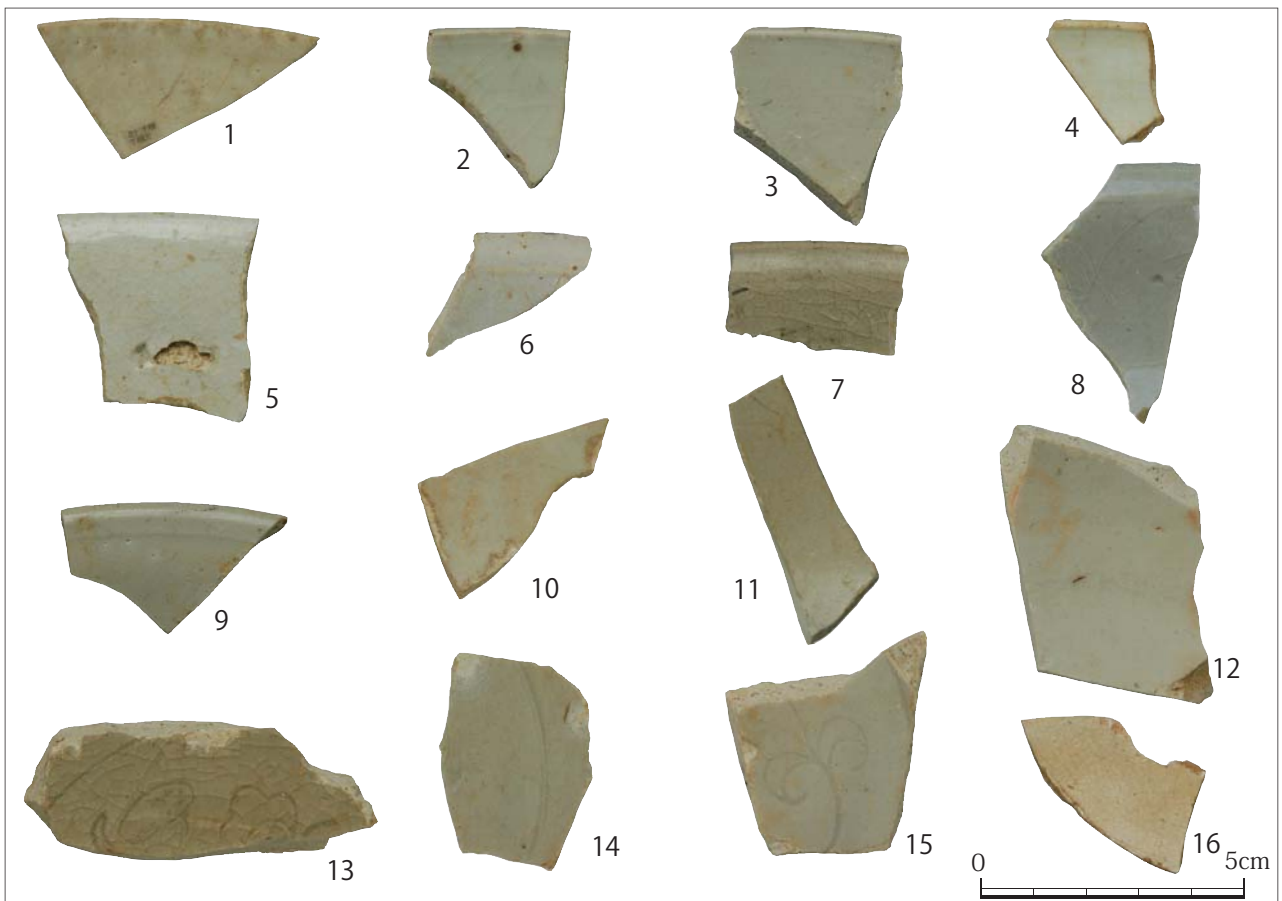
巻首図版7 no.2トレンチ 井戸(チンガー)復元工程



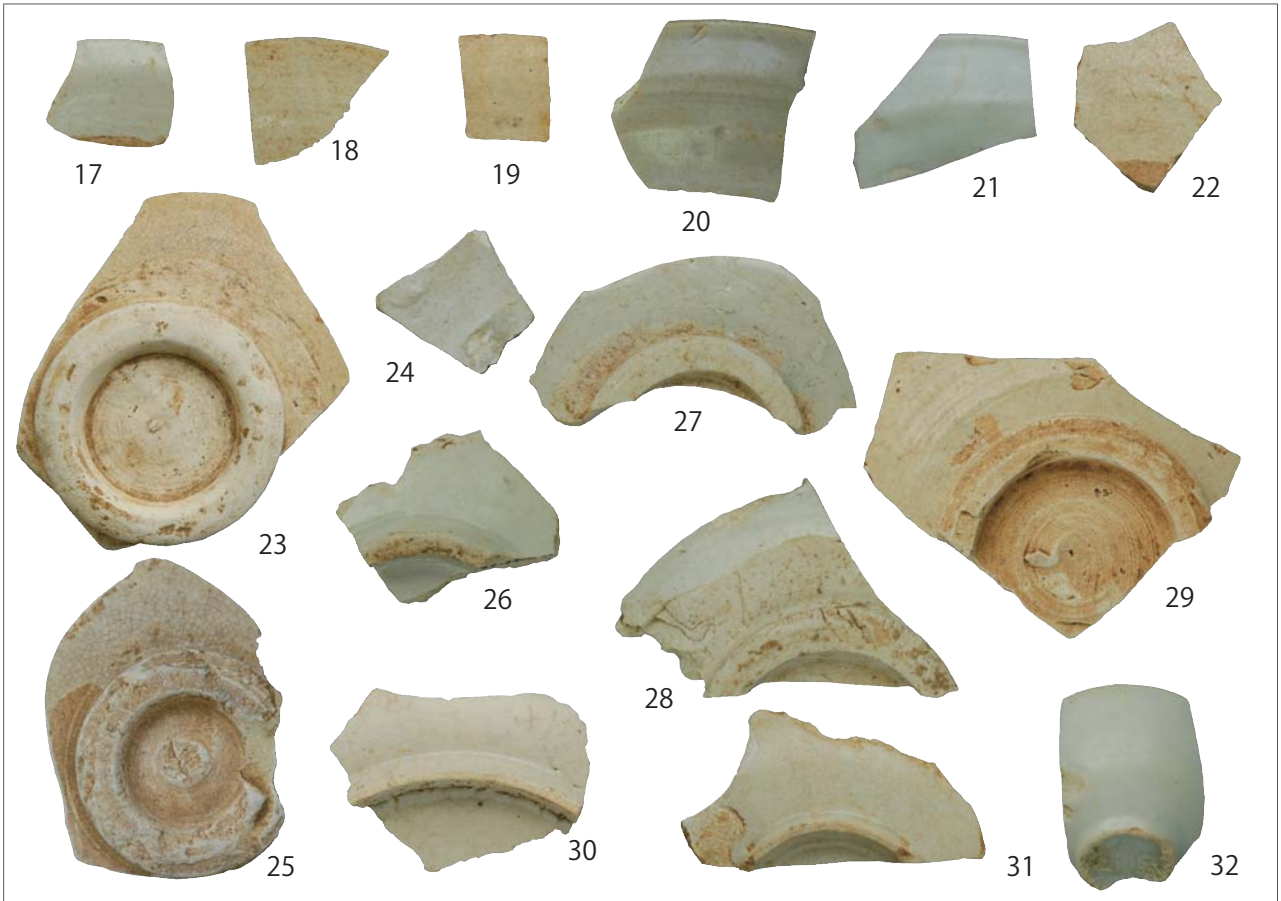
本土産陶器 (1:備前焼すり鉢・2:京焼系碗 内面・外面) 遺物番号は図版 28 と一致



巻首図版 8 カムイヤキ (中:外面・下:内面) 遺物番号は図版 16 と一致



卷首図版9 白磁1 (上:外面・下:内面) 遺物番号は図版17と一致



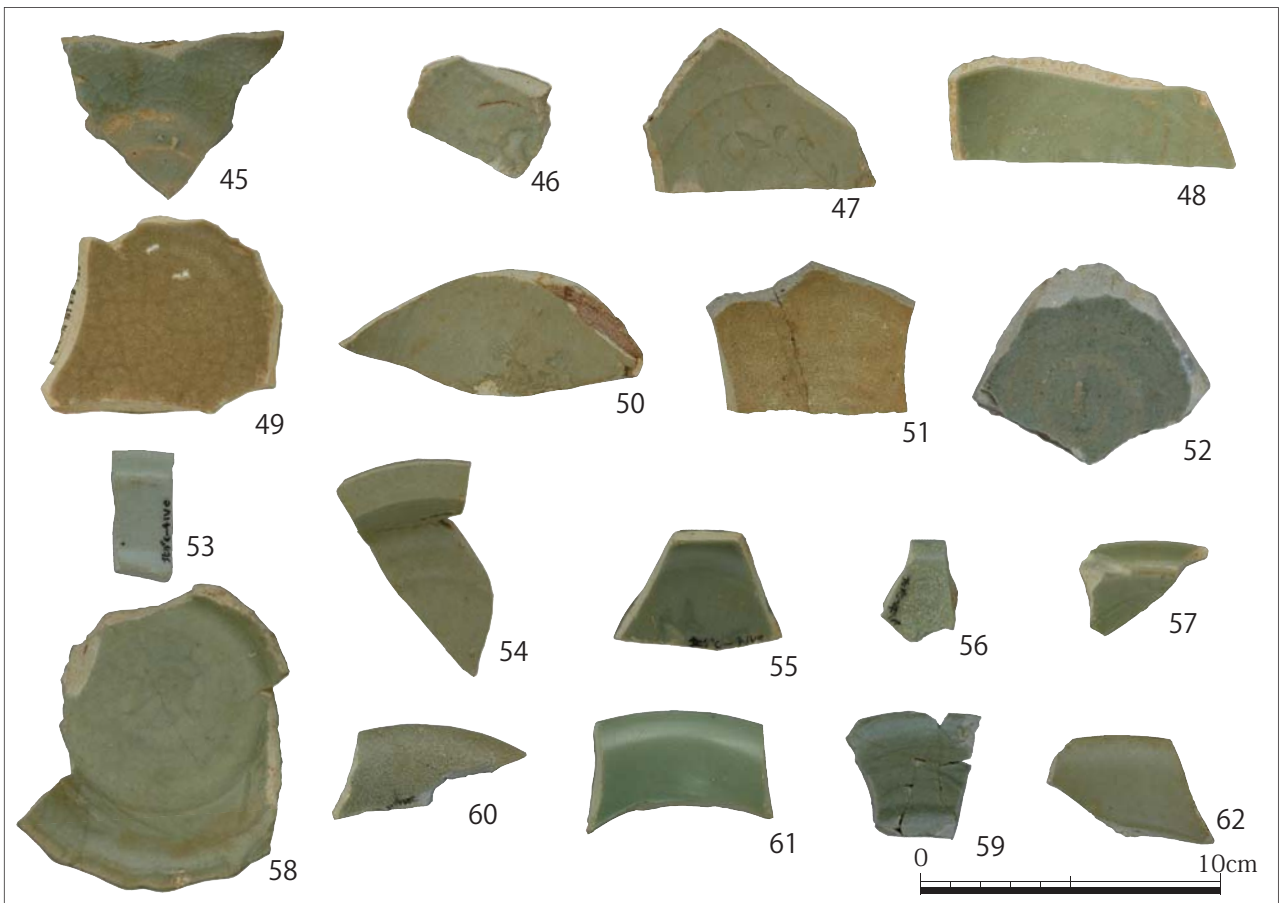
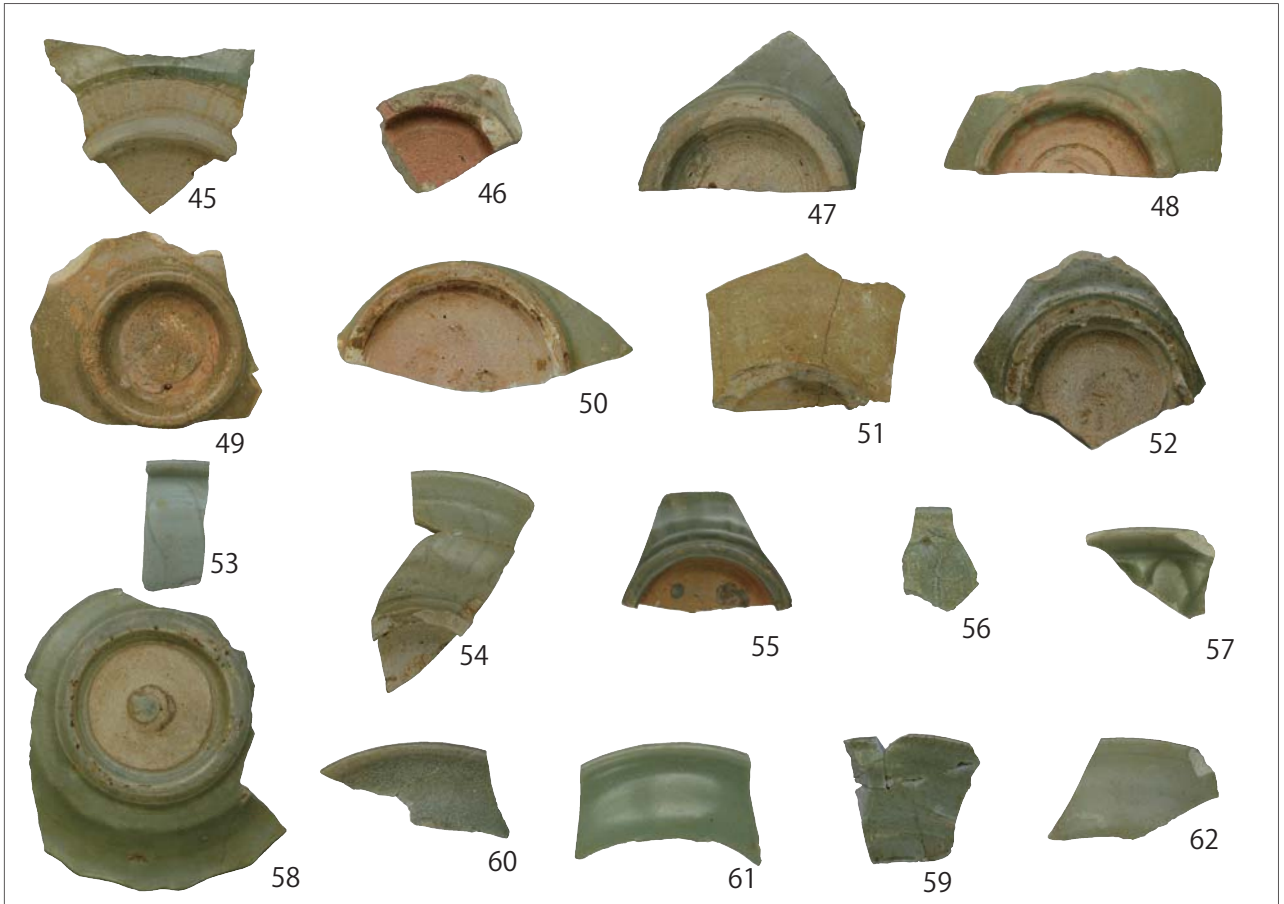
卷首図版 10 白磁 2 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 18 と一致



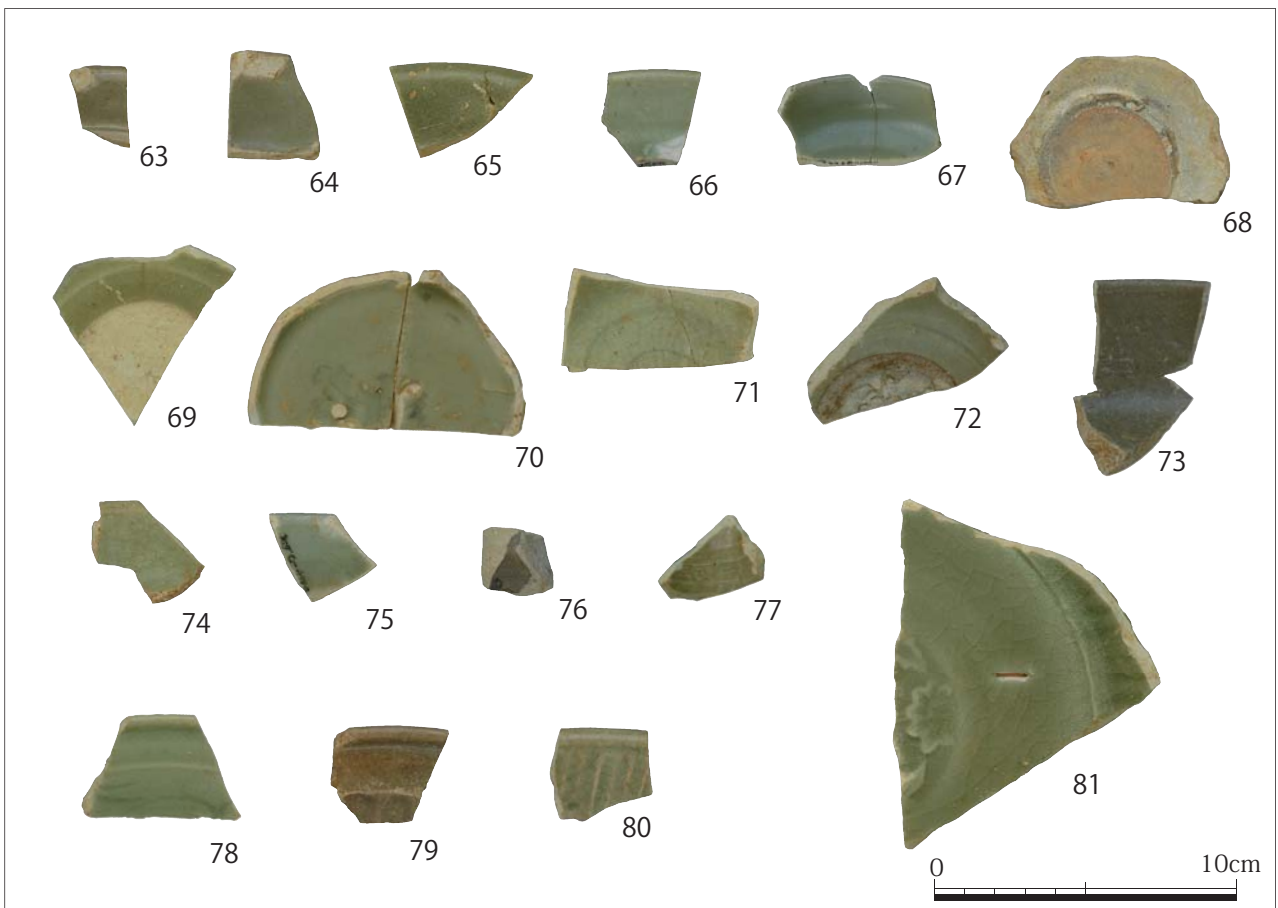
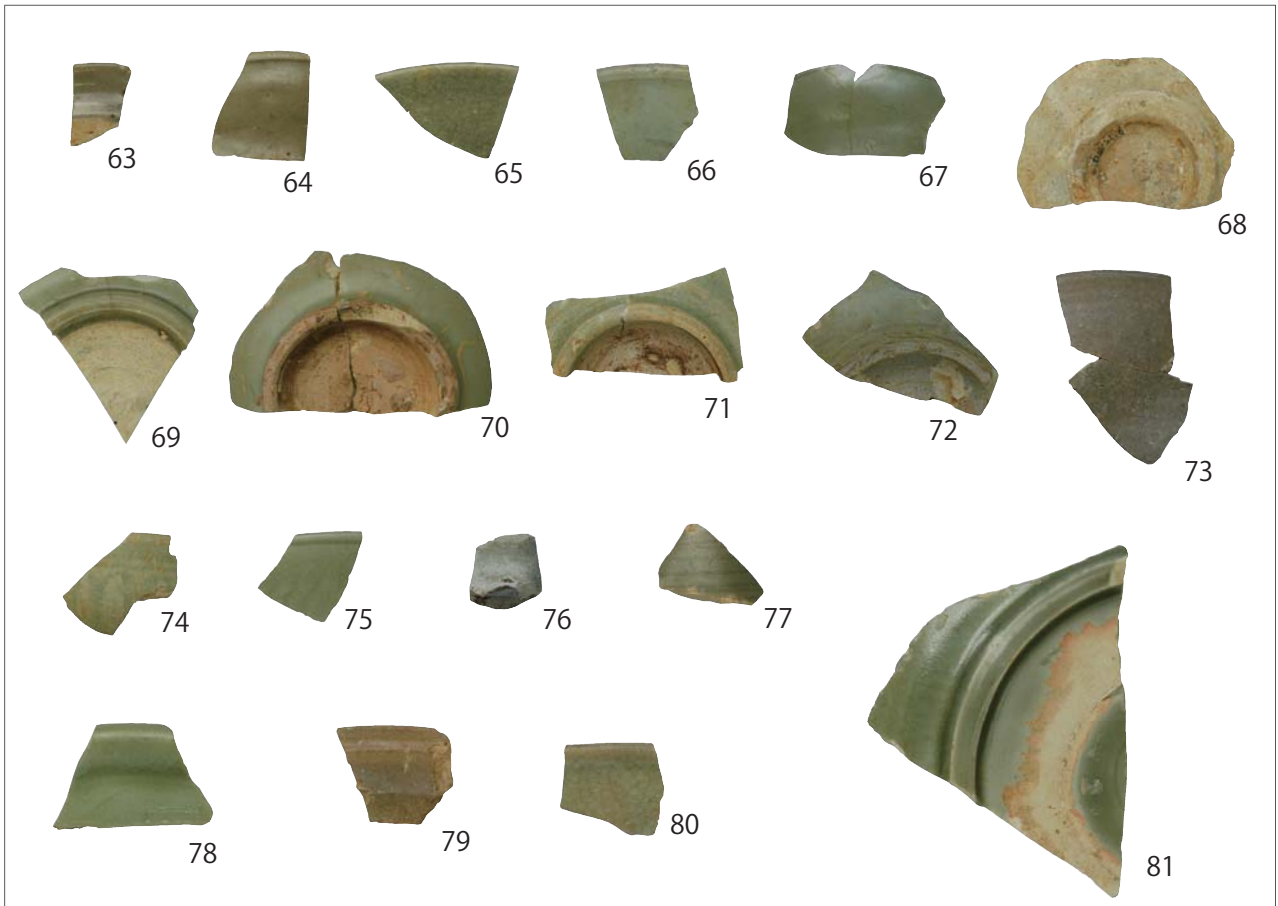
卷首図版11 青磁1 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版19と一致



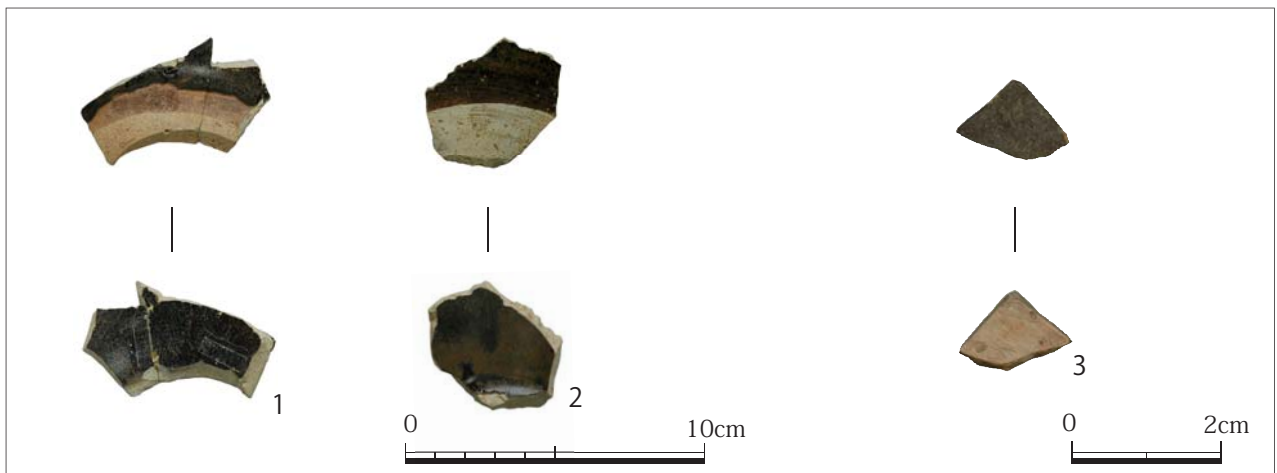
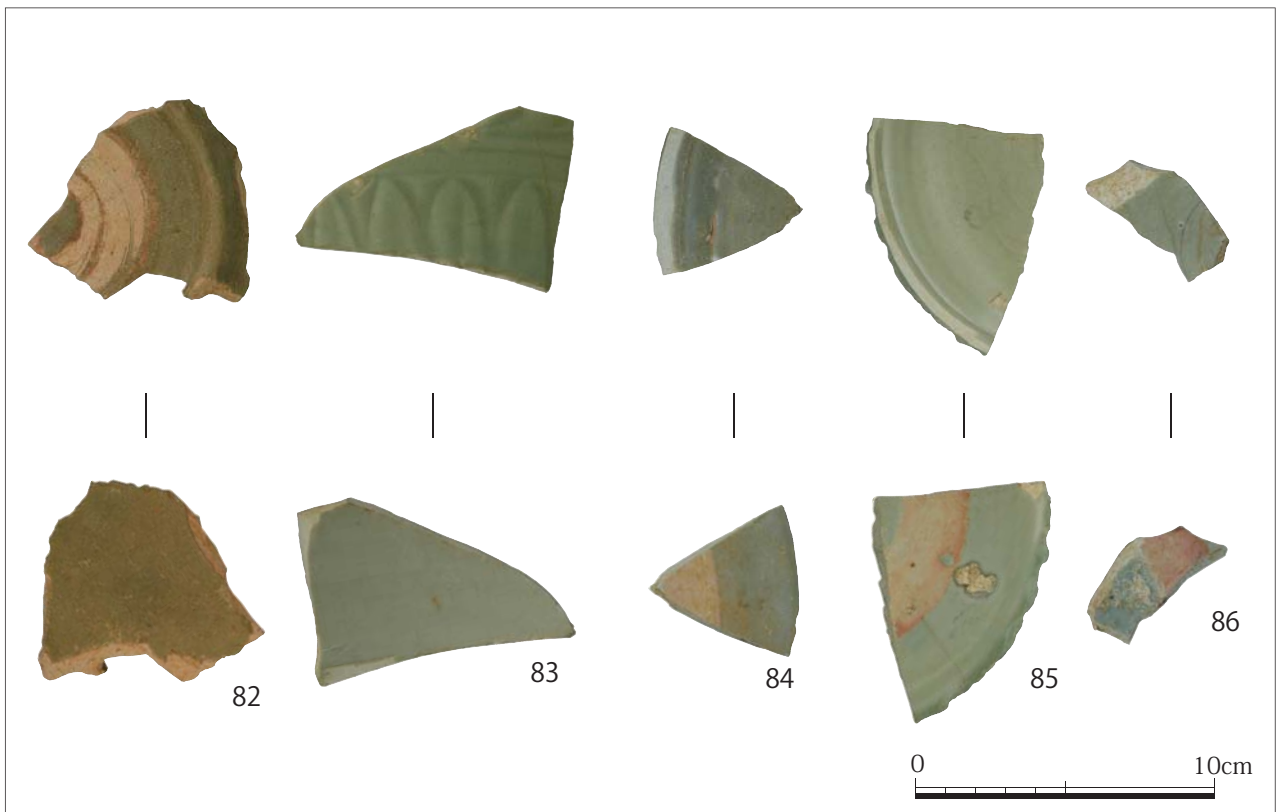
卷首図版 12 青磁 2 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 20 と一致



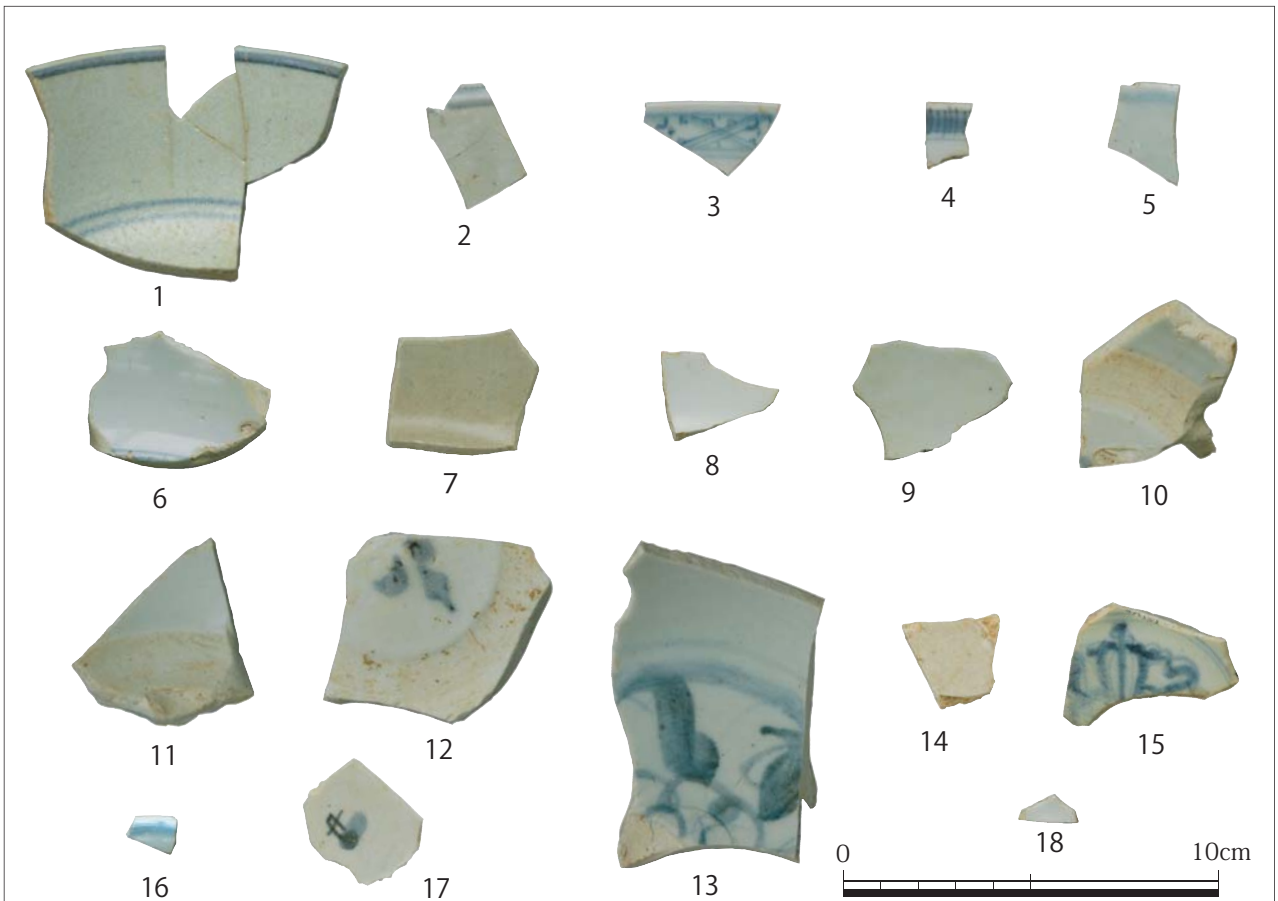
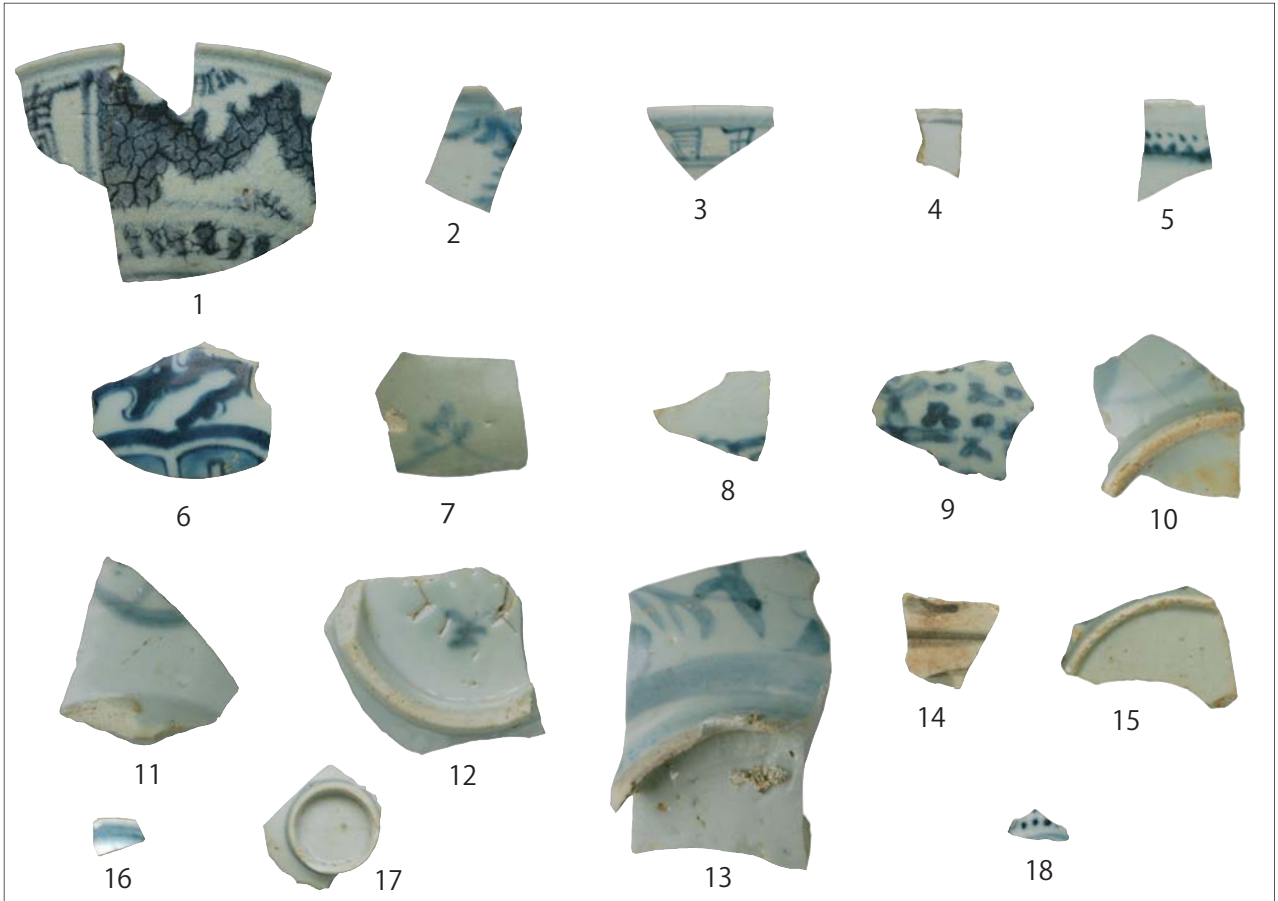
卷首図版 13 青磁 3 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 21 と一致



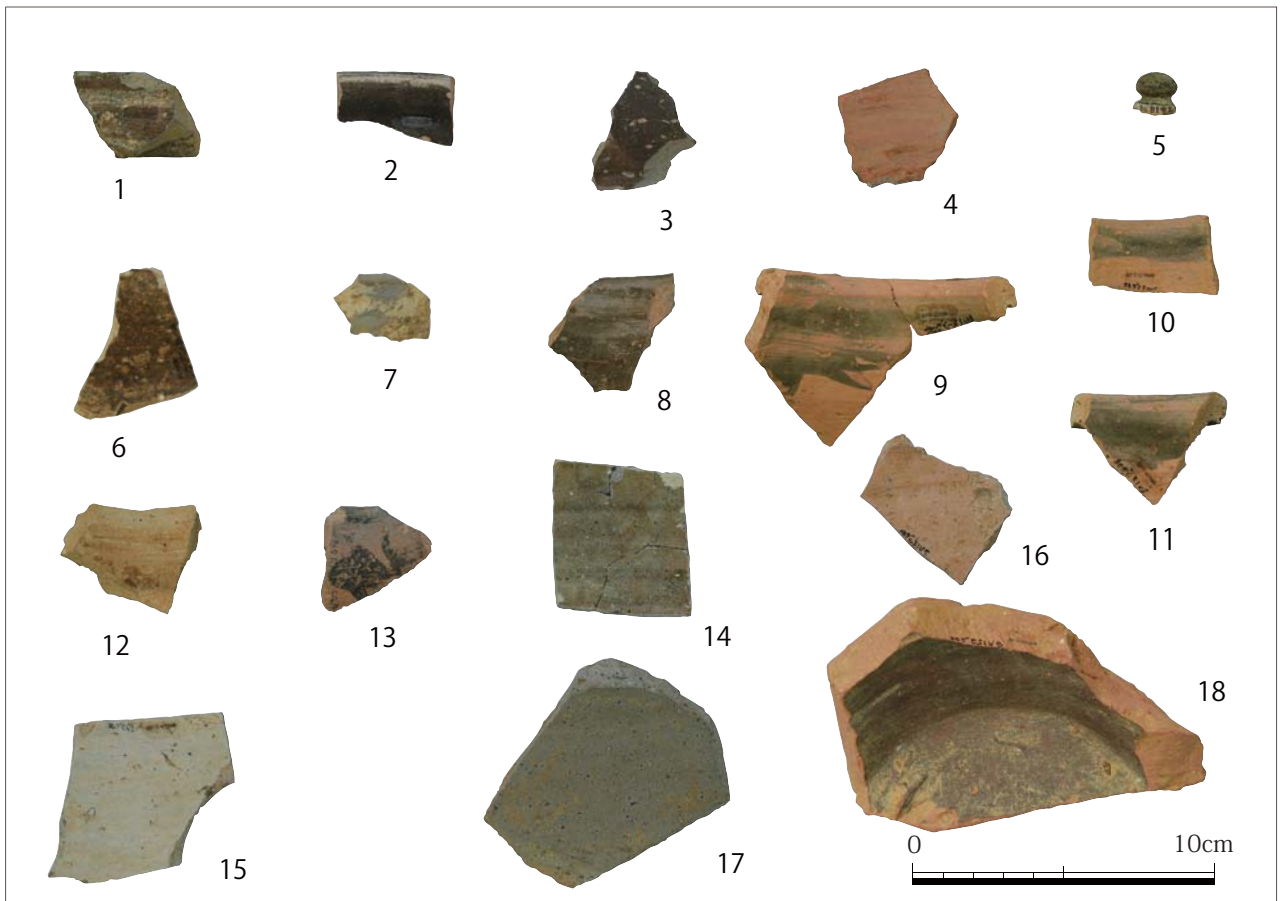
卷首図版 14 青磁 4 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 22 と一致



卷首図版 15 青磁 5・天目茶碗・茶入れ 遺物番号は図版 23・25 と一致



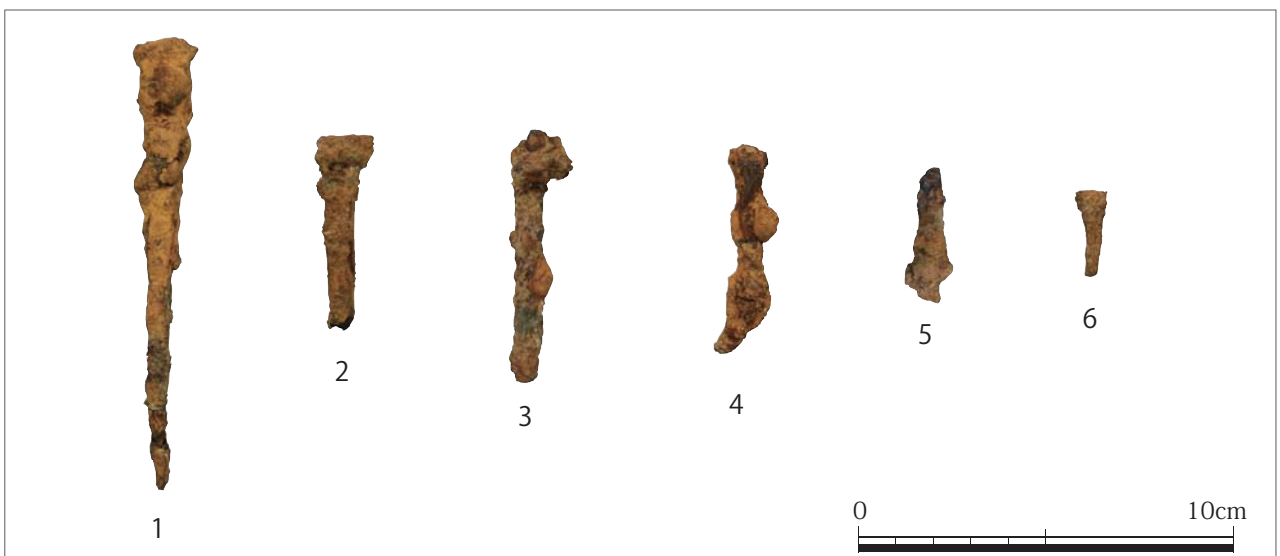
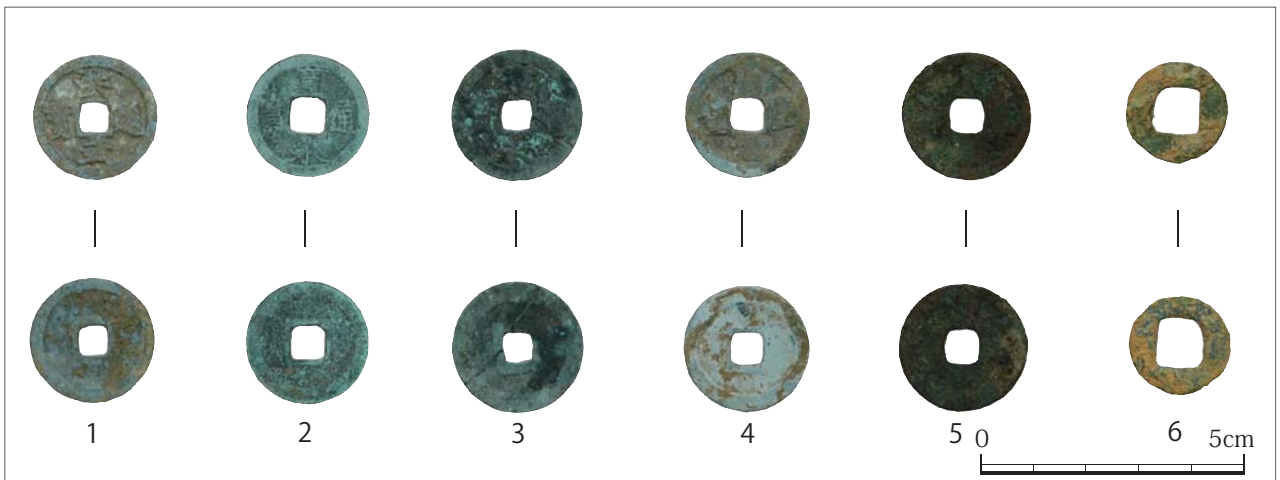
卷首図版 16 染付 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 24 と一致



卷首図版 17 褐釉陶器 1 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 26・27 と一致



卷首図版 18 褐釉陶器 2 (上：外面・下：内面) 遺物番号は図版 27 と一致



巻首図版 19 銭貨・ガラス玉・青銅製品・鉄製品 遺物番号は図版 40・41・43・47 と一致

はじめに

本書は、文化庁国庫補助事業（伊礼原B遺跡ほか発掘調査）を受けて、平成9・10・11・13年度に調査を実施した北谷城の範囲確認調査の成果をまとめたものです。

調査はこれまで、丘陵上における城郭（壁）や社殿址、城門、グスクの規模が把握できるなど大変貴重な成果が得られております。北谷城は、沖縄本島内のグスクの中でも、五指に入る規模であること、さらに歴史的にもグスク時代の黎明期のころから、その変化の過程を追うことができる古いグスクであるということが明らかになっております。また、琉球王朝期には奄美・沖縄諸島に伝わる古歌謡集「おもろそうし」には「きたたん」として当時の北谷における有力な按司たちの隆盛と、それを褒め称えるおもろがあり、さらに「琉球国由来記」には年中行事に関わる御嶽が記載されるなど、往時の祭祀儀礼を窺うことができる由緒ある城であることが史実からも窺われます。

今回の発掘調査は、北谷城周辺のあらたな様子が判明しております。それは、丘陵上の施設と何らかの関係を示唆する構築址が発見されたことに加え、城下町の伝道集落の古井戸や、集落よりさらに古いと考えられる土壙墓が発見されたことであります。本グスクからの土壙墓は初めての発見であります。このようなことから、施設や集落の変遷、埋葬形態を考慮するうえで大変貴重な成果が得られております。また、往時の人々の生活感が垣間見える土器や中国産陶磁器、鉄製品、獣骨や貝殻など多くの遺物も検出されております。

本報告書は、グスク時代とその時代の周辺遺跡、近世・近代の様相が伺い知れる資料として、研究機関へ寄与すること、また、町民が広く郷土の歴史が学べるよう活用されるよう期待します。

最後になりましたが、在沖海兵隊施設技術部をはじめ沖縄国際大学や多くの各関係機関の方々よりご助言・ご指導を賜り厚く御礼申し上げますとともに、調査及び整理作業にご協力頂いた関係各位に深く感謝申し上げます。

平成22年3月

北谷町教育委員会
教育長 比嘉 秀夫

例 言

1. 本報告書は、平成9年度～11年度・13年度に実施した北谷城 第十三次～第十六次発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。

3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

人	骨	松下 孝幸（土井ヶ浜人類学ミュージアム館長）
貝	類	黒住 耐二（千葉県立中央博物館 上席研究員）
獣	骨	樋泉 岳二（早稲田大学）
石	質	大城 逸朗（おきなわ石の会）

4. 松下孝幸氏・松下真実氏・黒住耐二氏・樋泉岳二氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。
5. 本報告書の編集は、東門研治、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第I章～第V章		東門 研治
第VI章	第1節	呉屋 広江
第VI章	第2・15・23節	上地千賀子
第VI章	第3・4・19節	東門 研治
第VI章	第5～7・13・14・16～18・ 第20～22・24・25節	島袋 春美
第VI章	第8・9・12節	山城 安生
第VI章	第10・11	松原 哲志
第VIII章		東門 研治
付 篇	第1節・第2節1	東門 研治
付 篇	第2節2～4	島袋 春美
付 篇	第2節5	上地千賀子

6. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・写真撮影・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の協力を得た。

豊里 初江	東 順子	上間真寿美	曾木 菊枝	佐久間クリエ	山城小百合
照屋 元子	西原 美草	知念 栄子	朝岡利恵子	宮里 美也子	徳本加代子
与那覇亜矢	浜川 和枝	稲嶺 律子	石川 由華	金城 綾乃	當山 美希
石川 千恵					

7. 本遺跡の遺物の注記は下記のとおりである。

・北谷城の注記凡例

台帳番号	遺跡名	トレンチ	グリッド	層	日付
230	北谷城	no.2	B-2	チンガー南側	980501

・注記例

北グ 230 no.2 B-2 チンガー南側 980501

8. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちやたんぐすく							
書名	北谷城							
副書名	伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業							
巻次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	東門研治・山城安生・松原哲志・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江・松下孝幸 松下真実・黒住耐二・樋泉岳二・パリノ・サーヴェイ(株)							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3490							
発行年月日	2010年(平成22年)3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちやたんぐすく 北谷城	おきなわ 沖縄県 ちやたん 北谷町 あざ 字大村 ぐすく 城原	473260		26° 18' 18"	127° 46' 10"	1998.02 ～ 2002.03	13,780	伊礼原B 遺跡ほか 発掘調査 事業
所収遺跡名	主な時代	主な遺構			主な遺物			特記事項
北谷城	近・現代	溝状遺構・獣骨埋葬遺構・ 井戸(チンガー)			沖縄産施釉・無釉陶器・ 陶質土器・円盤状製品・銭貨			
	グスク期	建物址遺構・石列遺構・敷石 遺構・円形炭混じり遺構・土 壙墓			土器・カムイヤキ・青磁・白磁・ 染付・本土産陶器・褐釉陶器・ 滑石製品・青銅製品・鉄製品・ ガラス玉			男性骨
	要約	<ul style="list-style-type: none"> ・no.2トレンチにおいて直径1m深さ4mの掘り抜き井戸が確認された。調査後に復元、保存。 ・no.1トレンチ斜面地でグスク期の石積み遺構(石列遺構1)が確認された。12世紀頃の土壙墓が確認され、熟年男性骨が1体検出された。埋葬方法は仰臥屈葬。 						
拾得遺物 (伊礼原遺跡 調査区内)	グスク期				青磁・染付・タイ産褐釉陶器・ 褐釉陶器・カムイヤキ			
	要約	キャンプ桑江北側返還前に伊礼原遺跡低湿地区を調査した際、中国産等の陶磁器が納められたダンボール箱が遺棄されていた。本資料が何処から得られたものかが不明であることから「拾得遺物」して報告することにする。						

本文目次

巻首図版

はじめに

例言

報告書抄録

第I章	調査に至る経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	1
第II章	遺跡の位置と環境	3
第III章	調査の方法と成果	7
第1節	調査の方法	7
第2節	調査の経過	7
第IV章	層序	13
第V章	遺構	14
第1節	建物址遺構	14
第2節	溝状遺構	14
第3節	石列遺構	14
第4節	敷石遺構	20
第5節	円形炭混じり遺構	21
第6節	土壇墓	21
第7節	獣骨埋葬遺構	23
第8節	井戸(チンガー)	24
第VI章	出土遺物	24
第1節	土器	26
第2節	カムイヤキ	46
第3節	白磁	48
第4節	青磁	55
第5節	染付	71
第6節	天目茶碗	76
第7節	褐釉陶器	77
第8節	本土産陶器	82
第9節	本土産磁器	83
第10節	沖縄産施釉陶器	87
第11節	沖縄産無釉陶器	94
第12節	陶質土器	100
第13節	瓦質土器	104
第14節	瓦	105
第15節	石器	106
第16節	銭貨	116
第17節	鉄製品	117
第18節	羽口・焼土	118
第19節	滑石	118
第20節	青銅製品	118
第21節	貝製品	120
第22節	骨製品	122
第23節	円盤状製品	123
第24節	ガラス玉	125
第25節	石製品	125
第VII章	自然科学的分析	126
第1節	北谷城(城門地区)出土の脊椎動物遺体	126
第2節	北谷城の発掘調査で得られた貝類遺体	138
第3節	沖縄県北谷町北谷城出土のグスク時代人骨	148
第4節	北谷城出土遺物の放射性炭素年代測定	167

第Ⅷ章	まとめ	170
<付篇>	拾得遺物—伊礼原遺跡調査区内—	175
第1節	拾得の経過	175
第2節	遺物	175
	1. 青磁	175
	2. 染付	196
	3. タイ産褐釉陶器	196
	4. 褐釉陶器	197
	5. カムイヤキ	199

挿図目次

第1図	北谷町の位置と遺跡分布	4	第37図	瓦質土器	104
第2図	北谷城 第13次～第16次調査範囲	6	第38図	瓦	105
第3図	北谷城グリッドと遺構配置図	8	第39図	石器1	109
第4図	no.1トレンチ西壁・断面図・ no.2トレンチ東壁	15	第40図	石器2	111
第5図	建物址遺構と溝状遺構平面図・断面図	17	第41図	石器3	113
第6図	石列遺構1・石列遺構2(溝状) 平面図・側面図	18	第42図	銭貨	116
第7図	敷石遺構1・2平面図・断面図	19	第43図	鉄製品	117
第8図	円形炭混じり遺構平面図・断面図	20	第44図	羽口・滑石	118
第9図	土壙墓(埋葬状況と取上後)	22	第45図	青銅製品	119
第10図	獣骨埋葬遺構平面図・断面図	23	第46図	貝製品	120
第11図	井戸(チンガー)平面図・断面図	25	第47図	骨製品	122
第12図	土器1	34	第48図	円盤状製品	124
第13図	土器2	36	第49図	ガラス玉	125
第14図	土器3	38	第50図	石製品	125
第15図	土器4	40	第51図	傷痕のある骨	132
第16図	土器5	42	第52図	北谷城変遷図	172
第17図	土器6	44		脊椎動物遺体 樋泉岳二	
第18図	カムイヤキ	47	図1	北谷城から出土した脊椎動物遺体組成の変遷 (NISP比)	131
第19図	白磁1	50		貝類遺体 黒住耐二	
第20図	白磁2	52	図1	北谷城のアラスジケマン殻長組成	143
第21図	青磁1	62		人骨 松下孝幸・松下真実	
第22図	青磁2	64	図1	遺跡の位置	149
第23図	青磁3	66	図2	人骨の残存図	164
第24図	青磁4	68		<付篇> 拾得遺物	
第25図	青磁5	70	第1図	拾得場所	175
第26図	染付	74	第2図	青磁1	180
第27図	天目茶碗・茶入れ	76	第3図	青磁2	182
第28図	褐釉陶器1	78	第4図	青磁3	184
第29図	褐釉陶器2	80	第5図	青磁4	186
第30図	本土産陶器	82	第6図	青磁5	188
第31図	本土産磁器	86	第7図	青磁6	190
第32図	沖縄産施釉陶器1	90	第8図	青磁7	192
第33図	沖縄産施釉陶器2	92	第9図	青磁8	194
第34図	沖縄産無釉陶器1	96	第10図	染付・タイ産褐釉陶器	196
第35図	沖縄産無釉陶器2	98	第11図	褐釉陶器	198
第36図	陶質土器	102	第12図	カムイヤキ	199

図版目次

巻首図版 1	北谷城(南側より)	図版28	本土産陶器	82
巻首図版 2	トレンチの堀削状況	図版29	沖縄産施釉陶器1	91
巻首図版 3	層序	図版30	沖縄産施釉陶器2	93
巻首図版 4	C・D-3・4グリッド	図版31	沖縄産無釉陶器1	97
巻首図版 5	遺構	図版32	沖縄産無釉陶器2	99
巻首図版 6	no.1トレンチ 土壙墓	図版33	陶質土器	103
巻首図版 7	no.2トレンチ 井戸(チンガー) 復元工程	図版34	瓦質土器	104
巻首図版 8	本土産陶器・カムイヤキ	図版35	瓦	105
巻首図版 9	白磁1	図版36	石器1	110
巻首図版10	白磁2	図版37	石器2	112
巻首図版11	青磁1	図版38	石器3	114
巻首図版12	青磁2	図版39	瘤状石	115
巻首図版13	青磁3	図版40	銭貨	116
巻首図版14	青磁4	図版41	鉄製品	117
巻首図版15	青磁5・天目茶碗・茶入れ	図版42	羽口・滑石	118
巻首図版16	染付	図版43	青銅製品	119
巻首図版17	褐釉陶器1	図版44	貝製品	121
巻首図版18	褐釉陶器2	図版45	骨製品	122
巻首図版19	銭貨・ガラス玉・青銅製品・鉄製品	図版46	円盤状製品	124
図版 1	建物址遺構検出状況	図版47	ガラス玉	125
図版 2	溝状遺構検出状況	図版48	石製品	125
図版 3	石列遺構検出状況	図版49	傷痕のある骨	133
図版 4	敷石遺構1検出状況	図版50	魚類・ウミガメ・ジュゴン・イルカ・イヌ・ヤギ	134
図版 5	敷石遺構2検出状況	図版51	イノシシ/ブタ	134
図版 6	円形炭混じり遺構検出状況	図版52	ウシ1	135
図版 7	土壙墓検出状況	図版53	ウシ2	135
図版 8	獣骨検出状況	図版54	ウマ	136
図版 9	井戸(チンガー)検出状況	図版55	ウシ(歯)	137
図版10	土器1	図版56	貝類1	145
図版11	土器2	図版57	貝類2	146
図版12	土器3	図版58	貝類3	147
図版13	土器4	人骨	松下孝幸・松下真実	
図版14	土器5	図版 1	頭蓋骨	165
図版15	土器6	図版 2	下肢骨・上肢骨	166
図版16	カムイヤキ	〈付篇〉	拾得遺物	
図版17	白磁1	図版 1	青磁1	181
図版18	白磁2	図版 2	青磁2	183
図版19	青磁1	図版 3	青磁3	185
図版20	青磁2	図版 4	青磁4	187
図版21	青磁3	図版 5	青磁5	189
図版22	青磁4	図版 6	青磁6	191
図版23	青磁5	図版 7	青磁7	193
図版24	染付	図版 8	青磁8	195
図版25	天目茶碗・茶入れ	図版 9	染付・タイ産褐釉陶器	196
図版26	褐釉陶器1	図版10	褐釉陶器	198
図版27	褐釉陶器2	図版11	カムイヤキ	199

表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	5	表8	北谷城から出土したウマ遺体	128
第2表	土器胴部出土量	30	表9	北谷城から出土したウシまたはウマ遺体	131
第3表	土器口縁・底部分類別出土量	30	表10	北谷城から出土したヤギ遺体	128
第4表	土器観察一覧	31	表11	北谷城から出土した海生哺乳類遺体	128
第5表	カムイヤキ出土一覧	46	表12	北谷城から出土した脊椎動物遺体の組成	131
第6表	白磁出土量	49		貝類遺体 黒住耐二	
第7表	白磁観察一覧	54	表1	北谷城からピックアップ法によって得られた 貝類遺体のトレンチ／層別出土の詳細	139
第8表	青磁碗分類別出土量	55	表2	北谷城における生息場所類型 および優占種組成	144
第9表	青磁皿分類別出土量	56		人骨 松下孝幸・真実	
第10表	青磁出土量	57	表1	出土人骨一覧	150
第11表	青磁観察一覧	58	表2	年齢区分	150
第12表	染付出土量	72	表3	脳頭蓋計測値	153
第13表	染付観察一覧	73	表4	顔面頭蓋	154
第14表	天目茶碗出土一覧	76	表5	鼻根部	154
第15表	褐釉陶器出土量	78	表6	上腕骨計測値	155
第16表	褐釉陶器観察一覧	79	表7	大腿骨計測値	155
第17表	本土産陶器出土一覧	82	表8	脛骨	156
第18表	本土産磁器出土量	84	表9	推定身長値	157
第19表	本土産磁器観察一覧	85	表10	脳頭蓋	159
第20表	沖縄産施釉陶器出土量	88	表11	顔面頭蓋	159
第21表	沖縄産施釉陶器観察一覧	89	表12	鼻根部	159
第22表	沖縄産無釉陶器出土量	94	表13	下顎骨	160
第23表	沖縄産無釉陶器観察一覧	95	表14	肩甲骨	160
第24表	陶質土器出土量	101	表15	鎖骨	160
第25表	陶質土器観察一覧	101	表16	上腕骨	160
第26表	瓦質土器出土一覧	104	表17	橈骨	161
第27表	瓦出土量	105	表18	尺骨	161
第28表	層序別石器出土量	106	表19	大腿骨	162
第29表	器種別石質出土量	108	表20	脛骨	162
第30表	石器観察一覧	107	表21	腓骨	162
第31表	銭貨観察一覧	116	表22	膝蓋骨	162
第32表	鉄製品出土量	117	表23	推定身長値	163
第33表	鉄製品観察一覧	117	表24	最大長の比	163
第34表	焼土出土一覧	118	表25	中央周の比	163
第35表	貝製品観察一覧	121	表26	形態小変異	163
第36表	円盤状製品出土量	123		放射性炭素年代測定 パリノサーヴェイ	
第37表	円盤状製品観察一覧	124	表1	試料確認結果	167
	脊椎動物遺体 樋泉岳二		表2	放射性炭素年代測定結果	168
表1	北谷城から出土した魚類遺体	128	表3	暦年較正結果	169
表2	北谷城から出土したウミガメ類・鳥類遺体	128		〈付篇〉拾得遺物	
表3	北谷城から出土したイヌ・ネコ遺体	128	第1表	青磁観察一覧	177
表4	北谷城から出土したイノシシ／ブタ遺体	129	第2表	拾得遺物出土一覧	197
表5	北谷城から出土したイノシシ／ブタ顎骨・ 歯の詳細	128			
表6	北谷城から出土したウシ遺体	130			
表7	「獣骨埋葬遺構」埋葬個体のものと思われる ウシの歯の詳細	128			

第I章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経緯

北谷城の発掘調査は、1984年の第1次調査が実施されてから、これまでに第16次調査が行われた。今回報告する調査は、第13次調査から第16次調査である。

第1次調査から第12次調査までの調査は、主に丘陵上で行われ、四つの郭から構成される連郭式であることが判明している。また、二の郭で舎殿址やヒンプン状遺構の存在が確認されたことから、城の中心をなすものと想定される。三の郭では祭祀に関する遺構が確認され、『琉球国由来記』（1713）に記載されている「城内安室崎之嶽」と考えられ、ノロが祭祀を行った伝承地とも符合することが判明した。

城の城門は、三の郭と四の郭の境の南側に三の郭より低くなった平場に城門と考えられる基礎が確認された。城門の東側には階段があり、東より入城することが想定された。また、伝承では丘陵の南側に伝道集落があり、そこにヌールガー（井戸）が存在していたという。ノロは祭祀を行う際、ヌールガー（井戸）で身を浄めて城へ入城したといわれている。入城するルートは数カ所あり、今回はそのルートを確認するための調査である。そこで、丘陵の勾配が緩やかな南側に面したルートを候補として、南西端にある塩川（井戸）ルート、三の郭と四の郭の境の南側にあるヌールガールート、丘陵の東側にあるチンガールート（井戸）の3ルートから絞ることとした。塩川ルートは勾配がきついため入城には不向きと想定されることから除外した。ヌールガールートは比較的緩やかであることから入城が可能である。が、今回は最も緩やかであるチンガールート周辺に調査区を設け調査を行うこととなった。

第2節 調査体制

1. 範囲確認調査及び資料整理の組織

本補助事業による調査体制は以下のとおりである。

事業主体	北谷町教育委員会		
	教育長	當山憲一	（平成9～11年度）
	同	瑞慶覽朝宏	（平成13年度）
	同	比嘉秀夫	（平成21年度）
事業総括	教育次長	伊礼喜正	（平成13年度）
	同	謝花良継	（平成21年度）
	文化課長	松田盛	（平成9・10年度）
	同	嘉手納昇	（平成11・13年度）
	社会教育課長	大城操	（平成21年度）
調査総括	文化係長	中村愿	（平成9～11・13年度）
	同	嘉陽田朝栄	（平成21年度）
調査員	主任主事	東門研治	（平成9～11・13・21年度）
	同	山城安生	（平成21年度）
	主事	松原哲志	（平成21年度）

調査補助員

(平成9年度)

臨 時	與那覇政之 伊禮 一恵	上間 庄二 浜元 葉月	儀間 哲二 町田 史野	砂川 正幸 島尻 綾乃
発掘調査作業員	上間 常貞 川満 恵清 名嘉 實	我如古 清 新城 正雄 町田 宗弘	喜屋武盛基 平良 松芳 宮里 盛安	金城 良夫 渡久地盛英 宮平 孝重

(沖縄市シルバー人材センター)

(平成10年度)

臨 時	與那覇政之	上間 庄二	花城 清哉	
発掘調査作業員	上間 常貞 川満 恵清 名嘉 實	我如古 清 新城 正雄 町田 宗弘	喜屋武盛基 平良 松芳 宮里 盛安	金城 良夫 渡久地盛英 宮平 孝重

(沖縄市シルバー人材センター)

(平成11年度)

臨 時	真喜屋 隆 砂川 正幸 天久 朝海 井上 美里	田仲 康理 宮里 光 我如古真弓	花城 清哉 與那覇 徹 安里 実紀	新里 尚也 松田 勇治 岸本 竹美
発掘調査作業員	上間 常貞 金城 良夫 平良 松芳 町田 宗弘	親富祖行平 金城 健治 照屋 寛栄 宮里 盛安	我如古 清 座覇 政仁 渡久地盛英 宮平 孝重	喜屋武盛基 下地 寛勝 渡久地眞栄 與那覇政栄

(沖縄市シルバー人材センター)

(平成13年度)

臨 時	宮里 光			
発掘調査作業員	新垣 義孝 仲村 幸有	内間 千福 仲村渠春幸	大嶺 明文	儀間 義忠

(北谷町シルバー人材センター)

(平成21年度)

嘱 託	島袋 春美 山城小百合	上間真寿美	東 順子	知念 栄子
臨 時	石川 由華 浜川 和枝	大城 光 与那覇亜矢	新垣 栄子	徳本加代子

第II章 遺跡の位置と環境

北谷町は沖縄本島の中部の東シナ海に面した西海岸側にあり、県庁所在地である那覇市から北に直線距離で約 16 km に位置している。本町の面積は、東西に 4.31 km、南北に 5.91 km を測り、南北にやや細長く方形状を呈する。総面積は 13.78 km² である。北側に嘉手納町、東側に沖縄市、南東側に北中城村、南側に宜野湾市が隣接している。西側の東シナ海には慶良間諸島や渡名喜島が望める（第 1 図）。

本町は北側の嘉手納町とは戦後間もなく分村を余儀なくされた経緯の要因である嘉手納基地が拡がり、中央部や南側の沖積平野部には米海兵隊基地のキャンプ桑江・キャンプ瑞慶覧があり、町域の 53% が現在も米軍基地として存在している。北谷城は本町の中部よりやや南側、西海岸に向かって舌状に延びる標高 50 m 前後の石灰岩台地上に北谷城が所在し、現在は米軍基地内である。

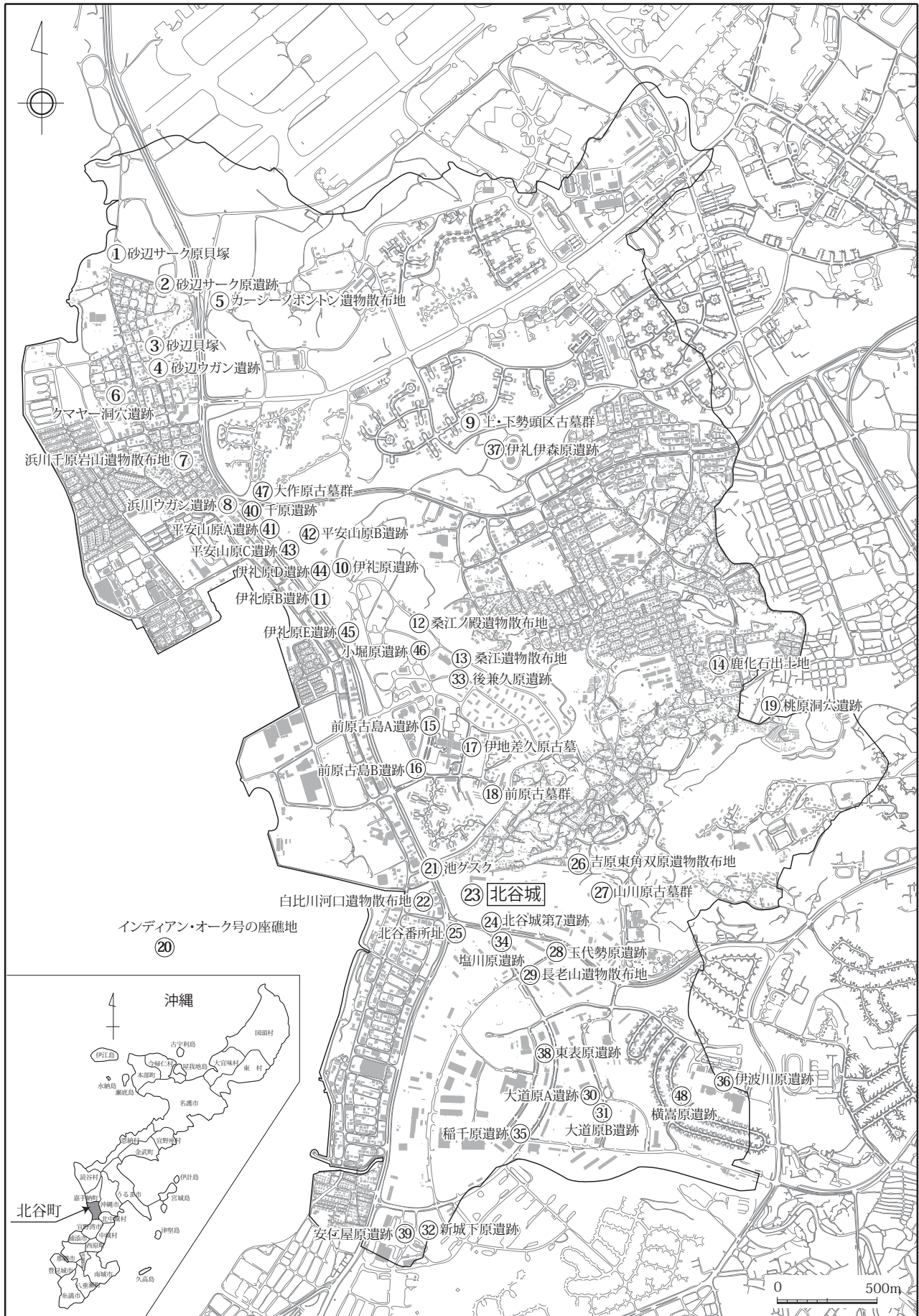
北谷城周辺部は町内においても数少ない遺跡の集中する地域であり、古くより南側には集落形成され、その形成過程の伝承が残る地域である。北谷城からは北に読谷村、南方向には中城城や浦添城、首里城を僅かに眺望することができる景勝地である。

北谷城一帯の石灰岩丘陵部は、北側に西流する白比川によって二分され、長年の浸食を受け、両側には数十メートルの河岸段丘の発達が見られる。特に、河口付近の南側の北谷城側は川幅も広く断崖も険しい状況を呈している。

北谷城の南側は北谷の旧村落が開けている。集落は城の麓から、南東にかけては南西方向の緩斜面の洪積世台地が南の宜野湾市まで拡がり、その間に形成されている。集落は丘陵下に伝道村、南東側に玉代勢村、南に北谷村となっている。前述した三村の一つである伝道村は古名を前城島といわれ、『琉球国由来記』（1713）に見られる北谷城内の殿の代々の祭司者であるノロの居住も同村落内にあり、城との関わりがあるようである。また、城の南側に拡がる北谷村は琉球王朝期に王府の行政機関である北谷番所の設置や馬場跡をもち、もと村の様相をなすが、伝道・玉代勢村より派生した村と伝えられている。この三つの村を「北谷三箇」と称し、グスク城下町を形成していたと推定される。また、集落の東側台地斜面より西流する数カ所の湧き水が存在し、下流では低湿地を成している。この一帯は苗田と称される良田となっている。戦前にはこの一帯に水田が拡がり、沖縄三大美田の一つとされ北谷ターバックア（北谷田圃）と呼ばれる田園風景が広がっていた。

さて、北谷城の築城等についてであるが明確な記録はない。伝承によると、金満按司や大川按司、北谷按司の三系統の按司たちの興亡があったと伝えられている。グスクの北側の中腹には金満按司の墓と称する洞穴墓がある。『おもろそうし』には「きたたんのてだ」や「きたたんの世のぬし」とあり、北谷城の按司が「王」の称号である「てだ」や「世の主」などと称されていることは、地方としてはかなり有力な按司であったことが伺える。また、『琉球祖先宝鑑』には、北谷王子が英祖王の二男としてあつかわれている。同書の北谷王子の頃には北谷同村のノロ殿内に御持、長男金満按司、二男稲福親雲上、三男伊礼大屋子、四男浜川親雲上、五男大嶺親雲上、六男熱田親雲上、七男安里親雲上、八男宜野湾親雲上などがあるが伝承の域をでない。

城内には『琉球国由来記』に載る「北谷城之殿」や「ヨシノ嶽」・「城内安室崎之嶽」の拝所が存在している。現在も年中行事は北谷ノロ殿内に継承されている。平成 22 年には「北谷三箇」の一大行事である「北谷ウーンナ」（大綱引き）が予定され、各拝所を拝む予定である。



第1図 北谷町の位置と遺跡分布

第1表 北谷町遺跡一覧

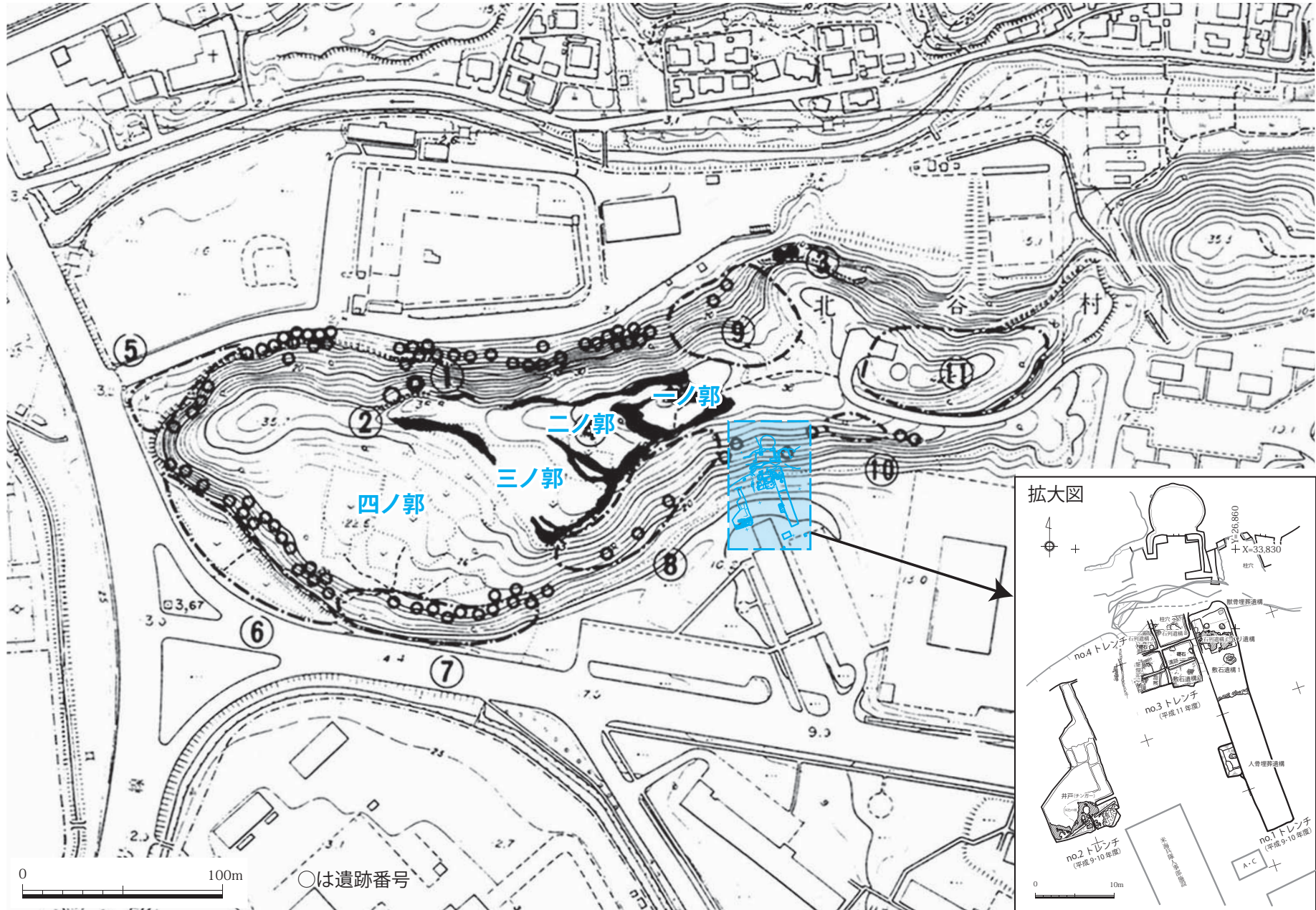
No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川千原
9	上・下勢頭区古墓群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	近世・近代	字伊平小字伊礼原
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江桑江原
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原
18	前原古墓群	近世	字桑江前原
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原
29	長老山遺物散布地	後期～グスク	字大村玉代勢原
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原
32	新城下原遺跡	早期～近世	字北谷安仁屋原
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原、字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	字北谷塩川原
35	稲千原遺跡	前期	字北前稲千原
36	伊波川原遺跡		字北前横高原・伊波川原
37	伊礼伊森原遺跡	後期	字上勢頭伊礼伊森原
38	東表原遺跡		字北谷東表原
39	安仁屋原遺跡		字北前安仁屋原
40	千原遺跡	後期	字伊平千原
41	平安山原A遺跡	後期	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	後期	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡		字伊平平安山原
44	伊礼原D遺跡	後期	字伊平伊礼原
45	伊礼原E遺跡	縄文後期～近世	字伊平小字伊礼原
46	小堀原遺跡	後期	字桑江小堀原
47	大作原古墓群	前期～近世	字伊平大作原
48	横高原遺跡	後期	字北前横高原

北谷町文化財調査報告書 第28集 『伊礼原D遺跡』(2008)の表1北谷町遺跡一覧を改変
 註:「前期」→「貝塚前期」、「後期」→「貝塚後期」をさす。

<<参考文献>>

- ①中村愿・田場勝也ほか「北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－」『北谷町文化財調査報告書』第14集 北谷町教育委員会 1994年
- ②中村愿・東門研治・島袋春美「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
- ③中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか「伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡『キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)』」北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月

* 番号は位置図に付随



第2図 北谷城 第13次～第16次調査範囲

第III章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

北谷城は西側に国道58号線が接し、北側に白比川が西流、南側に県道130号線が走っており、本地域は現在米軍基地内に所在している。今回の調査は、丘陵の東部の南側麓を中心に、本城への上り口ルートを確認を行うために試掘調査を実施した。

調査は平坦部から丘陵斜面に向かって2本のトレンチを設けた。東側からno.1トレンチ5×30mと、そのトレンチから約15m西側にno.2トレンチ5×18mを設けた。さらに、便宜的に10×10mのグリッドを設定し、南北軸をアルファベットに、東西軸に算用数字を付し、南よりA・B・C・・・、西より1・2・3・・・とした。

調査は、バックホーによる掘削を行い、no.1トレンチでは城期の上面まで、no.2トレンチは、平坦部は近世の遺構が確認されその面まで掘削した。no.1トレンチの斜面部でグスク期の石列が確認され、その広がりが西側に及ぶことから南側C-3グリッドをno.3トレンチ、北側D-3グリッドをno.4トレンチとし、調査を行った。

第2節 調査の経過

平成9年度（第13次調査）

平成9年度は平成10年2月26日より平成10年3月31日の日程で行った。調査は丘陵の東部南側の麓に2本のトレンチを斜面部から平坦部にかけて掘削して実施した。no.1トレンチでは斜面部で東西に延びる城期の石列が確認された。石列の露出作業を行ったところ、石積みは崩れた状態で幅が約2m前後に及び、西側に拡がる状況が窺われた。本年度は石列の露出状況の図面とトレンチの断面図作成を行った。また、平坦部では西側壁面に人骨の大腿部が露出していたため、埋葬遺構が想定され西側に拡張し、土壙墓面上部までバックホーで掘削し確認作業を行った。土壙墓は東西を長軸とした長楕円形を呈し、1体の人骨を確認した。

no.2トレンチは表土掘削後、近世の井戸チンガーが確認された。井戸の全容を把握するため西側へ拡張した。その結果、遺構は米軍による埋設管により一部破壊されていた。また、南側へ拡がりそうであったが米軍施設があるため拡張を行わなかった。井戸の露出と井戸内の掘削を行った。

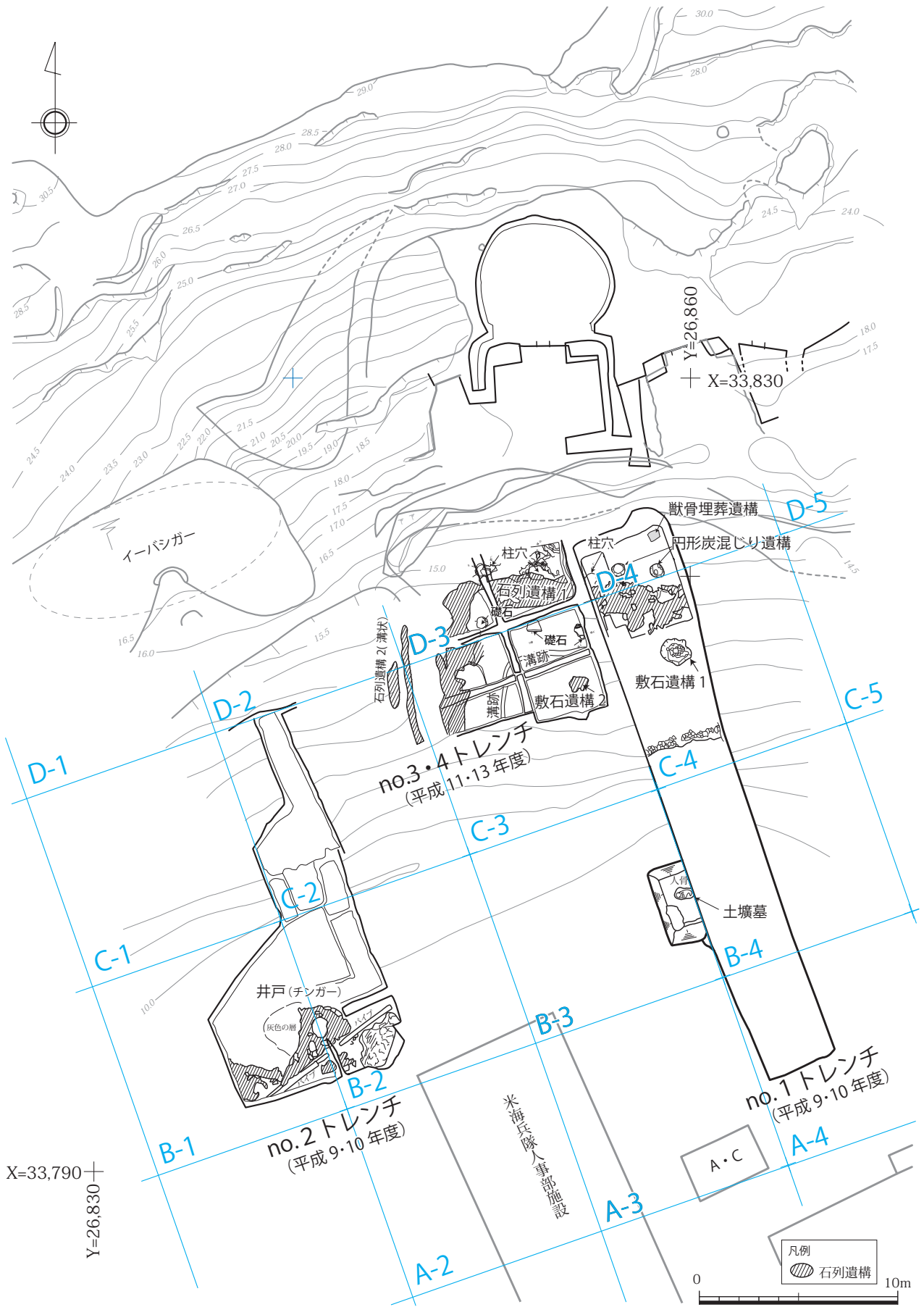
no.4トレンチはno.1トレンチとno.2トレンチの間でほぼno.2トレンチよりに設けた。本トレンチの西側は丘陵本来の斜面地を成し、東側はno.1トレンチまでグスク時代に掘削し、平地に造成している。ちょうど境目にあたる部分である。

no.3トレンチはno.4トレンチの南側で、no.4トレンチ同様の地形を成していた。斜面地は上り口のルートになると思われたが遺構は確認されなかった。グスク期の造成面の西端に溝状の石列が南北に配されているのが確認された。

出土遺物は近世の陶磁器やグスク時代の土器、中国産陶磁器、石器、鉄製品等が出土した。

平成10年度（第14次調査）

平成9年度の継続事業で、平成10年4月1日から平成11年3月30日まで行った。no.1トレンチは



第3図 北谷城グリッドと遺構配置図

石列の崩れた石の除去作業を行い、基部と一段の積まれた状況が確認できた。石列の北側には直径 60 cm の円形炭混じり遺構(第 3 図)が 2 基石列に平行して確認された。また、石列の南側では敷石遺構(第 3 図)が 1 基確認され、それぞれ図面作成を行った。no.1 トレンチの斜面端部は近世と思われる東西に延びる石列が検出された。no.1 トレンチの平坦部で確認された土壙墓(第 9 図)は頭部と肩部、腰部に棒が伴っていた。人骨は屈葬で棒はその姿勢を固定するために使用したと推測される。本遺構は周辺より白磁の玉縁口縁碗が出土していることから 11 ～ 12 世紀頃と思われる。

no. 2 トレンチは斜面部の調査では上り口となる遺構の確認はできなかった。平坦部では井戸遺構(チンガー)の掘りりと井戸内部の除去作業及び図面作成を行った。井戸は復元作業(巻首図版 7)を行った。

丘陵中腹には平場がありその平場は城門まで続いている。そこで、中腹の方より伝道集落のチンガールートを確認するため調査区を設け調査を行った。本調査区においても道となる遺構は確認されなかった。出土遺物は近世陶磁器、グスク時代の中国産陶磁器、土器、鉄製品などが出土した。

平成11年度(第15次調査)

平成 11 年 7 月 19 日より平成 12 年 1 月 7 日まで実施した。no. 1 トレンチで確認されたグスク期の石列が西側へ延びる状況を呈していたことから no. 4 トレンチとの間に調査区を設け、石列の全容を把握することとした。その結果、石列は no. 1 トレンチより約 10 m の規模を有し、西側で直角に曲がり南に延びる「L」字状を成すことが判明した。また、石列の下部からは建物址となる遺構(第 5 図)が確認された。石列を挟んだ状態で、北側は岩盤を削った円形の平場が 3 基、南側にはニービ(砂岩)の礎石(図版 1)が 3 基確認されたことから、石列より古いことが判明した。石列の図面作成と建物址の平面図化を行った。「L」字状に囲まれた南側の平場に溝状遺構(第 5 図)が確認され図化作業を行い調査を終えることとした。

平成13年度(第16次調査)

平成 14 年 3 月 1 日より 3 月 20 日まで実施した。平成 11 年度に実施した石列の全容把握と石列の「L」字状に囲まれた南側の平場の調査を行った。調査の結果、グスク期の造成面の掘りりが及ぶことが判明した。

平成21年度

平成 21 年度は、北谷城の報告書作成のための整理作業を行い、報告書の編集、刊行までに至る業務を行った。

平成9年度 (第13次調査)

平成10年

- 2月27日 伐採作業、グリッド設定。磁気探査。表層1m、試掘トレンチ2本掘削 (no.1トレンチ、no.2トレンチ)。no.2トレンチの掘削。井戸と思われる石積遺構の清掃。
- ～3月2日
- 3月 5日・ 6日 no.1トレンチ南側掘削、北側 (斜面地) 表土より暗褐色土層まで掘削。no.2トレンチ井戸、西側へ掘削。
- 3月 9日～13日 no.1、2トレンチ及びその周辺の水抜き作業。no.1トレンチ西壁削り、北壁崩落により石積み確認、壁面清掃。
- 3月16日～18日 no.1トレンチ北壁崩落土の除去、北壁の前表土剥ぎ、石積み露出作業、水抜き。no.2トレンチ東側、道確認のためD-3グリッド掘り下げ。
- 3月19日～23日 no.1トレンチ A-1平面・西壁清掃、東壁面清掃。no.2トレンチ B-1、B-2,平面清掃、東壁清掃、チンガの南側掘り下げ。no.3トレンチ掘り下げ。

平成10年度 (第14次調査)

- 4月 6日～10日 no.1トレンチ平面清掃。C-4南 暗褐色土の掘り下げ、東壁、西壁清掃。no.2トレンチチンガー掘り下げ。B-1茶色土層、南側 暗褐色混土貝層掘り下げ。B-2西壁清掃、平面清掃。no.4トレンチD-2掘り下げ。
- 4月16日～24日 no.1トレンチC-4南 暗褐色土層掘削、北東側トレンチ、西側掘り下げ。no.2トレンチC-1、C-2水抜き作業、C-2 (斜面部) 赤色土掘り下げ。パイプ埋土除去後写真撮影。B-1南東壁セクション図実測。
- 5月 1日～ 8日 no.1トレンチC-4、D-4掘り下げ、東壁清掃 写真撮影。no.2トレンチB-2掘り下げ。C-2、D-2東壁清掃。no.4トレンチD-3東壁、西壁セクション図作成。
- 5月11日～14日 no.1トレンチC-4掘り下げ、D-4集石周辺の清掃、黄色土の掘り下げ、土杭のセクション図作成。no.2トレンチB-1畦B-2セクション図作成、畦除去。no.4トレンチ茶色土層掘り下げ。
- 5月19日～22日 no.1トレンチC-4、D-4西壁直下北側サブトレンチ掘り下げ。、C-4南 敷石遺構実測。no.2トレンチ、平板測量(B-1、B-2、C-2、D-2)。D-2、C-2東壁実測。no.4トレンチD-2、D-3、C-2、C-3平板実測。D-3茶色土層平面清掃、石列検出。no.3、4トレンチC-3、D-3掘り下げ。
- 5月25日～28日 no.1トレンチC-4土坑状遺構、平面実測。D-4炉跡状遺構の実測、半裁。no.2トレンチB-1西サブトレンチ掘り下げ、B-2チンガー平面清掃。C-3、C-2の平面実測。no.3トレンチD-3(北)掘り下げ。no.4トレンチC-2、D-3西 東壁、C-3茶色土層掘り下げ、平板実測。
- 6月 1日～ 8日 no.1トレンチ壁面清掃、D-4平面実測。no.2トレンチB-1北客土掘り下げ、B-2チンガー東の東西畦、北壁セクション図作成。C-2、D-2東壁図面作成。no.3トレンチ掘り下げ。no.4トレンチC-3茶色土層掘り下げ C-2、D-2トレンチ平面実測。
- 6月10日～18日 no.1トレンチの上にある墓の平板実測、no.1、2トレンチの水抜き作業。no.4トレンチ壁面、平面清掃。
- 6月19日～22日 no.2トレンチ井戸内、駐車場東側芝生部分、水抜き作業。no.4トレンチ割付。
- 6月24日～30日 no.1トレンチA-4、B-4水抜き、清掃及び掘り下げ。C-4、D-4壁面清掃、C-4石列露出作業。no.2トレンチB-2東西畦南壁セクション図作成。no.4トレンチC-3礫直上の土、C-2掘り下げ。
- 7月 1日～ 6日 no.1トレンチA-4、B-4 ③層 (仮称) の掘り下げ。くびれ平底土器が出土。C-4(石列露出)、D-4清掃。no.2トレンチB-2東西畦客土、暗褐色土層の除去。A-1、B-1、B-2平面清掃、チンガー清掃。
- 7月 7日～10日 no.1トレンチA-4、B-4ニービ層の上層の掘り下げ。石敷状遺構が露出、C-4南 石列南側部掘り下げ。no.2トレンチ チンガー割付、東西畦の除去 (橙色土層掘り下げ)。B-1北、B-2東の掘り下げ。no.4トレンチC-2、C-3の掘り下げ、石列の露出作業。
- 7月16日～22日 no.1トレンチB-4平面実測。 C-4南側石列露出、敷石遺構、撮影。no.2トレンチB-1暗褐色土層の掘り下げ、B-2茶褐色土層掘り下げ。チンガー (井戸状遺構) 平面図作成。

7月23日～27日	no.1トレンチの土の洗浄（人骨出土のため）。C-4石列実測。A-4、B-4東壁セクション図作成。no.2トレンチ チンガー実測。
8月 1日～ 3日	no.1、no.2トレンチの水抜き、清掃。no.2トレンチ チンガーの平面実測。no.4トレンチの清掃。
8月 4日・ 5日	no.1トレンチ石敷遺構周辺V層の上面除去、B-4北の石列清掃。墓より西側の岩盤露出作業。no.2トレンチB-1暗褐色土層、B-2東壁南側の岩まで掘削。チンガー平面図作成。no.4トレンチ東 南壁面清掃。
8月 6日～10日	no.1トレンチC-4V層掘下げ。石列平面実測。B-4北石列正面図作成。no.2トレンチB-1暗褐色土層、炭混じり層の掘下げ、B-2東壁南側の岩まで掘削。チンガー平面図作成。墓の西側岩盤露出作業。
8月11日～14日	no.1トレンチ石列遺構平面実測。B-4北石列断面見通し実測、ニービ混入層掘り下げ。no.2トレンチ・チンガー見通し実測。B-1黄褐色土層掘り下げ。B-2茶色土層掘り下げ。畦除去。no.4トレンチC-3畦除去。
8月15日・16日	no.1トレンチD-4集石遺構平面実測。C-4部分ニービ混入層掘り下げ。no.2トレンチB-1炭混じり層、B-2部分黄褐色土（混貝土）掘り下げ。丘陵中腹南斜面平板測量及び杭打ち作業。
8月18日～21日	no.1トレンチC-4ニービ混入層掘り下げ。B-3人骨上のサブトレ掘り下げ。no.2トレンチB-1黄色混レキ土、B-2黄褐色土（混貝土）掘り下げ。no.4トレンチ集石間の土を掘り下げ。
8月24日～26日	no.1、2、3トレンチ水抜き。no.1トレンチB-4人骨上のサブトレ②層掘り下げ。no.4トレンチ溝状石列集石掘り下げ。
8月27日～31日	no.1トレンチB-3の掘り下げ。D-4円形炭混じり遺構の掘り下げ。no.2トレンチ東壁面清掃、チンガー西の畦実測。B-1西の石列実測。
9月 3日～ 9日	no.1トレンチ東西壁断面図作成。B-3人骨上サブトレ（淡灰土層）掘り下げ。no.2トレンチ東壁断面図作成。B-1西の石列実測。
9月10日～14日	no.1トレンチA-4、B-4掘り下げ。東西壁断面実測。no.2トレンチ東壁断面実測。
9月16日・17日	no.1トレンチ東西壁面実測。 B-3灰色砂層掘り下げ。no.2トレンチ東壁断面図作成。B-1、B-2平面清掃。
9月18日～25日	no.1トレンチC-4東西畦、D-4西壁実測。東壁B-3濃灰色砂層掘り下げ、人骨（上腕骨？肋骨）が出土。no.2トレンチB-2掘り下げ、東壁写真撮影。
10月 1日～13日	no.1、no.2トレンチ水抜き、平板測量。no.1トレンチ東壁実測。B-3人骨出土地点の清掃。
10月14日～22日	no.1トレンチA-4、B-4東壁実測。no.1、no.4、no.2トレンチ埋め戻し。no.2トレンチ チンガー埋め戻し。
10月23日～28日	水抜き作業と水路作り。no.1トレンチ 人骨出土グリッド水抜き作業。no.2トレンチ チンガー復元作業準備。写真撮影。
10月29日・30日	チンガー周辺の埋め戻し、チンガー復元作業、水抜き。
11月 2日～ 6日	チンガー復元作業、水抜き作業。
11月 9日～18日	人骨トレンチの壁面清掃、泥抜き作業。no.2トレンチ チンガー周辺の埋め戻し。マンホールの蓋設置。
11月19日～30日	人骨トレンチ 人骨検出作業、土壌内の土取り上げ、平面図、セクション図作成。写真撮影、畦除去。
12月 1日～18日	人骨の露出作業。棒状の木製品確認。人骨平面、断面、壁面図作成。
12月21日・22日	人骨取り上げ、土壌内残土の掘り下げ、棒状の木製品出土。
12月24日～27日	人骨土壌内の平面、断面図、壁面図（北壁・南壁）作成作成。人骨土壌より下層掘り下げ。
平成11年度（第15次調査）	
7月19日～23日	no.1トレンチ、no.2トレンチ間とその周辺の草刈り、グリッド設定(D-2・3・4・5、C-4、B-4、A-4)。

- 7月28日～30日 C-4、D-4Ⅲ層下部まで掘り下げ。C-3、C-4、D-3、D-4の清掃。赤水対策落土落石防止壁の設置。C-2より26.7mに逃げ杭C-3のポイント。
- 8月 3日～ 9日 no.1トレンチC-4、D-4の東壁・西壁の清掃。C-4、D-4層の確認。C-3、D-3のⅣ層除去、掘り下げ。
- 8月10日～14日 C-3、D-3(Ⅳb)掘り下げ、実測。D-4北壁の掘削。平板測量。C-3石列実測、平板測量。
- 8月17日・18日 割付け作業。D-3南側石列実測、D-3 Ⅳ層を切る円形遺構の平面図、南壁の断面図作成。
- 8月19日～26日 C-3 円形遺構平面、南西側石列平面実測。C-3(Ⅳc層)、D-3西側掘り下げ。D-3、C-3石列実測。
- 8月27日～31日 C-3、D-3北側掘り下げ。D-2石列清掃。C-2石列露出作業。D-3、C-3石列実測。D-3南壁、C-3北壁(西側) セクション図作成。
- 9月 1日～ 6日 C-3、D-3掘り下げ、実測。D-3石列実測。C-2、D-2Ⅲ層期の石列(溝)平面実測。
- 9月 7日・8日 C-3南側Ⅲ層下部、D-4北側表土からⅢ層掘り下げ。D-3北西角の掘り下げ(黄色土より北に岩盤が露出)。
- 9月 9日～17日 C-3はⅣ層、D-4Ⅲ層掘り下げ、北東角掘り下げ。D-3西側掘り下げ、東石列平面実測。D-4獣骨埋葬遺構が検出(Ⅲ層)。D-2石列平面図作成。城三ノ郭草刈り。
- 9月27日～30日 D-4獣骨埋葬遺構掘り下げ。D-3黄褐色土、Ⅳe層の掘り下げ、。C-3 Ⅳc層掘り下げ。
- 10月4日～8日 C-3 Ⅳc、Ⅳd層の掘り下げ。南拡張し掘り下げ。D-3 Ⅳe層の掘り下げ。
- 10月12日～25日 D-3 Ⅳe～Ⅴ層上面まで掘り下げ、石列清掃、西壁実測。C-3 Ⅳd・Ⅳe・Ⅴ層上面まで掘り下げ、遺構平面実測。C-2、C-3溝石列平面実測、平板測量。
- 10月26日～29日 C-3南東側平面実測、掘り下げ、石敷遺構の半裁、北西、南西石列溝の掘り下げ。D-3、D-4掘り下げ石の除去。C-4掘り下げ。
- 11月 1日～ 2日 C-3石敷遺構の半裁、北西掘り下げ、南西石列溝の掘り下げ。D-3石列除去。C-4掘り下げ、柱穴半裁。
- 11月 4日～15日 C-3掘り下げ、Ⅳe層に見られる遺構(石敷)平面、断面図作成。D-3石列北の黄色土掘り下げ。C-3、C-4、D-3、D-4石列の平面実測、D-3立面実測。
- 11月16日～19日 D-3石列北側柱穴状遺構の掘り下げ、半裁。C-3石敷遺構の石除去、平面図及び断面図作成。C-3Ⅴ層掘り下げ。C-4、D-4石列の立面図作成。C-4黄色土層掘り下げ。
- 11月22日～24日 C-3南東側 Ⅴ層掘り下げ、C-4 Ⅶ層掘り下げ。D-3北東柱穴状遺構内掘り下げ。D-3西、北グリッド南壁、東壁清掃。東グリッド石列下掘り下げ。
- 11月25日～29日 D-3黄褐色土層掘り下げ、石列北西側割付。C-3南東側柱穴遺構の掘り下げ。溝、P i t 図、南壁断面図作成。クワ跡が検出。
- 12月 3日～ 8日 C-3西、北側と北東側の断面図作成。北西側埋め戻し。D-3北西 石列平面図作成、角壁面及び床面清掃。黄色土の掘削。
- 12月 9日～14日 C-3南西、南東側の断面図作成。南側T・P北壁、西壁断面図作成。D-3礎石プランの平面、断面図作成。石列(北西側)立面図作成。C-2、D-2の抗打ち。C-4、D-4石列部分より南側の埋戻し。
- 12月20日・21日 クワ跡、柱穴、溝状遺構のグリッド埋め戻し作業。C-3南 獣骨取上げ、平面、断面図作成。北壁セクション図作成。

平成13年度 (第16次調査)

平成14年

- 3月 1日～ 7日 伐採作業、発掘区の設定、基準抗の確認、磁気探査、表層探査。斜面地から崩落土防止のため防御柵を設置。
- 3月 8日 D-3北側平面清掃、掘り下げ。C-4獣骨露出作業(子馬?)。D-4北側の清掃、掘り下げ。
- 3月11日～13日 C-4暗褐色混礫土層→暗褐色混貝土層の掘り下げ、獣骨露出作業。C-4、D-4石の露出作業。C-5、D-5掘り下げ。
- 3月18日～20日 C-4、D-4石の露出作業。C-4暗褐色土層(Ⅳ層)掘り下げ。C-5、D-5掘り下げ。

第IV章 層 序

今回実施された北谷城南側丘陵麓付近の調査は城門に登るルートの確認を行うために、グスクの丘陵中腹の平坦面(調査地より上部にある)より斜面地を成す麓及び平坦地にかけてトレンチを設けて調査を行った。掘削の段階で斜面地はグスク時代より平坦に造成していることが判明した。その造成地は斜面地全体に拡がるのではなく、グスクの一の郭(第2図)の真南下の約200㎡余の造成範囲を確認できた。西端はno.2トレンチまで及んでいない。東はno.1トレンチの東壁では延びていることが判明しているが今回の調査では拡張は行っていない。

各トレンチの層序は以下のとおりである。

no.1～4トレンチ

第I層：表土層。斜面地及び平坦面に堆積。斜面地は北側が厚く南に薄くなる。平坦地は厚く堆積する。

第II層：黄色砂層。丘陵中腹より下方にニービの堆積層がある。調査地の西側には戦時中に日本軍が掘削した壕が存在することや、戦前の畑地を作る際に周囲より持ち込まれ堆積したと思われる。調査地の北側に多く堆積し、南に薄く堆積する。全面には広がらない。本層からは近代磁器が見られる。戦中から戦後直後に堆積したと思われる。

第III層：茶褐色混礫土層。丘陵中腹は琉球石灰岩の露頭する場所が多々見られる。調査区の北に墓が存在することから、石灰岩を掘削した際の礫が調査区全体に広まったと思われる。戦前は当該地域を畑地として利用していたようである。本層上部は礫が含まれ、近代磁器が見られる。下部は礫が少なくなり、近代磁器やグスク土器や中国産陶磁器が混在している。本層は戦前の堆積である。

第IV層：暗褐色土層。本層は当該調査区がグスク時代に斜面地を掘削し平坦地に造成し、構築物や石垣などの遺構が確認された。C・D-3グリッドより西側に堆積し、C-3・4グリッドの南側で米軍によって切られる。西側はno.1トレンチの東壁で確認できることから延びることは間違いないようである。本層上部は第III層との混ざりがみられるがしまりがある。下部は貝殻を多く含み、遺物の出土が多くなる。遺物はくびれ平底土器・グスク土器・中国産陶磁器・本土産陶器・角釘などが出土する。

第V層：黄褐色土層。斜面地の石列遺構1より南側に堆積する。第IV層同様C-3・4グリッドの南側で米軍によって切られる。遺物はくびれ平底土器・青磁・本土産陶器などが出土する。

第VI層：灰色砂層。no.1トレンチの平坦部に堆積する層である。本層はB-4グリッドの北側から南側に窪地を呈し、そこに堆積していて若干水分を含む低湿地である。土壌墓は本層期にあたる。遺物は白磁の玉縁口縁碗(第19図1)が出土している。

第VII層：灰黒色土層。第V層同様で、土壌墓は本層を掘り込んでいる。低湿地で無遺物層である。

第Ⅷ層：地山。斜面部のD-3・4グリッドの北側は岩盤が、そこから南に赤土が堆積する。平坦部では地山は未確認である。

no.2 トレンチ

第Ⅰ層：表土層。斜面地から平坦地にかけて堆積する。no.1 トレンチに比して薄く堆積する。

平坦部では井戸（チンガー）を覆う暗褐色土が堆積する。

第Ⅱ層：茶色土層：斜面部に堆積する。戦後の耕作土と思われる。

第Ⅲ層：茶褐色土層。no.1 トレンチ同様C-2グリッドの北側の窪地に堆積する。井戸は本層期に作ったと思われる。

第Ⅷ層：地山。斜面地は赤土が堆積し、斜面地と平坦部の境に岩盤、砂岩、クチャ（島尻層）と続いている。平坦部は第Ⅲ層までの調査であったため、地山は未確認である。

第V章 遺 構

今回の調査で、建物址遺構、溝状遺構、石列遺構、敷石遺構、円形炭混じり遺構、土壇墓、獣骨埋葬遺構、井戸（チンガー）等の遺構が検出されている。

第1節 建物址遺構（第5図）

本遺構はC・D-3グリッド、C-4グリッドにかけて検出された柱穴及び礎石の配列より建物の存在が推測された。本地域は元々は斜面部で、そこを平坦に開拓したことが判明した。掘削当時より斜面地にもかかわらず理想の堆積が平坦であることから、遺構の存在が期待された。進めている際に、先に集積（石列遺構1）が検出された。

第2節 溝状遺構（第5図）

本遺構はC-3グリッドの東側より西に向かって「L」字状に曲がり南へ向かう。東側は幅が約26cmで西から南にかけては約20cmと狭くなる。本遺構は石列遺構1と同時期と思われる。C-3グリッドの第Ⅳ層。

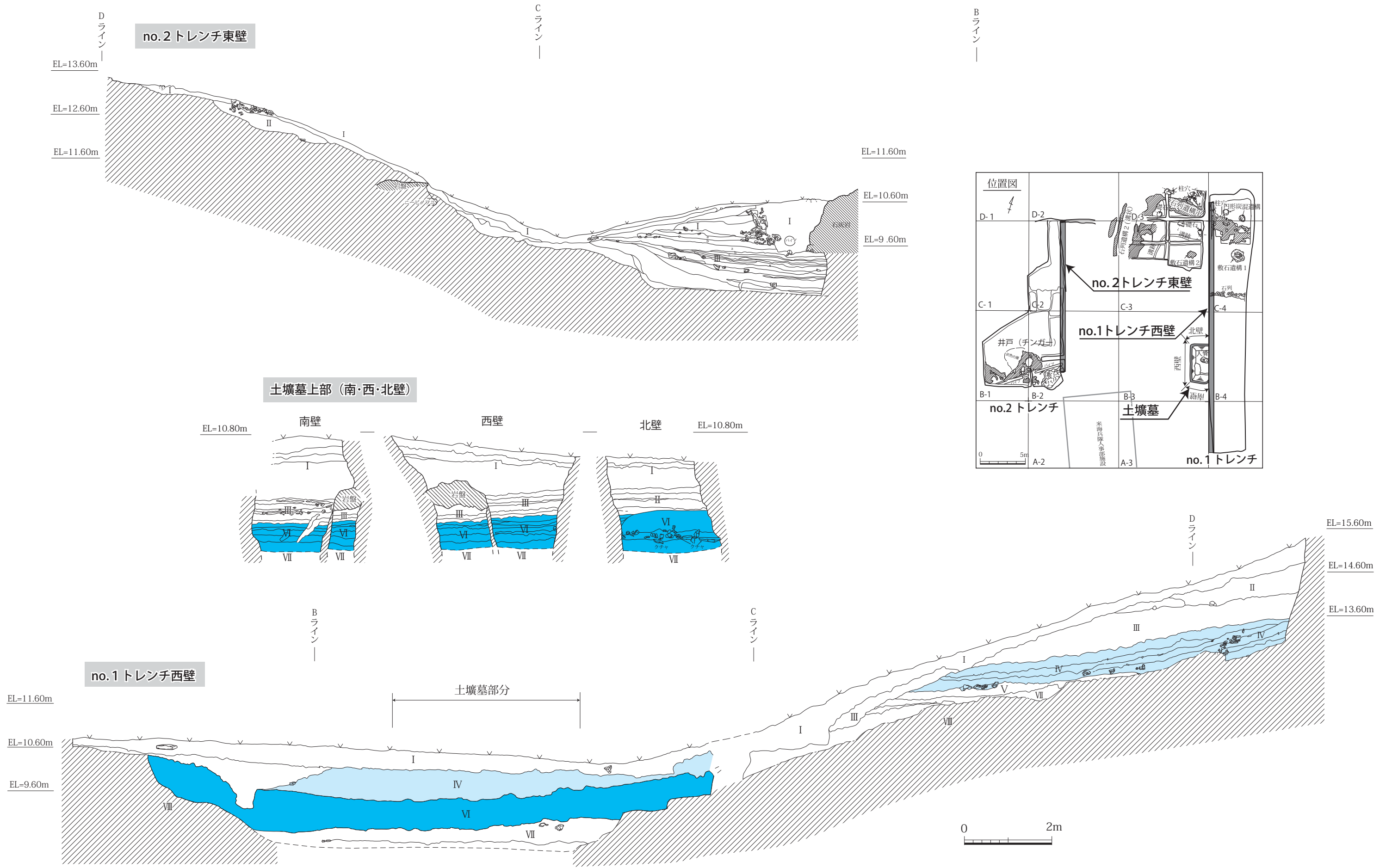
第3節 石列遺構（第6図）

(1) 石列遺構1

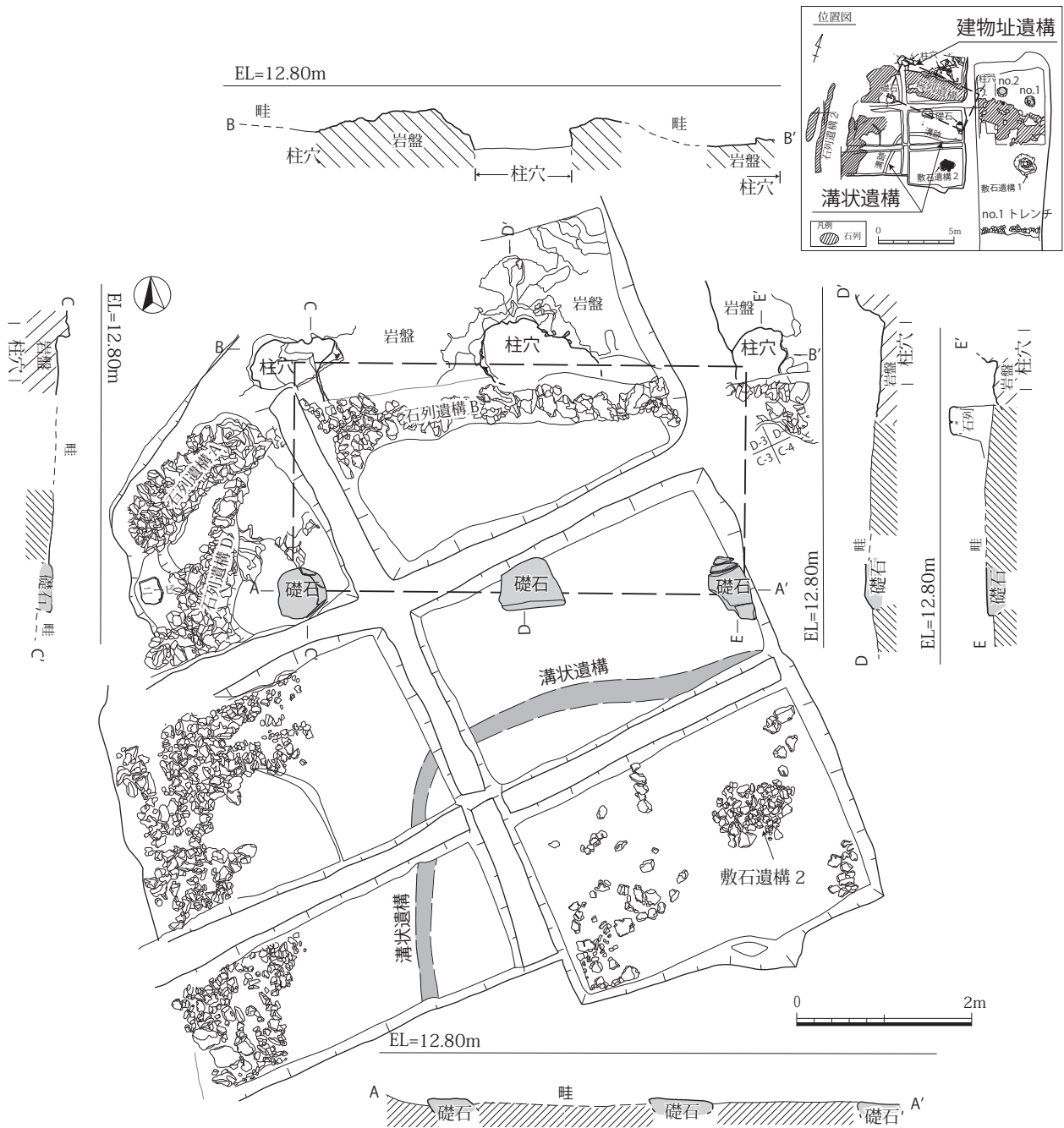
石列遺構1は本来の斜面地を掘り下げた後に、礎石をもつ建物遺構が存在していた。しかし、その建物遺構が利用されなくなった後に本石列がC・D-3グリッド、D-4グリッドに配されたようである。

露出時は大小様々な礫が幅約1.7～2mの集石であったが、明らかに崩れた石を除去していくと、石列は幅約0.8mで少なくとも2段を成している。遺構の平面形は、C-3グリッド(南)からD-3グリッド(北)へ直進し、そこから直角折れ、D-4グリッド(東)に延びていることが判明した。礫は主に琉球石灰岩で、切石を利用した石は無かった。D-4の東側には長さ約2×0.8m最も大柄な石が配され、一端石列が途切れた状況を呈している。D-4の東側は未調査であるため、石列が延びているかは不明である。

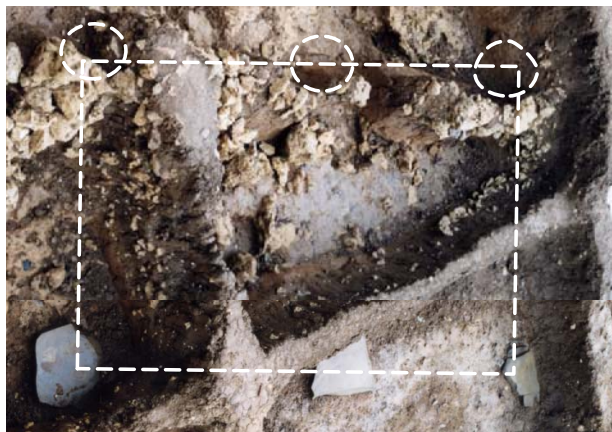
石列は地山（赤土）より積まれている。礎石をもつ建物遺構より本石列が新しいと判断したのは、石列



第4図 no.1 トレンチ西壁・断面図・no.2 トレンチ東壁



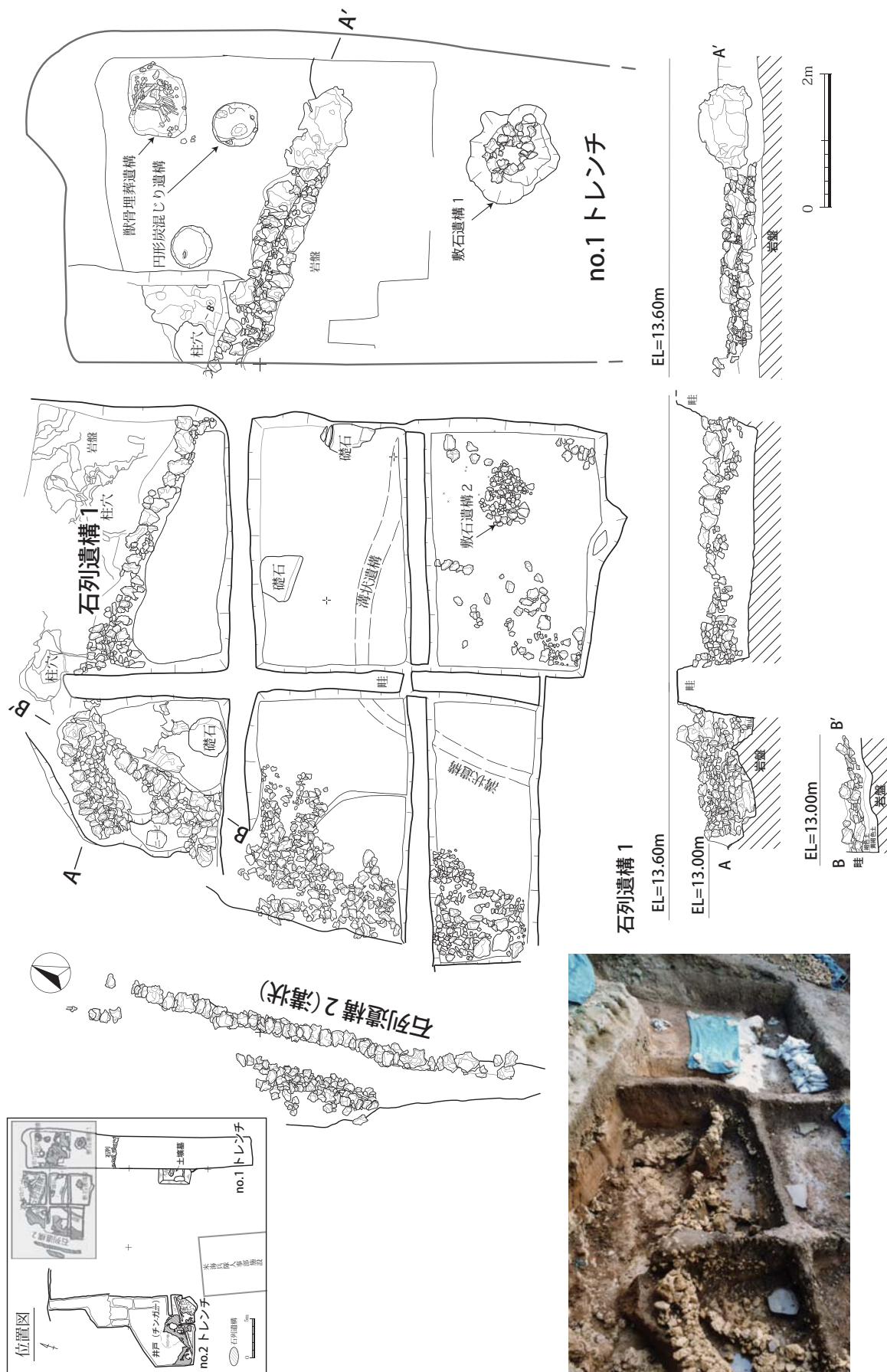
第5図 建物址遺構と溝状遺構平面図・断面図



図版1 建物址遺構検出状況



図版2 溝状遺構検出状況



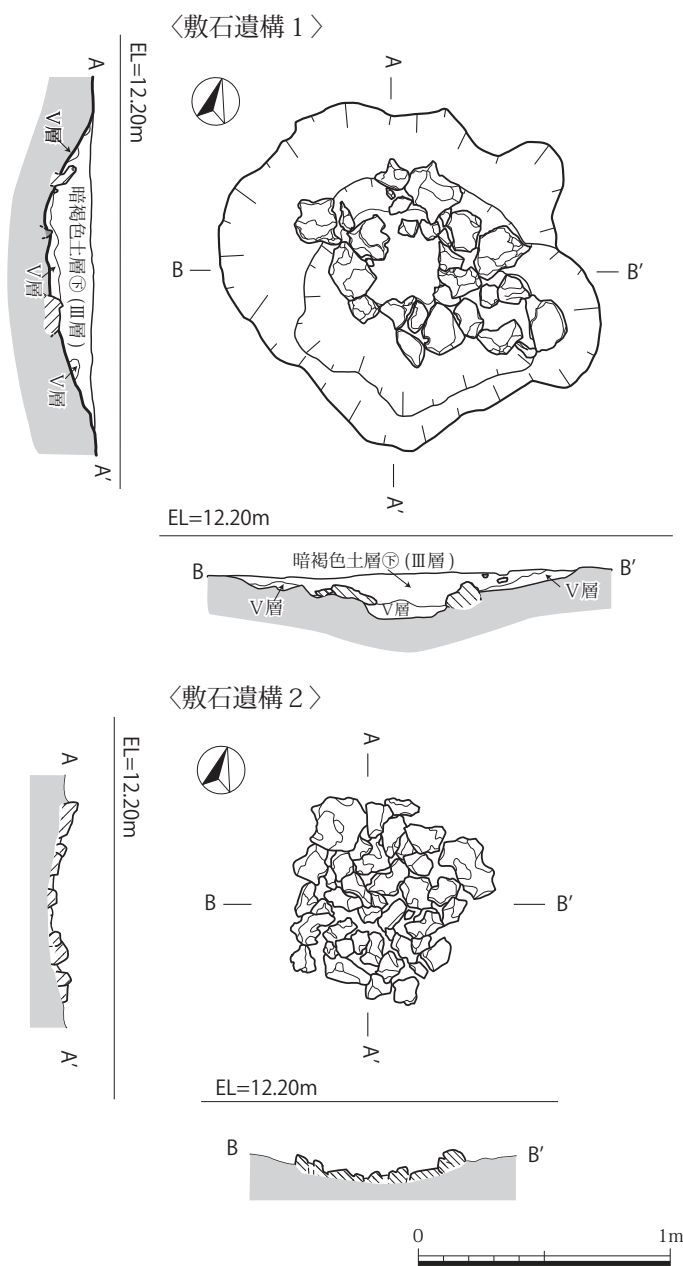
図版 3 石列遺構検出状況

第 6 図 石列遺構 1・石列遺構 2 (溝状) 平面図・側面図

に囲まれるように配されている3基の礎石に対比する柱穴が石列の北側に岩盤がありその岩盤に直径約57cmの柱穴3基がはつられていたことや、レベルがほぼ同じであることから建物が先で、石列が後に構築されたことによる。ただし、今のところ石列の全容が判明していないため目的は不明である。

(2) 石列遺構2（溝状石列）（第6図）

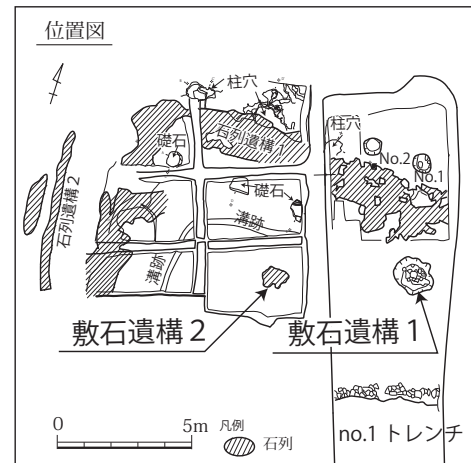
石列遺構2は斜面部を平坦地に造成した範囲の最も西側に位置している。ほぼ西側の斜面部下にあり、溝状に石は配されている。壁際は小礫が数段壁にへばり付くように積みれ、幅約50cmを空けて北から東に約30cm大の礫を一行に配して溝状にしている。石列遺構2も地山より積みれている。石列遺構1と本遺構の関係は不明である。



第7図 敷石遺構1・2平面図・断面図



図版4 敷石遺構1 検出状況



図版5 敷石遺構2 検出状況

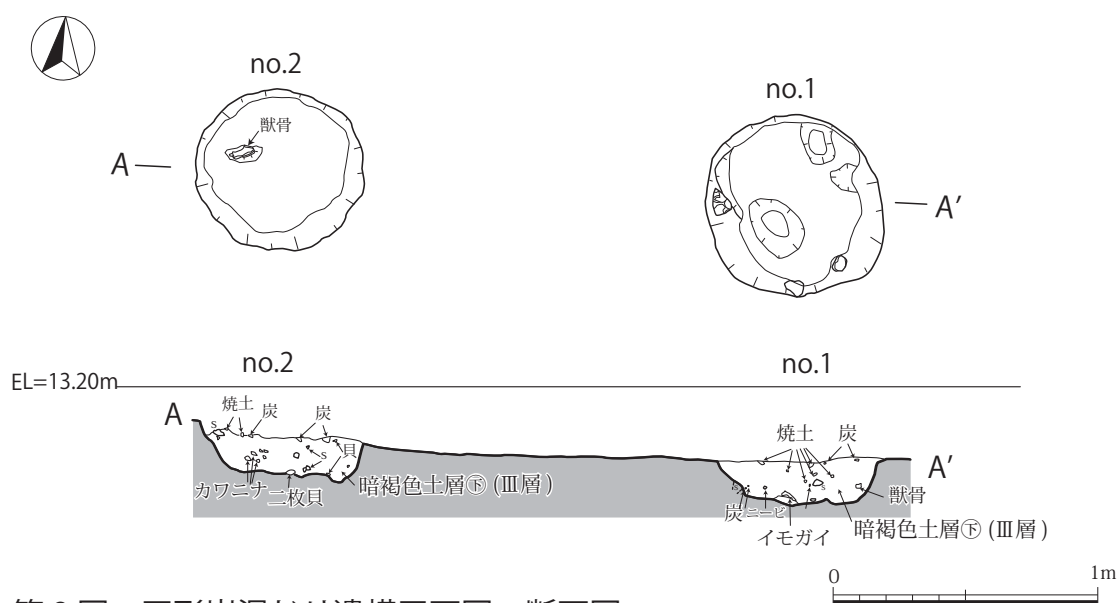
第4節 敷石遺構

(1) 敷石遺構1 (第7図)

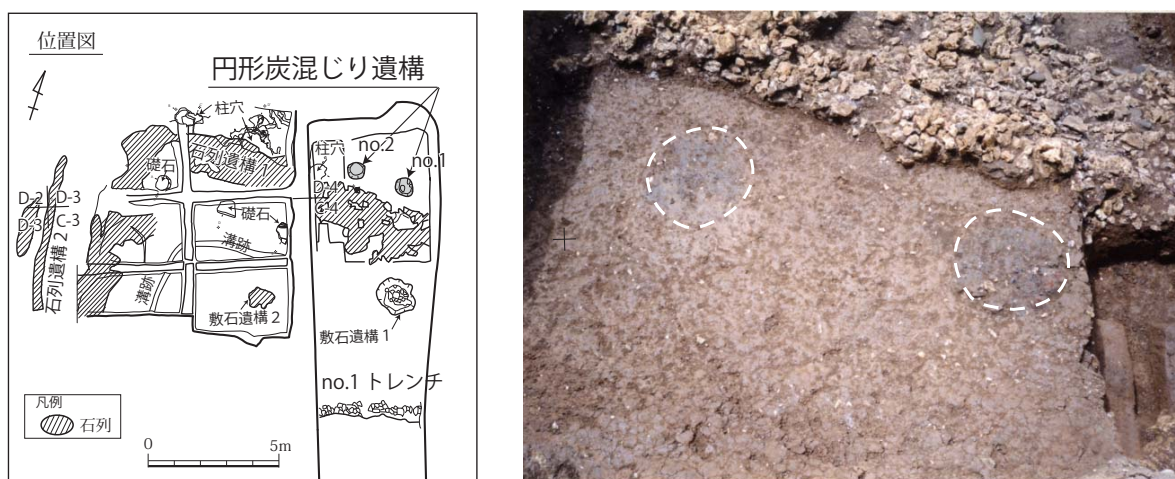
敷石遺構1はno.1トレンチのC-4グリッドで、石列の約2m南に位置している。本遺構の平面形は長楕円形で、A～A'は1.25m、B～B'は1.4mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。最深部は0.2mである。第V層に掘り込まれ、覆土は第Ⅲ層であった。石は掘り込みの底部に集中している。本遺構の西側に第V層の建物プランがあるが、約2m離れていることから関連性が窺えない。

(2) 敷石遺構2 (第7図)

敷石遺構2はC-3グリッド南東側に位置している。第IV層で検出された遺構で、北側にある礎石と同時期と思われる。平面形は長楕円形で0.9×0.8mで拳大よりもやや小さめ石が敷き積まれている。断面形は浅い皿状を呈している。最深部で0.1mである。北側の礎石を伴う施設の一部であろうか。だとするならば9本柱の建物の可能性も考えられる。



第8図 円形炭混じり遺構平面図・断面図



図版6 円形炭混じり遺構検出状況

第5節 円形炭混じり遺構（第8図）

本遺構は no. 1 トレンチ D-4 グリッド石列の北側に位置する。第IV層中の遺構で石列が出来た後に堆積した層に設けられたと思われる。遺構は2基あり、東側が no. 1、西側が no. 2 である。サイズはそれぞれ同様に直径は約 60cm、深さは 15cm である。覆土には焼土や炭、少量の淡水貝や海産貝、獣骨が見られた。no. 1 と no. 2 の間隔は 1.35m である。

第6節 土墳墓（第9図）

人骨埋葬遺構の形態は土墳墓で、丘陵麓の平坦地 no. 1 トレンチ B-3・4 グリッドの境中央部で1基検出された。遺構は東西方向に溝状を呈する地形上にあり、伝道集落の東側に位置している。

第IV層で、その上部からは白磁の玉縁口縁碗（第19図1）が出土していることから11～12世紀頃と推察される。

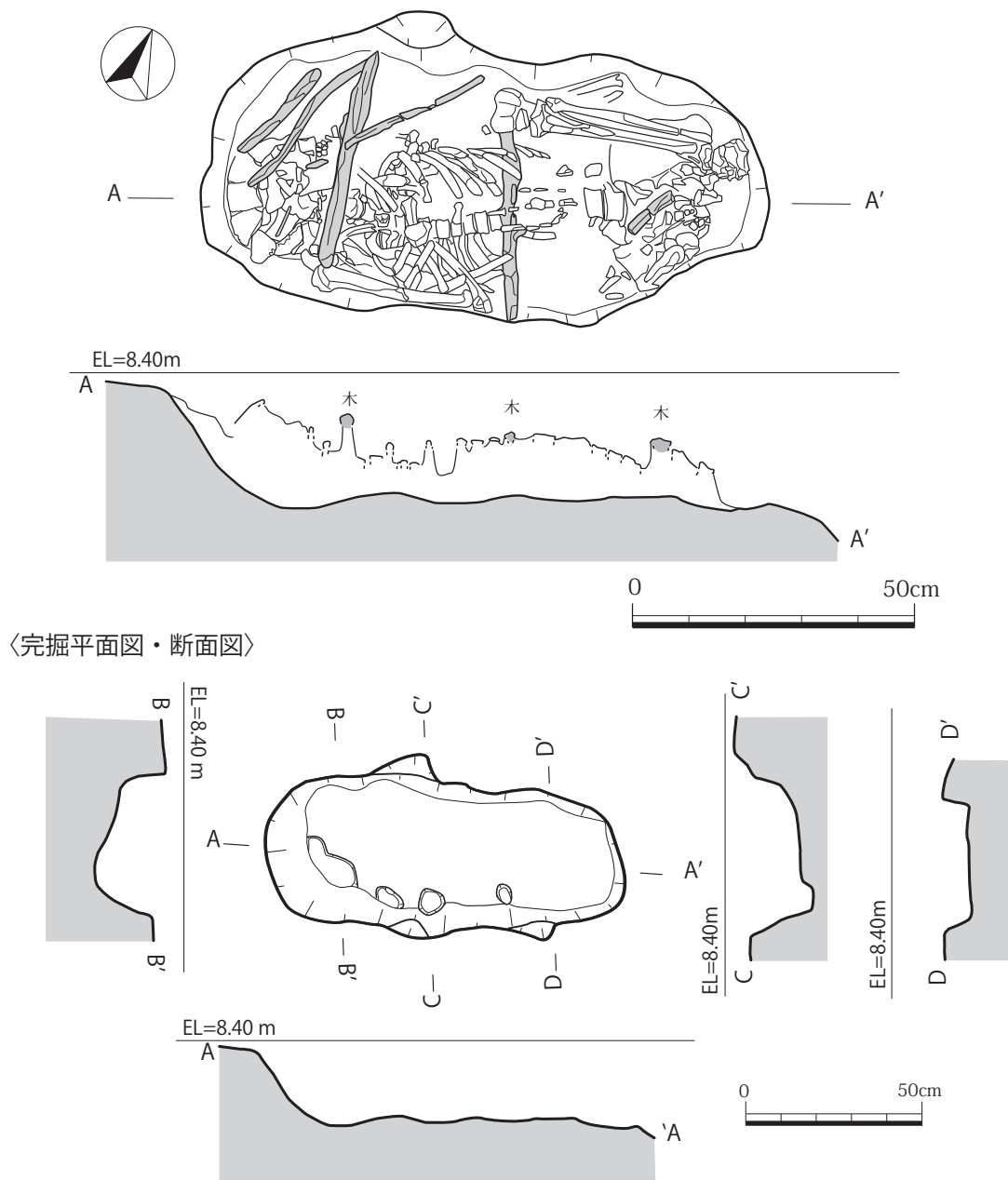
検出状況は no. 1 トレンチの掘削後、西壁の壁面清掃中に左大腿骨が露出していた。そこで、露出周辺を精査したところ掘り込みが確認されたことから、約2×2m西側へ拡張し、遺構直上まで重機により掘削を行った。

平面形は長楕円形を呈し、長軸は1m、短軸0.45m、深さ約0.15～0.2mである。方位は長軸が東西、短軸は南北である。頭位は北西を向き、仰臥屈葬にて埋葬されている。埋葬人骨の残りは良好である。

本遺構の特徴は埋葬人骨に木片（棒）が伴っていたことである。当初、棺箱を想定していたが、配置されている状況が顔を隠すように2本、肩部に1本、左腕側に1本、腰部に1本、計5本の棒であったため箱の状況では無いと判断した。そこで、肩部と腰部の棒はほぼ平行で、腰部の棒は脊柱と大腿骨の間に挟まれている状況から両肩や足の屈葬を固定するためではないかと思われる。このような埋葬形態は、死因や死生感に起因するのではないかと考えられる。

棒の長さは頭部の2本は20cmと32cmで、肩部と腰部は40cm、左上腕骨側は28cmで、太さは1～3cmである。また、右側頭下部には5cmの蔓？が付着していた。

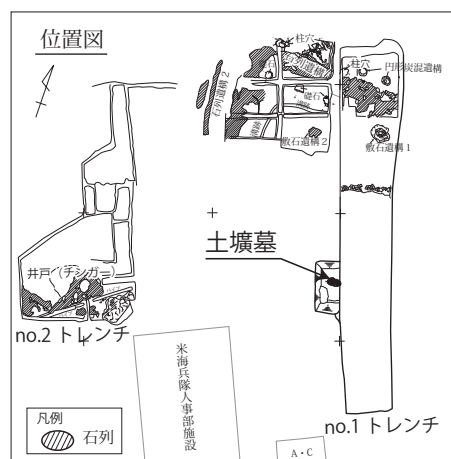
遺構の掘込み状況は、東西の断面状況は、西側は緩やかな傾斜で、南北は急峻な掘込みである。床面0.85×0.3mの平坦をなしている。

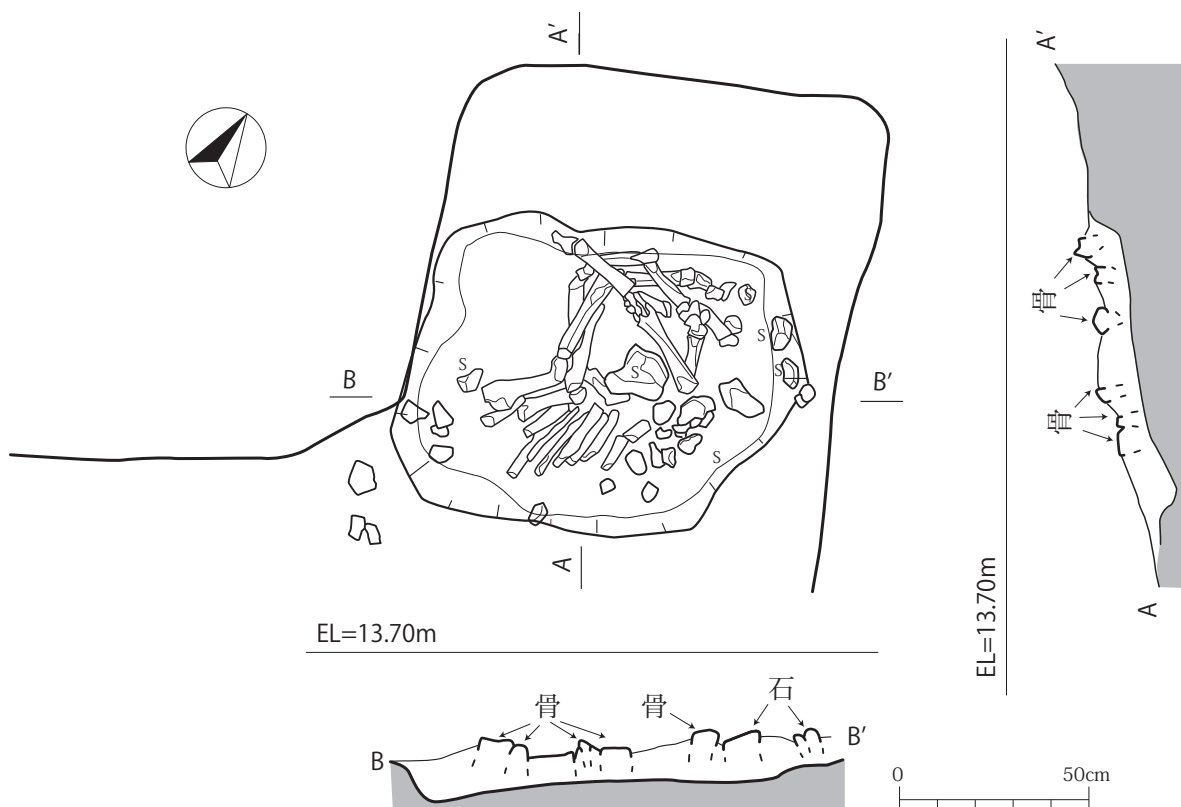


第9図 土壙墓（埋葬状況と取上げ後）

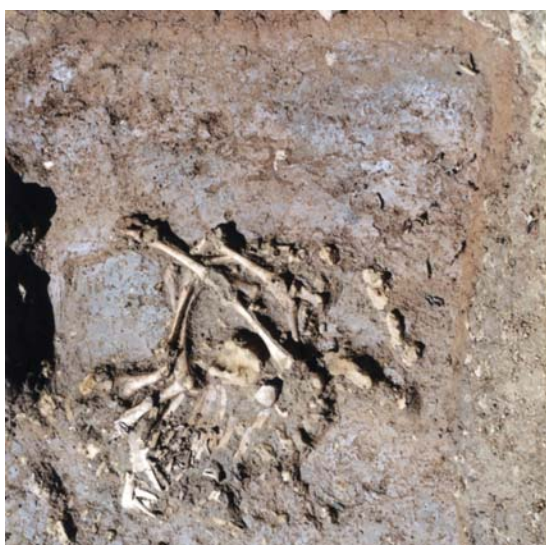


図版7 土壙墓検出状況

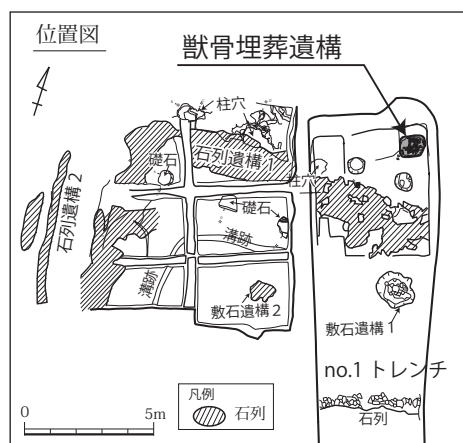




第 10 図 獣骨埋葬遺構平面図・断面図



図版 8 獣骨検出状況



第 7 節 獣骨埋葬遺構（第 10 図）

本遺構は no.1 トレンチ D-4 グリッドの北東角より検出されたものである。北東壁崩落後の清掃時に骨の露出が確認されたことから調査を行った。掘り込みは第Ⅲ層期から地山まで彫り込み埋葬されていた。掘り込みは 1.1 × 0.8 m であった。埋葬されていたのはウシと思われる。埋葬は頭部を西側に向き、四肢骨が北側を向いていた。体の左側を下にした側臥と思われる。

第8節 井戸（チンガー）（第11図）

井戸は丘陵麓に位置し、no. 2 トレンチ（B-1・2 グリッド）の南側で検出された。井戸は南に洗い場と考えられる平場があるが、米軍による上水管パイプが東西に埋設され大半は破壊されていた。また、北東端はキャタピラ痕が見られたことから井戸の北側は米軍によって造成された可能性がある。井戸の南側は米軍施設があるため広げることが出来なかったが、残っている可能性はある。

井戸は掘り抜きで、井戸の洗い場は南に位置していた。井戸縁の平面形は円形で石の外縁で直径約1 m（内径0.9 m）を測る。深さは約4 mある。井戸の内部は、上部より1.8 m下までは切石で整われていて積まれている。石質は琉球石灰岩で所々にノミ痕跡が観察できる。井戸の南側は取水口となっているため、石の面は汲み上げる際に桶が石積みの面にあたったため角が無いフラットな面を呈していた。その下部から床付近まで大きめの石が積まれていた。石質はサンゴ石灰岩である。床面は碗型を成し、直径が約4～4.8 mの楕円形の構造である。石は床面より0.2 m上から積まれていることが判明した。床面はクチャ層（島尻層群）である。

井戸の最上部の南縁石は弧状を成し、内側には水をくみあげるための紐擦れ痕が顕著に残っていた。そのことからすると、直接縄を利用して汲み上げていたと推察される。しかし、滑車を利用していた可能性もあるが、柱となる構造物址も無く、井戸内や周辺から滑車は見られしていない。ちなみに、井戸内には、米軍の廃棄物が主で、下部には戦前に利用していた取手の付いた一斗缶やアルミ缶製のバケツ桶が数個検出された。

洗い場の東側には2×1 mの石灰岩が露頭し、上部は平坦を成していることから、汲んだ水を桶などに入れ替え、一時的に置き場所として利用していた可能性がある。残存する洗い場の床面は、0.4～0.8 mの一枚板の琉球石灰岩が数枚敷かれ、所々に漆喰が塗布されていた。洗い場の西側にも石敷きが残っているが構造が把握できる状況ではなかった。

井戸の周囲の土層を観察してみると、直径約2 mで井戸に向かって逆三角状に堆積する青灰色の粘質土が見られる。この堆積が、井戸を掘り込む際の痕跡と考えられる。

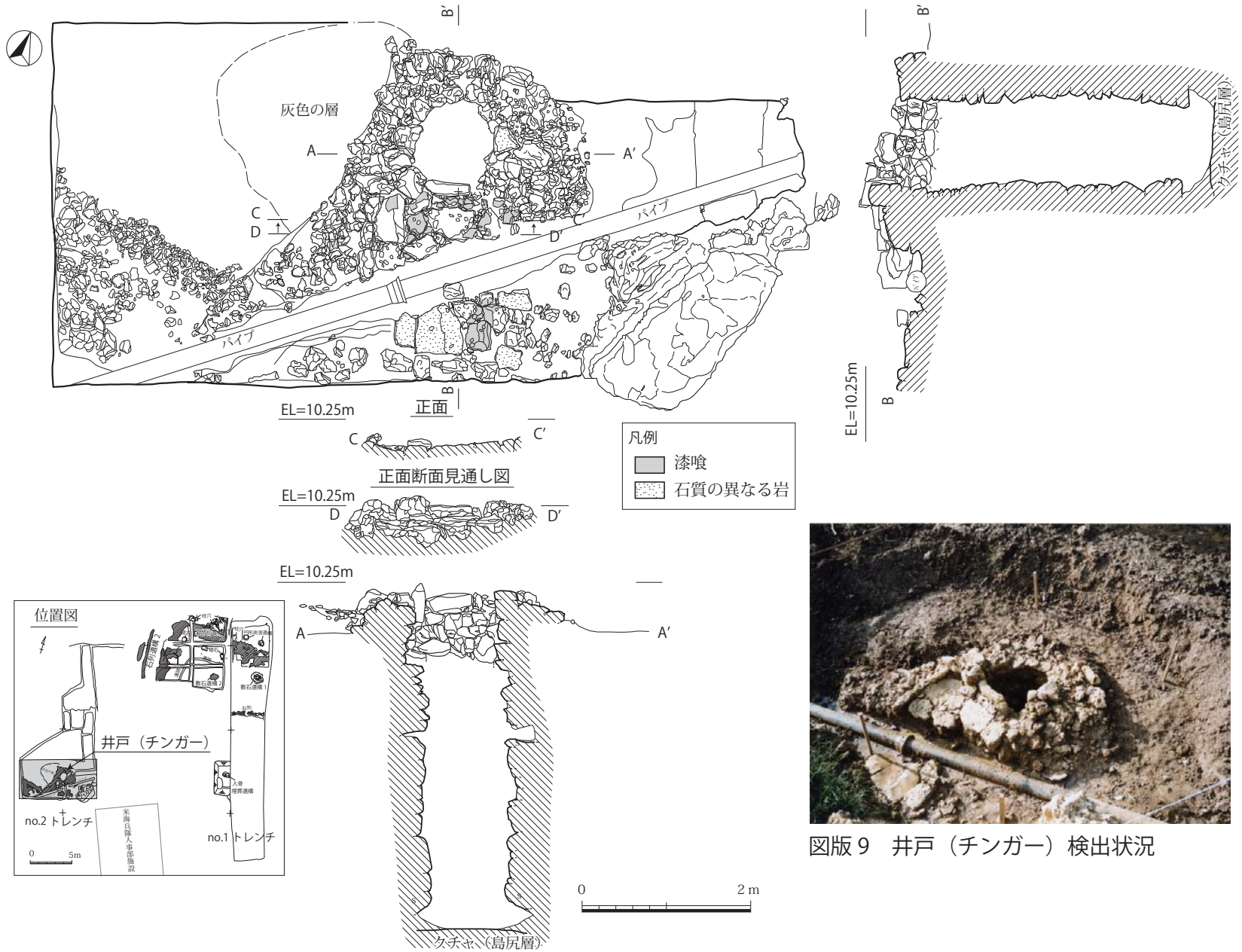
本トレンチの北側斜面部（C-2 グリッド）の堆積を見てみると斜面部はマージ（島尻層）でその下部に琉球石灰岩があり、更に下部は砂岩（ニービ層）が堆積し、基盤に青灰色の泥岩（クチャ層）が南に傾斜して堆積している。このような状況の延長線上に井戸（チンガー）が配されている。

井戸が露出された付近や井戸内の内容物から戦前に利用された井戸と思われる。本地域の平坦部一体は伝道集落があり、村もしくは個人で使用していたものと推察される。

調査後は伝道郷友会や在沖海兵隊施設技術部のご協力により復元をすることとなった。復元は井戸縁の直径にあわせて枠を作り、保護砂を敷いて上にコンクリートを張った。コンクリートはその上にマンホールを設置するための基礎台である。基礎台の上にはマンホールの直壁型を載せ、その上に斜壁型マンホールを設置した。斜壁型マンホールは上部の方が窄まるものである。井戸の口は通気性を考慮したグレイチングの蓋にした（巻首図版7）。

第VI章 出土遺物

出土遺物は人工遺物では土器・カムイヤキ・白磁・青磁・染付・天目茶碗・褐袖陶器・本土産陶器・本土産磁器・沖縄施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・瓦質土器等の器、石器・銭貨・鉄製品・羽口・滑石・青銅製品・骨貝製品・円盤状製品・ガラス玉・石製品、自然遺物では貝類遺体・動物遺体などが出土した。以下、それぞれの遺物について略述する。



第11図 井戸 (チンガー) 平面図・断面図

第1節 土器

総数 5054 点の土器が出土したが、小破片が多く全形を窺える資料は得られていない。その内訳は後期土器が 4425 点、グスク土器が 454 点、近世土器（宮古式土器・他）16 点と前者が圧倒的に多く、本遺跡の主体となっている。出土地と層序をみると、C-3グリッド・IV層からの出土量が最も多い。次に多いのが D-3グリッド・IV層である。その他、白色粒と赤色粒を混入した宮古式土器と思われる破片が 15 点出土している。今回の調査で得られた土器の出土状況を第 2・3 表、詳細は観察一覧に示した。後期土器、グスク土器、近世土器の順で記述する。

(1) 後期土器（第 12～16 図）

後期土器の内訳は口縁部 133 点（頸部を含む）、胴部 3907 点（2 cm 以上計数）、底部 385 点の合計 4425 点である。胴部の総数には別個で集計した光る黒色粒（黒雲母か輝石、以下「黒色鉱物」）を混入した土器 27 点も含む。以下、出土量が少ないために有文の口縁部、胴部も一緒に含め、順に記述する。それぞれ詳細は観察一覧に示した。

①口縁部

口縁部は器種ごとに分類し、壺を I 類、深鉢形（甕形含む）を II 類とする。小破片のため、壺以外のものは深鉢形に含めた。

I 類：壺（第 12 図 1～3）

I 類とした壺は 3 点の出土で、すべて図示した。図 1 は瘤状凸帯を貼付するが、上部は破損している。破片の状況から口唇直下までの貼付と考えられる。凸帯は下部より上部が厚く、平面形は略扇状となる。図 2・3 は無文口縁で、前者は口唇部が丸みを帯びながら頸部で屈曲するもので、後者は口縁部が外反し、長頸壺と思われる。後者のタイプは平敷屋トウバル遺跡（1996）で出土している。胎土についてみると、図 1・2 は粘性が強く泥質である。図 3 は粘性が弱く、砂質と思われる。混和材としてはいずれも石英、白色粒、赤色粒がみられる。

II 類：深鉢形（甕）（第 12 図 4～14、第 13 図 15～27）

II 類としたのは深鉢形（甕）で、口縁部が外反するものを II A 類、直口するものを II B 類とした。さらに、口唇部形状によって下記のように分類し、その順に記述する。

II A 類：外反口縁

イ・口唇部が丸みを持つもの（第 12 図 4～9）

ロ・口唇部が角を持つもの（第 12 図 10～12）

ハ・口唇部が舌状のもの（第 12 図 13・14、第 13 図 15～18）

II A 類イは 46 点が得られ、そのうち図 4～9 の 6 点を図示する。図 4 は外面から内面にまたがって鞍状に小突起が貼付されている。図 5 は推算口径 15.6 cm で、口縁部の外反が強く胴部が若干膨らむ。胎土は、砂泥質を呈し、口縁部上端に沈線状の傷がみられる。図 7・9 も口縁部の外反が強く、後者は内面にナデ痕が明瞭に残る。図 6・8 は口縁部の外反と胴部の膨らみが弱い。器色は大半が橙色で、ナデや指頭痕がみられる。

II A 類ロは 21 点が得られ、図 10～12 の 3 点を図示した。図 10 は推算口径 12.2 cm を測る。図 11 は外反が強く、「く」の字状に屈曲する。屈曲部には指頭痕が明瞭に残る。図 12 は暗黒褐色を呈し、胎土に光る黒色鉱物を多量に含むことからやや古い感を受ける。図 17・19 も同様である。平安原 B 遺跡の浜屋原式土器もしくは縄文晩期系に類似する。

II A 類ハは 34 点が得られ、図 13～18 の 6 点を記述する。図 13 は二条の凸帯が縦位に貼付されるもので、口唇上をまたがる鞍状凸帯である。図 14 は推算口径 8.6 cm、器厚 0.4 cm と小型の薄手土器で、1

点のみの出土である。類例資料が我謝遺跡（1983）で見られる。図 15～18は無文の口縁で、図 17は先述したように黒色鉱物が混入されている。図 17・18の内面には刷毛目痕が顕著に残る。その他のⅡA土器は、全般的に白色粒・赤色粒などの混和材を含む。

ⅡB類：直口口縁

ⅡB類は僅か9点の出土で、そのうち3点を図示した。ⅡA類と同じように口唇部の形状により丸をイ、角をロ、舌をハとした。ⅡB類ハは1点得られたが、小破片のため割愛した。

イ・口唇部が丸みを持つもの（第13図19・20）

ロ・口唇部が角を持つもの（第13図21）

ⅡB類イは図19・20の2点を図示した。図19は微弱な肥厚帯を有するもので、指頭痕によって口唇部が若干強調されて丸みを持つ。図20は口唇部が丸みを帯びながら直口する。橙色を呈し、ヘラナデの調整痕が顕著である。

ⅡB類ロは図21の1点で、平らな口唇部を呈する。粘土積み上げによって疑似肥厚となす。意図的なものか、雑仕上げなのかは不明である。内面には刷毛目の調整痕が顕著である。ⅡB土器も混和材はⅡA土器とほぼ同様である。

その他、有文胴部が12点得られたので、4点を図示して記述する。（第13図22～25）

図22は縦・横位の凸帯を貼付し、その上に刻み目文を施している。図23も横位の凸帯に刻み目文を施している。図24はラフな凸帯を貼付するもので、断面はゆるやかな三角形を呈する。図25は把手上面がやや長方形を呈し、断面が三角形になる。胎土は堅致でしまっており、把手の形状からするとグスク土器の可能性もある。

口縁部はⅡA類がほとんどを占め、その中で口唇部形状が丸いタイプが最も多い。

②胴部

胴部は小破片のため胎土や混和材などの違いから後期土器・グスク土器に大別し、まとめて記述する。後期土器胴部は無文がほとんどで、有文は僅か7点である。有文胴部は、口縁部の項と一緒に記述したので省略する。無文胴部は3880点（2cm以上を計数）、重量は2cm以下のものもすべて量り、総量25,252.75gである。光る黒色鉱物を含んだきめ細かな胎土の破片が27点出土し、重量は130gを量る。先述したとおり、縄文晩期系土器の可能性もあることから、別個に集計した。後期土器の総数には27点も含め、3907点とした。図示した図26は胴部が「く」の字状に屈曲する特徴があり、図27は内面の刷毛目痕が顕著に残る。グスク土器胴部は総数439点（2cm以上計数）で、重量は2cm以下のものも含めて2,911gである。胴部も後期土器が主体となる。

③底部

底部はくびれ平底がほとんどを占め、僅かに丸底と平底が出土している。丸底は形状や混和材などから縄文晩期相当の土器に近いと思われる。僅少であることから後期土器の底部の項で記述する。丸底をⅠ類、平底をⅡ類、くびれ平底をⅢ類とした。以下、その順で記述する。

Ⅰ類：丸底（第14図28～30）

3点を図示する。図28は底面中央部を僅かに窪ませる尖底的丸底である。胎土は砂泥質で黒色鉱物を含む。器色は茶褐色を呈する。

図29は底面がやや広い丸底である。胎土に混和材として黒色鉱物を多量に含み、泥質でしまりが良い。器色は淡橙色を呈する。

図30は底面からの立ち上がり丸みを持つ平底であるが、混和材に黒色鉱物を含み、上記2点に類似していることからⅠ類とした。内面にはヘラナデが明瞭に残る。胎土は砂泥質で、橙色を呈する。

図 29・30 の胎土は堅緻でしまりが良く、底厚も大きいことから後期・グスク土器かとも考えられる。ただ、胎土に黒色鉱物を含み、図 28 に類似することから今回は I 類に含め、縄文晩期系の土器とした。

Ⅱ類：平底（第 14 図 31～34）

平底も僅か 12 点の出土で、そのうち 4 点を図示する。図 31・33 は膨らみをもって立ち上がり、図 32・34 は直線的に立ち上がる。図 31 は泥質で赤褐色を呈し、図 33 は砂泥質で外面は黄灰褐色、内面は橙色を呈する。図 32・34 は砂質で橙色を呈する。4 点とも指頭痕やヘラナデなどの調整痕がみられる。

Ⅲ類：くびれ平底（第 14 図 35～50、第 15 図 51～71、第 16 図 72～91）

Ⅲ類のくびれ平底は本遺跡の主体となすもので、385 点が出土した。底面からの立ち上がりたくびれの形状から、下記のようにⅢ a～Ⅲ e まで分類し、その順で記述する。

Ⅲ a・底面からほぼ直口して立ち上がり、それから外側へ開くもの（第 14 図 35～50）

Ⅲ b・底面からやや内傾して立ち上がり、それから外側へ開くもの（第 15 図 51～71）

Ⅲ c・底面が張り出し、外側へ開くもの（第 16 図 72～79）

Ⅲ d・底面が張り出し、あまり外側へ開かないもの（第 16 図 80～88）

Ⅲ e・d に似るが、底面の張り出しがなく、あまり外側へ開かないもの（第 16 図 89～91）

Ⅲ a は底面からほぼ直口して立ち上がり、それから外側へ開くもので、153 点が出土した。Ⅲ類の中では最も多く、そのうち 16 点を図示する。（第 14 図 35～50）

立ち上がりをみると丸みを持つものがほとんどで、角を持つものは少ない。底径は 3～10 cm 以上まであり、最も多いものは 5～7 cm である。図示した中で 12 点はその範囲に収まる。底径と底厚の関係をみると、最も多い 5～7 cm 台は 0.8～1.3 cm の範囲にあり、図 46・47・49 の 3 点は約 1.7 cm の厚さを示す。器色は橙色を呈するのが多く、他に灰色や赤褐色などがある。大半の土器に指頭痕やナデ調整がみられ、図 45 はヘラナデ痕が顕著である。

Ⅲ b は底面からやや内傾し、それから外側へ開くもので、Ⅲ類の中では 140 点とⅢ a に次いで多い。そのうち、21 点を図示する。（第 15 図 51～71）

立ち上がりはほとんどが丸みを持ち、角を持つものは少ない。底径は 3～10 cm 台までであるが、5～7 cm までが 73 個と最も多く、Ⅲ a と同じ傾向を示す。図示した中では、14 点である。底厚との関係をみると、最も多い 5～7 cm のものは 0.7～1.2 cm の範囲にあるが、図 55・59・65 の 3 点は 1.7 cm 以上とかなりの厚さを示す。このようなタイプはⅢ a・Ⅲ b にみられるもので、Ⅲ c～Ⅲ e には見られない。図 67 は上げ底でもないが、0.4 cm と底厚が薄い。器色は橙色を主体とし、その他に灰黄褐色、茶褐色などがみられる。器面調整をみると、指ナデ、ヘラナデ、指頭痕などがある。図 58・70 は上げ底となり、後者は僅か 0.4 cm の底厚である。

Ⅲ c は底面が張り出し、外側へ開くもので 19 点の出土である。そのうち、8 点を図示する。（第 16 図 72～79）上記Ⅲ a・Ⅲ b に比べて出土量が僅かである。

図 72・75 はゆるやかな弧を描くように立ち上がり、図 73・74・76～79 は直線的に立ち上がる。前者は 2 点とも外側底面に粘土を貼り付けている。類例資料として平敷屋トウバル遺跡（1996）、喜屋武グスク（1988）がある。底径は図 72 のみ 4 cm 台で、残りは 6 cm 台である。ゆるやかな弧を描く図 72・75 の底厚は 0.6 cm で、直線的なものは 0.6 cm と 1.0 cm の底厚を呈する。器色は橙色を中心に赤褐色、黄褐色を呈し、ナデや指頭痕などの調整痕がみられる。図 73 は内面に刷毛目痕が明瞭に残る。

Ⅲ d は底面が張り出し、あまり外側へ開かないもので、46 点が得られた。そのうち 9 点を図示する。（第 16 図 80～88）

底面の張り出しが丸みを呈するものと角を持つものが半々である。後者の中でも図 83・85・88 は底面の張り出しが強く、鐔状となってくびれが強調される。底径は 4 cm 台から 9 cm 台まであり、5～7 cm の底径

を持つものが大半を占める。出土量が少ない割には、7 cm以上の底径を持つものの頻度が高い。底厚との関係を見ると0.7 cm前後がほとんどで、1 cm以上を超えるものは僅かである。図示した中では図 82・89のみである。胎土は泥質が多く、橙色を中心に黄褐色を呈するものもある。器面調整にはナデや指頭痕などがみられる。

Ⅲ eはⅢ dに似るが、底面の張り出しがないもので、3点を図示した。(第 16 図 89～91)

図 89・90の両者はあまり外側へ開かない点はⅢ dと似ているが、底面の張り出しがないことから、今回はⅢ eとして別分類した。指頭痕やナデ調整痕がみられる。

図 91は底面からスムーズにくびれて立ち上がり、くびれ部分が長いことが特徴的な底部である。外面に残る調整痕は、条痕に混和材の引きずりがなからへラナデかと思われる。使用工具の幅は1.0 cm前後であり、器色は橙色を呈する。類例資料が少なく、今回はとりあえずⅢ eに分類した。今後の発掘成果を待ちたい。

底部はⅢ aが最も多く、次にⅢ bと続く。底面の張り出しが強いⅢ c・Ⅲ dは出土量が少ない。中でも外側に開いていくタイプのⅢ cは、Ⅲ dに比べるとより少ない。

(2) グスク土器 (第 17 図)

総数 454 点の出土で、その内訳は口縁部 7 点、頸胴部 1 点、胴部 439 点(2 cm以上計数)、底部 7 点である。以下、その順で記述する。胴部は後期土器の項で述べたのでここでは割愛する。

①口縁部

口縁部は僅か 7 点の出土で、壺形をⅠ類、鍋形をⅡ類とした。口径より胴径の方が大きいものは壺形とした。器種ごとに記述する。図 96は口唇部が欠損した鏝部分のみの頸胴部破片であるが、鍋形と思われることから口縁部の項にて述べる。

Ⅰ類：壺形 (第 17 図 92～95)

壺形としたものは口径より胴径が大きいもので、屈曲度が強いものとゆるやかなものがある。前者は図 92・93の2点で、口唇部から2 cm下まで直口し、それから90度近く屈曲する。図 92は推算口径が14 cmを測り、口縁部が僅かに玉縁状となる。橙色を呈し、両面とも丁寧にナデ調整をおこなっている。図 93もほぼ同じ器形であるが、図 92に比べて口縁部がやや厚手で、頸部付近は少し薄手になる。外面頸部には、一部煤が付着している。後者は図 94・95で、図 94は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、図 95は頸部がゆるやかな弧状を呈する。2点とも前者に比べて屈曲度が弱い。後兼久原遺跡(2003)の胎土分類に即すると図 92・93は器面がアバタ状を呈し、胎土の粘性が強く、泥質を呈する。図 94もアバタ状を呈するが、上記に比べてやや粘性が弱く、砂泥質を呈する。図 95は器面がアバタ状を呈さず、胎土の粘性が強い泥質の土器である。4点とも石灰質の白色粒・赤色粒を混和材として含んでいる。

Ⅱ類：鍋形 (第 17 図 96)

鍋形と思われるものは図 96の1点で、口唇部は破損している。鏝状の凸帯を持ち、羽釜模倣と考えられる。内面は丁寧に撫でられ、外面の雑さが目立つ。胎土は砂質で、石英・石灰質の白色粒・赤色粒を含み、他のものと違い滑石と思われる混和材がみられる。

②底部

底部は7点が得られ、底径の推算できる資料を4点を図示した。形状によって後兼久原遺跡(2003)を参考に下記のように分類した。

Ⅰ類：底面からの立ち上がりが30度以下の角度でゆるやかなもの (第 17 図 97・98)

図 97・98の2点で、鍋形の底部と考えられる。推算底径は前者が6.0 cm、後者は11.0 cmである。器面はアバタ状を呈し、胎土の粘性が強く、泥質を呈する。石灰質の白色粒・赤色粒が目立つ。

第4表-1 土器観察一覧

第図版	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地
第12図・図版10	1	口縁部	6.2	I・壺	有文	瘤状凸帯(刻み目文有り)外反一丸。泥砂質。焼成は良好。混入物：赤色粒・白色粒。少量。細かい。外面色：橙、内面色：淡橙。器面調整：ナデ、指頭痕	no.1トレンチ B-4 IV層
	2	口縁部	3.6	I・壺	無文	外反一丸。泥質。焼成は良好。混入物：赤色粒・黒色粒・白色粒。少量。細かい。外面色：淡橙、内面色：淡橙。器面調整：指頭痕、ナデ。	不明
	3	口縁部	4.6	I・壺	無文	外反一丸。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白色粒・黒色粒(光)。少量。細かい。外面色：橙、内面色：暗灰。器面調整：指頭痕。0.3cm	no.1トレンチ B-4 IV層
	4	口縁部	—	II・鉢	Aイ	瘤状突起(鞍状)外反一丸。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒(多)黒色粒(光)・石英・白色粒。やや少量。細かい。外面色：黄橙、内面色：淡橙。器面調整：指頭痕。0.3cm	不明
	5	口縁部	15.6 14.8	II・鉢	Aイ	外反一丸。砂質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白色(光)・黒色粒(光)。少量。細、赤は粗粒。外面色：橙、内面色：橙灰。器面調整：指頭痕、ヘラナデ。0.4cm	no.34トレンチ C-3 南東グリッド IV層
	6	口縁部	14.0 13.3	II・鉢	Aイ	外反一丸。砂質。焼成は良い。混入物：赤色粒。微量。細かい。器面調整：指頭痕、ヘラナデ。0.5cm	no.1トレンチ B-4 IV層
	7	口縁部	19.0	II・鉢	Aイ	外反一丸。砂泥質。焼成は良好。混入物：茶色粒・白色粒。普通。やや粗い。両面色：淡黄。器面調整：指頭痕、ヘラナデ。0.5cm	no.1トレンチ C-4 III層
	8	口縁部	—	II・鉢	Aイ	外反一丸。泥質(堅緻)。焼成は良好。混入物：赤色粒・滑石?。少量。微細。両面色：橙。器面調整：指頭痕、ヘラナデ丁寧。0.6cm	不明
	9	口縁部	—	II・鉢	Aイ	外反一丸。泥質(堅緻)。焼成は良好。混入物：赤色粒・白色粒。少量。やや粗い。外面色：橙、内面色：灰黄。器面調整：指頭痕、ヘラナデ丁寧。0.5cm	no.1トレンチ 不明
	10	口縁部	12.2	II・鉢	A口	外反一角。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・サンゴ。少量。やや粗い。両面色：灰橙。器面調整：指頭痕。0.4cm	no.34トレンチ D-3 石列土中 IV層
	11	口縁部	—	II・鉢	A口	外反(強)一角。砂質。焼成は良好。混入物：石英・茶色粒・白(光)。僅か。細かい。外面色：橙、内面色：黄橙。器面調整：指頭痕。0.6cm	no.1トレンチ B-4 IV層
	12	口縁部	—	II・鉢	A口	外反一角。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・砂粒・黒色粒(光)。黒色は多量。他は普通。やや粗い。両面色：暗黒褐色。器面調整：指頭痕、ヘラナデ。0.5cm	不明
	13	口縁部	—	II・鉢	Aハ	凸帯文。外反一舌。泥質。焼成は良好。混入物：石英・灰色粒・赤色粒。普通。細かい。器色：両面色とも灰橙。器面調整：ナデ。0.4cm	no.1トレンチ 不明
	14	口縁部	8.8	II・鉢	Aハ	小型土器。外反一舌。砂泥質。焼成は良い。混入物：白色粒・黒色粒(光)。やや少ない。細かい。器色：暗灰色。器面調整：指頭痕。0.3cm	no.1トレンチ C-4 III層
第13図・図版11	15	口縁部	—	II・鉢	Aハ	外反一舌。泥砂質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白色粒・黒色粒(光)。少量。細かい。器色：両面色とも赤灰色。器面調整：ヘラナデ。0.4cm	不明
	16	口縁部	—	II・鉢	Aハ	外反一舌。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・砂粒。少量。細かい。器色：外面色：暗茶褐色、内面色：淡橙色。器面調整：ヘラナデ。0.5cm	不明
	17	口縁部	—	II・鉢	Aハ	外反一舌。砂泥質。焼成は良い。混入物：砂粒・赤色粒・黒色鉱物(光)。僅か。細かい。器色：両面色とも暗黒褐色。器面調整：ヘラナデ。0.4cm	不明
	18	口縁部	—	II・鉢	Aハ	外反一舌。泥質。焼成は良好。混入物：赤色粒。僅か。微細。器色：外面色：黄橙、内面色：橙。器面調整：外面はナデ、内面は刷毛目。0.5cm	no.1トレンチ D-4 IV層
	19	口縁部	—	II・鉢	Bイ	肥厚帯幅約 2.5。直口一丸。砂泥質。焼成は良好。混入物：石英・黒色鉱物(光)・赤色粒・砂粒。普通。細かい。器色：両面色とも暗黒褐色。0.4cm	no.34トレンチ D-3 V層
	20	口縁部	—	II・鉢	Bイ	直口一丸。焼成は良い。砂泥質。混入物：白色粒。僅か。細かい。外面色：橙、内面色：黄橙。器面調整：ヘラナデ。0.6cm	no.1トレンチ D-4 IV層
	21	口縁部	—	II・鉢	B口	直口一角。焼成は良い。泥質。混入物：白色粒・赤色粒・黒色粒(光)少量。細かい。外面色：灰、内面色：淡橙。器面調整：外面はナデ、内面は刷毛目。0.6cm	no.1トレンチ I層
	22	有文胴部	—	凸帯文	—	凸帯上に刻み目文。凸帯幅は約 0.5。縦・横位の凸帯二条。泥砂質。焼成は良好。混入物：白色粒・赤色粒。少量。細かい。外面色：淡橙、内面色：白黄。0.5cm	no.1トレンチ B-4 IV層
	23	有文胴部	—	凸帯文	—	凸帯上に刻み目文。凸帯幅は約 0.5。横位の凸帯一条。砂質。焼成は良好。混入物：白色粒・石英。少量。細かい。器色：両面色とも橙。0.4cm	no.1トレンチ B-4 IV層
	24	有文胴部	—	凸帯文	—	横位の凸帯文。幅は約 1.2。泥質。焼成は良い。混入物：白色粒・赤色粒。少量。細かい。器色：両面色とも灰橙。器面調整：ヘラナデ。	no.34トレンチ C-3 IV層
第14図・図版12	25	有文胴部	—	瘤状突起	—	方形状の瘤。断面は三角状。泥質。焼成は良好で堅緻。混入物：白色粒・茶色粒。僅か。細かい。器面調整はナデ。両面色とも淡茶褐色。	no.34トレンチ C-3 IV層
	26	無文胴部	17.0	—	—	泥質。焼成は良好。混入物：赤色粒・白色粒。僅か。細かい。器色：両面色とも淡橙。器面調整はナデ。0.5cm	no.2トレンチ B-2 IV層
	27	無文胴部	—	—	—	泥質。焼成は良好。混入物：赤色粒・白色粒。僅か。細かい。外面色：暗茶褐色・内面色：茶橙褐色。器面調整：外面ナデ、内面は刷毛目。0.6cm	no.2トレンチ B-2 II層
	28	底部	—	I	—	尖底の丸底。砂泥質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・白砂・黒色粒。やや多い。普通。器色：両面茶褐色。	no.1トレンチ C-4 II層
	29	底部	—	I	—	丸底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・黒色鉱物(光)。やや多い。普通。器色：両面色とも淡橙。	no.1トレンチ C-4 IV層
	30	底部	—	I	—	立ち上がり丸い。砂泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白砂・黒色粒(光)・石英。少量。細かい。器色：両面色とも淡橙色。器面調整：ナデ、刷毛目	no.1トレンチ D-4 III層
	31	底部	3.8	II	—	平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・石英。少量。細かい。器色：両面色とも赤褐色。	不明
	32	底部	4.0	II	—	平底。砂質。焼成は良い。混入物：石英・白砂・赤色粒。少量。細かい。器色：両面色とも橙色	no.1トレンチ C-4 III層
	33	底部	5.0	II	—	平底。砂質。焼成は良い。混入物：白砂・暗灰色粒。少量。細かい。外面色：黄灰、内面色：橙色	no.1トレンチ B-4 IV層
	34	底部	7.0	II	—	平底。砂質。赤色粒・白砂。少量。細かい。器色：両面色とも橙色	no.1トレンチ C-4 IV層

注1：観察一覧の項(口縁部・底部の形態、断面形、胎土、焼成、混入物、混入量、粒度、器色、器面調整、器厚)の順で表記
 注2：黒色粒(光)・黒色鉱物(光)は(黒雲母か輝石)のこと、大城逸朗氏同定。

第4表-2 土器観察一覧

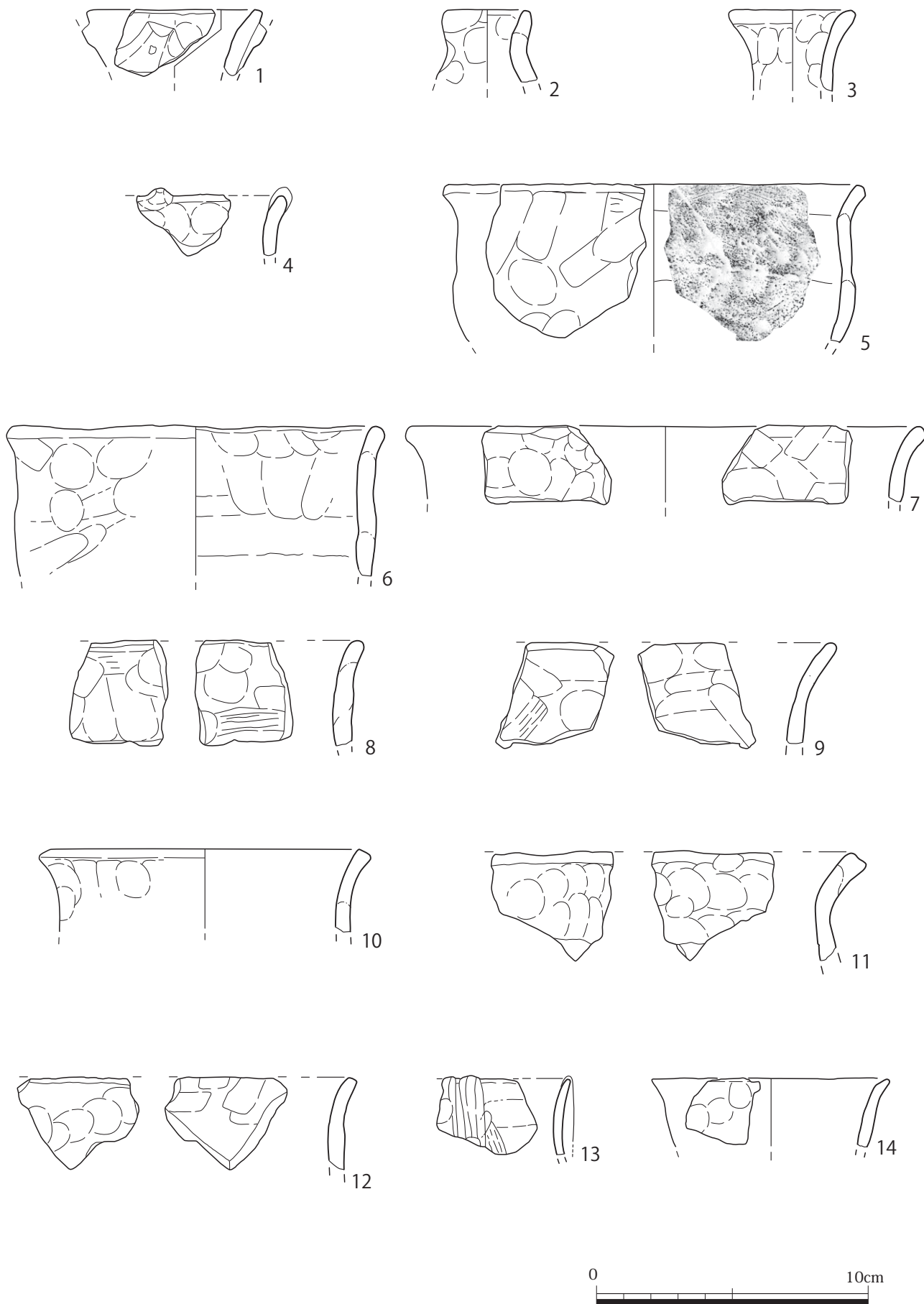
第図 図版	図 番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地
第14図・ 図版12	35	底部	3.6	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成良い。混入物：白砂・黒色鉱物(光)。少量。細かい。外面：灰、内面：淡橙色。器面調整：ヘラナデ。	no.1トレンチ I層
	36	底部	4.2	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成良い。混入物：白砂・赤色粒・暗灰色粒。少量。細かい。外面色：暗灰、内面色：橙色。器面調整：ナデ。	no.1トレンチ II層
	37	底部	5.2	Ⅲ	a	くびれ平底。泥質。焼成良い。混入物：白砂・赤色粒・白色(光)。少量。細かい。器色：両面とも淡橙色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ I層
	38	底部	4.8	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成良い。混入物：白砂・白色(光)。少量。細かい。外面色：暗黄、内面色：橙色。器面調整：ナデ	不明
	39	底部	4.8	Ⅲ	a	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。細かい。器色：淡橙色。器面調整：指頭痕、ナデ	no.34トレンチ C-3 IV層
	40	底部	5.0	Ⅲ	a	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・白砂・黒色粒。少量。細かい。器色：両面とも赤褐色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ D-4 I層
	41	底部	5.4	Ⅲ	a	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・石英。普通。細かい。外面色：橙色、内面色：茶褐色。器面調整：指頭痕	no.1トレンチ C-4 III層
	42	底部	5.4	Ⅲ	a	くびれ平底。砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。普通。外面色：灰黄、内面色：橙色。上げ底	no.1トレンチ C-4 IV層
	43	底部	5.4	Ⅲ	a	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・白色(光)。少量。細かい。器色：両面とも淡橙色。	no.34トレンチ D-3 IV層
	44	底部	6.0	Ⅲ	a	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白色粒・石英・黒色粒・黒色鉱物(光)。やや多い(特に黒色粒)。細かい。外面色：茶橙色、内面色：暗灰褐色。	no.34トレンチ C-3 IV層
	45	底部	6.0	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・石英。普通。細かい。外面色：橙色・内面色：黄色。器面調整：ナデ	no.34トレンチ D-3 V層
	46	底部	6.0	Ⅲ	a	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒(やや多い)。普通。細かい。外面色：赤橙色、内面色：茶褐色。器面調整：指頭痕	no.1トレンチ D-4 IV層
	47	底部	6.0	Ⅲ	a	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白色(光)は滑石?。少量。細かい。器色：淡橙色。器面調整：指頭痕	no.1トレンチ I層
	48	底部	6.8	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・石英・赤色粒・黒色粒。多い。やや粗い。器色：淡橙色。器面調整ナデ	no.1トレンチ C-4 III層
49	底部	7.0	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。細かいが粗粒もあり。器色：橙色。器面調整：指頭痕・ナデ	no.4トレンチ I層	
50	底部	8.4	Ⅲ	a	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。普通。細かい。外面色：橙色、内面色：黄褐色。器面調整：ナデ。器厚:0.4cmで薄手。底厚も0.7cmで薄い。	不明	
第15図・ 図版13	51	底部	3.2	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：石英・白砂・白(光)。少量。細かい。外面色：淡橙色、内面色：暗灰色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 III層
	52	底部	4.4	Ⅲ	b	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：茶褐色粒・暗黒色粒・黄色粒・白色粒・石英。外面色：黄灰色、内面色：灰色。器面調整：ナデ	不明
	53	底部	4.4	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・白(光)。少量。細かい。外面色：橙色、内面色：淡橙色。器面調整：指頭痕	no.34トレンチ D-3 IV層
	54	底部	5.0	Ⅲ	b	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・黒色粒。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ	no.34トレンチ C-3 IV層
	55	底部	5.4	Ⅲ	b	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・白砂・白(光)。少量。細かい。器色：両面とも暗灰褐色。底厚1.9cmと厚い。ナデ	no.1トレンチ C-4 IV層
	56	底部	5.6	Ⅲ	b	くびれ平底砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。細かい。器色：淡橙色。器面調整：指頭痕、ナデ	no.34トレンチ C-3 IV層
	57	底部	5.6	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成は良好。混入物：石英・白砂・赤色粒・白(光)。外面色：橙色、内面色：灰黄色。器面調整：外面は丁寧なナデ	no.1トレンチ B-4 IV層
	58	底部	5.6	Ⅲ	b	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・透明(光)。少量。細かい。外面色：橙色、内面色：黄灰色。器面調整：指頭痕。やや上げ底。	no.2トレンチ B-2 I層
	59	底部	6.0	Ⅲ	b	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・透明(光)。少量。細かい。外面色：橙色、内面色：黄灰色。器面調整：ナデ。底厚1.7cmと厚手。	no.34トレンチ C-3 IV層
	60	底部	5.6	Ⅲ	b	くびれ平底。砂質。焼成は良い。混入物：石英・白砂・白(光)。普通。細かい。器色：両面とも茶褐色。器面調整：指頭痕・ナデ・刷毛目。やや上げ底。	no.1トレンチ AB-4 III層
	61	底部	5.8	Ⅲ	b	くびれ平底。砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・黒色粒・白(光)。少量。普通。器色：両面とも橙色。	no.1トレンチ V層
	62	底部	6.0	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・暗茶粒・白色(光)。多い。粗い。器色：淡両面とも灰黄色。器面調整：指頭痕。上げ底。底面のナデ丁寧。	no.1トレンチ I層
	63	底部	6.0	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・黒色粒・白(光)。少量。細かい。外面色：灰橙色、内面色：橙色。器面調整：ヘラナデ。	no.34トレンチ C-4 IV層
	64	底部	6.0	Ⅲ	b	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・黒色粒・白(光)。少量。細かい。外面色：灰褐色、内面色：暗灰色。器面調整：ナデ。	no.34トレンチ D-3 IV層
65	底部	6.0	Ⅲ	b	くびれ平底。砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・黒色粒。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ。底厚が2.0cmと厚い。	no.1トレンチ B-4 V層	
66	底部	6.4	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質で堅緻。焼成は良好。混入物：白砂・赤色粒・石英・黒色粒・透明(光)。少量。細かい。器色：両面とも茶褐色。器面調整：指頭痕・ナデ・底面は丁寧なナデ	no.34トレンチ C-3 IV層	
67	底部	6.4	Ⅲ	b	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：灰色粒・黒色粒。少量。やや粗め。外面色：橙色、内面色：暗灰褐色。器面調整：指頭痕・指ナデ	no.1トレンチ C-4 IV層	
68	底部	7.0	Ⅲ	b	くびれ平底。泥質。焼成はよい。混入物：白砂・赤色粒少量。細かい。外面色：橙色、内面色：灰色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 III層	

注1：観察一覧の項(口縁部・底部の形態、断面形、胎土、焼成、混入物、混入量、粒度、器色、器面調整、器厚)の順で表記
 注2：黒色粒(光)・黒色鉱物(光)は(黒雲母か輝石)のこと、大城逸朗氏同定。

第4表-3 土器観察一覧

第図版	図番号	部位	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm)	分類 (大)	分類 (小)	観察一覧	出土地
第15図版	69	底部	7.2	Ⅲ	b	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：灰色粒・赤色粒・黒色粒(光)。普通。細かい。器色：両面とも茶褐色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	70	底部	8.4	Ⅲ	b	くびれ平底。泥砂質。焼成はやや良い。混入物：白砂・透明(光)。僅か。微細。外面色：黄橙色、内面色：橙色。器面調整：ナデ。上げ底。	不明
	71	底部	8.4	Ⅲ	b	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・茶色粒。少量。細かい(やや粗めもあり)。外面色：橙黄色、内面色：橙色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ 不明
第16図・図版14	72	底部	4.8	Ⅲ	c	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・透明(光)。少量。細かい。外面色：橙色、内面色：黄灰色。器面調整：ナデ。底面に粘土貼り付け	no.4トレンチ C-3 Ⅲ層
	73	底部	6.0	Ⅲ	c	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・白砂・黒色粒(光)。器色：両面とも茶褐色。器面調整：ナデ(外面)、刷毛目(内面)	no.1トレンチ D-4 Ⅲ層
	74	底部	6.0	Ⅲ	c	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・黒色粒(光)。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ	no.34トレンチ C-3 Ⅳ層
	75	底部	6.0	Ⅲ	c	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂。僅か。微細。器色：両面とも茶褐色。器面調整：指頭痕、ナデ。底面に粘土貼り付け	グリッド不明 Ⅰ層
	76	底部	6.4	Ⅲ	c	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・白(光)。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：指頭痕、ナデ	no.1トレンチ C-4 Ⅳ層
	77	底部	6.4	Ⅲ	c	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。僅か。微細。外面色：橙色、内面色：黄橙色。	no.1トレンチ C-4 Ⅳ層
	78	底部	-	Ⅲ	c	底径計測不可。くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。細かい。外面色：黄橙色、内面色：橙色。器面調整：ナデ	no.34トレンチ D-3 Ⅴ層
	79	底部	-	Ⅲ	c	底径計測不可。くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・白(光)。少量。細かい。外面色：黄橙色、内面色：暗黒褐色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 Ⅱ層
	80	底部	4.8	Ⅲ	d	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・透明(光)。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ D-4 Ⅱ層
	81	底部	4.4	Ⅲ	d	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・僅か。微細。器色：両面とも灰黄色。器面調整：ナデ	不明
	82	底部	5.8	Ⅲ	d	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。やや粗め。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ B-4 Ⅲ層
	83	底部	5.4	Ⅲ	d	くびれ平底。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・石英。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：指ナデ・底面ナデ丁寧	no.1トレンチ B-4 Ⅳ層
	84	底部	6.0	Ⅲ	d	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・白(光)。少量。細かい。器色：両面とも灰黄色。器面調整：指頭痕・ナデ。底面はやや上げ底。	no.34トレンチ D-3 Ⅳ層
	85	底部	7.0	Ⅲ	d	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・黒色粒(光)。器色：外面：橙色、内面：暗黒褐色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	86	底部	6.4	Ⅲ	d	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・茶色粒。少量。やや粗め。器色：両面とも灰褐色。器面調整：ナデ	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	87	底部	7.8	Ⅲ	d	くびれ平底。砂泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒・石英・黒色粒(光)。やや多い。やや粗め。器色：両面とも茶褐色。器面調整：ナデ。底面は上げ底。	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	88	底部	9.0	Ⅲ	d	くびれ平底。砂質。焼成は良い。混入物：石英・白砂。少量。細かい。器色：両面とも灰褐色。器面調整：ナデ。	no.34トレンチ D-3 Ⅴ層
	89	底部	5.4	Ⅲ	e	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・黒色粒・白砂・透明(光)。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：ナデ。	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	90	底部	5.4	Ⅲ	e	くびれ平底。砂質。焼成は悪い。混入物：白砂・赤色粒。僅か。細かい。器色：両面とも赤褐色。器面調整：指頭痕。	no.1トレンチ B-4 Ⅳ層
	91	底部	7.2	Ⅲ	e	くびれ平底。泥質。焼成は良い。混入物：石英・赤色粒・白砂・黒色粒(光)。やや多い。やや粗め。器色：両面とも赤褐色。器面調整：外面のナデ痕顕著	不明
第17図・図版15	92	口縁部	15.8	I・壺	グスク	口縁部は若干玉縁状。直口一舌。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・白(光)。少量。細かい。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ。アバタ有り。	no.1トレンチ B-4 Ⅰ層
	93	口縁部	-	I・壺	グスク	直口一角。泥質。焼成は良い。混入物：白砂・石英・白(光)。少量。細かい。器色：両面とも淡褐色。外面に煤?。アバタ有り。	no.1トレンチ 不明
	94	口縁部	-	I・壺	グスク	口唇部破損。砂泥質。焼成は良い。混入物：石英・黒色粒(光)。混入量：黒色粒(光)は多い。他は少量。細かい。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ。アバタ無し。	no.4トレンチ C-3 Ⅲ層
	95	口縁部	-	I・壺	グスク	直口一舌。泥砂質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。普通。細かい。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ。アバタ有り。	no.1トレンチ C-4 Ⅴ層
	96	胴部	-	Ⅱ・鍋形	グスク	砂質。焼成は良い。混入物：白砂・滑石?。少量。細かい。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ。内面は丁寧。アバタ無し。	no.2トレンチ B-1 Ⅰ層
	97	底部	6.0	I	グスク	泥質。焼成は良い。混入物：赤色粒・白色粒。普通。やや粗め。外面色：淡橙灰色、内面色：橙色。器面調整：ケズリ。アバタ有り。	no.1トレンチ C-4 Ⅲ層
	98	底部	11.0	I	グスク	泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。少量。細かい。粗いものもあり。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ・ケズリ。アバタ有り。	no.1トレンチ B-4 Ⅳ層
	99	底部	8.0	Ⅱ	グスク	泥質。焼成は良い。混入物：白砂・赤色粒。白砂は多量。細かい。粗いものもあり。器色：両面とも淡褐色。器面調整：ナデ。アバタ有り。	no.1トレンチ C-4 Ⅰ層
	100	底部	9.0	Ⅱ	グスク	泥質。焼成は良い。混入物：白砂多量、赤色粒。やや粗め。外面色淡橙灰色、内面色：橙色。器面調整：ナデ、ケズリ。	不明
	101	胴部	-	I・宮古式	近世	泥砂質。混入物：白砂・赤色粒。多量。粗め。外面色：灰黄色、内面色：桃色。器面調整：ナデ。0.4~0.6cm	no.2トレンチ B-2 Ⅰ層
	102	底部	-	I・宮古式	近世	泥砂質。混入物：白砂・赤色粒。多量。粗め。外面色：茶褐色、内面色：桃色。器面調整：ナデ。0.6cm	no.2トレンチ B-2東 Ⅱ層
	103	底部	13.6	Ⅱ	近世	砂質。混入物：石英・白色粒・赤色粒・光(黒・白)。少量。細かい。器色：両面とも橙色。器面調整：指頭痕・ナデ・刷毛目	不明

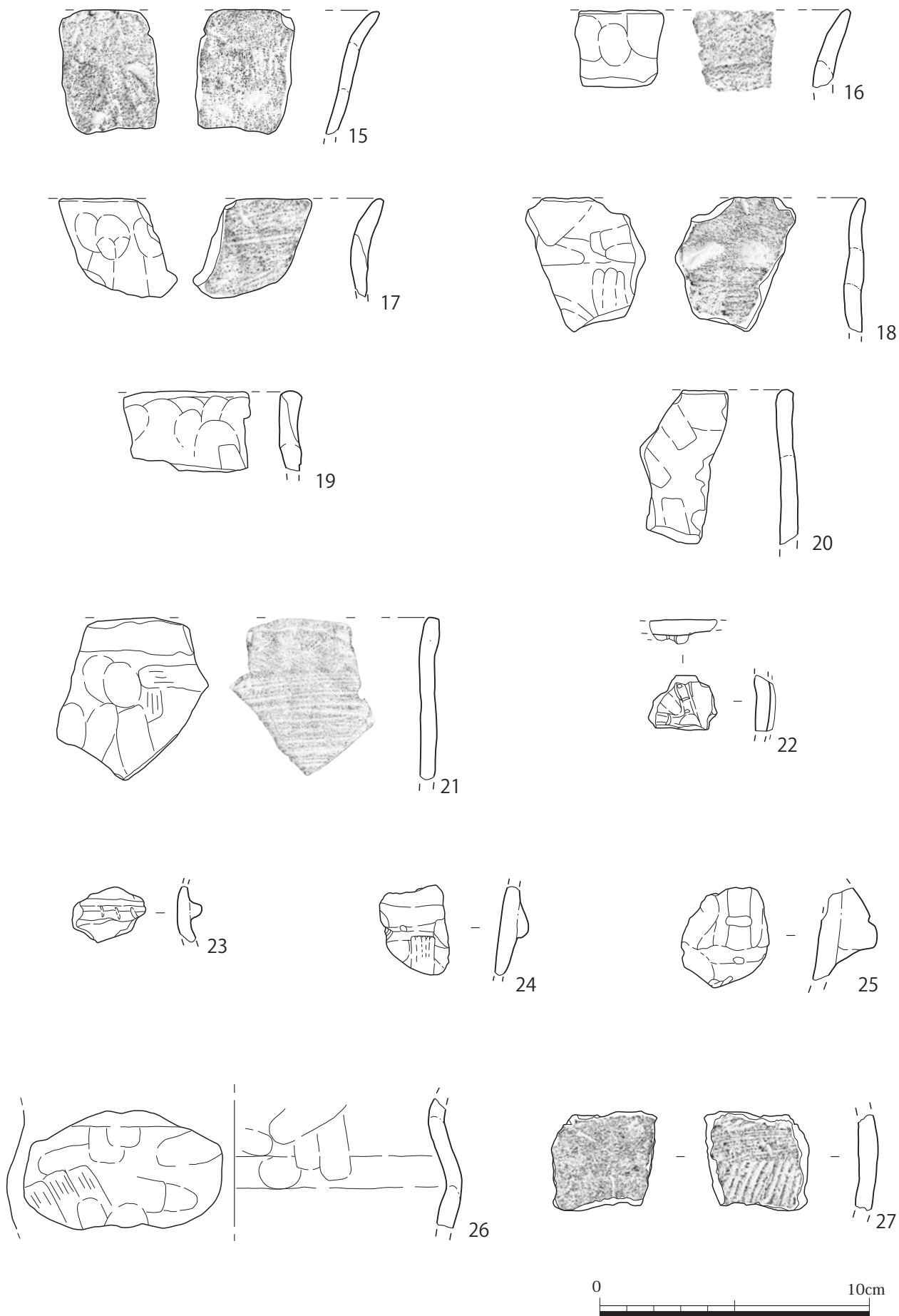
注1：観察一覧の項(口縁部・底部の形態、断面形、胎土、焼成、混入物、混入量、粒度、器色、器面調整、器厚)の順で表記
 注2：黒色粒(光)・黒色鉱物(光)は(黒雲母か輝石)のこと、大城逸朗氏同定。



第12図 土器1 (後期 - 口縁部)



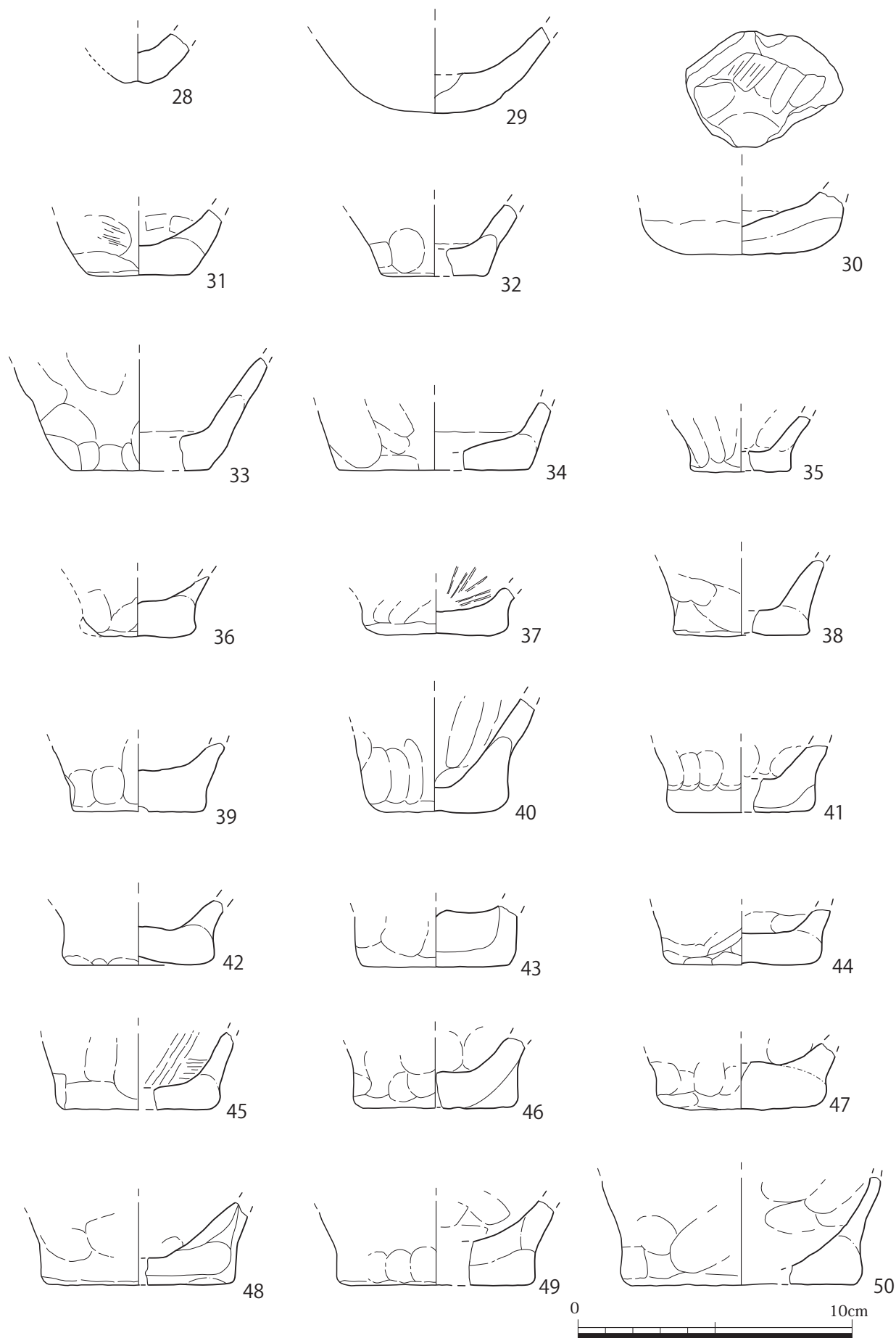
図版10 土器1 (上:外面・下:内面)



第13図 土器2 (後期 - 口縁・胴部)



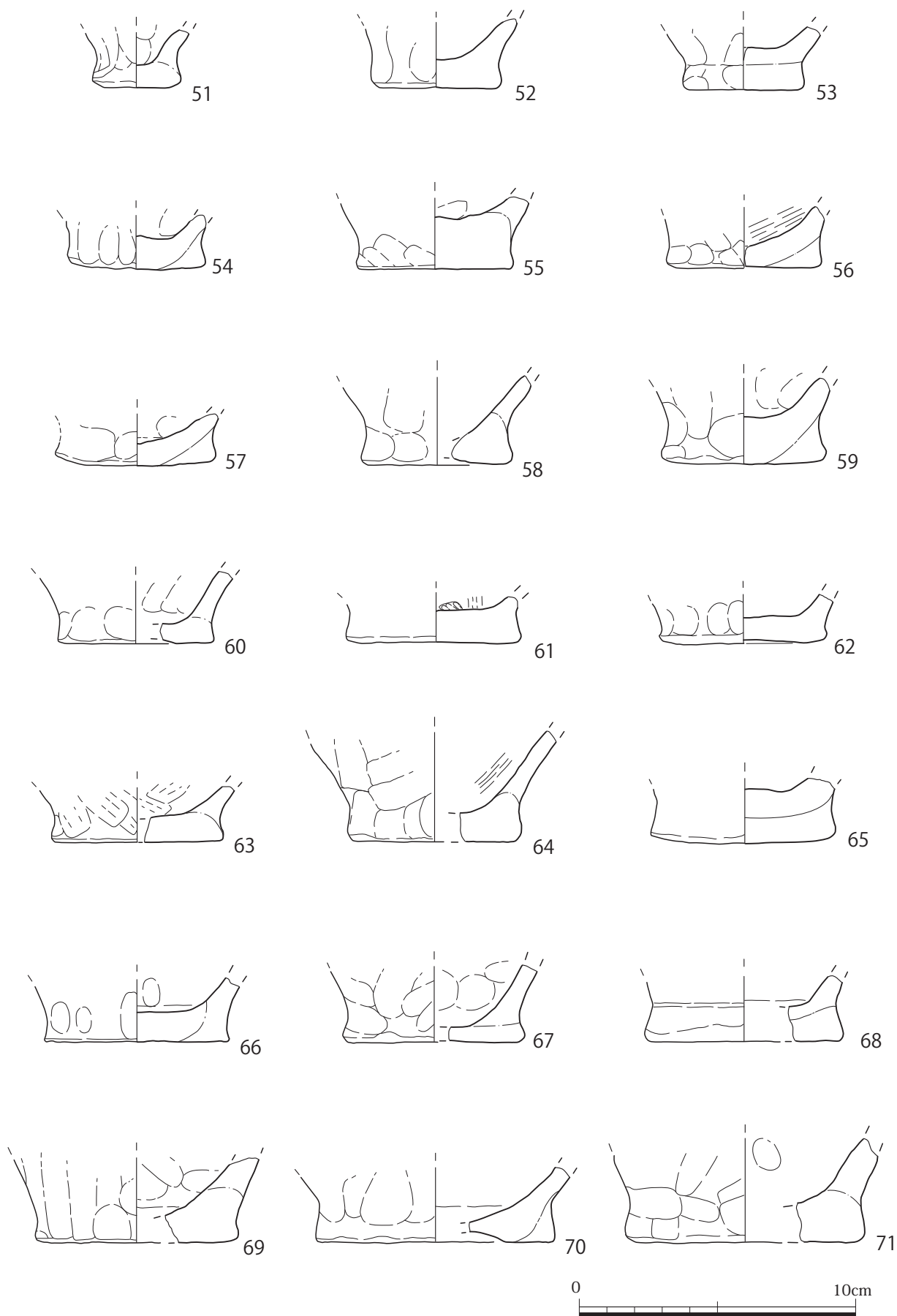
図版 11 土器 2 (上：外面・下：内面)



第14図 土器3 (後期 - 底部)



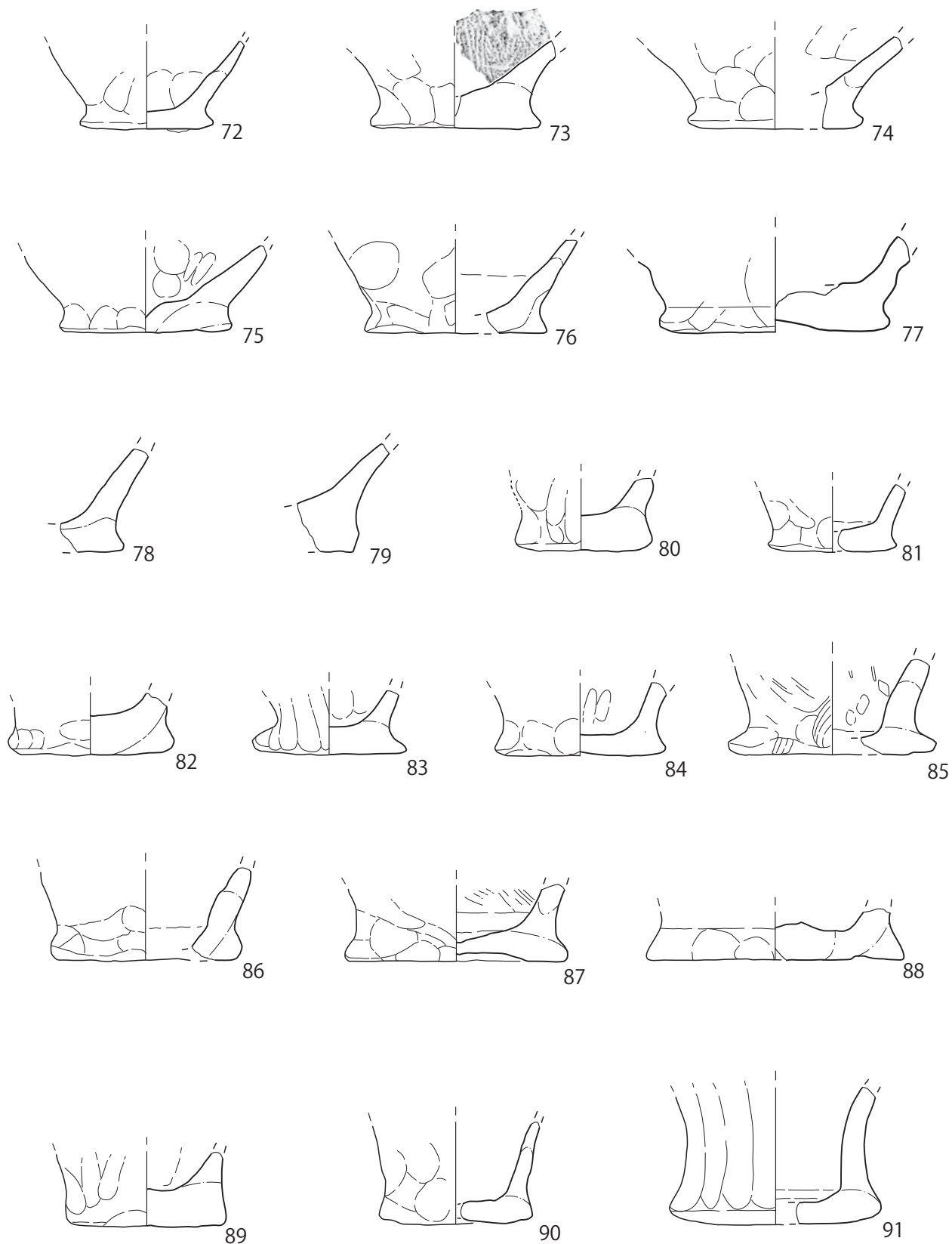
図版 12 土器 3 (上:外面・下:内面)



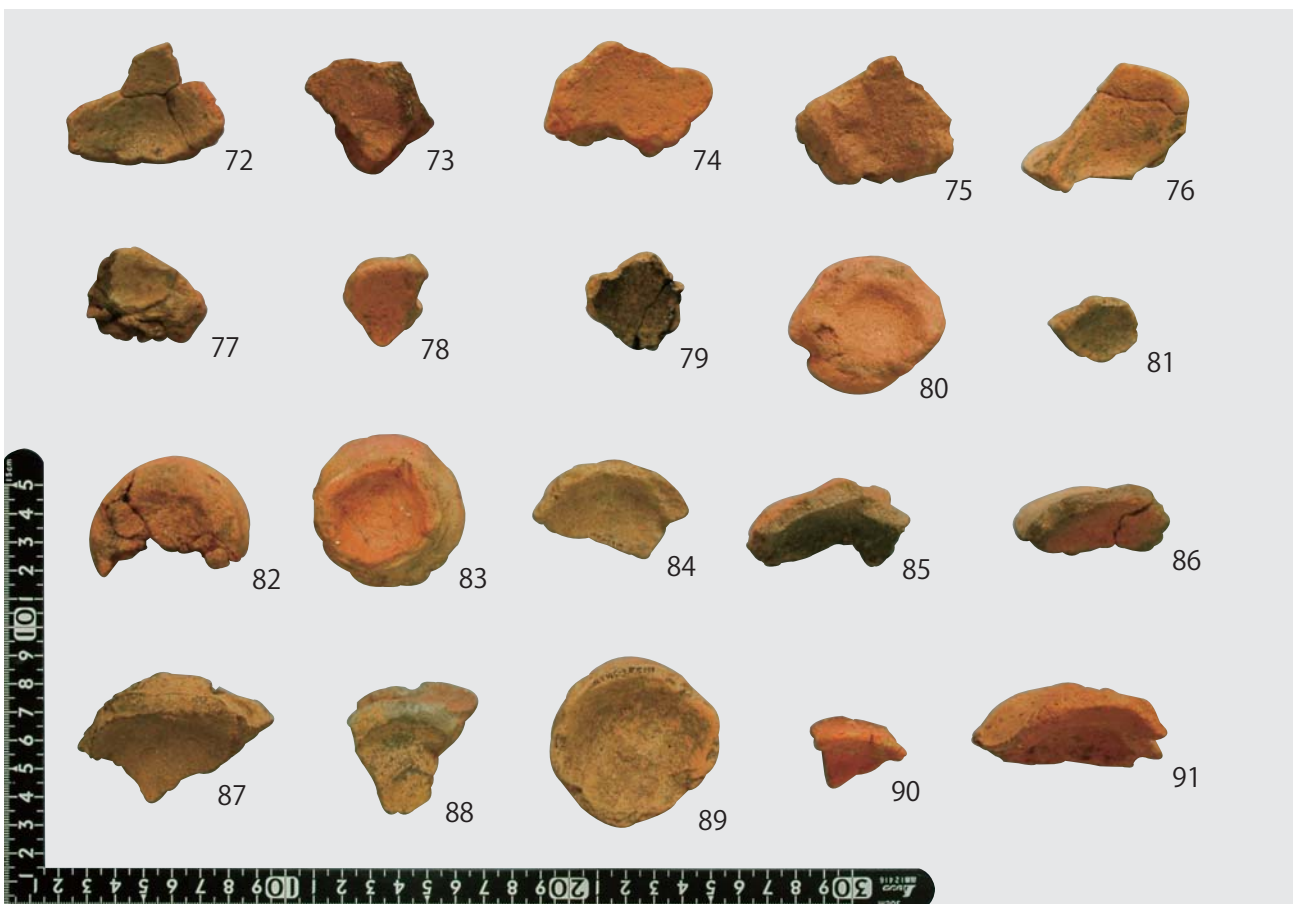
第15図 土器4 (後期 - 底部)



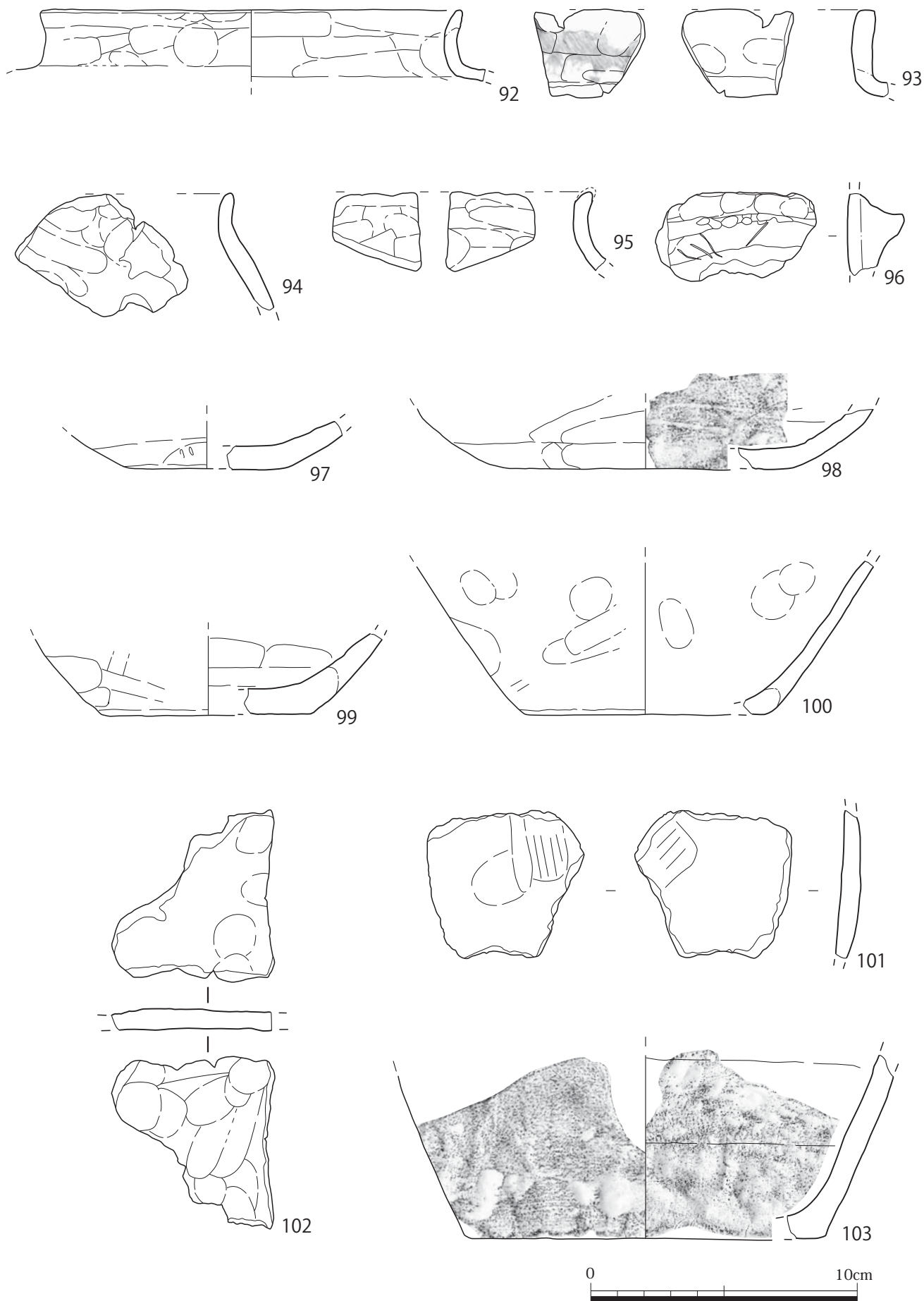
図版 13 土器 4 (上:外面・下:内面)



第16図 土器5 (後期 - 底部)



図版 14 土器 5 (上：外面・下：内面)



第17図 土器6 (グスク・近世)



図版 15 土器 6 (上：外面・下：内面)

第2節 カムイヤキ (第18図)

本遺跡出土のカムイヤキは合計24点出土している。そのうち10点を第18図、図版16に図示した。

出土点数を第5表に示したが、器形はすべて壺で口縁部が2点、底部が3点出土している以外は胴部破片である。出土地別にみても特に多く出土している層はなかった。以下個々の遺物について述べる。

図1は、口縁部で1点のみの資料である。焼成は良好、色調は表面が暗灰色で断面が赤褐色、裏面が暗灰色である。混入物は白色粒が多くみられる。器面調整はあまり良くない。

図2は、肩部の資料である。かなり膨らみを持ち、おそらく頸部は細く窄まる壺型のものと想定される。焼成は良好である。文様は沈線を挟んで上に三条、下に二条の波状沈線文が確認できる。色調は、表面が暗灰色で断面は赤褐色と灰青色のまだら色、裏面が灰青色。混入物は白色粒が含まれる。器面調整は悪く内面は凹凸が多い。

図3も、肩部の資料である。焼成は良好である。文様は細い沈線の上に二条、下に三条の波状沈線文が認められる。色調は、表面が灰色で断面が赤褐色と灰青色の混ざった色調、裏面が灰青色である。混入物は白色粒がみられる。器面調整は悪く、内面は凹凸がみられる。

図4は、肩部資料である。焼成は良好、文様は沈線文の上に二条の波状沈線文がみられる。色調は表面が灰色、断面が赤褐色と灰青色のまだら、裏面が灰青色である。混入物は白色粒と石英が含まれている。器面調整は悪く、内面に凹凸あり。

図5は、肩部付近の破片資料である。焼成は良好、文様は波状文がみられる。色調は表面が黒灰色、断面は赤褐色で部分的に灰青色、裏面が灰青色。混入物は白色粒がみられる。器面調整は良くない。

図6は、胴部資料である。焼成は良好。文様は波状の部分为重なりあっており、一見すると鱗状のようにもみえる。その下に沈線文が一条みられる。色調は表面が暗灰色で断面が赤褐色と灰青色、裏面が灰青色である。混入物は白色粒と石英が含まれている。器面調整は良くない。

図7は、胴部資料である。焼成は良好。文様は不明瞭で沈線文らしきものがみられる。色調は表面が灰色で断面が赤褐色と灰青色の二色みられ裏面が灰青色である。混入物は白色粒と石英が含まれている。器面調整は良くない。表面に付着物があり、内面には轆轤痕の上に叩き目が確認できる。

図8は、胴下部の資料である。焼成は良好。文様はなし。色調は表面が灰青色で断面が赤褐色と暗灰色、裏面が灰青色である。混入物は白色粒と石英が多くみられる。器面調整は悪く表面は凹凸とひび割れあり、内面はへら削りが多い。

図9は、底部資料である。2点出土しているが、底径は10.5cmと小さい。焼成は良好。色調は表面が灰色で断面が灰青色、裏面が灰青色である。混入物は石英と黒色粒が多く認められる。器面調整は良い。底面に石英粒が多くみられる。内面はへら削りが認められる。

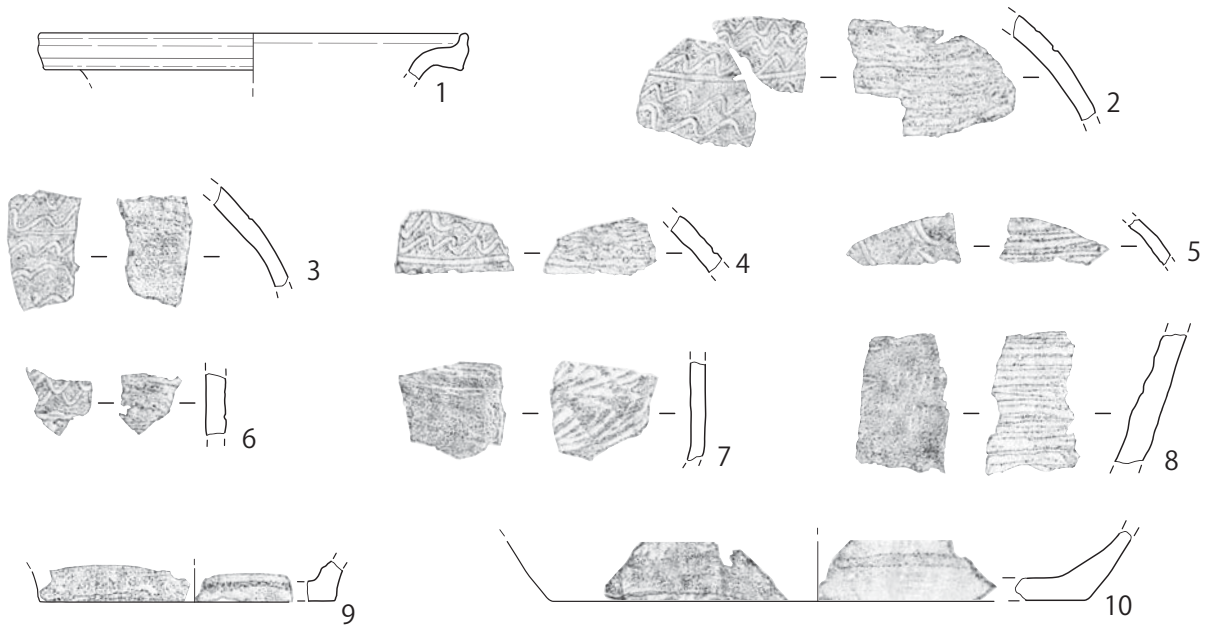
図10は、底部資料である。底径は18.4cmでわりと大きな底部と思われる。焼成は良好。色調は表面が赤褐色で断面が灰青色、裏面が赤褐色である。混入物は白色粒と石英が含まれる。器面調整は悪い。へら削りの痕はみられるが明瞭でない。

第5表 カムイヤキ出土一覧

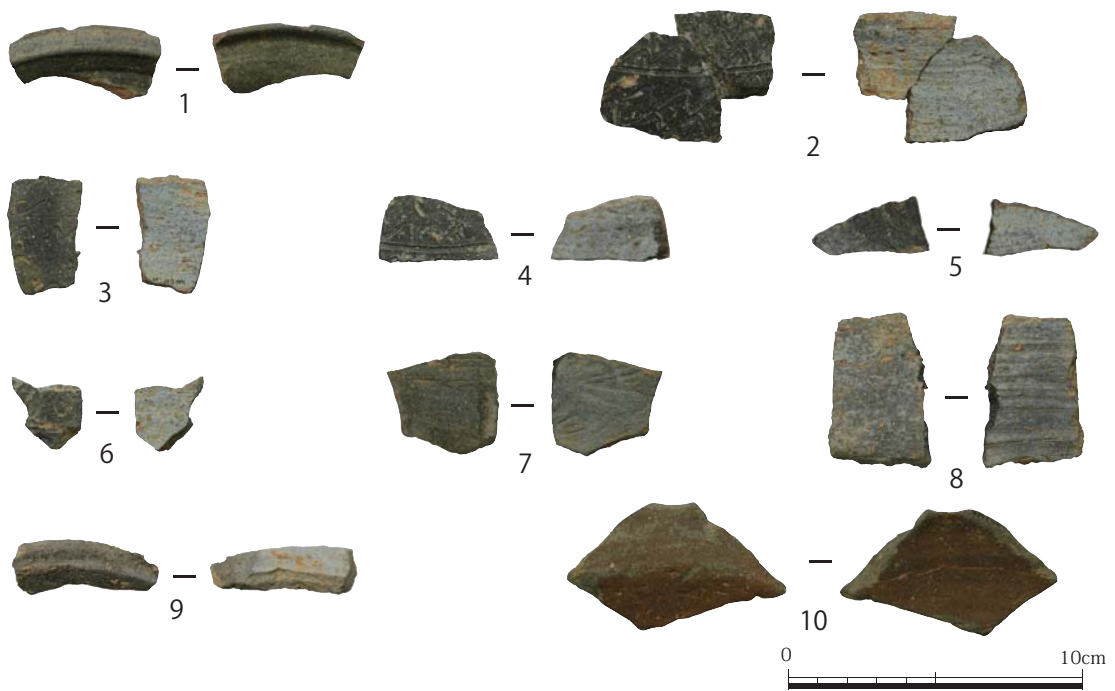
トレンチ	グリッド	器種 部位	壺			合計
			口縁部	胴部	底部	
no.1	C-3	IV層		2		2
	C-4	I層		1		1
	C-4	II層		1		1
	C-4	IV層	1	2		3
	不明	IV層		1		1
no.2	B-1	I層			1	1
	B-1	II層		1		1
	B-1.2	I層		1		1
	B-2	I層		1		1
	B-2	V層		1		1
不明	不明		1		1	
no.4	不明	II層		1		1
no.3・4	C-3	表採		1		1
	C-3	III層		2		2
	C-3	IV層			1	1
	D-3	II層		1		1
	D-3	IV層		1	1	2
	不明	不明	1	1		2
合計			2	19	3	24

<参考文献>

- ・大西智和 「南島須恵器の問題点」 『南日本文化』第29号抜刷 鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1996年
- ・山城安生 東門研治 沖縄県北谷町教育委員会 『後兼久原遺跡 -庁舎建設に係わる文化財発掘調査報告-』北谷町文化財調査報告書 第21集 2003年
- ・池田栄史 「類須恵器と貝塚時代後期」 『考古資料大観-貝塚後期文化-』第12巻 小学館 2004年
- ・新里亮人 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」 『東アジアの古代文化』130号 編集：古代学研究所 大房書房 2007年



第18図 カムイヤキ



図版16 カムイヤキ

第3節 白磁（第19・20図）

白磁は総数 85 点出土している。器種は碗・皿・杯の3種類である。器種別に述べることとする。

（1）碗（第19図）

碗は口縁部の形状から玉縁口縁碗・内彎口縁碗・外反口縁碗の3種類に分けることができる。

第19図1は口縁部がカマボコ状に肥厚する玉縁口縁碗である。これまで実施された丘陵上での調査での出土例は無く、丘陵下南西側の北谷城第7遺跡で2点報告例がある。口縁部の肥厚部は約0.6cm、肥厚帯幅は約1.2cm、口径約15.6cmである。素地は白色で、釉は薄く施釉する。B-3、IV層（人骨周辺）出土。

図2～4は口縁部が内彎する。図2・3は厚手で口唇部の内面に稜を呈するピロースクタイプ碗IIで、初めての出土である。図2は器厚約0.6cm、口径約17.4cmである。素地は白色で、釉は薄く施釉する。C-4、II層出土。図3は器厚約0.6cm、口径約16.4cmである。素地は淡灰色で、釉は薄く施釉する。B-1、II層出土。

図5～9は外反口縁碗の口縁部資料である。図5は口径約16.9cm、内面に剥落が見られる。素地は白色で、薄い透明釉が施される。貫入は細かい。A-4、I層出土。図6は口縁部下に釉垂れが見られる。素地は白色で、釉は濁白色である。C-4、I層出土。図7は口径19.0cm。口唇部が舌状を呈する。素地は淡灰色で透明釉を薄く施釉。出土地は不明。図8は口縁下部を窄ませて外反する。素地は淡灰色で、釉は薄く施釉する。no.4 トレンチII層出土。図9は口縁部を肥厚させ外反する。口径約16.2cm。素地は淡灰色で、透明釉を薄く施釉する。B-1、IV層出土。図10～12は胴部資料で、図10・11の胴上部が反ることから外反口縁碗と推定される。図10は器壁が厚く、外面胴下部まで施釉する。素地は灰色で、透明釉を薄く施釉する。トレンチ不明褐色土II層出土。図11は器壁が薄く、外面胴部に轆轤痕が明瞭に残る。胴下部まで施釉する。素地は灰色で、非常に薄く施釉する。no. 1 トレンチ、II層出土。図12は胴下部片で外面の腰部まで施釉し、器壁が厚く、大振りの外反口縁碗と推定される。素地は淡灰色で、薄い透明釉が施される。C-4、III層出土。

図13～15は底部資料である。図13は底径約5.4cm。見込みは蓮花文を施す。内底から外底までの器壁は厚く、畳付は方形状を呈する。素地は淡灰色で、薄い透明釉が内面から胴下部まで施釉し、以下外底まで露胎となる。見込みに見られる貫入は粗い。今帰仁城跡出土の大振りの外反碗に類似すると推定される。D-3、V層出土。図14・15は見込みに花文が施される。図14の素地は淡灰色で、薄い透明釉が施される。胴下部は露胎する。C-4、I層出土。図15の素地は白色で、釉は薄く施釉し、腰部は露胎となる。no.1 トレンチI層出土。

（2）皿（第20図）

皿は口縁部の形状より直口口縁皿、外反口縁皿の2種類に分けることができる。

第20図16～19は浅い直口口縁皿である。図16は口径約12.6cm。器壁は薄く、外面に轆轤痕が残る。素地は乳白色で、薄く施釉する。貫入は細かい。D-3、V層出土。図17は口径約9.6cm。器壁は薄く、腰部まで施釉する。素地は白色で、薄い透明釉を施す。D-3、V層出土。図18は口径約9.6cm。器壁は薄い。素地は白色で、薄い透明釉が施される。貫入は細かい。D-3、V層出土。図19素地は白色で、薄く施釉する。貫入は細かい。C-4、IV層出土。本資料の底部は図24のように高台に抉りを有し、見込みに重ね焼きの目痕が見られるものと、図23・25のとおり高台に抉りをもたない種類に分けられる。図24素地は白色で、薄い透明釉を施す。B-1、II層出土。図23は底径約4.5cm。畳付は摩耗が著しい。素地は白色で、釉は薄く腰部まで施され、以下外底まで露胎となる。貫入は細かい。D-3、V層出土。図25は底径4.2cm。

素地は白色で、釉は薄く施釉する。釉は腰部までの施釉であるが一部畳付外面まで施されている。貫入は細かい。石列土中 D-3、IV層出土。図 22 は胴部資料で、器壁や施釉の特徴から直口口縁皿と推定される。素地は白色で、釉は薄く施釉し、外面腰部まで施釉する。貫入は細かい。no. 1 トレンチ C-4 より出土。

図 20・21 は外反口縁皿である。図 20 はやや厚手で浅い外反口縁皿である。口径約 13cm。素地は白色で透明釉が施される。C-4、IV層出土。図 21 は図 20 に比して薄く小振りである。口径約 10.2cm。素地は淡灰色である。C-4、IV層出土。図 26 は底部資料で、胴部上面で外反するようであることから外反口縁皿と推定される。底径は 4.7cm、見込みは蛇の目釉剥ぎが施されている。釉は外面腰部まで施釉され、以下外底まで露胎となる。素地は白色で、釉は淡青色である。

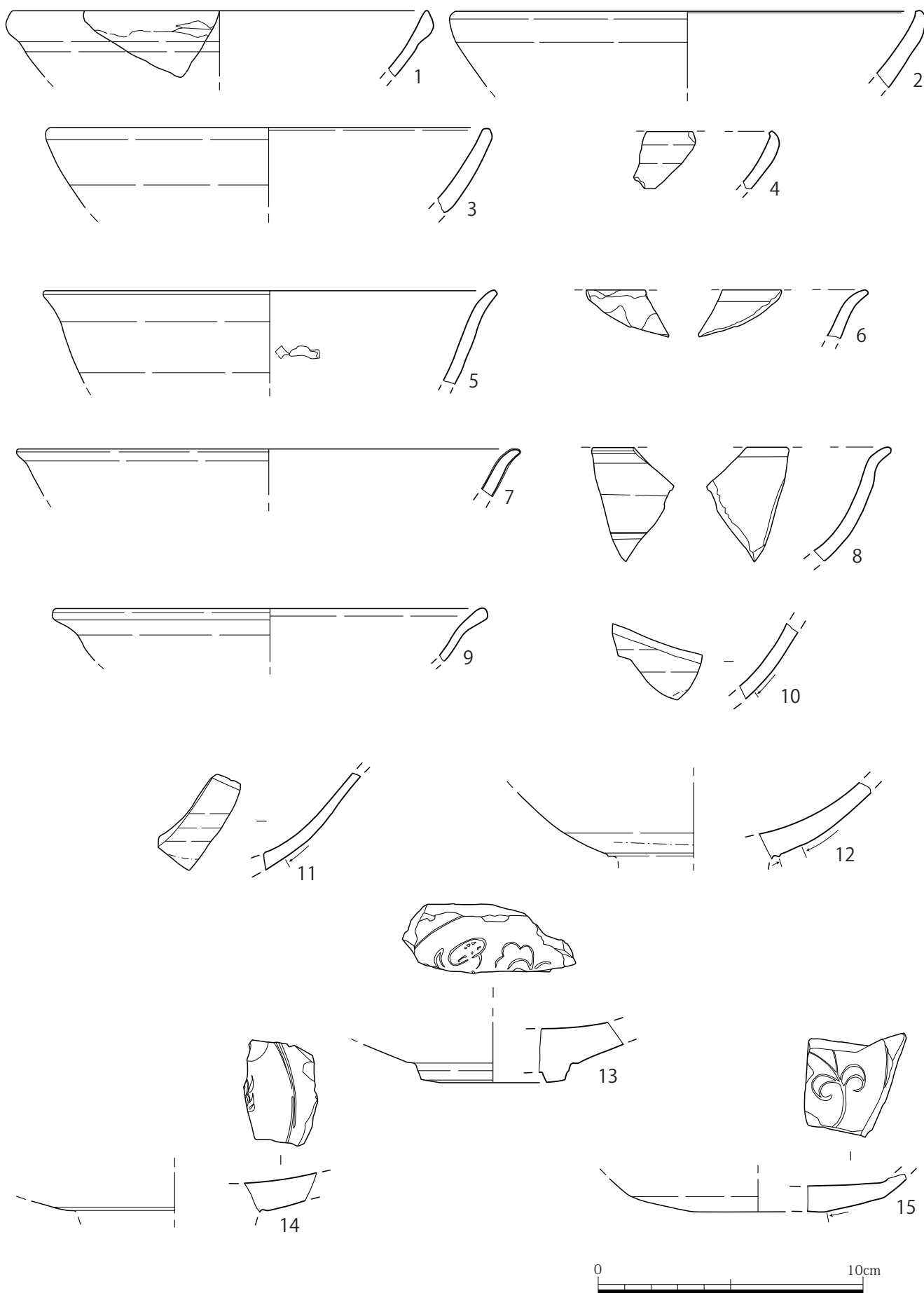
図 27～31 は皿底部資料で口縁部の形状が不明である。図 27 底径は 4.1cm、素地は白色で、淡青色の釉を薄く、高台際まで施釉する。D-3、IV層出土。図 28 は底径 5.0cm、器壁の厚い皿である。見込みは蛇の目釉剥ぎ。素地は白色で、釉は淡青色で全釉となるが、畳付には重ね焼きの際の砂が付着する。no. 2 トレンチ、井戸周辺 I 層出土。図 29 は底径 5.1cm、素地は乳白色で、釉は高台外面まで施釉し、畳付及び外底は露胎となる。貫入は細かい。図 30 は底径 8.4cm と大振りで、薄手の皿である。素地は乳白色で畳付を除く全釉で、所々で貫入が見られる。no. 2 トレンチ、井戸周辺 I 層出土。図 31 は底径 3.9cm で、薄手の皿である。胴部は丸みを帯びている。素地は白色で、薄い透明釉が畳付を除く全釉である。貫入は細かい。石列遺構 2、C-3、III層出土。

(3) 杯 (第 20 図)

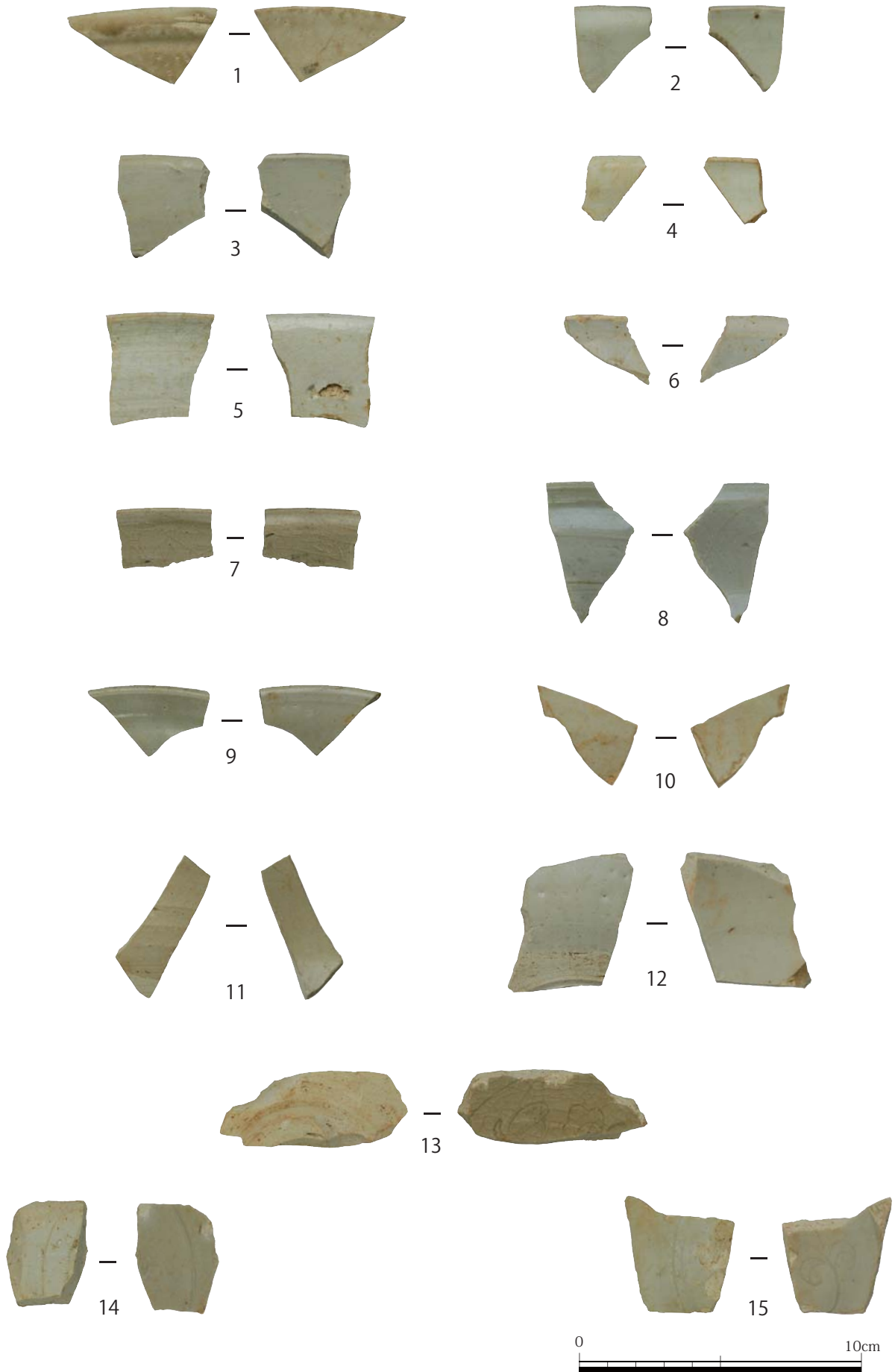
杯は 5 点出土している。図 32 は口径 4.3cm、底径 1.7cm、器高 2.6cm である。薄手の杯である。素地は白色で、釉は薄く畳付を除く全釉である。B-2、I 層出土。

第6表 白磁出土量

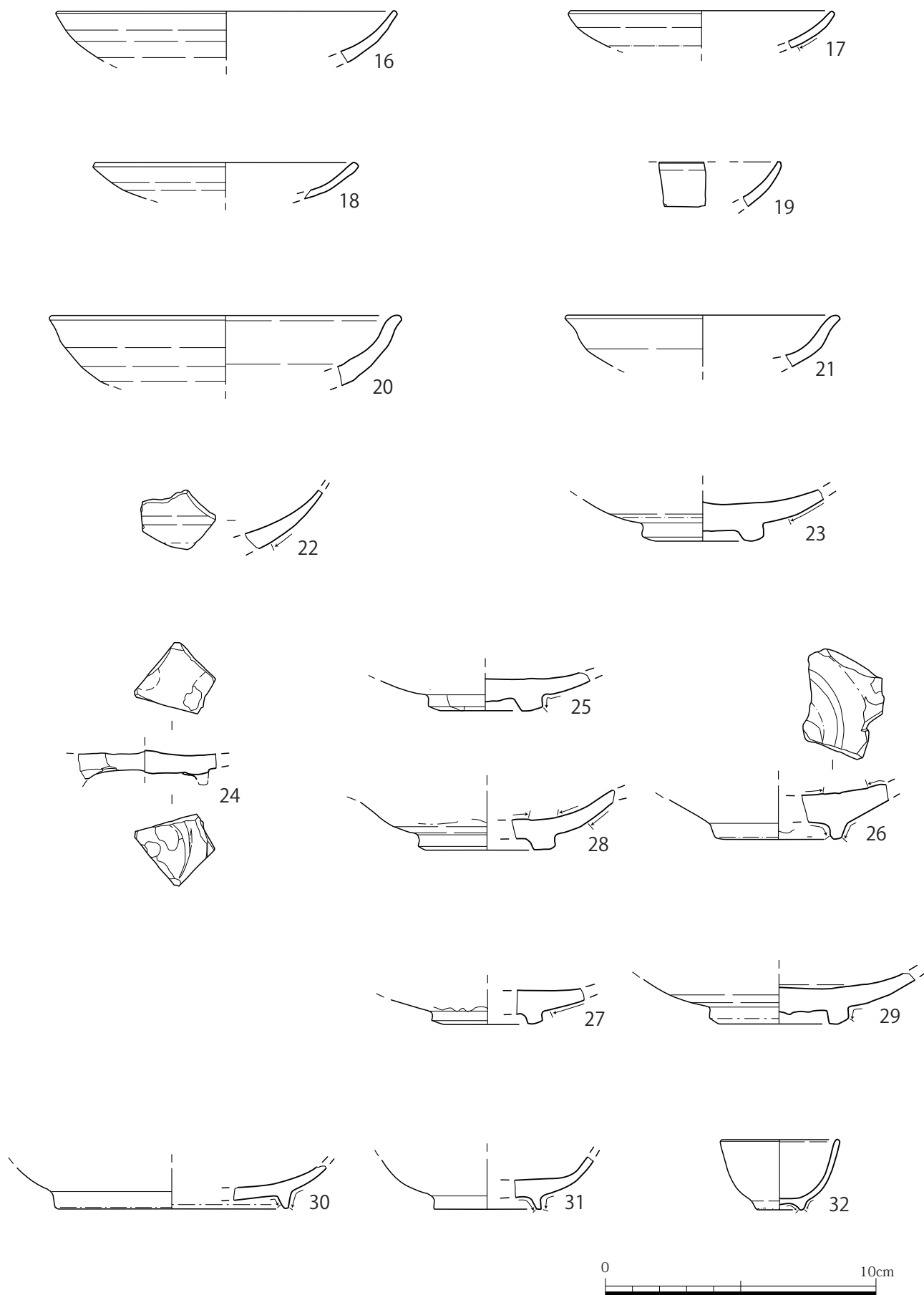
出土地	器種・部位		碗				皿			杯		その他・不明 口・胴 口ハケ・瓶	合計		
			口縁部			胴部	底部	口縁部		胴部	底部			完形 直口	底部
			外反	玉縁	内罎(直口)			直口	外反						
no.1	A-4	I	1										1		
	B-3	IV		1									1		
	C-4	I				1	1							3	
		II			1	2								3	
		III			1	1	1			2				5	
		IV				1		1	2	1				5	
	D-4	I									1			1	
		III	1			1								2	
		不											1	1	
	—	I	2		1	1	1						1	6	
II					1								1		
IV						1							1		
不													1		
no.2	B-1	I	1		1						1	1	4		
		II			1				1	1			3		
		IV	2			1							4		
	B-2	I					1				1	1	3		
		IV				1								1	
	C-2	IV			1								1		
	—	I								2			2		
no.3・4	C-2	IV								2			2		
		III								1			1		
	C-3	IV	1			4						4	9		
		II				1							1		
	D-3	IV				4					2		6		
		V				3	1	3			1		8		
		不明	1										1		
	不	II	1			1					1		3		
不明		1		1	2					1	1	6			
合計		12	1	5	27	5	6	2	4	10	1	4	8		
部位別合計			18		27	5		8		4		4	8		
器種別合計				50				22		5			8		



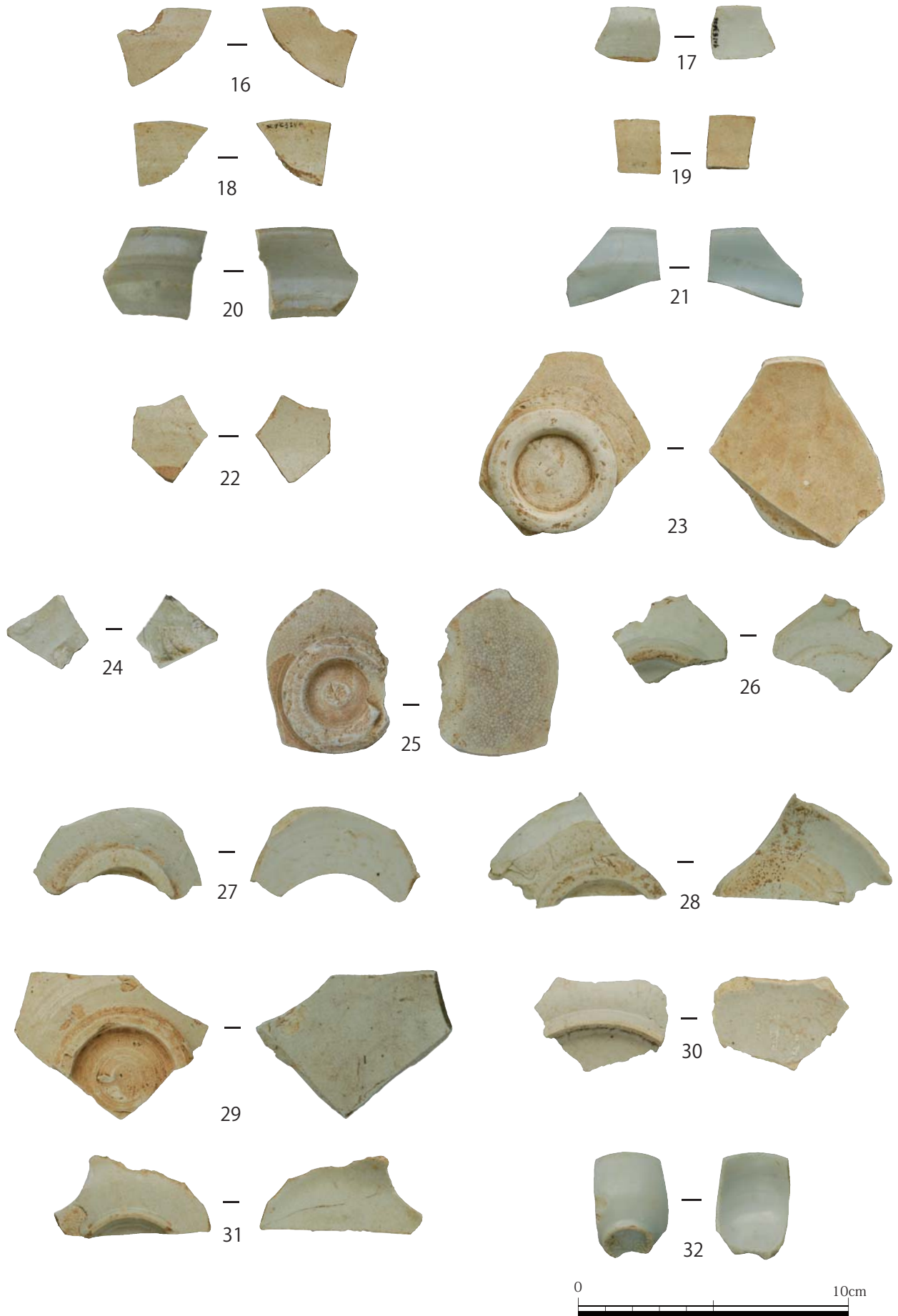
第19図 白磁1 (碗)



图版 17 白磁 1 (碗)



第20図 白磁2 (皿・杯)



图版 18 白磁 2 (皿·杯)

第7表 白磁観察一覧

第図 図版	番号	名称	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観 察 事 項	出土地
第19図・ 図版17	1	碗	口玉 縁	15.6 — —	白色の微粒子			玉縁口縁。口縁部の肥厚下部を削る。	no.1 トレンチ B-3 IV層 人骨周辺
	2		内彎 口縁	17.4 — —	白色の微粒子			内彎口縁。口縁内端部に稜を呈するピロー スクタイプ碗Ⅱである。	no.1 トレンチ C-4 II層
	3			16.4 — —	淡灰色の微粒子			内彎口縁。口縁内端部に稜を呈するピロー スクタイプ碗Ⅱである。	no.2 トレンチ B-1 II層
	4			—	白色の微粒子			内彎碗。	不明
	5		外反 口縁	16.9 — —	白色の微粒子	透明釉を 薄く施釉	あり	外反口縁。口唇部は平坦を成す。	no.1 トレンチ A-4 I層
	6			—	白色の微粒子	濁白色		外反口縁。口唇部は舌状を成す。	no.1 トレンチ C4 I層
	7			19.0 — —	淡灰色の微粒子	透明釉を 薄く施釉	あり	外反口縁。口唇部は舌状を成す。	不明
	8			—	淡灰色の微粒子			外反口縁。口縁下部は窄まる。	no.4 トレンチ II層
	9			16.2 — —	淡灰色の微粒子			外反口縁。口縁部は口縁下部で窄まり肥厚する。	no.2 トレンチ B-1 IV層
	10		胴部	—	灰色の微粒子	透明釉を薄く施釉		胴部片で器壁は厚い。胴上部で外反する。	不明
	11			—	灰色の微粒子			胴部片で器壁は薄い。胴上部で外反する。 胴下部まで施釉する。	no.1 トレンチ II層
	12			—	淡灰色の微粒子	透明釉を薄く施釉		胴下部片。外面腰部まで施釉する。	no.1 トレンチ C-4Ⅲ層
	13		底部	5.4 — —	淡灰色の微粒子	透明釉を薄く施釉	あり	底部。見込みに蓮花文が施される。腰部か ら外底まで露胎となる。	no.3 トレンチ D-3 V層
	14			—	淡灰色の微粒子	透明釉を薄く施釉		底部。見込みに花文が施される。腰部は露 胎となる。	no.1 トレンチ C-4 I層
	15			—	白色の微粒子			底部。見込みに花文が施される。腰部は露 胎となる。	no.1 トレンチ I層
第20図・ 図版18	16	皿	直口 口縁	12.6 — —	乳白色の微粒子		あり	直口口縁。外面胴部に明瞭な轆轤痕が残る。	no.3 トレンチ D-3 V層
	17			9.6 — —	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉		直口口縁。	no.3 トレンチ D-3 V層
	18			9.6 — —	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉	あり	直口口縁。	no.3 トレンチ D-3 V層
	19			—	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉	あり	直口口縁。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	20		外反 口縁	13.0 — —	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉		外反口縁。厚手の皿である。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	21			10.2 — —	淡灰色の微粒子			外反口縁。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	22		胴部	—	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉	あり	胴部片。直口口縁と思われる。腰部まで施 釉する。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	23		底部	4.5 — —	白色の微粒子		あり	底部。外面腰部まで施釉する。	no.3 トレンチ D-3 V層
	24		り 挟り 高台入	—	白色の微粒子	透明釉を薄く施釉		挟り入り高台皿。見込みに重ね焼きの際の 目痕が見られる。	no.2 トレンチ B-1 II層
	25		底部	4.2 — —	白色の微粒子		あり	底部。外面腰部まで施釉する。	no.3 トレンチ D-3 IV層
	26			4.7 — —	白色の微粒子	淡青色釉		底部。胴上部より外反する。見込みは蛇の 目釉剥ぎ。外面腰部まで施釉。	no.4 トレンチ C-2 IV層
	27			4.1 — —	白色の微粒子	淡青色釉		底部。腰部まで施釉する。	no.3 トレンチ D-3 IV層
	28			5.0 — —	乳白色の微粒子	淡青色釉	あり	底部。見込みは蛇の目釉剥ぎ。畳付は露胎。	no.2 トレンチ (井戸周辺) I層
	29			5.1 — —	白色の微粒子			底部。内面から高台外面まで施釉。畳付か ら外底は露胎。	no.1 トレンチ D-4 I層
	30			8.4 — —	乳白色の微粒子		あり	底部。薄手の皿で畳付を除く全釉。	no.2 トレンチ (井戸周辺) I層
	31			3.9 — —	白色の微粒子		あり	底部。畳付を除く全釉。	no.3 トレンチ C-3 III層
	32		杯	4.3 1.7 2.6	白色の微粒子			小杯。薄手。畳付を除く全釉。	no.2 トレンチ B-2 I層

第4節 青磁（第21～25図）

青磁は総数615点出土している。得られた器種は碗、皿、杯、火炉、瓶、盤、酒会壺、蓋の撮みの8種類である。

各器種別に記し、個々の詳細は第11表の観察一覧にまとめることとする。

（1）碗（第21～23図）

青磁碗は文様から蓮弁文碗・篋描き文碗・型押し文碗・無文碗に分けた。

①蓮弁文碗（第21図1～11）

蓮弁文は鎬蓮弁文から無鎬蓮弁文までの文様変化が見られる。蓮弁の特徴から更に細分を行った。

I群

蓮弁文に鎬を有する鎬蓮弁文碗である。蓮弁の幅に差異が見られ、幅の広いものをA、狭いものをBとした。

I A群：蓮弁文の幅が広い（第21図1・2）。

I B群：蓮弁の幅が狭い（図3～7）。

II群（図8）

無鎬蓮弁文碗である。片切り彫りで幅広の蓮弁文を描き、弁先が開くものである。

III群（図9～11）

無鎬蓮弁文碗で、篋書きによる線刻細蓮弁文である。

②篋描き文碗（図12～16・18）

外面または両面を篋描きによる文様を施すものである。文様は口縁部に雷文帯を施すグループと花文を施すグループに分けられる。口縁部の形態より以下に分け、さらに文様で細分した。

I群

口縁部は直口し、雷文帯を廻らすものと花文を施すものがあり、前者をA、後者をBとした。

I A群：口縁部に雷文帯のみと胴部に花文を施すものがある（図12～14）。

I B群：内外面に花文を施すもの（図15・18）。

II群

口縁部が外反するもので外面に花文などを施す（図16）。

③型押し文碗

内面に花文などを施すものである（図17・39・40）。

④無文碗（図19～第22図38）

外面が無文の碗で、内面に花文などを描く資料もある。

口縁部の器形によるI～IV類に分けた。

I類：内彎口縁（図19・20）

II類：直口口縁（図21・22）

III類：外反口縁（図23～32・35～37）

IV類：玉縁口縁（図33・34・38）

⑤碗底部（図41～第23図45～52）

底部は施釉方法により2種類に分けた。

I類：外底は蛇の目釉剥ぎである（図42・44・48・49・52）。

II類：外底は無釉である（図41・43・45～47・50・51）。

第8表 青磁碗分類別出土量

器種部位 分類 出土地	碗										合計	ト レ ン チ			
	口					胴							底		
	①	②	③	④	不明	①	②	③	④	不明			④	⑤	
no.1	A-4											1	2	153	
	B-4											3	4		
	C-4	3				43	1	8			47	1	9		113
	D-4					8					15		2		25
	不明					6		1					2		9
no.2	B-1	1	4		19		5	1	2	35		1	4	72	114
	B-1.2				1					2				3	
	B-2	2			6		4		2	17			4	35	
	C-2									1				1	
	不明				1		1			1				3	
no.3・4	C-2				1									1	217
	C-3	1		2	33		5	11	13	63		2	4	134	
	D-3	2	1		23		4		1	43			6	80	
	不明									1			1	2	
	不明	1	3		19		2			29	1	1	4	60	
合計	10	8	2	161	1	30	12	18	258	2	5	37	544	544	
部位別合計	182					320					42		544		

(2) 皿 (第23・24図)

皿は口縁部の形状から、口折皿・稜花皿・外反口縁皿・直口口縁皿に分けた。

①口折皿 (第23図 53～57)

口縁部が平鐙を成し、外面に蓮弁文を施す。文様の施文方法から2種類に分けた。

I類：篋描きによる蓮弁文を施す (図53～56)。

II類：片切り彫りによる蓮弁文を施す (図57)。

②稜花皿 (図58・59)

腰部で外側に屈曲して外反する。口唇部は花卉状に刻みを施し、内面にラマ式の蓮弁文や刻花文、見込みに花文を施す。

③外反口縁皿 (図60～64)

外反皿は外反の形状から2種類に分けた。

I類：腰部は丸みを帯びながら外反する (図60・61)。

II類：腰部で外側に屈曲して外反する (図62・63)

III類：口縁端部が外反する (図64)

④直口口縁皿 (図65～67)

口縁部の形状より3種類に分けた。

I類：口縁部は丸みを帯びる (図65)。

II類：口縁部は肥厚する (図66)。

III類：口縁部はやや舌状を呈する (図67)。

⑤皿底部 (図68～72)

底部は施釉方法により2種類に分けた。

I類：外底は蛇の目釉剥ぎである (図68・69・71)。

II類：外底は無釉である (図70・72)。

第9表 青磁皿分類別出土量

器種部位 分類 出土地	皿					合計	ト レン チ		
	口	口～底	胴	底					
	①	②	③	④	②	④	⑤		
no.1	B-5 C-4 D-4 不明	5	1 2 1	1			3 1	1 11 1 1	14
no.2	B-1 B-2	1 1	1	2 1			1 1	4 3	7
no.3・4	C-3 D-3	3	1 2	2			1 3	6 3	9
不明		1			1	1	1	4	4
合計		9	2 7	6	1	1	8	34	34
部位別合計			24		1	1	8	34	

(3) 杯 (第24図 73・74・76)

杯は馬上杯で口縁部と底部が得られた。口縁部の器形は内彎型で、底部は逆「ハ」の字状を呈する脚台である。文様は無文 (図73) と圏線と蓮弁文を施す (図74) ものがある。

(4) 火炉 (第24図 75)

火炉の口縁部は直口口縁で、文様は口縁部に圏線を廻らしている。

(5) 瓶 (第24図 77)

瓶の頸部片で三条の圏線が廻る (図77)。

(6) 盤 (第24・25図)

盤は口縁部の形状より鐙縁盤・直口口縁盤に分けた。

①鐙縁盤 (図78・79)

内面の文様により2種類に分けた。

I類：内面に刻花文を施す (図78)。

II類：内面に幅広の蓮弁文を施す (図79)。

②直口口縁盤 (図 80)

口縁部は直口で端部は肥厚する。

③盤底部 (図 81・82)

高台の形状より2種類に分けた。

I類：高台が方形状を呈する (図 81)。

II類：高台外面が豊付より腰部へ移行する (図 82)。

(7) 酒会壺 (第 25 図)

酒会壺は胴部と底部で落とし底が得られた (図 83 ~ 86)。胴部は圈線とその下部に蓮弁文を施す。底部の見込みは蛇の目釉剥ぎである。

(8) 蓋 (第 25 図)

酒会壺の蓋の撮みと思われ、形状は獅子を呈する。撮みは露胎である (図 87)。

第10表 青磁出土量

出土地・層	器種 部位		碗			皿				杯		火炉		瓶		盤			酒会壺		蓋	不明	合計	トレンチ		
	口	胴	底	口	胴	底	口~底	口	底	口	胴	口	胴	底	口	底	撮み	胴								
no.1	A-4	I		1	1																		2	175		
	B-4	I	1	1																			2			
		IV		2																			2			
	B-5	I				1																	1			
	C-4	I	9	10	1																		2		22	
		II	8	3		1																	1		12	
		III	17	25	6	3		1														1	54			
		IV	13	14	3	4		2			1											1	39			
		V		4																					4	
	D-4	I	1	5				1																	7	
II			1																				1			
III		2	5																				7			
IV		4	4	2														1					11			
V		1																					1			
表採不明	I	6		2	1																		9			
	V		1																				1			
no.2	B-1	I	10	17	1	2					1											4	35	129		
		II	5	14	2	1																	24			
		III		1																					1	
		IV	9	11	2			1						1											24	
	B-1.2	I	1	2																					3	
	B-2	I	2	8	1	1		1																		13
		II	4	11	3	1																				19
C-2	IV		1																				6			
不明	I	1	2																				1			
C-2	IV	1																					3			
no.3.4	C-3	I	1	2																				3	242	
		II		2																						2
		III	2	6																						8
		IV	30	77	6	6																				123
		V	3	4									2		1					1						8
	不明		1																					1		
	D-3	I		1																						1
		II	3	2																						5
		III	1	2																						3
		IV	16	29	4	2		1		2				1		3				3						61
V		4	10	2										1										17		
不明	2	4																					6			
不明	I		1	1																				3		
不明		23	32	5	1	1	1	1														2	69	69		
合計		182	320	42	24	1	8	1	2	1	1	3	5	3	3	2	5	1	11				615	615		
器種別合計			544				34			3		1	3		11		7		1		11		615			

第11表-1 青磁観察一覽

第 図 版	番 号	器 種	名 称	分 類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観 察 事 項	出土地	
第 21 図 ・ 図 版 19	1	碗	鎚蓮弁文	I A	14.0 — —	白色の 微粒子	淡緑色	なし	直口口縁。口唇部は舌状を呈す。片切り彫りによる幅広の蓮弁文を描き、間弁を有する。	no.2 トレンチ B-1 IV層	
	2				—	淡灰色の 微粒子	淡青緑色	あり	胴部片。片切り彫りによる幅広の蓮弁文を描く。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層	
	3			I B	—	白色の 微粒子	淡緑色	なし	直口口縁。口唇部はやや舌状を成す。片切り彫りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	no.3・4 トレンチ D-3 III層	
	4				—	白色の 微粒子	淡緑色	なし	直口口縁。片切り彫りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	no.1 トレンチ C-4 IV層	
	5				—	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	胴部片。片切り彫りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	no.1 トレンチ C-4 IV層	
	6				5.6 — —	灰色の 微粒子	淡オリーブ 色	あり	底部。片切り彫りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	不明	
	7				11.8 — —	乳白色の 微粒子	淡茶緑色	あり	直口口縁。片切り彫りによるやや幅広の蓮弁文を描く。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層	
	8				16.2 — —	白色の 微粒子	淡緑色	なし	直口口縁。口唇部は舌状を成す。片切り彫りによる幅広の蓮弁文を描くが弁先が開く。	no.3・4 トレンチ D-3 (石列土) IV層	
	9			無鎚蓮弁文	—	淡灰色の 微粒子	淡青緑色	あり	直口口縁。篋描きによる線刻細蓮弁文を描く。	no.1 トレンチ C-4 IV層	
	10				—	白色の 微粒子	淡灰緑色	なし	直口口縁。篋描きによる線刻細蓮弁文を描く。	不明	
	11				—	灰色の 微粒子	濃緑色	あり	胴部片。内面は片切り彫りによる花文を描く。	no.2 トレンチ I層	
	12			篋描文	I A	13.0 — —	灰色の 微粒子	淡緑色	あり	直口口縁。篋彫りによる雷文帯と、その直下にラム式蓮弁文を描く。	不明
	13					14.4 — —	白色の 微粒子	淡茶色	あり	直口口縁。口縁部資料で、胴部の文様は不明。	no.2 トレンチ B-1 I層
	14				14.2 — —	灰色の 微粒子	暗褐色	あり	直口口縁。崩れた雷文帯である。釉の発色が鈍い。	no.2 トレンチ B-1 IV層	
	15		I B		—	白色の 微粒子	淡オリーブ 色	なし	胴部片。片切り彫りによる花文を描く。	no.2 トレンチ B-1 II層	
	16		II	19.8 — —	白色の 微粒子	淡黄色	あり	外反口縁。外面に片切り彫りによる花文を描く。	no.2 トレンチ B-1 IV層		
	17		型押文	16.6 — —	淡灰色の 微粒子	淡緑色	あり	外反口縁。外面は花文を描き、内面にラム式蓮弁文を描く。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層		
	18		篋描文	I B	—	白色の 微粒子	淡緑色	あり	内彎口縁。内外面に片切り彫りによる花文を描く。	不明	
	19		無 文	I	13.0 — —	白色の 粗粒子	暗褐色	なし	内彎口縁。口唇部は平坦を成す。	no.1 トレンチ C-4 III層	
	20				12.0 — —	淡灰色の 微粒子	淡青色	なし	内彎口縁。	不明	
	21			II	14.8 — —	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	あり	直口口縁。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層	
	22				12.4 — —	白色の 微粒子	淡緑色	あり	直口口縁。	no.1 トレンチ C-4 IV層	

第11表-2 青磁観察一覧

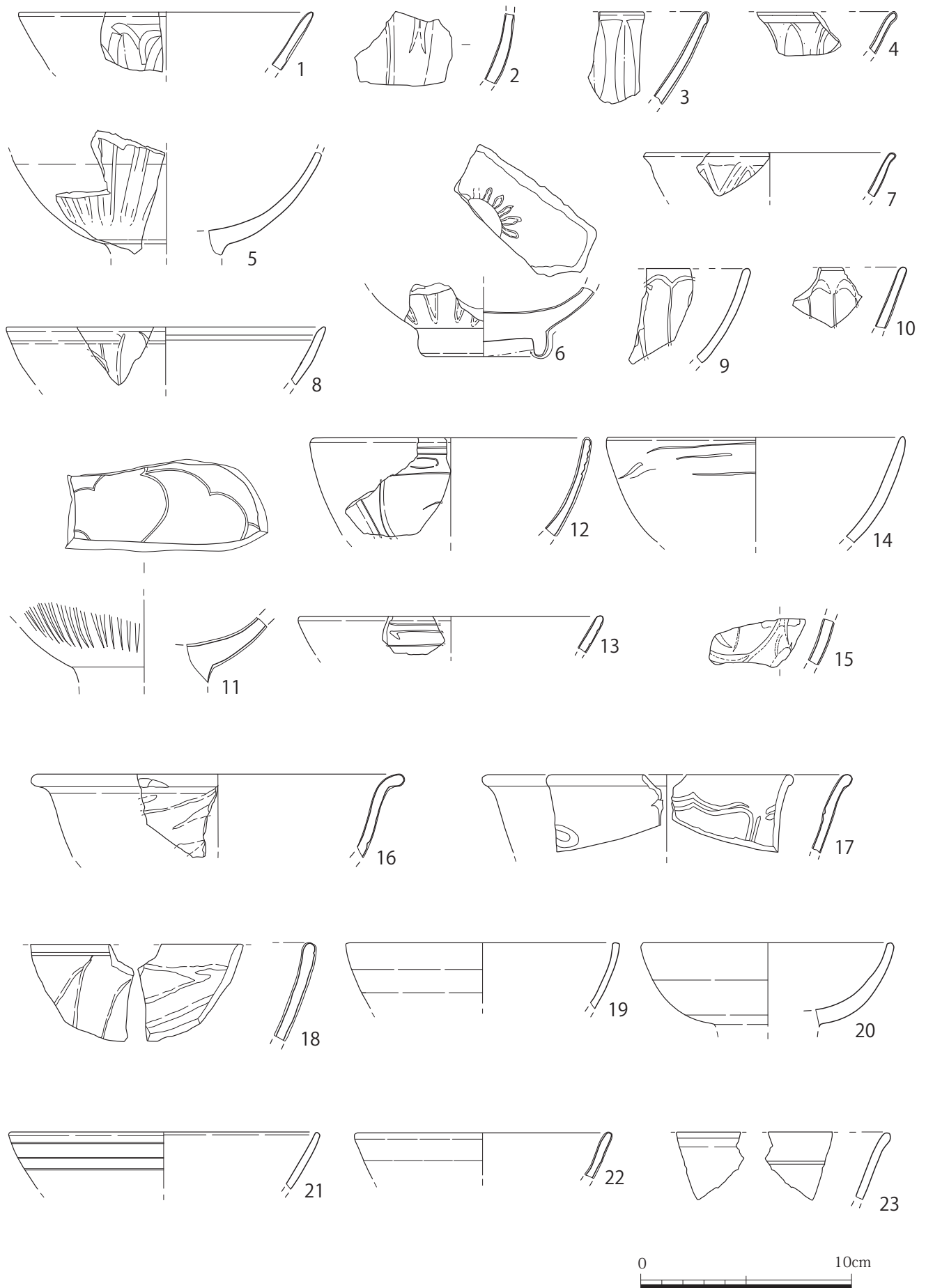
第図 図版	番号	器種	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項	出土地					
第21版 図19	23	碗	無文	III	—	淡灰色の微粒子	濃緑色	なし	外反口縁。内面に一本の圈線が廻らされている。	no.1 トレンチ C-4 III層					
	24				19.8 — —	淡灰色の微粒子	淡灰色	なし	外反口縁。釉の発色が鈍い。	no.1 トレンチ 表採					
	25				13.9 — —	灰色の微粒子	濃緑色	あり	外反口縁。	no.1 トレンチ D-4 IV層					
	26				14.0 — —	灰色の微粒子	淡緑色	あり	外反口縁。釉の発色が鈍い。	no.2 トレンチ B-1 II層					
	27				18.0 — —	灰色の微粒子	淡緑色	あり	外反口縁。	no.1 トレンチ D-4 IV層					
	28				13.6 — —	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	外反口縁。	no.2 トレンチ B-1 II層					
	29				15.0 — —	白色の微粒子	淡青色	なし	外反口縁。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層					
	30				16.8 — —	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	外反口縁。	no.1 トレンチ B-4 I層					
	31				14.8 — —	淡灰色の微粒子	オリーブ釉	なし	外反口縁。	no.1 トレンチ C-4 IV層					
	32				14.4 — —	淡灰色の微粒子	淡オリーブ釉	なし	外反口縁。	no.3・4 トレンチ C-3 V層					
	第22版 図版 20			33	碗	無文	IV	11.4 — —	淡灰色の微粒子	淡緑色	あり	玉縁口縁。釉の発色が鈍い。	no.1 トレンチ I層		
				34				13.4 — —	淡灰色の微粒子	淡オリーブ釉	あり	玉縁口縁。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層		
				35			—	淡灰色の微粒子	オリーブ釉	なし	外反口縁。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層			
				36			III	—	白色の微粒子	淡緑色	あり	外反口縁。	no.1 トレンチ C-4 III層		
				37				—	淡白色の微粒子	淡緑色	あり	外反口縁。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層		
				38				IV	—	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	玉縁口縁。	no.2 トレンチ B-1 II層	
				39			碗	型押文	—	—	白色の微粒子	濃緑色	あり	胴部片。内面に型押しによる花文が施されている。	no.2 トレンチ B-2 II層
				40						—	淡白色の微粒子	淡緑色	あり	胴部片。内面に花文が施されている。	no.2 トレンチ B-2 (チンガー) I層
	41			底部	II	—			淡灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	底部片。見込みの部分で双魚文と思われる文様が施されている。	no.2 トレンチ B-1 I層		
	42				I	—			淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	底部片。見込みの部分で印花文が施されている。	no.1 トレンチ C-4 III層		
43	II	6.0 — —	淡黄色の微粒子		淡黄色	あり			底部片。見込みに印花文が施されている。畳付から外底は露胎となる。	no.3・4 トレンチ D-3 V層					
44	I	— 6.2 —	白色の微粒子		茶緑色	なし			底部片。見込みに印花文が施されている。釉の発色が鈍い。外底は目痕となる。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層					

第11表-3 青磁観察一覧

第図 図版	番 号	器 種	名 称	分 類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観 察 事 項	出土地		
第23図・ 図版21	45	碗	底部	II	7.0 —	淡灰色の 微粒子	明青色	あり	底部片。腰部から外底まで露胎となる。腰部はカンナ削り痕が明瞭に残る。	no.3 トレンチ I層		
	46				5.7 —	白色の 微粒子	淡緑色	なし	底部片。見込みに印花文が施されている。高台内面から外底は露胎となる。	no.1 トレンチ C-4 IV層		
	47				6.3 —	淡灰色の 微粒子	淡青緑色	なし	底部片。畳付から外底は露胎となる。見込みは花文が施される。	no.1 トレンチ C-4 IV層		
	48			I	6.2 —	白色の 微粒子	淡緑色	あり	底部片。外底は露胎である。見込みに 花文が施される。	no.1 トレンチ D-4 IV層		
	49				5.0 —	白色の 微粒子	淡黄茶色	あり	底部片。外底は蛇の目釉剥ぎである。	no.2 トレンチ B-2 (チンガー) I層		
	50			II	7.0 —	淡灰色の 微粒子	淡青緑色	なし	底部片。見込みに印花文が施される。	不明		
	51				4.8 —	灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	底部片。高台は竹の節である。釉は高台 外面まで施釉し畳付から外底は露胎となる。	no.2 トレンチ B-2 II層		
	52			I	6.0 —	淡灰色の 微粒子	淡青色	あり	底部片。	no.1 トレンチ I層		
	53			皿	口折	I	—	淡灰色の 微粒子	明灰緑色	なし	口折皿。外面は篋描きによる蓮弁文を施す。弁先は開く。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	54						13.0 5.4 3.3	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	口折皿。外面は篋描きによる蓮弁文を施す。畳付より外底は露胎となる。釉の発色が鈍い。	不明
	55						5.6 —	淡灰色の 微粒子	オリーブ釉	なし	口折皿の底部片。外面は篋描きによる蓮弁文で、見込みに双魚文と思われる様が施される。	no.1 トレンチ C-4 IV層
56	—	淡灰色の 微粒子	灰緑色			なし	口折皿。外面は篋描きによる蓮弁文を施す。	no.1 トレンチ C-4 IV層				
57	II	12.4 —	白色の 微粒子			灰緑色	なし	口折皿。外面は片切り彫りによる蓮弁文を施す。	no.1 トレンチ C-4 III層			
58	稜花	12.2 6.0 3.5	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	あり	稜花皿。口縁部内面にラマ式蓮弁文、胴部に刻花文を施す。見込みは印花文が施されている。外底は蛇の目釉剥ぎである。	不明					
59		13.8 —	灰色の 微粒子	灰緑色	あり	稜花皿。口縁部内面にラマ式蓮弁文、胴部は刻花文と思われる。	no.2 トレンチ B-1 IV層					
60	外反口縁	I	11.2 —	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	外反皿。釉の発色が鈍い。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層				
61			12.0 —	淡灰色の 微粒子	淡青色	なし	外反皿。	no.3・4 トレンチ C-3 南 IV層				
62			13.2 —	淡灰色の 微粒子	淡青色	なし	外反皿。	no.1 トレンチ B-5 I層				
63		II	11.5 —	淡灰色の 微粒子		なし	外反皿。腰部まで施釉する。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層				
64		III	13.0 —	淡灰色の 微粒子	淡オリーブ 釉	なし	直口口縁皿。口唇部は丸みを帯びる。	no.1 トレンチ C-4 III層				
65		直口口縁	I	14.0 —	淡灰色の 微粒子	明灰緑色	あり	直口口縁皿。	no.2 トレンチ B-1 I層			
66	II		12.4 —	灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	直口口縁皿。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層				
第24図・ 図版22												

第11表-4 青磁観察一覧

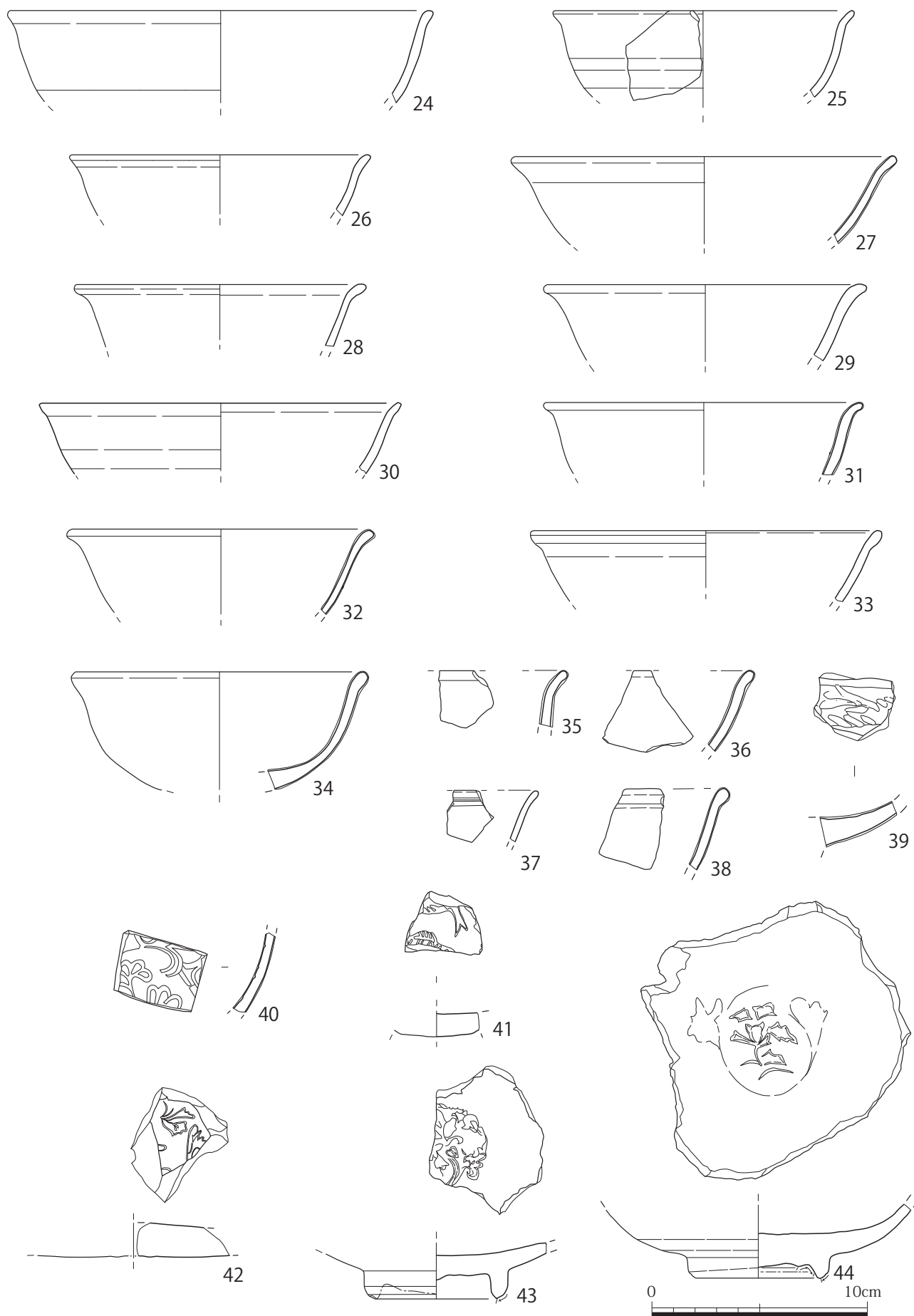
第図 図版	番号	器種	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項	出土地	
第24図・ 図版22	67	皿	直口 口縁	Ⅲ	9.0 — —	白色の 微粒子	明緑色	なし	直口口縁皿。外面口縁下部に一本の圈線が廻る。	no.2 トレンチ B-2 (チンガー) I層	
	68			I	—	4.6 — —	灰色の 微粒子	不明	不明	底部。見込みと外底は目跡となる。釉の発色が鈍い。	no.1 トレンチ C-4 IV層
	69				—	7.4 — —	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	底部。高台が広い。見込みと外底は目痕となる。	no.2 トレンチ B-1 IV層
	70			Ⅱ	—	6.2 — —	淡灰色の 微粒子	淡灰緑色	なし	底部。釉は高台外面途中まで施される。見込みには印花文が施される。	no.1 トレンチ C-4 Ⅲ層
	71			I	—	6.0 — —	白色の 微粒子	淡青色	あり	底部。見込みは圈線が施される。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層
	72			Ⅱ	—	6.4 — —	灰色の 微粒子	灰緑色	なし	底部。見込みは目跡で印花文が施されている。釉の発色は鈍い。	no.1 トレンチ D-4 I層
	73	杯			8.2 — —	淡灰色の 微粒子	暗褐色釉	あり	杯。器形は、胴部で丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内彎する。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
	74				7.2 — —	白色の 微粒子	淡緑色	あり	杯。器形は、胴部は張りそのまま立ち上がる。口縁部内面に二本の圈線、外面は口縁下部に二本の圈線を廻らし、その下部に片切り彫りによる蓮す。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
	75	火炉			8.8 — —	白色の 微粒子	淡緑色	あり	杯。直口の口縁で、外面口縁下部に一本の圈線を廻らす。香炉の可能性もある。	no.1 トレンチ C-4 IV層	
	76	杯			— 3.3 —	灰色の 微粒子	灰緑色	不明	馬上杯。底部片。高台外面辺りまで施釉。外底は露胎である。	no.2 トレンチ B-1 Ⅱ層	
	77	瓶			—	白色の 微粒子	淡緑色	なし	瓶の頸部片。外面に三本の圈線を廻らす。	no.3・4 トレンチ C-3 IV層	
	78	盤	鏝縁	I	21.0 — —	乳白色の 微粒子	緑色	なし	鏝縁盤。口縁部内面に刻花文を施す。	no.3 トレンチ I層	
79	Ⅱ			—	23.2 — —	淡茶色の 微粒子	茶色	あり	鏝縁盤。口縁部内面に窠彫りによる幅広の蓮弁文を施す。	不明	
80	直口 口縁				20.4 — —	白色の 微粒子	淡緑色	あり	直口口縁盤。内面に三～四本単位の櫛による蓮弁文を施す。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
81	底部		I	—	13.4 — —	白色の 微粒子	深緑色	あり	盤底部。内面腰部に数本単位の櫛による蓮弁文が施される。見込みは印花文。外底は蛇の目釉剥ぎである。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
82			Ⅱ	—	14.6 — —	淡茶色の 微粒子	茶色	あり	盤底部。外底は蛇の目釉剥ぎである。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
第25図・ 図版23	83	酒会 壺			—	白色の 微粒子	緑色	なし	酒会壺胴部片。胴下部片で上部の構図は不明、その下部に三本の圈線を廻らす。下部は蓮弁文を施す。	no.3・4 トレンチ C-3 V層	
	84				—	白色の 微粒子	淡灰緑色	なし	酒会壺底部片。見込みは目痕状である。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
	85				—	白色の 微粒子	緑色	あり	酒会壺底部片。見込みは蛇の目釉剥ぎである。	no.1 トレンチ D-4 IV層	
	86				—	白色の 微粒子	緑色	あり	酒会壺底部片。見込みは蛇の目釉剥ぎである。	no.3・4 トレンチ D-3 IV層	
	87	蓋撮 のみ			—	白色の 微粒子	無釉	なし	撮み。獅子。	no.1 トレンチ C-4 IV層	



第21図 青磁1(碗)



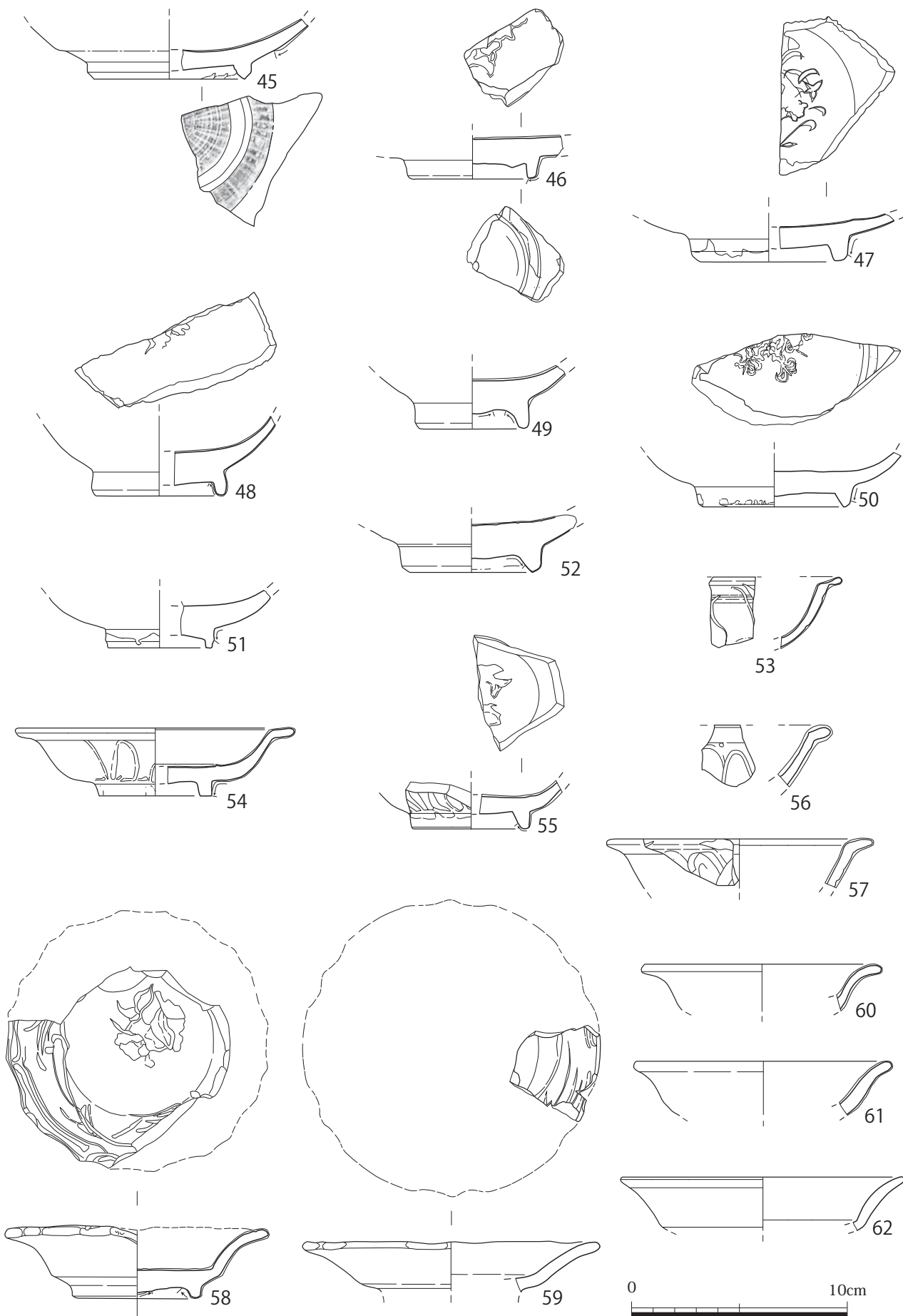
图版 19 青磁 1 (碗)



第22図 青磁2(碗)



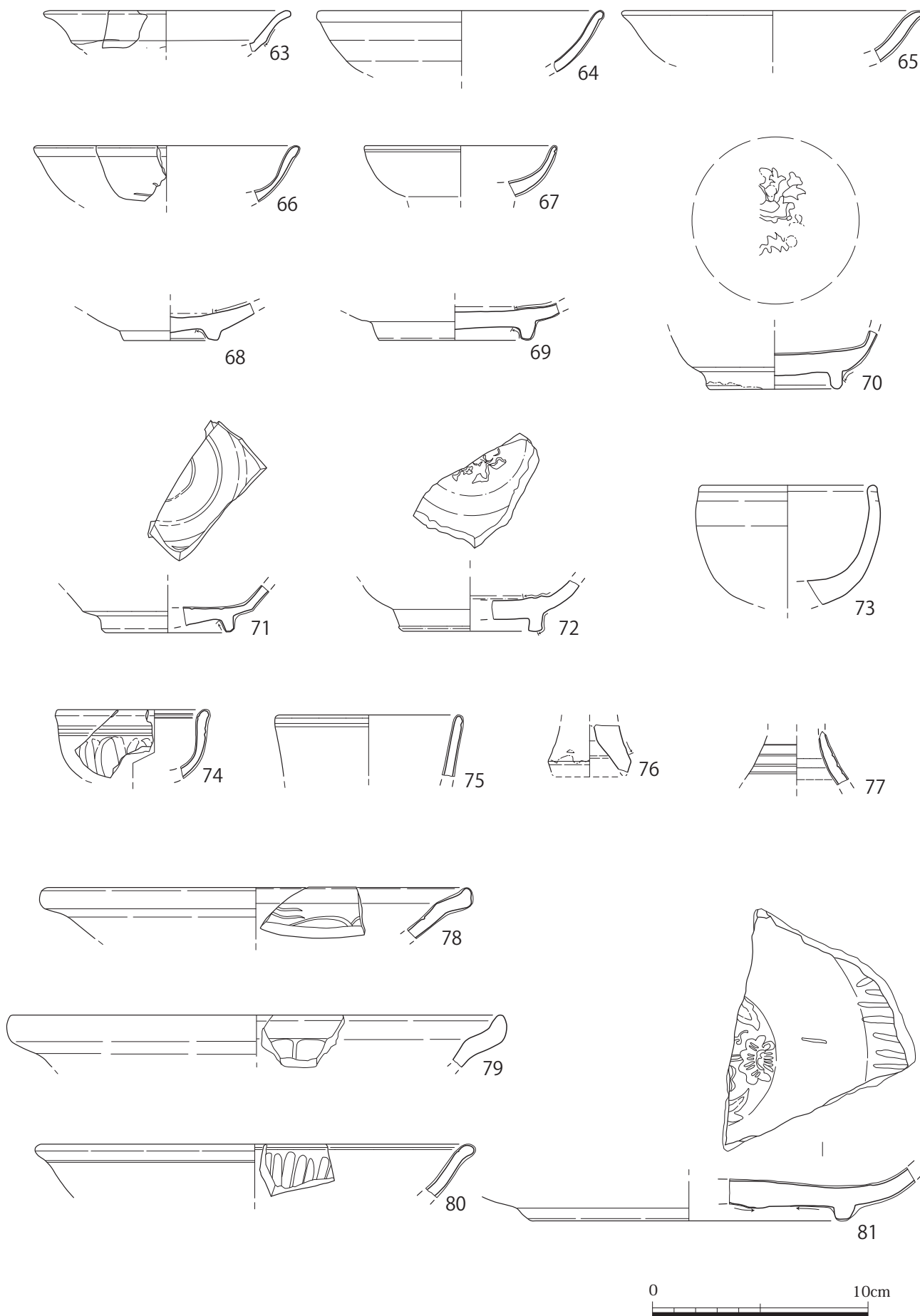
図版 20 青磁 2 (碗)



第23図 青磁3 (碗・皿)



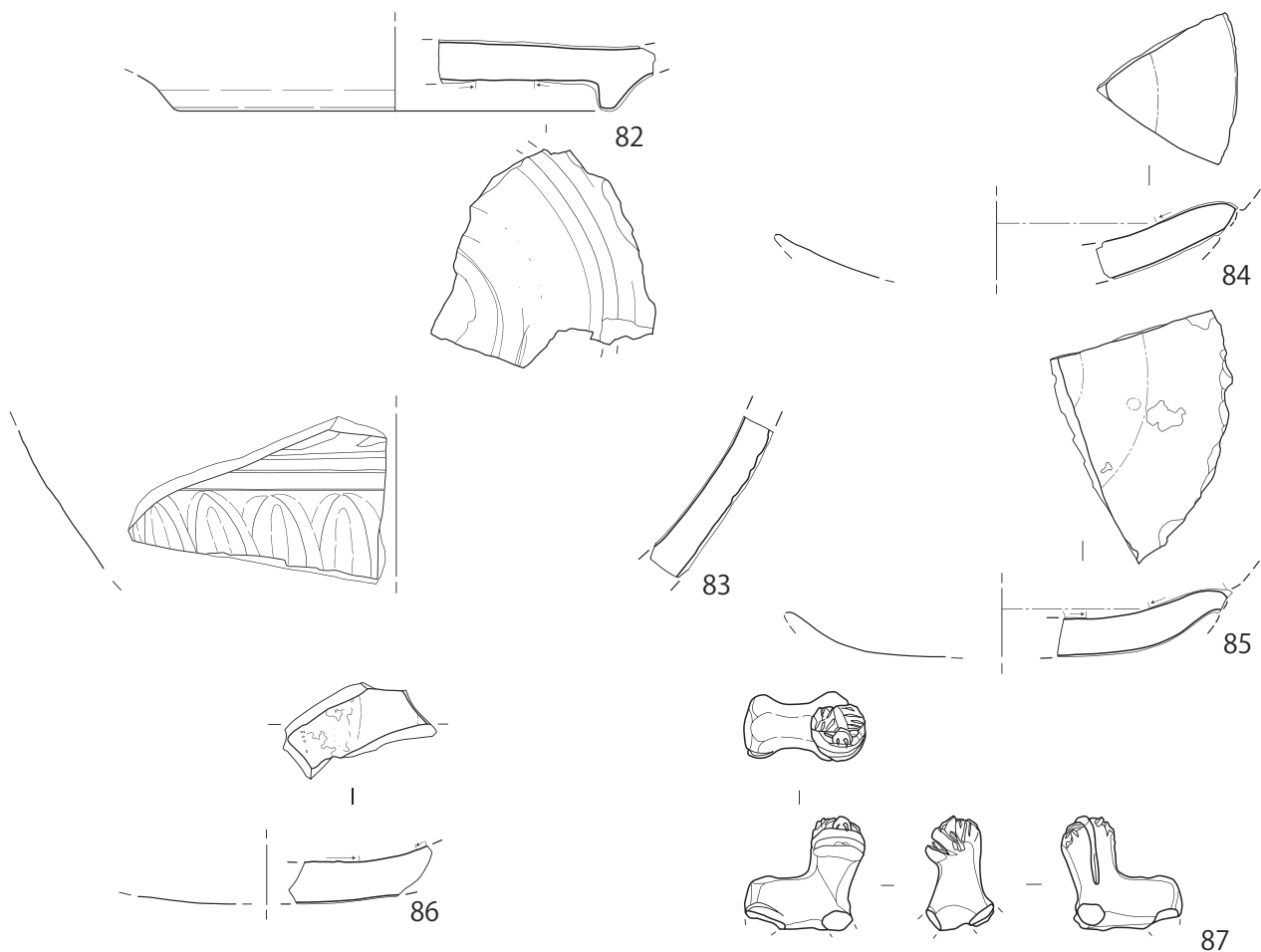
图版 21 青磁 3 (碗・皿)



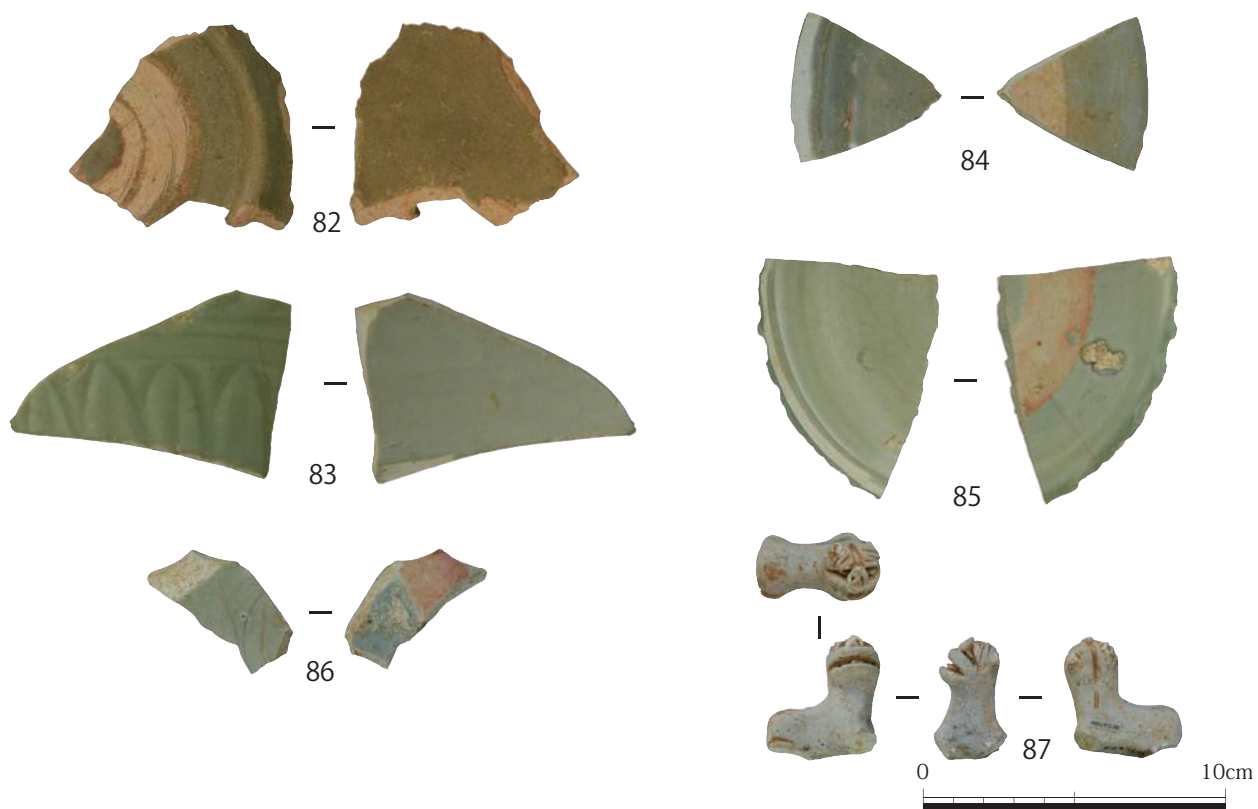
第24図 青磁4 (皿・杯・火炉・瓶・盤)



図版 22 青磁 4 (皿・杯・火炉・瓶・盤)



第25図 青磁5（盤・酒会壺・蓋の撮み）



図版 23 青磁 5（盤・酒会壺・蓋の撮み）

第5節 染付（第26図）

染付は61点出土した。その内訳は碗52点、皿4点、鉢2点、杯3点である。

出土地はno.1トレンチで7点、no.2トレンチ28点、no.3トレンチ20点、no.4トレンチ1点出土した。層別にはI層で31点、II層で9点、III層3点、IV層9点、V層9点である。

出土状況を第12表、主な遺物は第26図、図版24に示し、その観察一覧を第13表に示した。以下、器種ごとに概略する。

（1）碗（第26図）

口縁部18点、胴部26点、底部7点の計51点の出土である。

口縁部は外反口縁と直口口縁、胴部は腰折れとほぼまっすぐに立ち上がるもの、底部は内底に蛇の目釉剥ぎを施すものと施さないものがある。

①口縁部

外反口縁は8点、直口口縁は10点出土している。

第26図1・2は外反口縁で、図1は外面の腰部に蓮弁文、内面の見込みに圏線を2本を施す。呉須の発色悪く、福建広東系と考えられる。図2は外面に草花文、内面の口唇に圏線2本を施すもので前者に比べて、呉須の発色はよい。

図3～5は直口口縁である。図3は器厚が0.2cmと薄手で、外面に梵字文、内唇に襷文を施すもので呉須の発色は淡い。図4は口縁部断面が舌状を呈するもので、外面に圏線、内唇に花菱文を施す。呉須の発色は淡く、器厚は0.5cmと厚手である。図5は外面に波濤文、内面の口唇に圏線を1本施すものである。呉須の発色はよい。福建広東系と思われる。

②胴部

腰折タイプ（図6～8）とストレートタイプ（図9）がある。

図6は外面に雲龍文と蓮弁文を施し、呉須の発色は鮮やである。図7は外面に唐草文を施すが呉須の発色は淡く、釉も青みを帯びるものである。図8は外面に呉須と沈線文で草花文を施すものである。呉須の発色は良く、薄手である。

ストレートタイプは図9で、外面に唐草文を施すもので、呉須の発色は良く、最大胴径16.0cmと大振りである。腰折タイプは外反口縁、ストレートタイプは直口口縁のものと思われる。

③底部

図10・11は外面に発色の悪い丸文を施す。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、外底の高台の内部には目砂が確認されるもので、図11は高台がやや「ハ」字状に開く。

図12は見込みに草花文、外底に「天」の文様を施すもので呉須の発色は淡い。見込に蛇の目釉剥ぎを施す。

（2）皿（第26図）

胴部2点、底部2点出土した。

図15は底部で文様は見込みに十字花文と圏線、高台脇に圏線が施され、呉須の発色は悪い。畳付は内側から細かい剥離が見られる。底径6.2cmを測る。

（3）鉢（第26図）

胴部と底部各々1点出土した。

図14は胴部で外面の中央に横位、その上下に草花文が見られ、呉須の発色が悪く、胎土は乳白色を呈し、焼成は悪い。16世紀末～17世紀初の漳州窯のと思われる。類例は那覇市天界寺跡（2001）から出土。

図 13 は底部で、外面及び見込みに草花文を施すもので、呉須の発色は鈍い。腰部は丸味を帯び、外底に目砂が確認される。底径 8.2cm。

(4) 杯 (第 26 図)

杯としたのは口径が 6cm 以下のものをここに含めた。

3 点出土した。

図 16 は口径 5.8cm と大きめで、口縁部は外反し、外面に列点文を施す。呉須の発色良い。

図 17 は腰折タイプの底部で、見込みに山水文、高台脇に圈線を施す。呉須の発色は淡い。畳付は無釉で、外側はヘラで削るが、畳付けが細くなり、型造りと思われる。呉須の発色が鈍いことから伊万里焼の可能性も考えられる。

図 18 は外面に点刻文を施すもので、呉須の発色は濃い。底径 1.8cm を測る。

出土した染付はほぼ 16 世紀～ 18 世紀のもので、出土地も井戸状遺構の検出された no.2 トレンチに多く見られ、「寛永通宝」(初鑄 1636 年)なども出土していることから、井戸の使用年代は合致する。

第12表 染付出土量

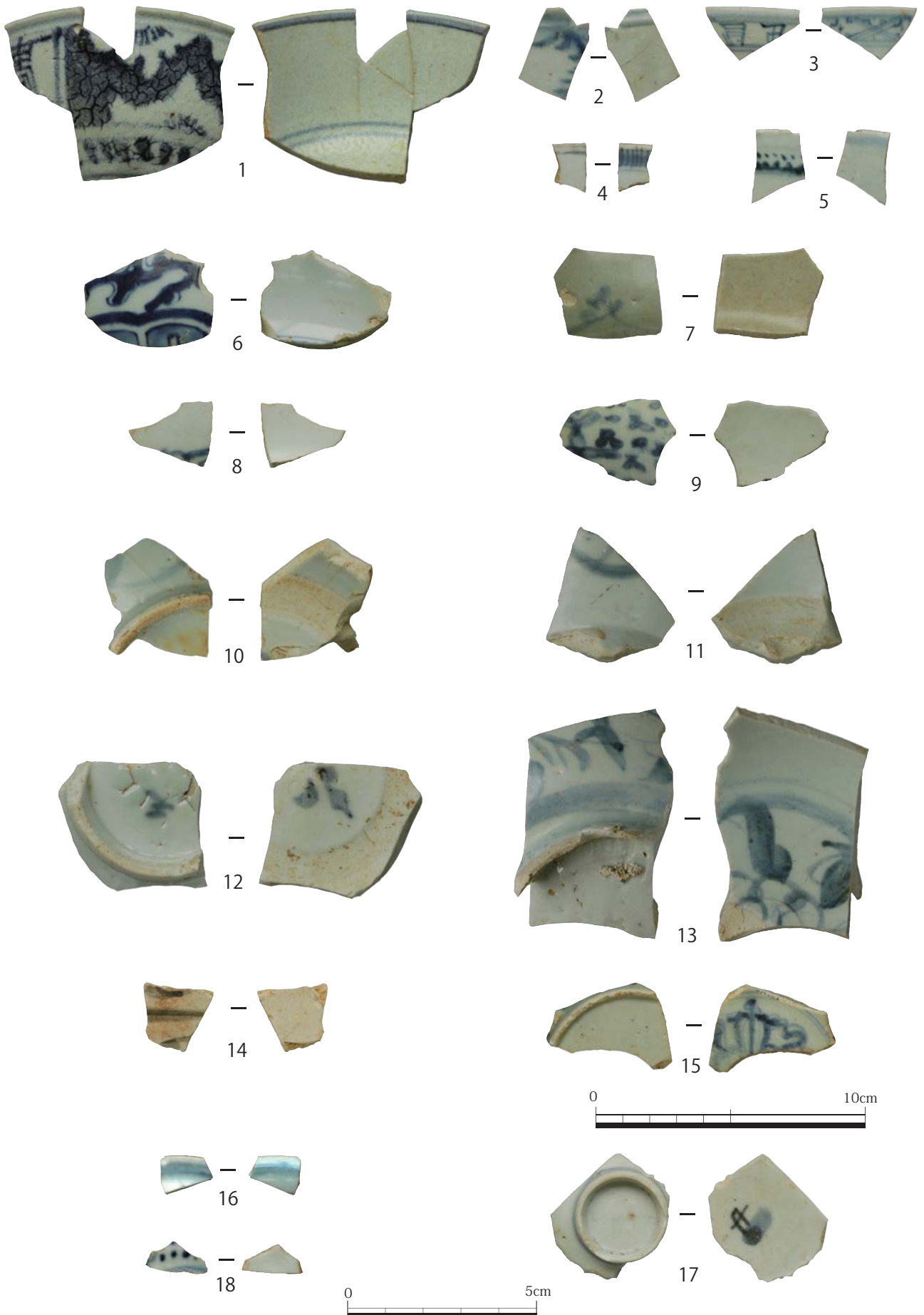
器種		碗				皿		鉢		杯		合計
		口縁部		胴部	底部	胴部	底部	胴部	底部	口縁部	底部	
		外反	直口							外反	底部	
no.1	C-4	Ⅲ	1	1								2
	D-4	Ⅰ			1							1
	D-4	Ⅴ							1			1
	傾斜部	Ⅰ			1	1						2
	傾斜部	Ⅱ			1							1
no.2	B-1	Ⅰ	3	1	7	1	1			1		15
	B-1	Ⅱ						1				1
	B-1	Ⅳ	2									2
	B-1.2	Ⅰ									2	2
	B-2	Ⅰ		1	1	1						3
	B-2	Ⅱ		1								1
	B-3	Ⅰ			1							1
	C-2	Ⅰ			1	1						2
no.3	C-3	Ⅰ			1	1						2
	C-3	Ⅱ			1							1
	C-3	Ⅲ			1							1
	C-3	Ⅳ		1	3	1						5
	C-3	Ⅴ										0
	D-3	Ⅱ					1					1
	D-3	Ⅳ			2							2
D-3	Ⅴ		1	4	2			1			8	
no.4	D-3	Ⅱ		1								1
no.2	平坦部	Ⅰ		2								2
	不明	Ⅰ			1							1
	不明	Ⅱ	2	1								3
合計			8	10	26	8	2	2	1	1	1	2
部位別合計			18		26	8	2	2	1	1	1	2
器種別合計			52			4		2		3		61

第13表 染付観察一覧

第図 図版	番号	種類	部位	口径 底径 胴径 (cm)	観察事項	出土地
第 26 図 ・ 図 版 24	1	碗	口	口径:14.9 器高: 5.8 底径: 7.0	形態:外反。 文様:外面-腰部に蓮弁文。内面-圏線、見込みに2本と口縁部に1本。 呉須:発色悪い。素地:貫入。福建広東。	no.4t トンチ D-3 II層
	2	碗	口	—	形態:外反。 文様:外面-草花文。内面-唇に圏線2本。 呉須:発色はよい。厚さ3mm。	no.2 トンチ B-1 I層
	3	碗	口	口径:11.7	形態:直口。 文様:外面-梵字文。内唇-襷文。 呉須:淡い。薄手-2mm。	no.2 トンチ 平坦部 I層
	4	碗	口	—	形態:直口-舌。 文様:外面-圏線。内面-花菱文。 呉須:発色は淡い。器厚5mm。	no.1 トンチ C-4 III層
	5	碗	口	—	形態:直口。 文様:外面-波濤文。内面-口唇、圏線1本。 呉須:呉須-発色はよい。福建広東。	no.2 トンチ B-1 I層
	6	碗	胴	最大胴径:13.0	形態:腰折れ。 文様:腰部-蓮弁文。 呉須:発色鮮やか。器厚4mm。	no.1 トンチ 傾斜部 II層
	7	碗	胴	最大胴径:10.7	形態:外面腰折れ。 文様:唐草文。 呉須:発色悪い釉も青みを帯びる。	no.1 トンチ 傾斜部 I層
	8	碗	胴	最大胴径:10.9	文様:外面-草花文と沈線で草花文。 呉須:発色は良い。	no.3 トンチ D-3 V層
	9	碗	胴	最大胴径:16.0	形態:おそらく、直口。 文様:外面-唐草文。 呉須:発色は良い。器厚3mm。	no.3 トンチ D-3 V層
	10	碗	底	底径:7.7	呉須:発色が悪い。見込み-蛇の目釉剥ぎ、脚内部に砂目。	no.2 トンチ B-1 I層
	11	碗	底	底径:7.1	文様:外面-丸文。 呉須:発色は淡い。見込み-蛇の目。	no.3 トンチ C-3 I層
	12	碗	底	底径:6.8	文様:見込みに草花文。外底「天」。 呉須:発色は淡い。見込-蛇の目(釉剥ぎ)。	no.3 トンチ C-3 IV層
	13	鉢	底	底径:8.2	形態:腰は丸味。 文様:外面-草花文見込みに草花文。 呉須:淡い。外底-目砂見込。	no.1 トンチ D-4 V層
	14	鉢	胴	—	文様:横位に文様、重ねあり。 呉須:発色鈍い。胎土-乳白色。素地:粗製。16c末~17c初、漳州窯。	no.2 トンチ B-1 II層
	15	皿	底	底径:6.2	文様:外面-底部に圏線。内底-十字花文と圏線。 呉須:発色は悪い。畳付-細かい剥離。	no.3 トンチ D-3 V層
	16	杯	口	口径:5.8	形態:外反。 文様:外面-列点文。 呉須:発色良い。	no.2 トンチ B-1 I層
	17	杯	底	底径:2.3	文様:見込みに文様、山水文。外面-脇に圏線。 呉須:淡い。畳付無釉。外側-ヘラで削る型作り。伊万里かも。	no.2 トンチ B-1.2 I層
	18	杯	底	底径:1.8	文様:外面-一点刻文。 呉須:濃い。	no.2 トンチ B-1.2 I層



第26図 染付



図版 24 染付

第6節 天目茶碗（第27図）

9点出土した。全て碗の胴部で破片の大きいものを図示した。出土はB-1 I層で1点、C-3 IV層1点、C-4 III層2点、D-3 IV層1点、D-4 IV層で1点、no.1トレンチの傾斜部I層で1点、不明2点の出土である。

図1・2とも底部近くで、図1は内外面とも光沢のある黒釉が明瞭に見られ、高台脇の外径は5cmを測る。図2は、前者に比べて鉄釉が浮き出ている。高台脇は外径4.6cmと前者よりは若干小さくなる。胎土はいずれも明灰褐色を呈する。

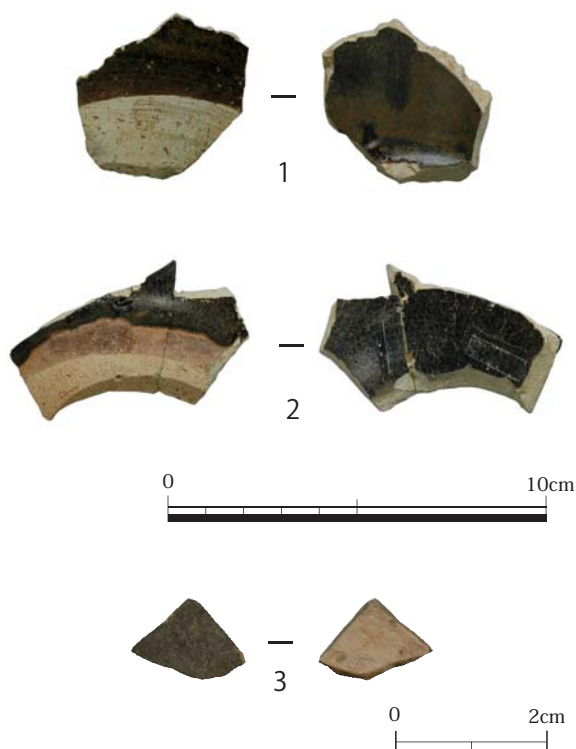
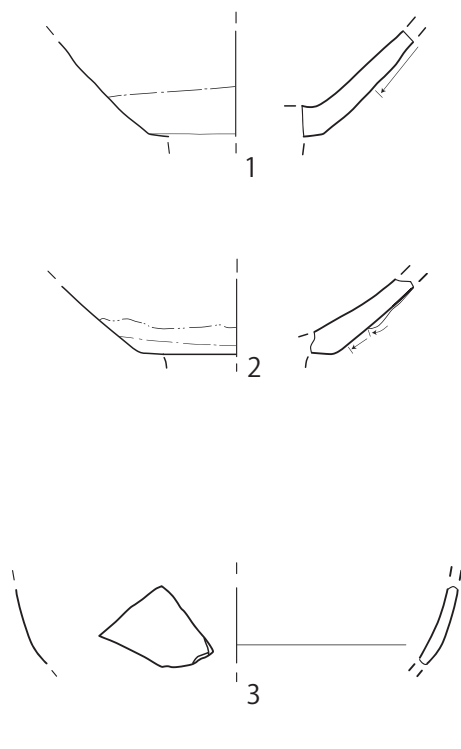
前者がB-1 I層、後者がno.1トレンチ傾斜部のI層とD-3 IV層が接合した。これ以外に茶釉で失光沢の胴部破片がno.1トレンチD-4 IV層で出土している。

第14表 天目茶碗出土一覧

出土地		碗 胴部	茶入れ 胴部
傾斜部	I	1	
B-1	I	1	
B-4	IV		1
C-3	IV	1	
D-3	IV	1	
C-4	III	2	
D-4	IV	1	
不明	不明	2	
合計		9	1

茶入れ（第27図・図版25）

胴部が1点出土した。器厚0.13cmと薄く、胴径は6cmを測る。釉は外面に茶褐色の釉を施し、裏面は無釉で桃褐色を呈し、轆轤痕が見られる。no.1トレンチB-4 IV層の出土である。



第27図 天目茶碗・茶入れ

図版25 天目茶碗・茶入れ

第7節 褐釉陶器（第28・29図）

A. 中国産

褐釉陶器は口縁部12点、胴部207点、底部10点の計229点の出土である。出土地別にはno.1トレンチで50点、no.2トレンチで55点、no.3・4トレンチから73点、不明51点、計229点出土し、層別にはI層で48点、II層で17点、III層で25点、IV層で71点、V層で14点とIV層で多く出土した。

器種別には鉢、壺、瓶、碗が得られ、最も多いものは壺で、大・中・小の大きさが確認できる。出土状況は第15表に示し、主なものは第28・29図、図版26・27、観察一覧を第16表に示し、以下、略述する。

（1）鉢（第28図）

鉢は2点出土した。いずれも口縁部であるが、口縁形態及び胎土は若干異なる。図1は口縁が肥厚する内湾口縁で、口唇は幅2.8cmを測る。6mmの大粒の石英が確認できる。図2は前者と同じ、内彎するもので口径21cmと若干小さく、口縁部断面は逆L字状を呈し、素地は両者若干異なる。

（2）蓋（第28図）

図5は蓋の撮みである。撮みは饅頭形で、外面に黒釉を施す。胎土及び釉色からタイ産陶器に近い。

（3）壺（第28・29図）

図3と4で厚さ0.3～0.5cmの薄手である。図3は有頸で、口縁は玉縁を呈し、図4は底部である。図6はナデ肩壺の頸部で、図7・8は肥厚するもので、前者が蒲鉾状、後者はやや外反する。いずれも壺で茶褐色の失透釉を施すが、内面の頸部はまだらに施される。図9～11は肥厚部がやや方形もので、胎土は赤褐色、失透茶褐色釉で、混和材は石英が見られる。図12は蒲鉾状の肥厚でやや内湾する。前3者よりは厚手である。素地は明灰褐色、混入物に約2mm大の石英と褐色粒を混入する。

図13は有頸の壺で、口縁部はやや肥厚し、断面は三角を呈する。外面の肩部から胴部にかけて鉄釉を施し、内面の頸部には黒釉で指痕が残る。素地は明橙褐色を呈し、石英を混入する。図16は底部に近い部分で、内面に明瞭な轆轤痕が見られ、胎土は図13と酷似する。

図14・15は大型の壺の胴部で素地は明灰褐色を呈する。前者は口縁に近く、いずれも両面に釉を施す。後者は外面の途中まで釉が施されている。首里城京の内地区の第29図に類似するものである。

図17は無釉では最大胴径24.6cm、器厚0.9cmの大きめの壺の肩部である。内面に轆轤痕が明瞭に見られ、素地は明橙褐色と明灰褐色の2層をなす。

図18～20は特徴のある底部である。図18は底面より幅1.5cm丸くなる。内面と外面に鉄釉を施すが、底面は無釉である、素地は明茶褐色で緻密である。素地は沖縄産無釉陶器に類似する。石英をわずかに混入する。図19は底部の立ち上がりがほぼまっすぐで、内面の轆轤痕も明瞭である。胴部に外面は鉄釉を、内面は無釉を呈し、胎土は明橙色、黒粒・赤粒を混入する。図20は底径9.2cm、器厚1.1cm厚手で、素地が明橙褐色を呈し、胎土は細かい。

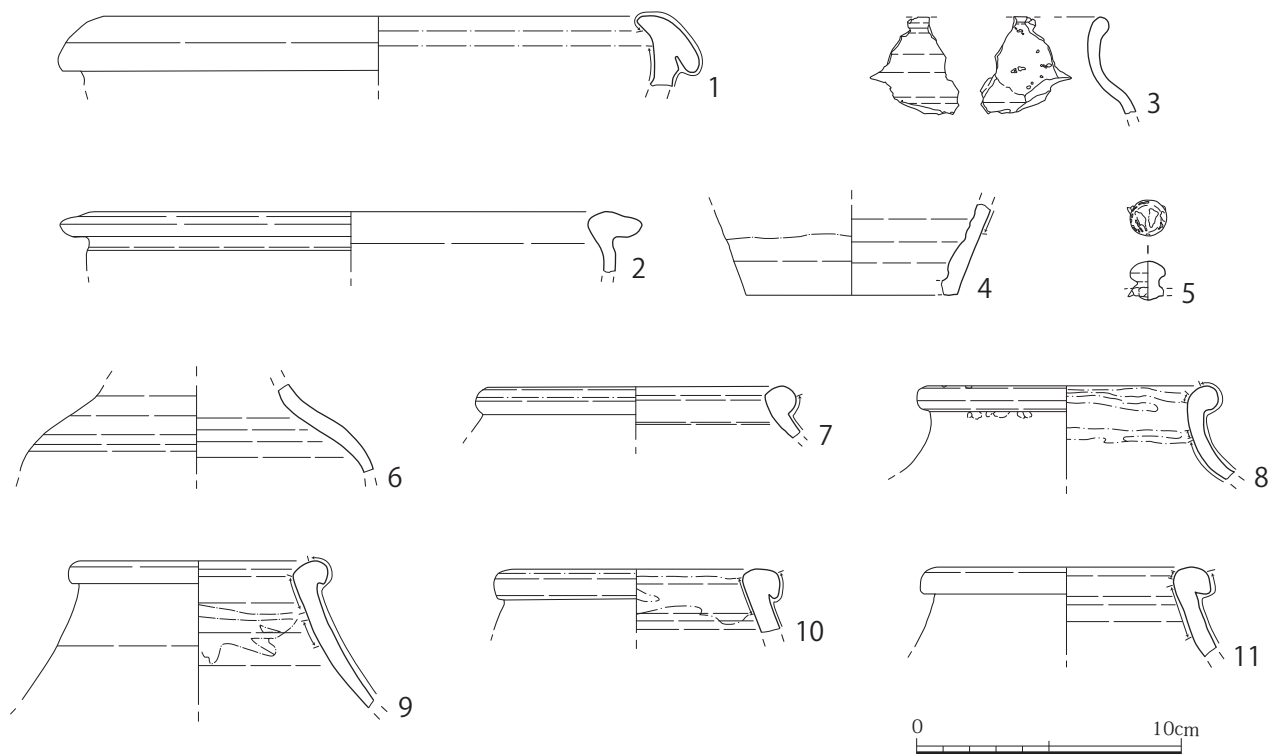
図21～24は口縁部断面が方形を呈し、肩部が張り、胴部から底部にかけては絞り込むように細くなるいわゆる「ルソン」壺と呼ばれるタイプである。図23は胴下部で残存部の最大胴径36cmを測る。明瞭な轆轤痕が見えることから底部に近いと思われる。図24の底部はあげ底になる。

B. タイ産（第29図）

黒釉で、素地に黒色鉱物・石英を混入するいわゆるタイ産陶器は口縁部8点、胴部18点、底部1点、計27点出土した。図25～28に主なものは図示した。図26はやや小降りの四耳壺の口縁部である。口縁部は肥厚し、内唇はややくびれる。図25は肥厚口縁であるが、頸部がやや厚い。図27は三角形に肥厚するもので類例は首里城京の内地区（1998）に見られる。

第15表 褐釉陶器出土量

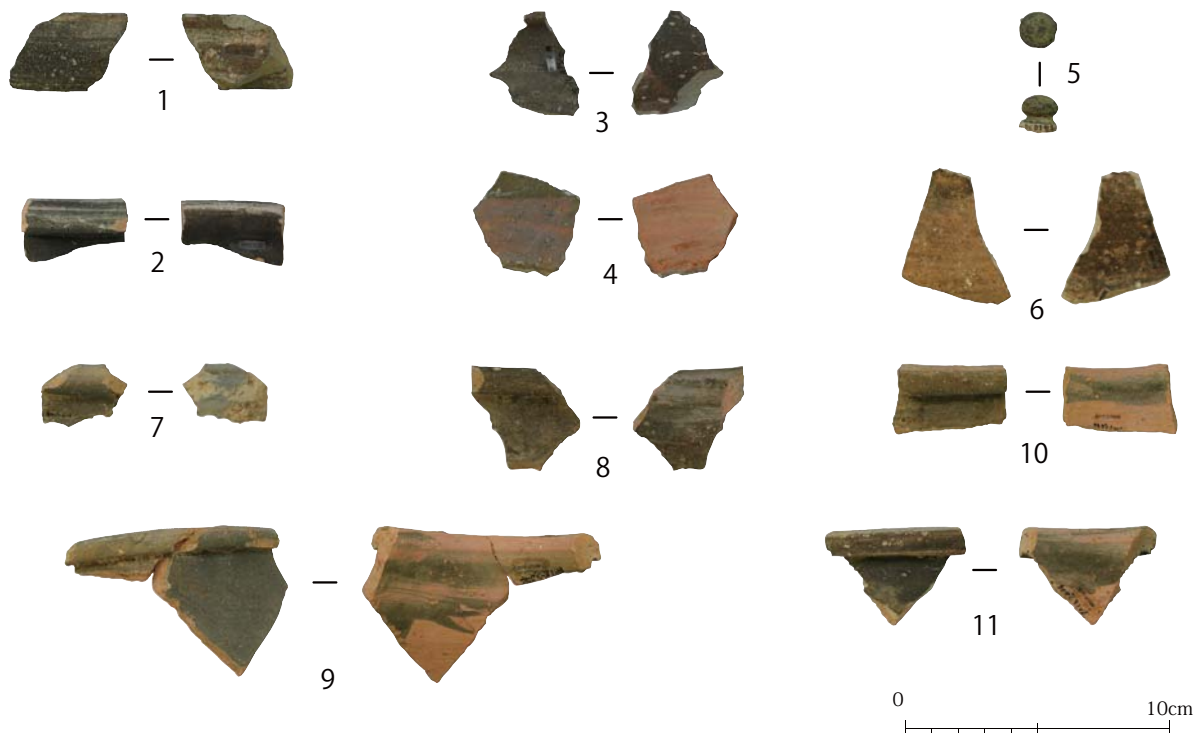
出土地	器種・部位	鉢	壺			小壺	瓶底	蓋	碗		合計	タイ			合計	
		口	口	片面	両面	底	口・胴	底	撮み	底		胴	口	胴		底
no.1	A-4	I				1						2			0	
		I				2						2			0	
	B-4	IV			1							1			0	
		I			1	2						3		1	1	
	C-4	III			8	5	2					15		1	1	
		IV		1	7	1		1				10			0	
		V				1						1			0	
	D-4	I			1	1						2	1		1	
		III			3	2						5			0	
IV				6							7		1	0		
不明							2				2			0		
no.2	B-1	I			17	5			2	1		25	3	6	9	
		II			3	9						12		1	1	
		IV	1			1						2			0	
	B-2	I		1	6	5						12	2	1	3	
		II				2	1					3			0	
	V				1						1			0		
no.34	C-2	III			1							1			0	
		IV			1							1			0	
	C-3	I			1	1						2			0	
		II				1						1			0	
		III			3							3			0	
		IV		3	28	3	2					36		4	4	
		V	1		6							7			0	
	D-2	II									0	1		1	2	
	D-3	I										0	1		1	
		II			1							1		1	1	
		III			1							1			0	
		IV		3	9	2						14		1	1	
V			1	4							5			0		
不明	不明			1						1				0		
不明	不明		1	37	11	1				1			2	2		
合計		2	10	146	56	7	3	2	1	1	229	8	18	1	27	



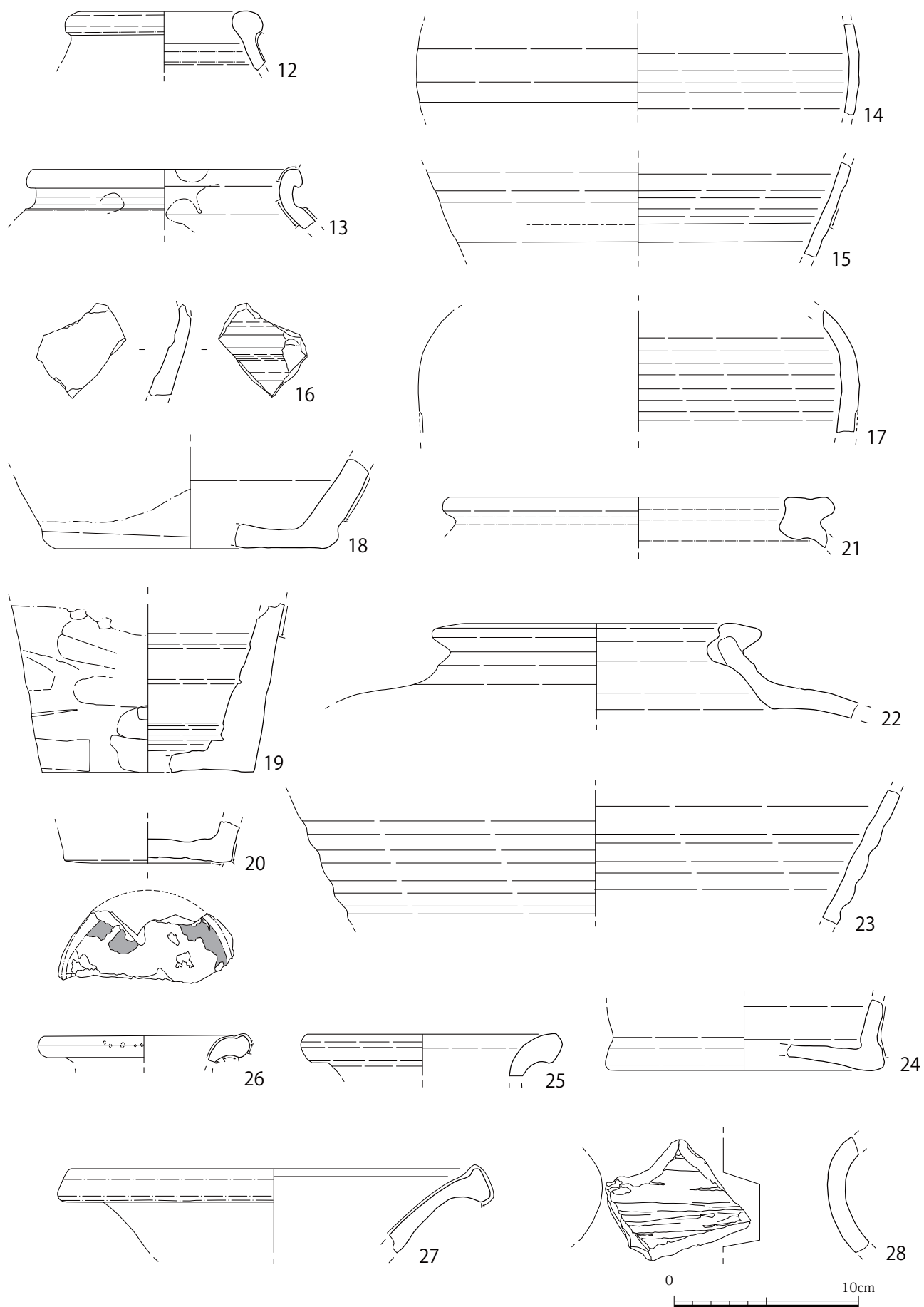
第28図 褐釉陶器1 (鉢・壺・蓋)

第16表 褐釉陶器観察一覧

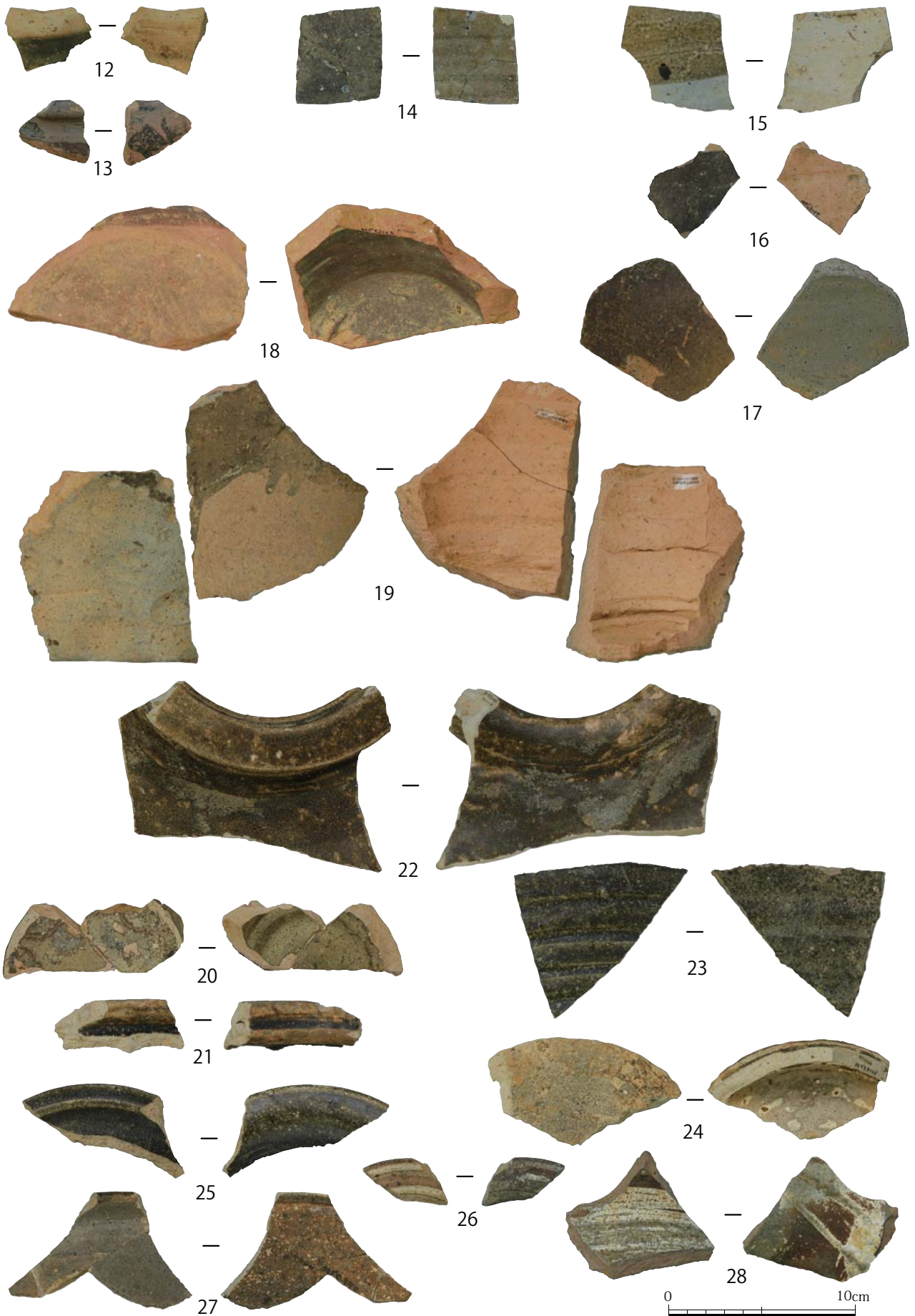
第図版	番号	種類	分類	法量 (cm)	観察事項	出土地
第28図・図版26	1	鉢		口径：24.5 厚さ：0.8	口縁は内彎、口唇幅28.4mm。外面：暗茶褐色、内面：鉄釉。素地：明桃褐色。混和材：石英6mm	no. 2トレンチ B-1 IV層
	2	鉢		口径：22.9 厚さ：0.43	口唇は逆「L」字状、「L」字の幅20.3mm、口縁は内彎。沈線二条。釉は外面：暗茶褐色、鉄釉。素地は明橙褐色。混和材：石英の細粒。	no. 3・4トレンチ C-3V層
	3	壺	小	厚さ：0.3	口唇はやや膨らむ。内外面：轆轤痕。外面：茶褐色、暗茶褐色。素地：明灰褐色。混和材：石英1mm。	no. 1トレンチ C-4IV層
	4	壺	小	底径：8.0 厚さ：0.5	直底。外面：施釉、内面：無釉（赤）。底部より24mm。轆轤痕明瞭。外面：暗茶褐色、底面より24mm、無釉。素地：外面：明灰褐色、内面：明橙褐色。混和材：石英1mm	no. 1トレンチ D-4層不明
	5	蓋	撮み	厚さ：0.3 高：1.4	撮径13mm。外面：黒釉、内面：無釉。素地：明橙褐色。混和材：石英0.5mm。	no. 2トレンチ B-1 I層
	6	壺	小	最大胴径：13.3 厚さ：0.5	頸部、肩部は丸い。内外面：茶釉。素地：明灰褐色。石英1mm、黒色粒。	no. 1トレンチ D-4層不明
	7	壺	中	口径：12.2 厚さ：3.3	肥厚口縁、厚さ11mm。内傾。外面：暗茶褐色釉、内面：無釉。素地：明橙褐色。混和材：石英、黒粒。	no. 3・4トレンチ D-3 IV層
	8	壺	中	口径：11.4 厚さ：0.4	肥厚、やや外反。肥厚10mm。内外面：茶釉、内面：まだらに施釉。素地：明橙褐色。混和材：石英、黒粒1mm。	no. 3・4トレンチ D-3 V層
	9	壺	中	口径：10.0 厚さ：0.5	肥厚部はやや方形、内傾、肥厚幅14mm、高さ8.3mm。外面：失灰褐色、内面：まだら。素地：明橙褐色。混和材石英1mm。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	10	壺	中	口径：10.9	肥厚・やや方形。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	11	壺	中	口径：11.2 厚さ：0.6	肥厚は幅13.5mm、高さ10.4mm。外面：無釉、内面：頸部に鉄釉。素地：明灰～橙褐色。混和材：石英2mm。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
第29図・図版27	12	壺	中	口径：10.7 厚さ：0.6	肥厚内傾。外面：黒釉、内面：口唇から無釉。素地：明灰褐色。混和材：石英、褐色粒2mm。	no. 2トレンチ B-2 I層
	13	壺	中	口径：15.0	有頸、立ち上がり2.3cm、肩部に鉄釉、内面黒釉。指痕の釉。素地は明橙褐色、石英混入。	no. 1トレンチ C-4 IV層
	14	壺	大	最大胴径：22.0 薄手：0.4	両面釉。明～暗緑褐色。素地は明灰褐色。混和材石英・黒粒1mm。	no. 1トレンチ A-4 I層
	15	壺	大	最大胴径：23.0 厚さ：0.8	底近く、片面釉、白地。内面轆轤痕。外面～暗緑褐色。素地～明灰褐色石英粒。	no. 1トレンチ C-4 IV層
	16	壺			底部近くにヘラ削り。外面暗茶釉。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	17	壺	大	口径：24.0 厚さ：0.9	肩部丸い。内外面轆轤痕。素地は明橙褐色と明灰褐色の2層。混和材に石英多し、黒粒、炭化粒を含む。	no. 2トレンチ B-2 I層
	18	壺		底径：15.0 厚さ：1.0	外面茶釉。底面は無釉。外面に濃茶褐色釉、内面は明茶褐色。石英を含む。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	19	壺	大	底径：11.45	内面轆轤痕明瞭。外面鉄釉は部分、内面無釉。素地は明橙色。黒・赤粒混入。タイ産？	no. 3・4トレンチ D-2 II層
	20	壺		底径：9.2 厚さ：1.1	内外面暗茶褐色釉。素地は明褐色。石英・黒・茶粒、0.5mm多し。	no. 1トレンチ A-4 I層
	21	壺		口径：23.7	口縁部一四角。内外面一褐釉。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	22	壺		口径：18.0	口縁部一四角。内外面一褐釉。	no. 3・4トレンチ D-3 IV層
	23	壺		最大胴径：33.1	内外面一黒釉。	no. 2トレンチ B-1 I層
	24	壺		底径：15.1 厚さ：0.8	底部一上げ底。轆轤痕一明瞭。内外面一黒釉。素地一明灰褐色、2層。石英多し。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	25	壺	タイ	口径：13.5	タイ産。口縁部外反。内外面一黒釉。明灰褐色。	no. 2トレンチ B-2 I層
	26	壺	タイ	口径：10.9	タイ産。やや外反、肥厚一蒲鋒。口唇で若干くびれる。外面一茶褐色釉、内面一まだら茶褐色。素地一明灰褐色。石英・黒粒1mm。	no. 2トレンチ B-2 I層
	27	壺	タイ	口径：22.2 厚さ：1.0	タイ産。外反無釉。口唇から内面に茶釉。素地一明灰褐色。黒粒混入。	no. 3・4トレンチ C-3 IV層
	28	壺	タイ	最大胴径：14.8	タイ産。頸部に部分施釉。暗茶褐色釉。素地一紫褐色。石英・赤粒1mm。	no. 2トレンチ B-1 I層



図版26 褐釉陶器1 (鉢・壺・蓋)



第29図 褐釉陶器2(中国産・タイ産)



図版 27 褐釉陶器 2 (中国産・タイ産)

第8節 本土産陶器（第30図）

備前すり鉢の破片3点、薩摩焼の胴部破片3点、京焼系1点、産地不明2点の計9点出土した。

図1はすり鉢で、口縁部破片3点出土した。口縁部の形状や胎土などから同一個体と考えられるため、復元した。口縁部形態は幅2cmで三角状に肥厚する。肥厚下部の鏝は明瞭でなく、底部はやや上げ底気味で、立ち上がりはストレートである。胎土に5mmほどの粗い石英を混入する。色調は暗紫褐色を呈し、口唇には自然釉の光沢が部分的に見られる。復元した大きさは口径25.5cm、器高9.5cm、底径10cmを測る。内面には幅2cmの櫛目が7本を1組として6本施される。本品は口縁部の形状や底部からの立ち上がり及び大きさから首里城京の内出土のすり鉢に近く、14世紀～15世紀の古手のタイプと考えられる。

薩摩焼は3点出土した。（第17表）器種が確認できるのは1点で壺と思われるが、いずれも細片の為、図示は省いた。

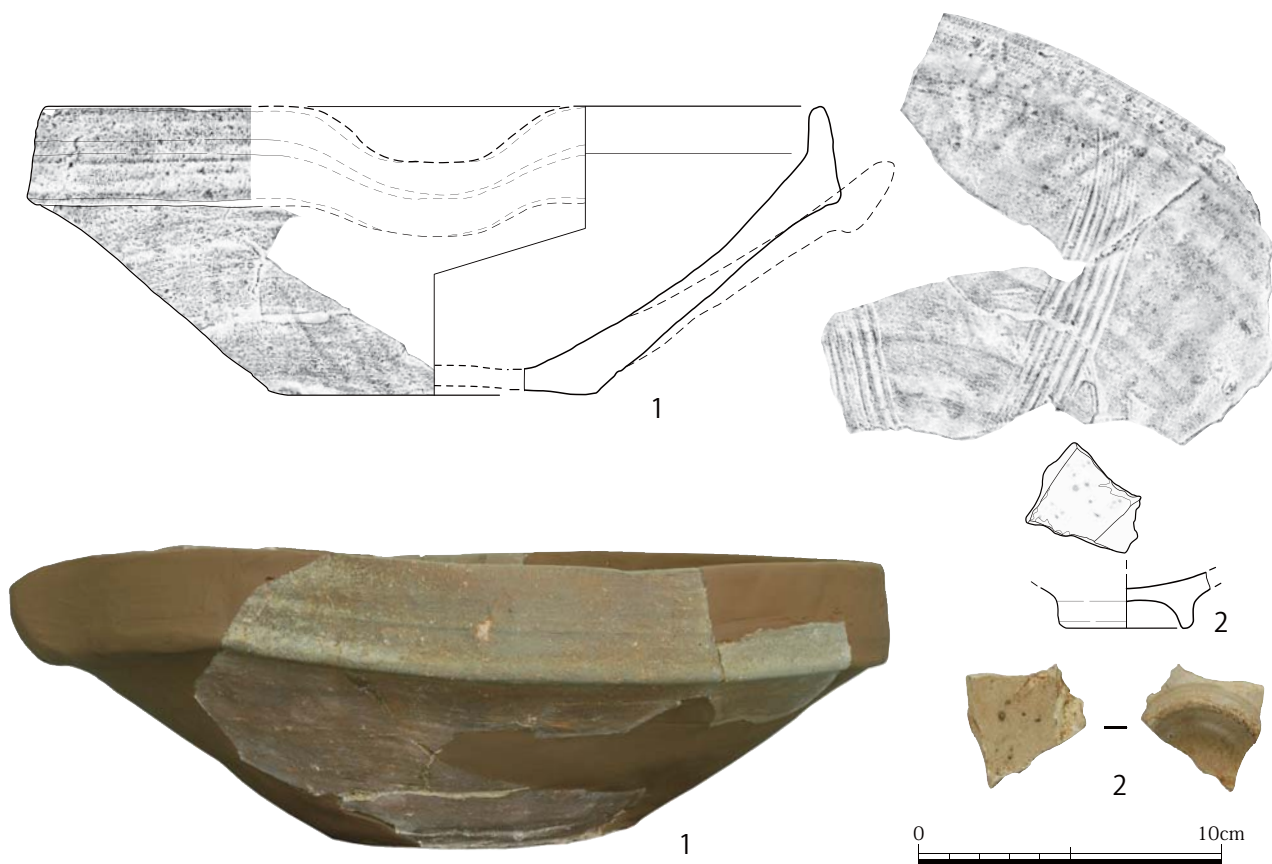
第17表 本土産陶器出土一覧

図番号	産地	種類	部位	備考	出土地
1	備前	すり鉢	口		D-3 V層
2	京焼系	碗	底		no.2 トレンチ B-2 I層
-	薩摩焼	壺	胴		no.4 トレンチ
-	薩摩焼	不明	胴		no.2 トレンチ B-1.2 I層
-	薩摩焼	不明	胴		no.3 トレンチ II層
-		皿	口	内湾	no.2 トレンチ B-2 I層
-		皿	胴	三島手	グリッド不明 II層

図2は碗の底部で、底径4cmを測る。乳白色で貫入が顕著で、内底に文様の痕跡が見られる。外底も総釉で、高台の境は丸くなることから型成形と思われる。形状や釉から京焼系と考えられる。

<参考文献>

金城亀信・城間肇「首里城跡一京の内跡発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書』第132集 沖縄県教育委員会 1998年



第30図・図版28 本土産陶器

第9節 本土産磁器（第31図）

本土産磁器の器種と出土数は、碗41点、小碗38点、皿14点、急須6点、湯飲2点、瓶1点、猪口・杯2点、器種不明7点の総数111点の出土である。

何れも近世から現代のもので、肥前・瀬戸・美濃と見られるものがあり、戦時統制下のものも得られた。これらに見られる施文方法には、型紙摺り・銅版転写・ゴム版・吹付けは碗・小碗・皿で見られ、陽刻は碗と杯にみられる。飛鉤は小碗に、手描きは皿と急須に前者は肥前、後者は近代のコバルト釉で施文されるものである。

第18表に出土量、第31図に主な器種と特徴的なもの、その観察表を第19表に示し、以下集計表で示したのものも含めて略述する。

（1）碗

碗には口径約12cm、13.6cm、14cm、底径約3cmや約5cm、器高約5cm、約6cmのものが見られ、型紙摺りが施されるものは、いずれも口縁形態が外反し、口唇部が舌状を呈し外底が深いもの（第31図4）、口唇部が略「コ」字状を呈し外底が浅いもの（第31図3）、口唇部が逆「U」字状を呈するもの（第31図2）が見られる。

高台脇から逆「ハ」字状で僅かに膨らみながら直線的に口縁部に至るものに、銅版転写や吹付け、緑釉、サビ釉が施される戦時統制下のものがあり、型紙摺りが施されるものに類する器形に口縁部にサビ釉と圏線が施されるもの（第31図1）や、吹付けと陽刻が施されるクロム青磁がある。

（2）小碗

小碗は口径約8.3～9.5cm、底径3cm前後、器高4.1cmや5.7cmが見られ、口縁形態が直口と外反があり、前者には腰部から直線的に立ち上がり僅かに開くもの（第31図6、9）、緩やかに膨らみながら口縁部に至るもの（第31図7）がある。

高台脇から口縁部にかけて型紙摺りや銅版転写、ゴム版による施文が比較的多く、口縁部下に圏線のみもの（第31図9）、胴部に加え高台外面に施文し外底に文字を有するもの（第31図10）などがあり、いずれも内面は無文と見られる。口縁形態が外反する（第31図8）は、胴部外面と内底中央に施文される。

（3）皿

皿は、口縁形態が直口するもの（第31図12）で、底径で見ると中皿や大皿と考えられる5.4cmから15.6cmのものが見られる。

（4）急須

急須は口縁部が合口となり、肩部が屈曲し胴部が僅かに膨らむもので肩部付近に耳を有するものである（第31図18）。

（5）湯飲

湯飲は、腰部で膨らみ口縁部へ直線的に立ち上がる口縁形態が直口する筒型のものである（第31図16）。

（6）杯

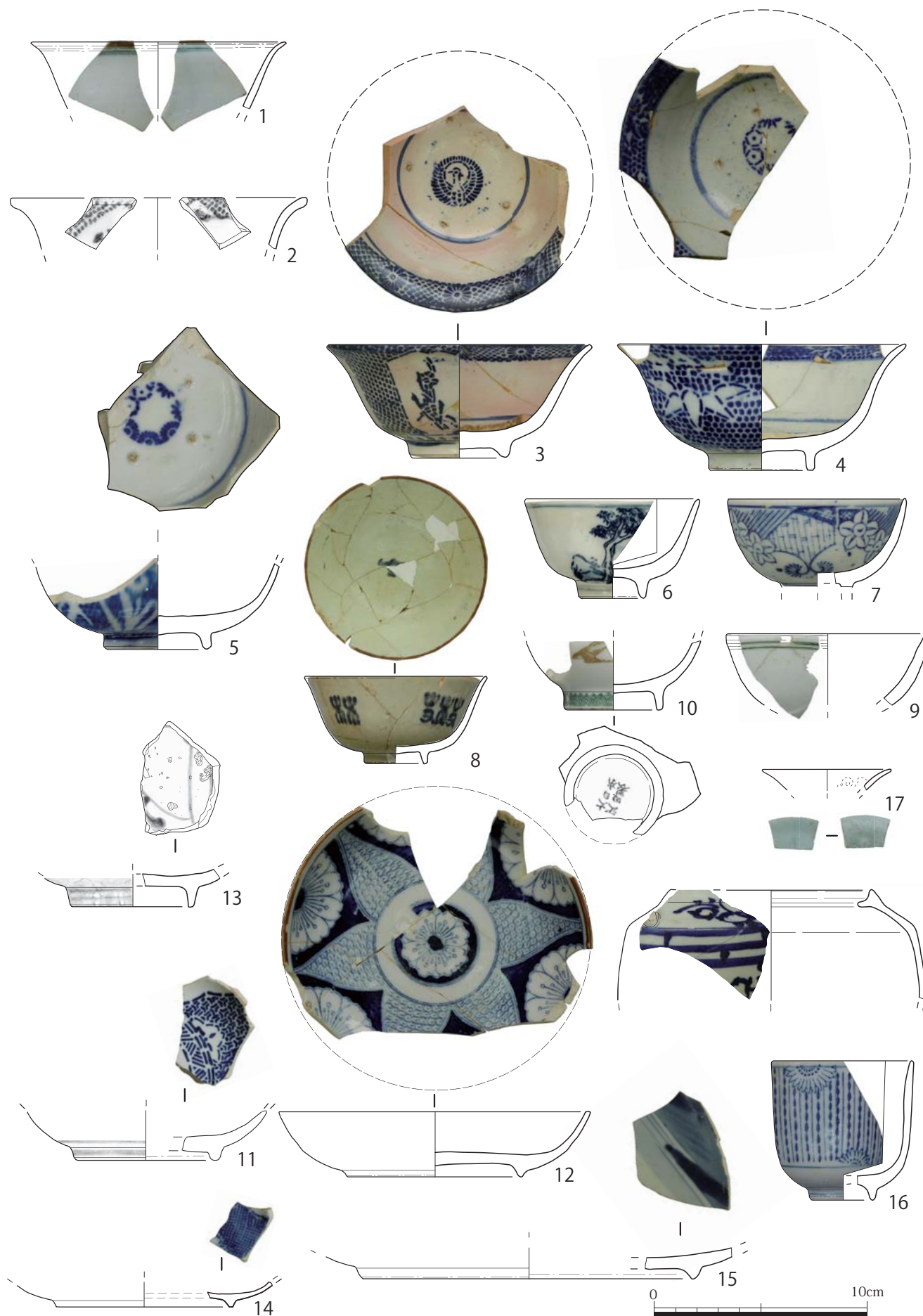
杯は口縁形態が逆「ハ」字状に開くものである。内面に陽刻の文様がある（第31図17）。

（7）器種不明

型紙摺りが施される胴部小破片や湾曲の強い小破片である。

第19表 本土産磁器観察一覧

第 図 版	番 号	器 種	部 位	形 態	種 類	口径 底器高 (cm)	重 量 (g)	観 察 事 項	出 土 地
第 31 図	1	碗	口	外反		12.0 — —	5.45	文様は口唇部にサビ釉、口縁下の内外面に各1条の圏線。	no.2 トレンチ B-1 IV層
	2		口	外反	型紙	14.0 — —	4.54	外面の地紋は丸文、菱形の窓中央に施文。内面は口縁部下に1条の圏線、地紋の丸文を鋸歯状に配する。	no.3 トレンチ C-3 I層
	3		口 底	外反	型紙	12.2 4.8 5.3	117.51	外面の地紋は菱形文、破線で略羽子板状の窓を2対1組、其々に吉祥文字と花文を施し3ヶ所に配し、高台脇に1条の破線の圏線と蓮弁状文。高台外面3ヶ所に太線。口縁部内面に地紋の菱形文・菊花文、圏線1条。内底中央に鶴丸文、内底際に1条の圏線、目痕5カ所。畳付けは露胎、摩滅(研磨?)。内外面で部分的に淡赤色を呈する焼成不良。	不明
	4		口 底	外反	型紙	13.6 4.7 5.95	89.72	外面の地紋は丸文、竹と花、高台脇に破線の圏線を1条・蓮弁状文、高台は無文。口縁部内面に地紋の丸文・草文、圏線1条。内底中央に花文?、内底際に1条の圏線を廻す。畳付けは露胎、摩滅(研磨?)する。目痕2カ所。	no.4 トレンチ C-2 IV層
	5	小碗	底	—	型紙	— 5.0 —	77.14	外面の文様は地紋は丸文、草花文、高台脇に1条の破線の圏線・蓮弁状文、下位に1条の圏線を廻す。内底中央に花文?、内底際に1条の圏線、目痕3ヶ所。畳付け露胎。	no.3 トレンチ II層 (東側端部掘り下げ時黄褐色砂質土)
	6		口 底	直口	ゴム印? ?	8.3 3.4 5.7	54.64	外面の文様は、胴部に山水文。高台外面、高台脇、口縁部に各1条の圏線、口縁部の圏線は途切れる。畳付け露胎、外底は無文。内面に文様は見られない。	no.3 トレンチ D-3 V層
	7		口	直口	型紙	8.4 — —	37.51	外面の文様は高台脇と口縁直下に1条の圏線を廻し、2輪1組の花文の間を斜めの交差に区画し、斜位の細線と太線組合せ、格子文と花、竹を草文で区画。型紙境目2カ所あり重複ズレ有り。内面に文様は見られない。	no.4 トレンチ II層 (黄砂質土)
	8		口 底	外反		8.6 2.8 4.1	74.05	外面の文様は、2種類の文字?を2対1組で2ヶ所に配し、見込み中央に文字?を配する。口唇部にはサビ釉。畳付けは露胎。	no.2 トレンチ C-2 I層
	9	皿	口	直口		9.5 — —	9.72	外面の文様は、口縁部下に濃緑色の圏線を2条廻す。	no.2 トレンチ B-2 II層
	10		底	—	銅版転写	— 4.6 —	29.15	外面の文様は、体部に燕と小枝、高台外面に蓮弁文。外底の銘款は「大日本沢田製」、燕は褐色、その他は濃緑色。畳付けは露胎。	no.1 トレンチ I層 (傾斜部)
	11		底	—	型紙	— 6.8 —	16.33	外面の文様は、に高台外面と腰部に各1条の圏線。内面は地紋の禪文、梅花文、畳付けは施釉され、高台内中位から外底は露胎。	no.2 トレンチ B-1 I層
	12		口 底	直口	銅版転写	14.4 8.2 3.1	89.78	外面は無文、口唇部にサビ釉、内面は内底向きの蓮弁状の区画内と見込み中央の円の中に梅花文、界線の間は塗りつぶす。蓮弁状の区画の間は渦巻き状の文様を密に配す。	no.3 トレンチ C-3 I層
	13	急須	底	—	型紙	— 5.4 —	20.45	外面の文様は、高台外面に2条の圏線を具須で施し、内底に細線の施文・目砂付着。畳付けは露胎。肥前産。	no.1 トレンチ III層 (西壁III層下部)
	14		底	—	型紙	— 8.4 —	3.23	文様は内面のみ、他の文様間に点文を密に施す。畳付けは露胎。器厚は約0.2cm、底厚約0.3cm。	no.2 トレンチ D-2 I層
	15		皿 (大皿)	底	—		— 15.6 —	24.27	外面に文様は見られず、内面に山水文、畳付けは露胎。
	16	湯飲	口 底	直口	型紙	6.6 2.8 6.6	35.3	外面の文様は口縁、腰部、高台脇、高台外面に各1条の圏線を廻し、簾状の文様に菊花文を上下の文様が交互になる位置で上下に等間隔で4ヶ所に配す。畳付け露胎、外底は無文。内面に文様は見られない。	no.3 トレンチ D-3 V層
	17	杯	口	外反	陽刻	6.0 — —	1.37	外面に文様は見られず、内面胴部に花卉状の陽刻が施される。	no.1 トレンチ C-4 III層
	18	急須	口		手描き	9.6 — —	16.23	外面の文様は、肩部に太い圏線を3条廻し、各圏線間の空白部に丸文を等間隔に配し、肩部から口縁部と胴部に、花文を施す。合い口部は露胎。器厚は2.6mm。	no.1 トレンチ I層 (客土及び赤褐色土)



第31図 本土産磁器

第10節 沖縄産施釉陶器（第32・33図）

沖縄産施釉陶器は、碗200点、小碗12点、皿2点、鉢22点、急須21点、鍋5点、蓋4点、瓶12点、瓶or壺11点、壺9点、油壺4点、酒器2点、香炉1点、火取2点、厨子甕1点、不明13点が出土した。

出土地を見ると、no.1トレンチから29点、no.2トレンチから126点、no.3・4トレンチから125点、C-3グリッドから13点、C-4グリッドから9点、D-3グリッドから39点、D-4グリッドから11点、出土地不明から41点得られた。

器種では、碗が全体の約63%を占め、他を圧倒している。出土地では、no.2トレンチから126点と全体の約39%を占め、かつI層からは108点出土している。この事は、no.2トレンチに井戸（チンガー）が確認されている事から、戦前までno.2トレンチ周辺に居住空間が機能していた事が推察できるものと考えられる。

以下、各器種毎に略述する。なお、各トレンチ、グリッド等からの出土状況は第20表にて、実測対象遺物に関する観察一覧は第21表に、実測図は第32・33図に、写真資料は図版29と30に示す。

（1）碗

第32図1～12に図示した。図1～3は灰釉碗である。底部から直線的に口縁部へ移行するのが特徴的である。図4～7は口縁部片である。図4は鉄釉による草花文を施文後、透明釉を施す。図5は呉須による圏線を施す。図6は白化粧後透明釉を施す。内外面には呉須による草花文を施す。図7は内外面に鉄釉を施す。図8・9・12は底部資料である。図8は白化粧後透明釉を施す。図9は内外面とも鉄釉を施す。図12は高台を欠く底部片で、見込みに鉄釉による丸文が見られる。図10・11は白化粧後透明釉を施す。図11は二彩による花卉文を描く。イッチンによる技法が見られる。

（2）小碗

第32図13・14は小碗である。図13は外面に鉄釉を、内面に白化粧後透明釉を施す掛分けを行っている。図14は外器面を面取りしている。

（3）鉢

第33図15・16はいわゆるワンプーと呼ばれる鉢である。図15は口縁部が逆「L」字状に折れ曲がる。図16は口縁部が欠損しているが、図15と同様な口縁形態になるものと考えられる。両資料とも外面は黒色の釉を、内器面は白化粧後透明釉を施す掛分けを行っている。畳付は無釉である。

（4）瓶

第33図17～20に図示した。図17は器壁が厚く肩の張る胴部資料で、外面に鉄釉を施す。内面は無釉である。図18は胴部資料で外面に鉄釉を施す。内面は無釉である。図19は底部資料である。高台脇まで透明釉を施す。図20は底部資料で外器面に黒色釉を施す。

（5）壺

第33図21～24に図示した。図21は撫肩の肩部を持つ資料。内外面とも白化粧後透明釉を施す。図22は壺の底部資料。内外面とも茶色釉が掛かる。図23・24は、いわゆるアンダガーミと呼ばれる油壺の底部である。図23は内面無釉で外面に黒色釉を施す。図24は内外面とも黒色釉が施される。

（6）蓋

第33図25・26に図示した。図25は撮みを持たない資料で、全面に白化粧を施すが、透明釉は頂部から罅まで施されている。図26は油壺の蓋である。撮み部分は欠損している。茶褐色の釉を罅まで施釉し、頂部付近は蛇の目釉剥ぎを行っている。

（7）酒器

第33図27に図示した。いわゆる「カラカラ」と呼ばれる酒器である。外面は白化粧後、透明釉を施

している。文様は、線彫りによる施文後、呉須と飴釉を施している。

(8) 急須

第33図28～31に図示した。図28は外面に鉄釉を施す。内面は無釉であるが、口縁付近は釉が掛かっていた後剥ぎ取りを行った様子が窺える。図29は内外面とも白化粧を行うが、外面は飴釉を、内面は透明釉を施す。外反する口縁部分は釉剥ぎを行っている。図30は注口を欠く胴部資料である。内外面とも鉄釉を施すが、内面は肩部付近までの施釉となっている。図31は精練された素地を持つ底部資料である。外底は碁笥底状に近く、中央部は円形に削りが入る。内外面とも透明釉が施される。

(9) 香炉

第33図32に図示した。香炉の出土は、本底部資料のみである。外面は腰部分まで灰色釉を施し、高台及び内面は無釉となる。

(10) 鍋

第33図33に図示した。円錐状の脚を持つ丸底の底部資料である。外底は使用により煤が付着している。

第20表 沖縄産施釉陶器出土量

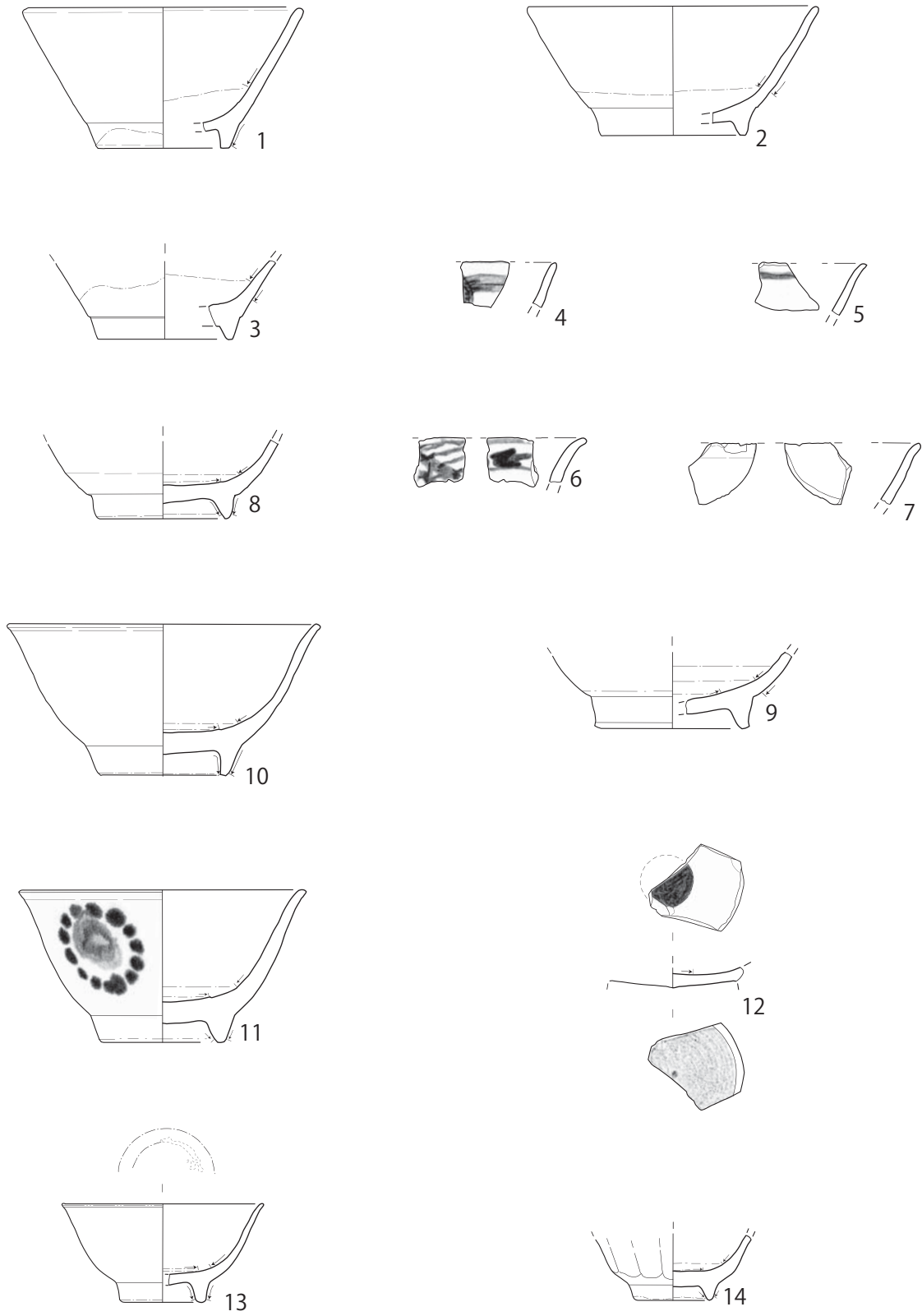
器種	出土地	碗			小碗			皿		鉢			鍋			急須			蓋		瓶				瓶or壺	壺		油壺		火取	香炉	酒器	厨子甕	器種不明	合計
		口底	口	胴底	口	胴底	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口			
no.1	C-4	I	1	1																													2		
		II																															2		
		III			1		1																										2		
		IV																															3		
	D-4	I		1	1																												5		
		III																															2		
		IV																															1		
	—	V		1		1																											3		
		I			1																												4		
		II		1	1	1																											3		
	no.2	B-1	IV																														2		
			I	1	8	13	4	1	1																								56		
II				4	2																												7		
B-1.2		IV			1																												1		
		I		2	3																												7		
B-2		I		10	8	5																											36		
		II		2	3	1																											11		
no.3.4		C-2	I		1	3	1																											5	
			III		2	2	1																											7	
			IV		2																													2	
		C-3	I			3		1																										4	
			II																															2	
	III																																2		
	IV					1	1																										5		
	D-2	II																															3		
		I		2	1																												3		
		II		3	3	3		1		1																							15		
		IV		6	2	2																											12		
		V		1	3	5																											9		
—	I		1	2	2																											6			
	II		1	13	13	4	1	2																								27			
	V		1	1																												3			
不明		1	8	18	2			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	41				
合計		5	73	89	33	2	8	2	1	1	11	8	3	4	1	5	14	2	1	3	2	7	3	11	6	3	2	2	2	1	2	1	13	321	
			200			12		2			22		5		21		4		12		11		9		4		2	1	2	1	13	321			

<参考文献>

佐々木 達夫『日本史小百科 29 陶磁』近藤出版社 1991年
 島 弘ほか『壺屋古窯群Ⅲ』—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査— 那覇市文化財調査報告書 第38集 1997年
 照屋 善義『沖縄の陶器 技術と科学』平山印刷 with なんくるプロ 2000年
 中村 愿・東門 研治ほか『伊礼原 B 遺跡・伊礼原 E 遺跡』—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成10～14年度)— 北谷町文化財調査報告書 第27集 2008年

第21表 沖繩産施釉陶器観察一覧

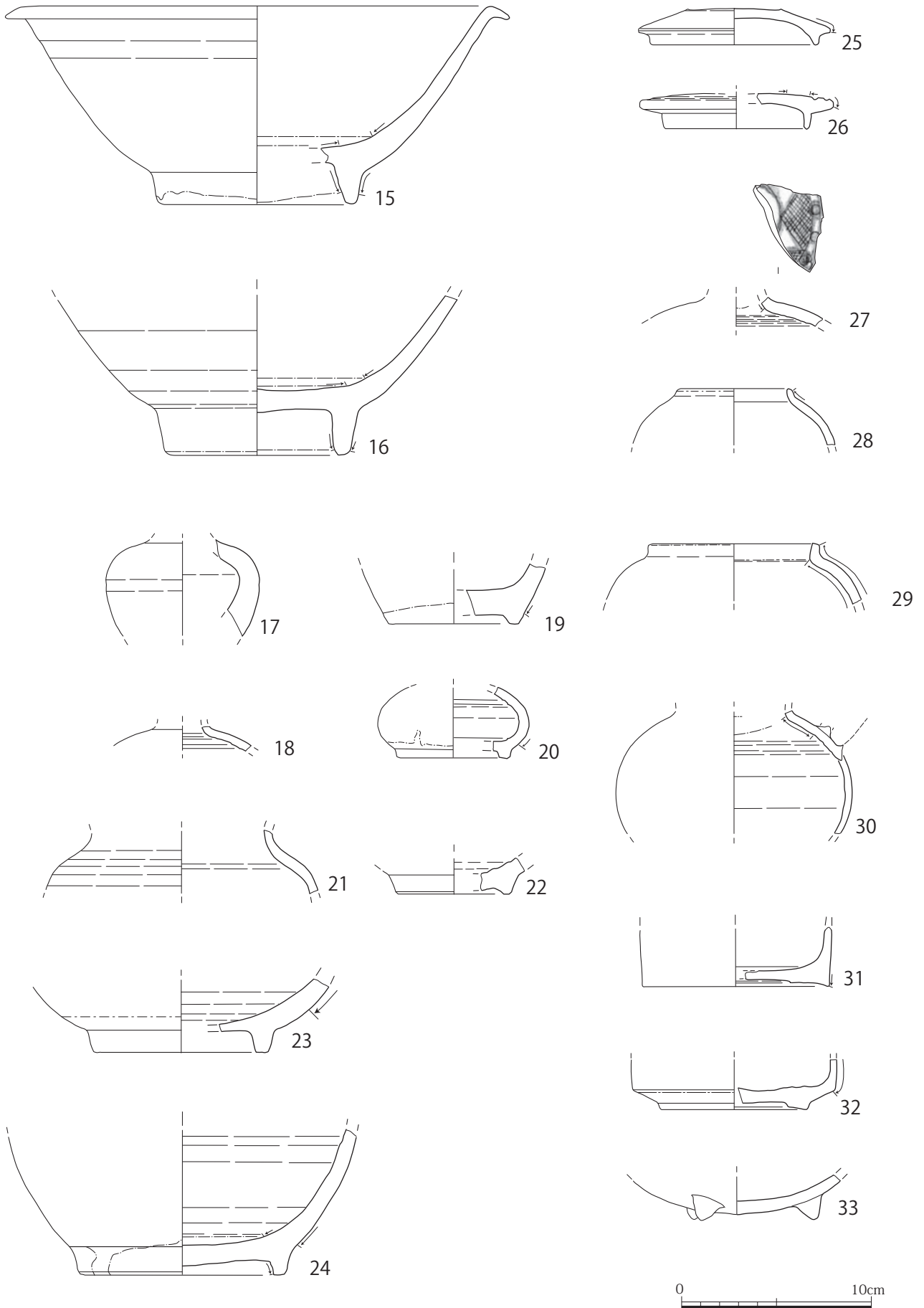
第図版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	観察事項	出土地
第32図・図版29	1	碗	口縁部 ～底部	12.7cm 6.1cm 6.5cm	形状：高台脇から直線的に口縁部へ立ち上がる直口碗。素地：淡黄色。釉色：内外面-灰釉。外底：高台際に削り有。畳付無釉。フィガキーによる釉掛け。	no.4トレンチ 不明 II層
	2	碗	口縁部 ～底部	13.5cm 6.6cm 5.9cm	形状：高台脇から直線的に口縁部へ立ち上がる直口碗。素地：淡褐色。釉色：内外面-灰釉。外底：高台際に明瞭な削り有。畳付無釉。フィガキーによる釉掛け。	no.2トレンチ B-1 I層
	3	碗	底部	6.2cm —	形状：高台脇から直線的に立ち上がる。素地：灰黒色。釉色：内外面-黒釉。内底：見込は平坦を呈す。外底：高台際に明瞭な削り有。フィガキーによる釉掛け。	no.1トレンチ 不明 IV層
	4	碗	口縁部	—	形状：直口。素地：灰色。釉色：内外面-透明釉。文様：鉄釉による草花文か。	no.3・4トレンチ C-2 III層
	5	碗	口縁部	—	形状：外反。素地：灰色。釉色：内外面-透明釉。文様：呉須による一条の圈線。	no.3トレンチ 不明 II層
	6	碗	口縁部	—	形状：外反。素地：淡黄色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。文様：呉須による草花文を内外面に施す。	no.3・4トレンチ D-3 IV層
	7	碗	口縁部	—	形状：僅かに外反する。素地：茶褐色。釉色：内外面-鉄釉か。焼成時に釉表面がアバタ状になっている。	no.3トレンチ (接合) D-3 I層+不明 II層
	8	碗	底部	5.9cm —	形状：腰は張らない。高台際に抉り有。素地：乳白色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	no.4トレンチ D-2 II層
	9	碗	底部	7.1cm —	形状：腰は張らない。高台際に抉り有。素地：褐色。釉色：内外面-鉄釉。内底：蛇の目釉剥。外底：高台脇から高台内まで無釉。	no.2トレンチ B-2 II層
	10	碗	口縁部 ～底部	14.3cm 5.7cm 7.1cm	形状：僅かに腰が張り外反する。素地：乳白色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	不明
	11	碗	口縁部 ～底部	13.1cm 5.5cm 7.0cm	形状：僅かに腰が張り外反する。素地：乳白色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。文様：二彩による花卉文。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	no.1トレンチ C-4 I層
	12	碗	底部	5.8cm(内径) —	形状：高台を欠く碗の底部。素地：乳白色。釉色：外面-無釉。内面-無釉。文様：見込に鉄釉による丸文を施す(蛇の目釉剥の可能性有)。外底：削りの痕が残る。	no.2トレンチ B-1 I層
	13	小碗	口縁部 ～底部	9.3cm 3.6cm 4.6cm	形状：やや腰が張り外反する小碗。素地：灰色。釉色：外面-鉄釉。内面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	no.4トレンチ 不明 II層
	14	小碗	底部	3.5cm —	形状：腰折れの小碗。外器面を面取りしている。素地：灰色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：逆三角形の高台で畳付は無釉。	no.1トレンチ D-4 III層
第33図・図版30	15	鉢	口縁部 ～底部	24.4cm 4.9cm 10.5cm	形状：腰は張らない。逆さL字状口縁。素地：乳白色。釉色：外面-黒色。内面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	no.1トレンチ D-4 III層
	16	鉢	底部	9.1cm —	形状：腰は張らない。素地：褐色。釉色：外面-黒色。内面-白化粧後透明釉。内底：蛇の目釉剥、熔着痕有。外底：畳付無釉、白化粧のみ。	no.1トレンチ C-4 II層
	17	瓶	胴部	— 8.1cm(胴径)	形状：肩の張る瓶。素地：淡黄色。釉色：外面-黒色。内面-無釉。	no.2トレンチ 不明 I層
	18	瓶	胴部	—	形状：肩～胴部。素地：灰色。釉色：外面-鉄釉。内面-無釉。	no.2トレンチ B-1 I層
	19	瓶	底部	6.8cm —	形状：高台脇の立上がりがつい。素地：淡黄色。釉色：外面-透明釉。内面-無釉。内底：削り痕有。外底-高台脇から高台内まで無釉。	no.2トレンチ B-1 I層
	20	瓶	底部	6.0cm 8.0cm(胴径)	形状：胴部の張る小瓶。素地：灰色。釉色：外面-黒釉。内面-無釉。外底：高台脇から高台内は無釉。内器面に削りの痕が明瞭に残る。	no.2トレンチ B-2 II層
	21	壺	胴部	—	形状：頸部から胴部片。肩は撫肩状。素地：乳白色。釉色：内外面-白化粧後透明釉。	no.2トレンチ B-1 II層
	22	壺	底部	5.9cm —	形状：台形状の高台を呈する壺底部小片。素地：褐色。釉色：内外面-茶色。外面は僅かに釉グレが確認できる。内底：削りの痕が明瞭に残る。外底：高台脇から高台内まで無釉。	no.1トレンチ D-4 I層
	23	油壺	底部	9.4cm —	形状：方形の畳付を呈し、やや腰が張る。素地：褐色。釉色：外面-黒色。内面-無釉。外底：高台脇から高台内は無釉。高台内の削りが深く、底壁が薄い。	不明
	24	油壺	底部	10.8cm —	形状：方形の畳付を呈し、腰は張らず胴部へ移行。素地：灰色。釉色：内外面-黒色。内底：見込は釉が掛からず、露胎部分が不規則に残る。外底：高台脇から畳付は無釉。	no.1トレンチ C-4
	25	蓋	口縁部	10.1cm 8.6cm —	形状：饅頭タイプでも高台タイプでもない。鑊及びかえりは短い。素地：淡黄色。釉色：全面白化粧を施すが、頂部から鑊までは透明釉を施す。	no.3・4トレンチ C-2 III層
	26	蓋	口縁部 ～底部	13.1cm 7.6cm —	形状：摘み部分が欠損しているため、摘みの有無及び形状は不明。鑊上部に抉りを二条施す。素地：褐色。釉色：頂部から鑊先まで施釉後、蛇の目釉剥。	no.2トレンチ B-2 I層
	27	酒器	胴部	—	形状：通称カラカラの肩～胴部。素地：灰色。釉色：外面-白化粧後透明釉。内面-灰釉。文様：線彫り。二条の圈線間を鋸歯状文で充填(呉須)。下部に丸文(鉛釉)。	no.1トレンチ B-2 I層
	28	急須	口縁部	5.8cm —	形状：内湾する口縁部から撫肩の肩部へ移行。素地：灰色。釉色：外面-鉄釉。内面-口縁付近鉄釉を施釉後、釉剥。	no.2トレンチ B-1 I層
	29	急須	口縁部	8.4cm —	形状：方形で外反する口縁部から弱い肩をもち胴部へ移行。素地：淡黄色。釉色：外面-白化粧後鉛釉。内面-白化粧後透明釉。口唇部と口縁内面は釉剥を行っている。	no.4トレンチ 不明 II層
	30	急須	胴部	— 12.5cm(胴径)	形状：注口を欠く急須胴部。球状を呈する。素地：淡灰色。釉色：内外面-鉄釉。内面は肩部付近までの施釉。	no.2トレンチ B-2 II層
	31	急須	底部	9.9cm —	形状：弱い基筒底状の底部から直立する。素地：白色。釉色：内外面-透明釉。内底：一条の沈圈線を施す。外底：無釉。中央部を薄く削っている。	no.2トレンチ B-1 I層
	32	香炉	底部	7.6cm 10.6cm(胴径)	形状：腰は直角に曲がり胴部へ移行。素地：淡黄色。釉色：外面-灰色。内面-無釉。内底：見込に削りの痕が残る、中央部がやや盛り上がる。外底：腰から高台内まで無釉。	no.3・4トレンチ C-2 III層
	33	鍋	底部 三脚	—	形状：円錐状の脚を持つ鍋の底部。三脚になると考えられる。素地：灰色。釉色：内外面-茶色。内底：丸底を呈す。外底：使用による煤が付着。渦状の成形痕が確認できる。	no.2トレンチ B-1 I層



第 32 図 沖縄産施釉陶器 1 (碗・小碗)



図版 29 沖縄産施釉陶器 1 (碗・小碗)



第33図 沖縄産施釉陶器2 (鉢・瓶・壺・急須・他)



図版 30 沖縄産施釉陶器 2 (鉢・瓶・壺・急須・他)

第 11 節 沖縄産無釉陶器 (第 34・35 図)

沖縄産無釉陶器は、354 点出土した。器種毎の内訳は、碗 1 点、皿 2 点、鉢 40 点、瓶 13 点、壺 168 点、甕 2 点、蓋 2 点、火炉 1 点、不明 125 点であった。

出土地を見ると、no.1 トレンチから 24 点、no.2 トレンチから 184 点、no. 3・4 トレンチから 105 点、出土地が不明なのは 41 点であった。

器種では、壺が 168 点出土し全体の約 46% を占めている。出土地では no.2 トレンチから 184 点出土し、約 52% と全体のほぼ半数を占めている。また、no.2 トレンチの I 層から 164 点出土している事は注目に値する。

以下、器種毎に略述する。なお、各トレンチ、グリッド等からの出土状況は第 22 表にて、実測対象遺物に関する観察一覧は第 23 表に、実測図は第 34 図と第 35 図に、写真資料は図版 31 と 32 に示す。

(1) 碗

第 34 図 1 は外傾する直口碗の口縁部である。

(2) 皿

第 34 図 2 は皿の底部である。底径が小さい為、小皿になるものと考えられる。

(3) 鉢

第 34 図 3～7 は播鉢、図 8～10 は鉢である。3 は播鉢と思われる口縁部で、「く」の字状に屈曲する。図 4・5 は口縁部で、図 6・7 は底部である。図 5・6 は櫛目が細かく、図 4・7 は櫛目が粗い。図 8・9 は水鉢の口縁部で内彎し、胴部に波状文を施す。図 10 は鉢の胴部で、縄目突帯を貼付する。

(4) 瓶

第 34 図 11～13 は、瓶である。全て肩部から胴部にかけての資料である。全資料に共通して、胴上部に沈圈線を数条施す。

(5) 壺

第 34 図 14・15、第 35 図 16～26 は壺である。第 34 図 14、第 35 図 16～18 は口縁部資料である。第 34 図 14 は外反する。第 35 図 16・17 は、「L」字状口縁を呈し、第 35 図 18 は玉縁状を呈する。第 35 図 19・20 は胴部資料で、図 19 は、

撫肩の肩部から緩やかに胴部へ移行する。第 34 図 15、第 35 図 21～26 は底部資料である。内彎しながら胴部へ移行するもの (第 34 図 14、第 35 図 21・22) と、外傾直立しながら胴部へ移行するもの (第 35 図 23～26) とに大きく分けることができる。

(6) 蓋

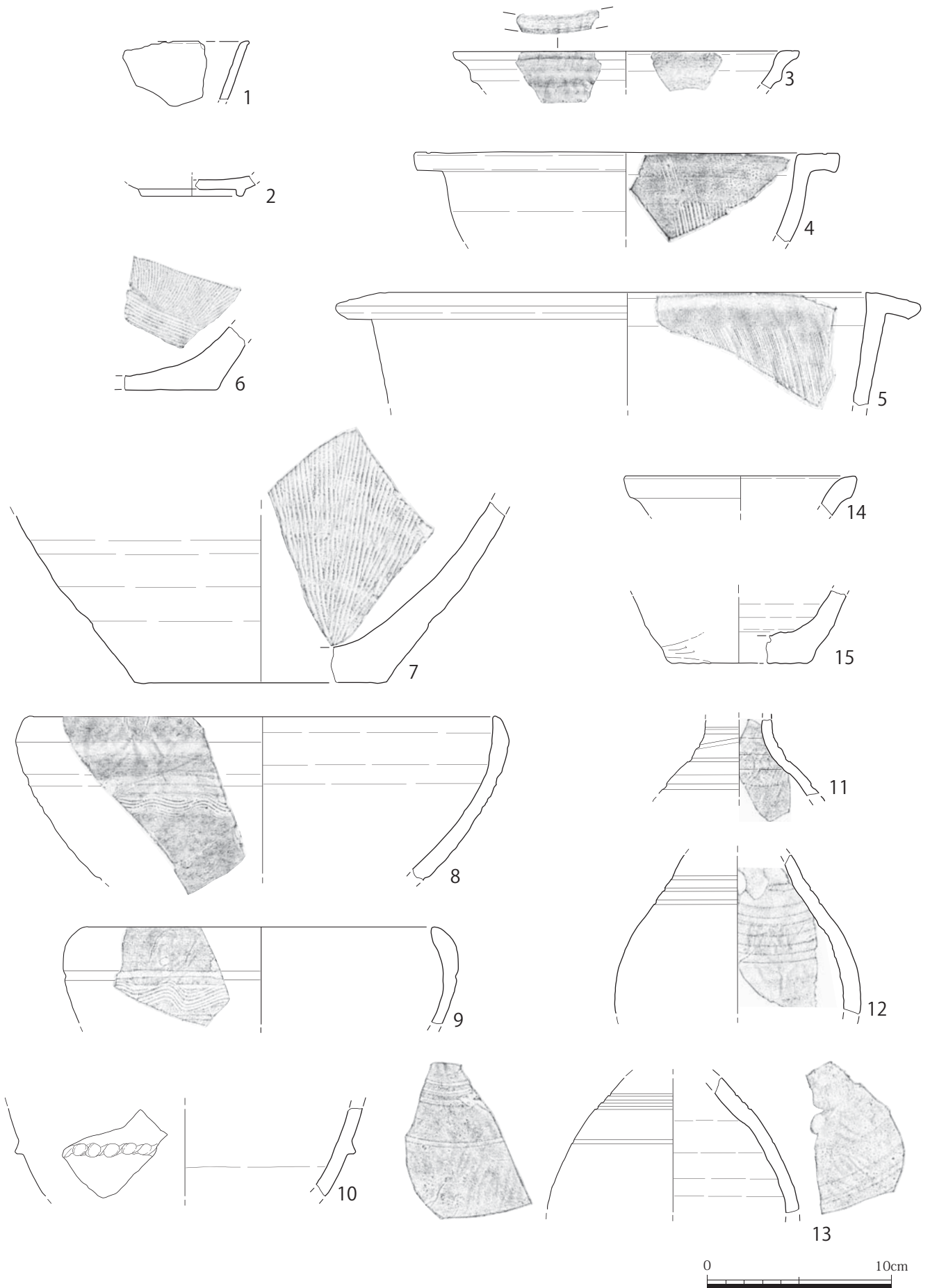
第 35 図 27 は蓋である。大きさから、厨子甕の蓋と考えられる。

第 22 表 沖縄産無釉陶器出土量

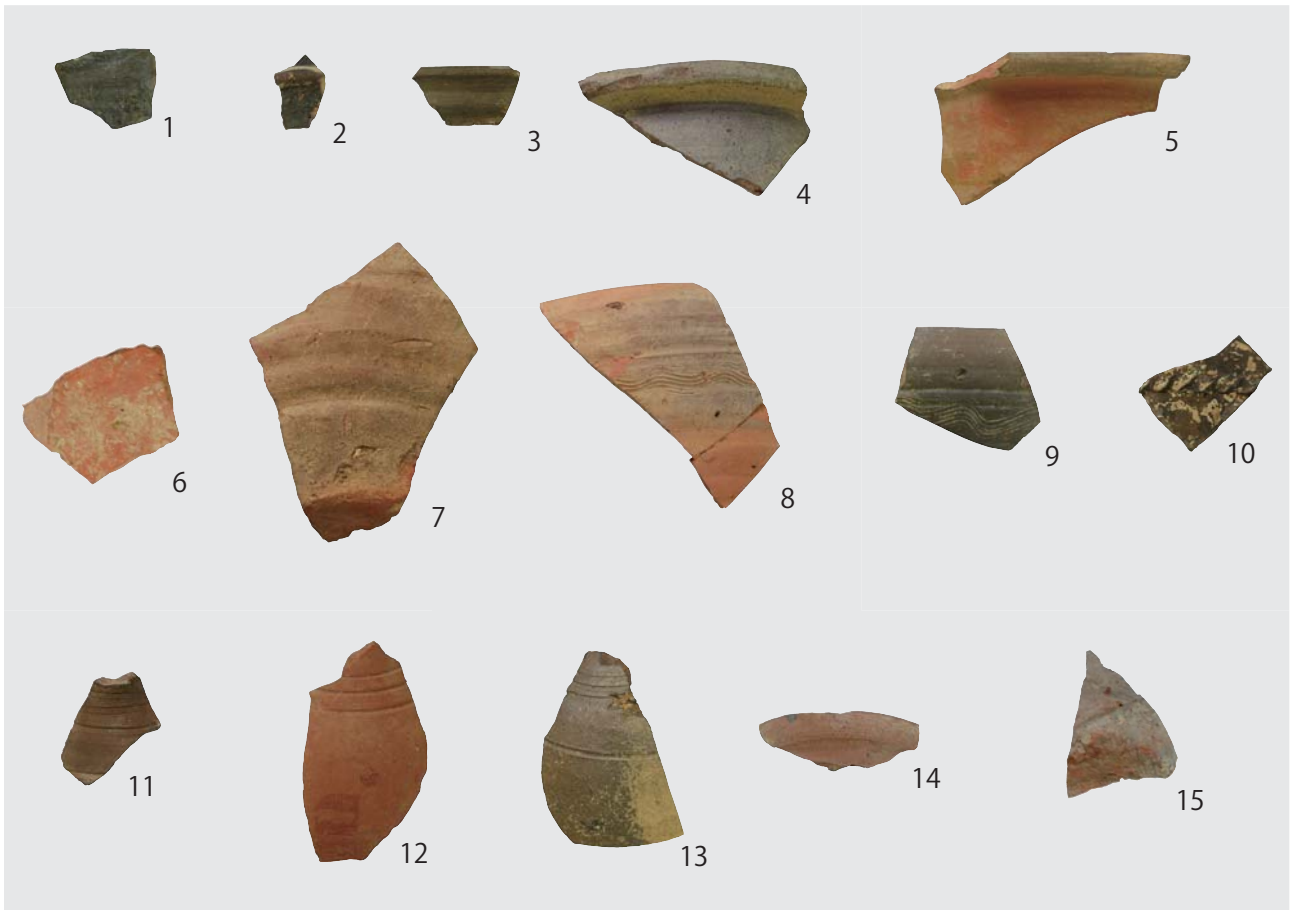
出土地	器種	碗		皿		水瓶		蓋		壺				鉢				甕		火炉		不明		小計	トレンチ別計	
		口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	不明	口	底	不明	口	底	不明	口	底	不明	口				
no.1	AB-4	不明								1													1	24		
	C-4	不明													1							4	5			
	D-4	I																					2		3	
		II									1												1		2	
		III																					1		1	
		IV																					1		1	
	不明																					1	2			
C-D-4	I								1												1	1				
—	I								4												1	6				
no.2	不明																					1	1			
	B-1	I	1					4	1	3	36			5	2					1	22	3	78			
	B-1.2	I									1											2	7			
		II									1	8										1	11			
	B-2	I																				0	0			
	B-3	I																					27	58		
		II									1	3	14	3	6								1	1		
	C-2	I																				2	4			
	D-2	I																					5	5		
		II																					1	1		
—	I																					6	4			
no.3.4	C-2	IV																				1	2			
	D-2	I																				2	3			
		II																				3	3			
	C-3	I																					6	9		
II																						1	8			
III																						2	3			
D-3	IV																					2	2			
	I	I																				1	11			
		II																				1	3			
	不明																					1	2			
—	I																					1	4			
	II																					18	46			
不明																						1	2			
合計		1	1	1	2	1	10	2	10	134	16	6	8	4	4	6	9	1	2	4	1	119	1	5	2	354

第23表 沖縄産無釉陶器観察一覧

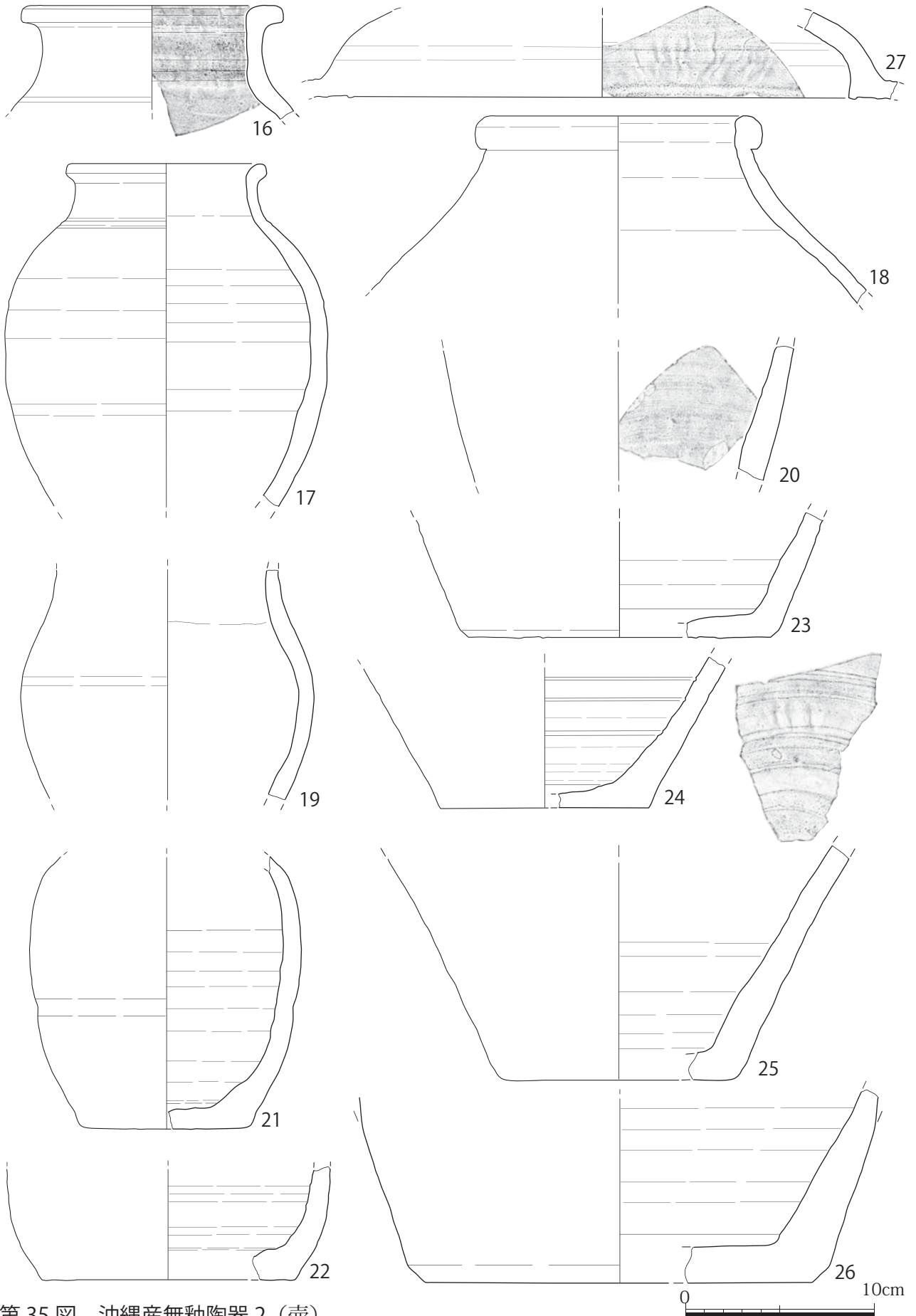
第図 図版	番号	器種	部位	口径 底径 (cm)	観 察 事 項	出土地
第34 図版 31	1	碗	口縁部	—	形状：外傾する直口口縁。素地：灰褐色。器面：内外面-暗灰褐色。焼成：良好。混和材：1mm程の白色粒を多く含む。外器面に自然釉が僅かに確認できる。内器面には泥漿(?)の釉ダレが見られる。	no.2トレンチ B-1 I層
	2	皿	底部	5.6	形状：高台の低い皿の底部片。素地：褐色。器面：内外面-泥釉。焼成：良好。外底：畳付は弱い釉剥。	不明 I層
	3	播鉢	口縁部	18.8	形状：くの字状に折れ曲がる平口縁。素地：灰色。器面：内外面-灰褐色。外器面に僅少の自然釉が掛かる。焼成：良好。混和材：白色粒。	no.4トレンチ II層
	4	播鉢	口縁部	22.4	形状：L字状の平口縁。素地：褐色。器面：内外面-褐色。焼成：良好。混和材：白色、黒色粒。文様：口縁上部平坦面に沈圈線を施す。内器面の櫛目は粗い。	不明
	5	播鉢	口縁部	25.8	形状：L字状の平口縁。口縁端部はやや下がる。素地：明褐色。器面：内外面-明褐色。焼成：良好。混和材：黒色粒。文様：内器面の櫛目は細かく密に施されている。	no.2トレンチ B-1 II層
	6	播鉢	底部	—	形状：底部から直線的に胴部へ立ち上がる。素地：明褐色。器面：内外面-明褐色。焼成：良好。混和材：白色、黒色粒。文様：見込までの櫛目は細かく、その後粗い櫛目で仕上げている。使用により磨滅している。	不明 I層
	7	播鉢	底部	13.6	形状：底部から直線的に胴部へ立ち上がる。素地：明褐色。器面：内外面-褐色。焼成：良好。混和材：白色、赤色粒。文様：内器面の櫛目は粗く、使用による磨滅が確認できる。	no.2トレンチ B-2 II層
	8	水鉢	口縁部	25.0	形状：緩い内彎口縁。素地：褐色。器面：内外面-褐色。焼成：良好。混和材：3mm程の茶色粒。文様：外器面に波状文。	no.3トレンチ D-3 II層
	9	水鉢	口縁部	19.0	形状：内彎口縁。小ぶりの水鉢。素地：褐色。器面：内外面-黒褐色。焼成：良好。混和材：僅かに白色粒。文様：外器面に波状文。	D-4 III層
	10	鉢	胴部	—	形状：緩い弧状を呈する胴部片。素地：暗茶褐色。器面：内外面-暗褐色。石灰の付着が著しい。外器面には自然釉が掛かる。焼成：良好。混和材：赤色、白色粒。文様：一条の縄目突帯を貼付する。	no.2トレンチ B-1 II層
	11	瓶	胴部	—	形状：撫肩の肩部より胴部へ移行する。素地：褐色。器面：外面-茶褐色。内面-褐色。焼成：良好。混和材：赤色粒。文様：外器面肩部に四条の沈圈線を施す。	不明
	12	瓶	胴部	—	形状：撫肩の肩部より胴部が膨らみ移行する。素地：明褐色。器面：内外面-明褐色。焼成：良好。混和材：白色粒。文様：外器面肩部に三条の沈圈線を施す。	no.3トレンチ D-3 I層
	13	瓶	胴部	—	形状：撫肩の肩部より胴部へ移行する。素地：褐色。器面：外面-茶褐色。自然釉が掛かる。内面-黒色。焼成：良好。混和材：白色粒。文様：外器面肩部に三条、胴部に一条の沈圈線を施す。	no.4トレンチ C-3 I層
	14	壺	口縁部	12.6	形状：強く外反する肥厚口縁で断面は三角形。素地：暗褐色。器色：内外面-明褐色。断面観では、黒色地に挟まれたサンドウィッチ状になる。焼成：良。混和材：黒色粒	不明
	15	壺	底部	7.4	形状：底部から胴部へかけ弧状に立ち上がる。素地：明褐色。器色：内外面-淡灰褐色。サンドウィッチ状になる。焼成：良。混和材：白色粒。内底：轆轤痕有。外底：成形痕無く粗雑な作りである。	不明
第35 図版 32	16	壺	口縁部	14.0	形状：L字状の平口縁。肩は張らない様相を呈す。素地：暗褐色。器面：外面-茶褐色。内面-淡茶褐色。焼成：良好。混和材：白色、赤色粒。文様：頸部下部に二条の沈圈線を施す。	no.2トレンチ B-1 I層
	17	壺	口縁部	9.8	形状：L字状の肥厚口縁。頸部は短く、肩が張らず卵状の胴部形状を呈す。素地：暗褐色。器面：外面-茶褐色。口縁部から胴上部にかけて自然釉が部分的に見られる。内面-灰茶褐色。焼成：良。混和材：赤色粒を多く含む。文様：頸部下部に二条の沈圈線を施す。	no.2トレンチ B-2 II層
	18	壺	口縁部	15.4	形状：玉縁状の肥厚口縁、撫肩。素地：褐色。器面：内外面-褐色。焼成：良好。混和材：赤色粒。	no.2トレンチ B-1.2 I層
	19	壺	胴部	—	形状：頸部より緩やかに張る胴部へ移行する。素地：褐色。器面：外面-暗褐色。内面-明黒黄色。焼成：良好。混和材：白色粒。文様：外器面胴部に一条の沈圈線を施す。	no.2トレンチ B-2 II層
	20	壺	胴部	—	形状：底部付近の直線的な胴部資料。素地：褐色。器面：内外面-暗灰色。外器面は自然釉が掛かり、アバタ状になっている。焼成：良好。混和材：白色粒。	不明
	21	壺	底部	9.0	形状：底部から肩部へかけ緩やかな弧状を呈す。素地：暗褐色。器色：外面-暗褐色。内面-暗灰褐色。焼成：良好。混和材：白色、赤色粒、石英。外器面は混和材が剥げ落ち、アバタ状を呈する。内底：轆轤痕有。外底：成形痕見られず雑な作りである。	no.2トレンチ B-2 II層
	22	壺	底部	13.4	形状：底部から胴部へかけ弧状に立ち上がる。素地：淡褐色。器色：内外面-淡褐色。焼成：不良。混和材：黒色粒。内底：轆轤痕有。外底：僅かに指痕が残る。粗雑な作りである。	no.2トレンチ I層
	23	壺	底部	16.0	形状：底部から胴部へかけ直線的に立ち上がる。素地：褐色。器色：外面-暗褐色。内面-褐色。焼成：良好。混和材：2mm程の赤色、黒色粒少量。内底：轆轤痕有。外底：底部端に削り痕有。	no.3トレンチ II層
	24	壺	底部	11.0	形状：底部から胴部へかけ直線的に立ち上がる。素地：褐色。器色：内外面-灰褐色。サンドウィッチ状。焼成：良。混和材：3mm程の赤色粒。内底：轆轤痕有。外底：指痕残る。粗雑な製品の印象を受ける。	no.4トレンチ 不明 II層
	25	壺	底部	12.0	形状：底部から胴部へかけ外反気味に立ち上がる。素地：暗褐色。器色：外面-淡黄褐色。内面-明褐色。焼成：良好。混和材：2mm程の白色を多く含む。内底：内面に轆轤痕有。外底：底部端に削り痕が僅かに見られる。	no.2トレンチ B-2 II層
	26	壺	底部	20.6	形状：底部から胴部へかけ直線的に立ち上がる。素地：褐色。器色：内外面-褐色。内底面-使用によるものか黒色を呈す。焼成：良好。混和材：2mm程の白色、赤色、黒色粒を多く含む。内底：轆轤痕有。外底：底部端に削り痕有。外器面は成形痕をナゲ消す。	no.4トレンチ 不明 II層
	27	蓋	口縁部	11.0	形状：頂部を欠く。かえりはほとんどないが、鐙は長くなるものと考えられる。素地：暗褐色。器面：外面-黒褐色。自然釉が掛かる。内面-暗褐色。焼成：良好。混和材：白色粒。	no.1トレンチ I層



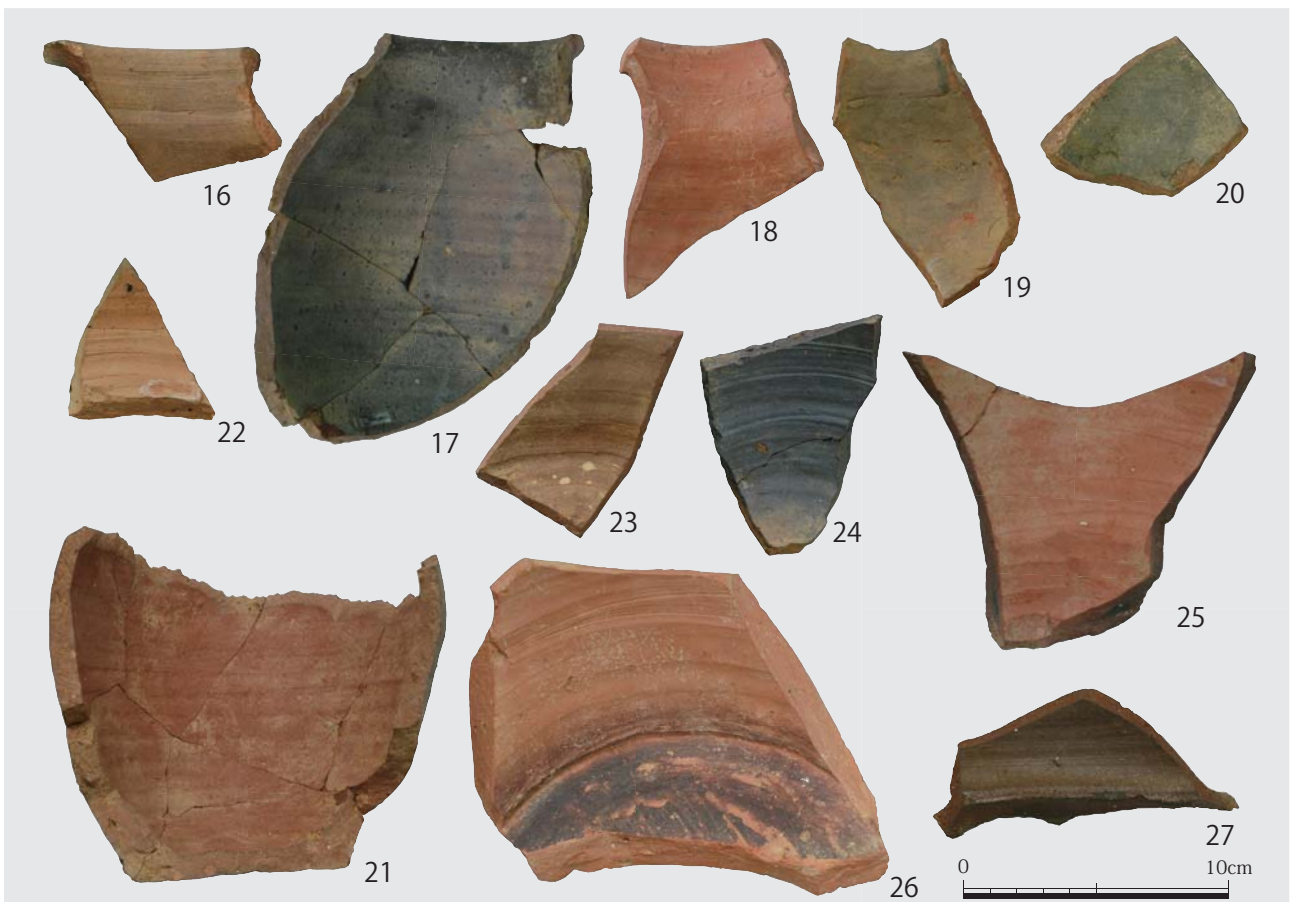
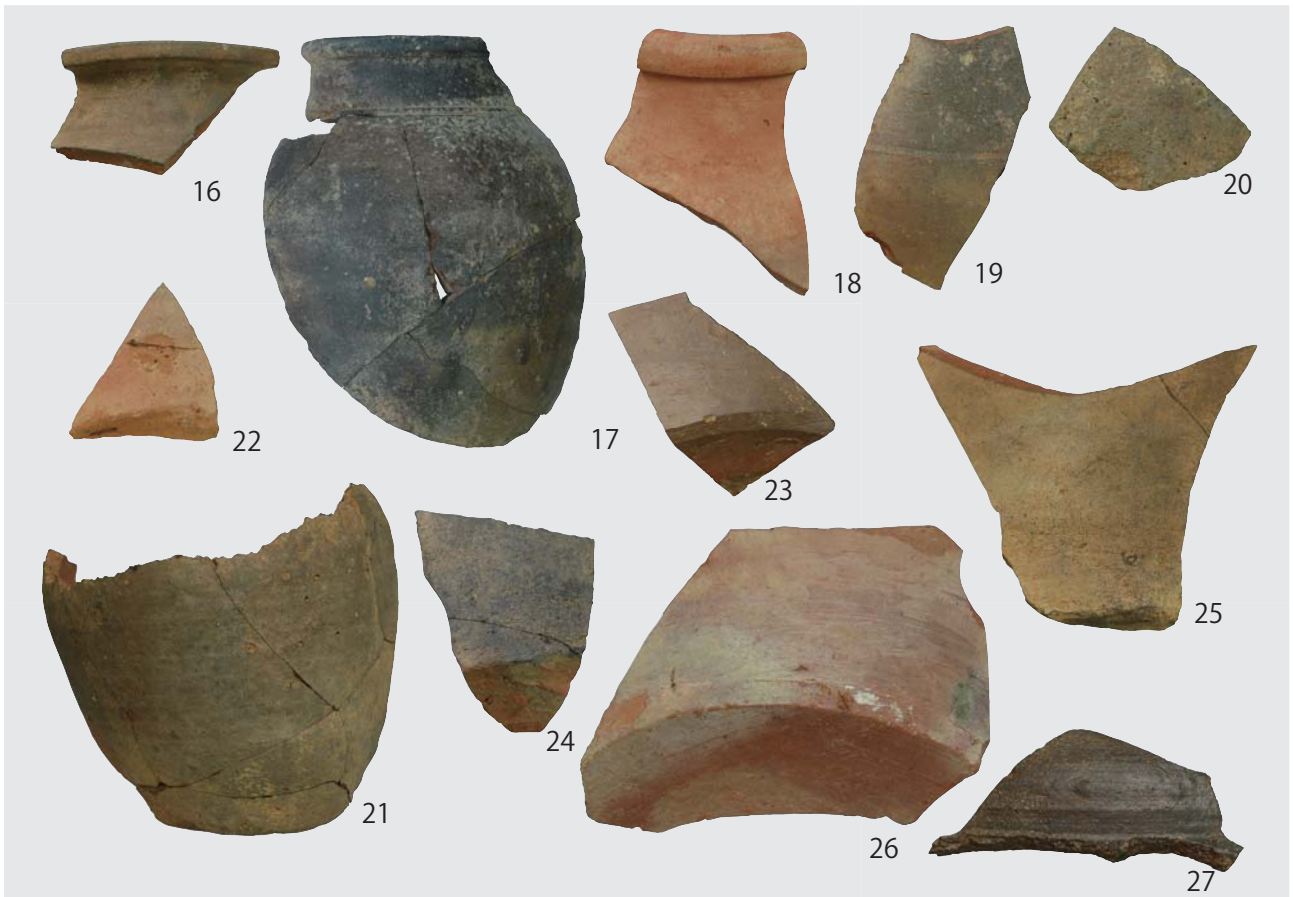
第34図 沖縄産無釉陶器1 (碗・皿・鉢・瓶・壺)



図版 31 沖縄産無釉陶器 1 (上：外面・下：内面)



第35図 沖縄産無釉陶器2(壺)



図版 32 沖縄産無釉陶器 2 (上：外面・下：内面)

第12節 陶質土器（第36図）

陶質土器の器種と出土数は、火炉 21 点、鍋 17 点、鉢 2 点、急須 7 点、器種不明 24 点の総数 71 点である。赤橙色の器色を呈する「アカムン」と称されるものである。

第24表に出土量、第36図、図版33に主な器種と特徴的なものを図示し、その観察表を第25表に示し、以下、略述する。第24表の出土状況で示したものも含めて略述する。

（1）火炉

火炉は口縁形態が緩やかに内彎するもの（第36図1）、胴部上で屈曲し内傾するもの（第36図2）、緩やかに膨らむ胴部から直口し口唇部が内面側に舌状を呈するもの（第36図3）、胴部から直線的にやや窄まりながら口縁部が屈曲し内傾するもの（第36図4）、口縁部が逆「L」字状を呈するものが見られる。胴部は「く」字状に屈曲し器厚が薄いもの（第36図5）がある。底部は高台が低く、高台脇から緩やかに膨らみながら立ち上がる底厚がやや厚いもの（第36図8）、同様に高台は低い底厚が薄く平坦で畳付幅が前述のものに比してやや広いもの（第36図9）がある。白化粧土や沈線及び両者を組み合わせた圏線が見られる。

火炉の把手には平面形が略台形のもの（第36図6）、略長方形を呈するもの（第36図7）があり、いずれも胴部に近い中央部付近にある孔は、上面から下面方向に開けられている。

（2）鍋

鍋は胴部の最大径と見られる部分を境に口縁部、底部方向へ窄まる器壁が薄いもの（第36図10）である。鍋の耳（把手）には粘土紐を用いたものもみられる。

（3）鉢

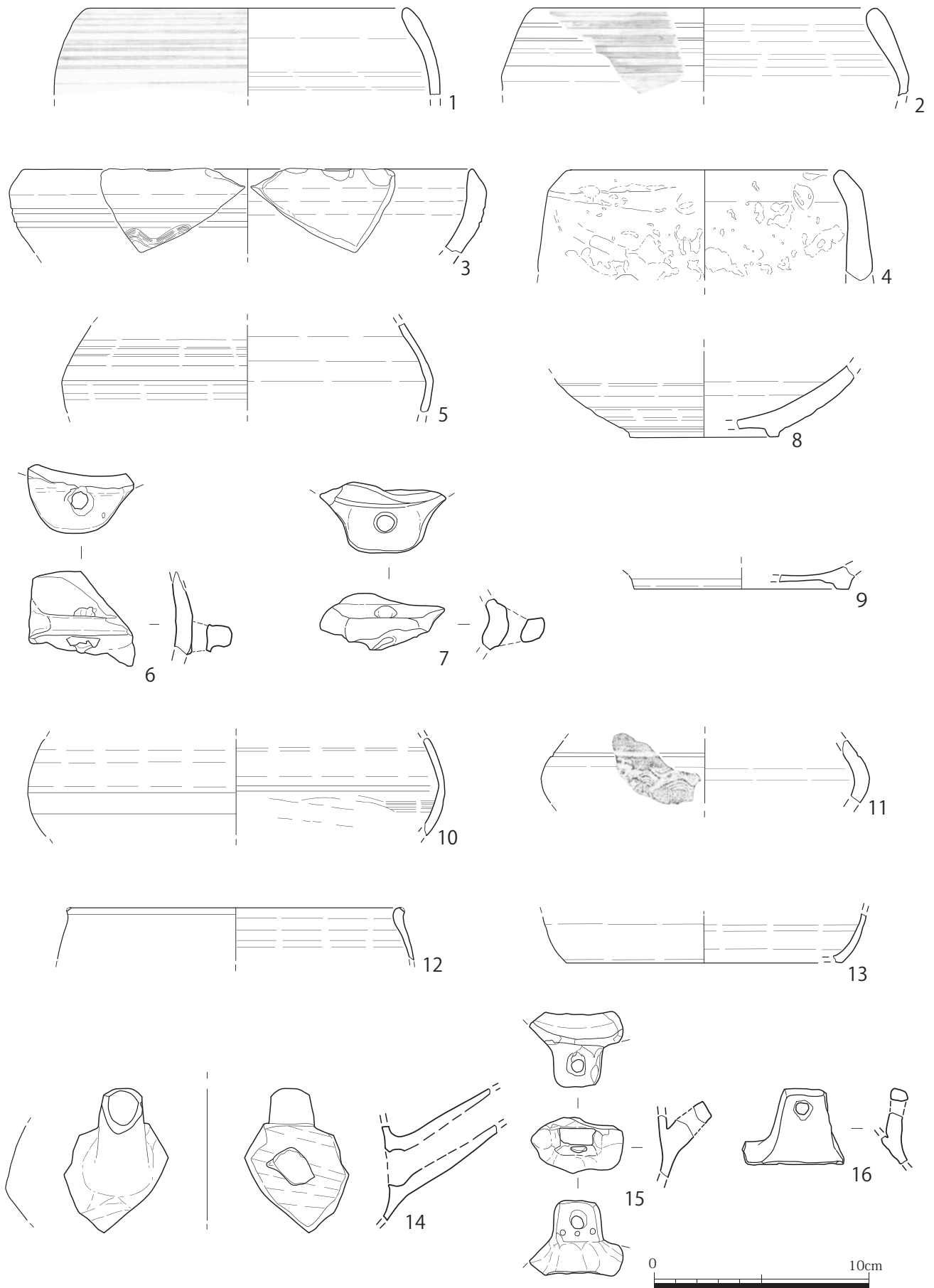
鉢は胴部の最大径と見られる部分に波状沈線、その上位に1条の細沈線が施され器壁が厚いもの（第36図11）である。

（4）急須

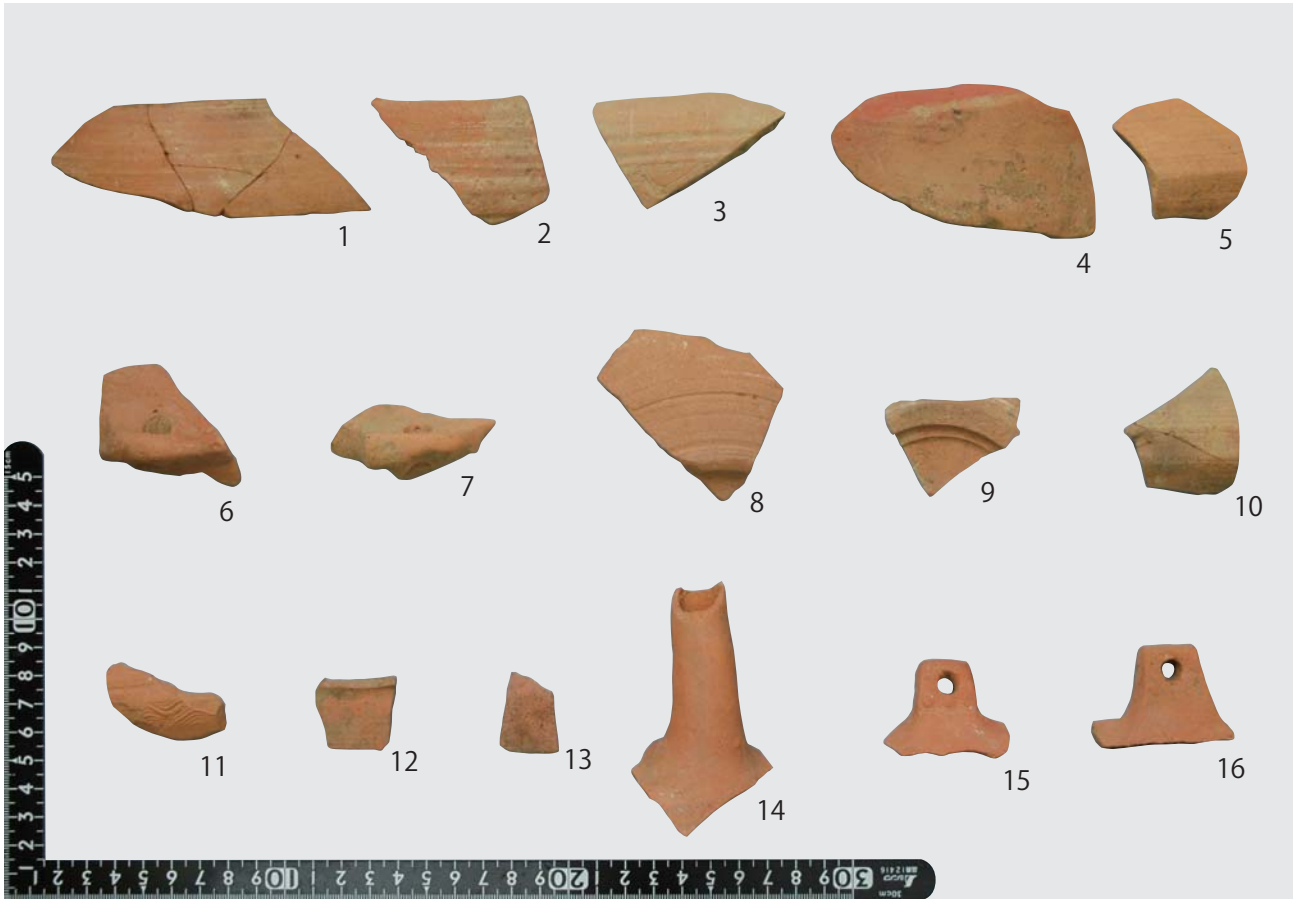
急須の口縁部資料は、胴部から口縁部に緩やかに窄まり口唇部が玉縁状を呈する（第36図12）。底部資料は平底で僅かに膨らみながら立ち上がり直線的に開くと見られるもの（第36図13）である。注口が貼り付けられた胴部資料は「く」字状の屈曲部に注口が貼り付けられたもの（第36図14）である。耳が貼り付けられた胴部資料は、貼付けた耳を境に上位は直口で下位は窄まると見られるもの（第36図15）、内傾する胴部に耳を貼り付けたもの（第36図16）がある。耳は略台形で裏面の整形は丁寧でなく表側から開けられた孔を有するものが見られる。

（5）器種不明

器種不明は碗または皿と思われる低い高台の底部や器厚の薄い小破片などが見られる。



第36図 陶質土器(火炉・鍋・鉢・急須)



図版 33 陶質土器(上：外面・下：内面)

第13節 瓦質土器 (第37図)

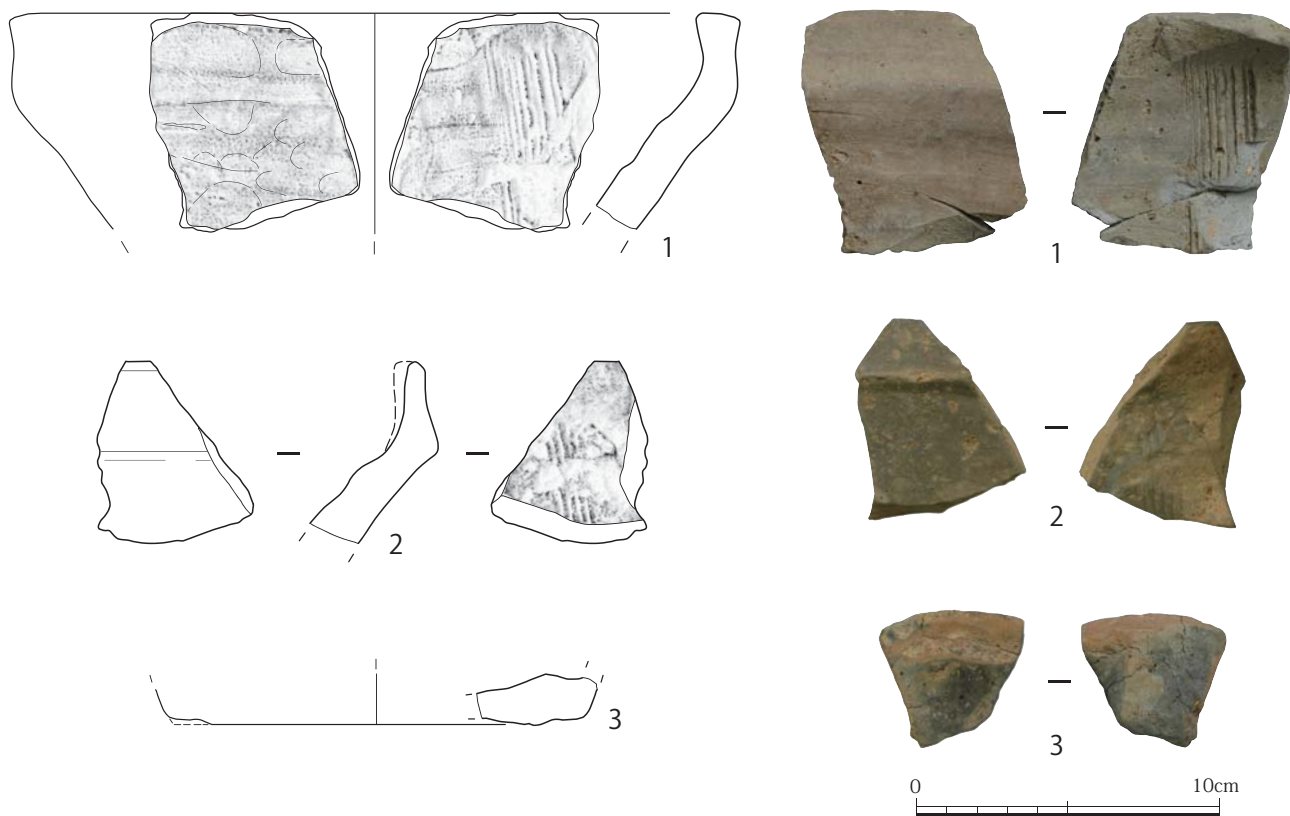
口縁部3点、底部1点の出土で、そのうちの3点を第37図に示した。

出土地全てI層で no.1 トレンチで1点、no.2 トレンチで2点、不明1点である。器種はすり鉢の口縁部と底部である。

図1と2はすり鉢の口縁部で、図1は口径34.8cmと推算される。口唇は角を呈し、外面に器面調整の為の稜が中程に見られる。器厚は1.4cmで口縁部は若干細い。器色は内外面とも明灰褐色、焼成良好である。内面の櫛幅は22mm、櫛は8本、溝は片側が深く、除々に浅くなる。図2は口唇部分がかかるが、口唇部は前者と同じく角をなす。器色は外面が暗灰褐色、内部が明灰褐色とサンドイッチ状を呈する。器厚は1.2cmを測る。混和材にニービに含まれるような光沢物質が見られる。節幅は20mm、櫛目は6本で粗く、片側が深い。図3は底部であるが、すり目が無く、浅鉢の底部と思われる。器色は前2者と比べて赤い。

第26表 瓦質土器出土一覧

図	種類	部位	法量(cm)	観察事項	出土地
1	すり鉢	口縁部	口径:24.1	口縁部は「く」字状、幅1.2cm。色調：内外面一明灰褐色、器厚1.4cm、混入物；櫛8本、櫛幅22mmで強弱あり。焼成良好	no.2 トレンチ D-2 I層
2	すり鉢	口縁部	-	口縁部は「く」字状、色調：内外面一暗灰褐色、内部一明灰褐色。器厚1.2cm、混入物にニービのものあり。櫛6本、櫛幅20mmは粗い	no.1 トレンチ傾斜部 I層
3	-	底部	底径:13.7	泥質、色調：橙褐色、内部は明灰褐色、焼成やや脆い	不明



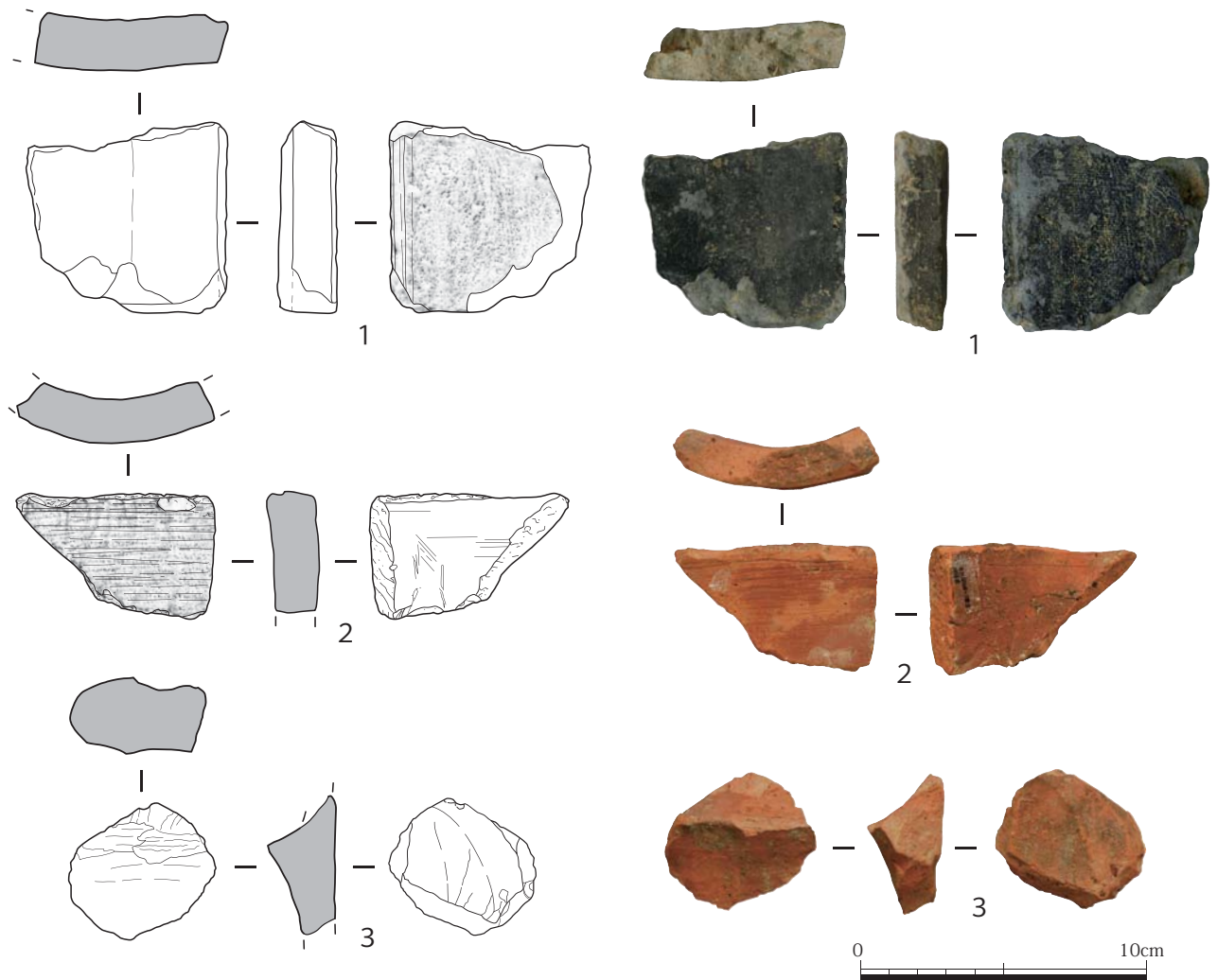
第37図・図版34 瓦質土器

第14節 瓦 (第38図)

平瓦 144 点、丸瓦 14 点、不明 171 点の計 329 点出土した。そのうち灰色瓦 7 点で他は赤色瓦である。いずれも no.2 トレンチの B-1・2 で 280 点 (全体 85.1%) と最も多い。図 1 は灰色の平瓦で no.2 トレンチ B-1 I 層で、焼成はやや軟質である。図 2 と 3 は赤瓦の平瓦と丸瓦で、焼成は良い。出土は no.2 トレンチの I 層に集中していることから「チンガー」と呼ばれる井戸周辺であり、瓦はそれに伴う遺物と思われる。

第27表 瓦出土量

出土地	分類	平瓦		丸瓦	不明	合計
		赤	灰	赤		
no.1	I	2		1	5	8
no.2	I	77	4	9	84	174
	II	29	1	1	46	77
	III	14	1		14	29
C-3	I	1			1	2
	II			1		1
	III	1			5	6
C-4	III	1				1
D-3	III	2		1	1	4
D-4	II			1		1
	不明	2			7	9
不明		8	1		8	17
合計		137	7	14	171	329



第38図・図版35 瓦

第15節 石器(第39～41図)

今回の調査で出土した資料は、石器片と思われるもの13点、用途不明の石器等も含めて総数61点出土した。そのうち製品として明瞭に確認されるもの25点を第39図～41図、図版36～38に示した。石器の種類は石斧、敲き石、磨り石、くぼみ石、円盤状石器、砥石、石球、などである。その中から、石器、石器片、加工したと思われるものを選別した結果、次のような出土状況が判断できた。

第29表は石器の器種別出土集計である。特に多く出土している石器はないが種類別で最も多く出土しているのは、磨り石で破片も含めると9点の出土であった。その次に多いのが砥石で、破片も含めると8点の出土。石球は8点、敲き石は破片も含めると7点、完形は6点である。くぼみ石は4点の出土である。円盤状石器としたものは3点出土している。そのいずれも平面形態から分類したもので明瞭な円形ではなく、ほぼ円形に近いものを選択した。黒色片岩製の2点は扁平な状態と厚みが上下あまり変わらず、もう1点の角閃石安山岩のものは手頃な川原石を加工したものと考えられるが、一番よく手に馴染む印象である。石斧は1点のみの出土であった。

次に出土地、層序をみると、最も多く出土しているのがno.1トレンチで全体では31点の出土、C-4、IV層からの出土が多く9点である。その次に多く出土しているのはD-3グリッドの9点で、層でみると多く出土しているのはIV層の5点である。C-3グリッドでは3点の出土、no.2トレンチでは10点の出土である。

第29表は、石質別に器種をみたもので、15種類もの石が使用されている。最も多く使われているのが砂岩の24点である。これはどの石器にも用いられるもので、砂岩の種類に硬質のものから軟質の砂岩までであるのが理由で叩き石や磨り石等に使用される。輝緑岩は5点の出土で、石斧によく用いられる石材であるが、磨り石にも3点出土している。黒色千枚岩は4点、角閃石安山岩は3点である。輝石安山岩は1点の出土である。片状砂岩と凝灰岩はそれぞれ3点の出土である。ひん岩と礫質砂岩、角閃岩は2点の出土、斑レイ岩、玄武岩、結晶片岩、安山岩、輝石安山岩、細粒砂岩は1点の出土である。どの石も点数は少ないが石質の種類は多くバリエーションがある。方解石5点、脈状石英1点は鉱物である。

第28表 層序別石器出土量

トレンチ	グリッド	層序	器種										小計	合計	
			石斧	敲き石	磨り石	くぼみ石	円盤状石器	砥石	石球	石器片	石材	鉱物			
no.1	B-4	I層								1	2			3	31
		IV層		1	2									3	
		V層			1	1	1							3	
	C-4	III層							1			1		2	
		IV層		2			1		1	1		1	4	9	
		V層		1										1	
	D-4	III層						1						1	
		IV層						1						1	
			I層			1	1		1		1	1		5	
			II層			1								1	
		不明			1				1				2		
no.2	B-1	I層				1		1	1				3		
		II層					1						1		
	B-1・2	I層							1				1		
	B-2	I層						1	1	1			3		
	C-2	I層		1									1		
		不明							1				1		
no.3.4	D-2	II層			1				1				2		
		II層							1	1			2		
	D-3	IV層		1				2		2			5		
		V層		1	1								2		
		V層								1			2		
	C-3	III層	1										1		
		V層				1							1		
		不明						1				1			
		不明			1			2	1		1	5			
		合計	1	7	9	4	3	8	8	13	2	6	61		

第30表-1 石器観察一覧-1

単位 (cm/g)

挿図 図版	番号	器種	残存 状態	縦横 最大厚 重量	石質	観 察 事 項	出土地
第39 図・ 図版 36	1	石斧	半欠品 (刃部)	3.9 4.8 1.4 38	輝緑岩	石斧の刃部である。基部の殆どと刃部の裏面が欠落している。刃は両面から研ぎだされている。研磨は基部の部分にまで至るが、側面の一部は研磨が弱く自然面の部分がみられる。刃部は二方向、二回、研ぎだしており稜線が刃面に明瞭に残り、手触りでも確認できる。側面図から欠損した部分を図上復元すると幅2cm程の厚みを持つ石斧と思われる。	no.4トレンチ C-3 III層
	2	敲き石	半欠品	6.8 5.8 3.6 169	ひん岩	敲き石片で全体の形状は不明、裏面も剥離している。表面と側面に研磨の痕跡が認められる。研磨は叩き痕のつぶれにまで至らず、表面の一部に窺える。	no.1トレンチ C-4 石列 IV層
	3	敲き石	完形	14.0 9.1 5.6 1,140	砂岩	敲き石と磨り石を併用したものである。表裏面に磨り面、上下面に叩きつぶれの面が窺える。重量があり対象物を磨るにしろ叩くにしろ、かなりの威力で粉碎できる資料と考えられる。上下の叩きは、両面とも使用した面が二面あり角度の違いで二方向から使用したと思われる。	no.3トレンチ D-3 IV層
	4	敲き石	半欠品	8.2 7.6 7.7 391	砂岩	敲き石の半欠品であるが、四分の一程度が残存していると考えられる。側面は叩きの痕がみられる。裏面は表面よりも平たい面をつくり中心と思われる箇所に叩きの痕が長さ3cmの範囲で認められる。	no.2トレンチ C-2 I層
第40 図・ 図版 37	5	敲き石	破片	6.0 4.2 7.4 242	斑レイ岩	敲き石の半欠品である。残存部から形状は平たかないものと推測される。おそらく三角形に近いような多面体の角のある製品と考えられる。面のある部分には研磨が明瞭な磨り面が認められる。側面と思われる部分には、つぶれの痕がみられる。上下面では打割で破損し自然面がみられる。石質は斑レイ岩で硬質なため、研磨面に光沢があり重量感もある。	no.3トレンチ D-3 石列 V層
	6	敲き石	半欠品	6.9 6.9 8.2 515	砂岩	敲き石の半欠品である。側面の厚みから推測すると大型の敲き石と思われる。表面の残存部には、指が当てやすいような浅い溝状のくぼみがみられる。裏面の残存面には、磨り面がみられ研磨は手触りで確認できる。側面には面が幾つもあり4cmほどの面が五つほどみられる。	no.1トレンチ C-4 石列 IV層
	7	磨り石	半欠品	8.1 5.6 5.0 214	礫質砂岩	磨り石の破片である。加工された痕がみられるのは表面と側面のみで裏面と上下面は打割による破片で自然面がみられる。表面は磨りによってできた研磨が顕著である。側面にかけてゆるいカーブをつくる。	no.1トレンチ 表採
	8	磨り石	半欠品	6.2 5.2 6.8 266	安山岩	磨り石の破損品である。残存部はおそらく四分の一程度の資料であると思われる。形状は推測範囲でほぼ球状になると考えられる。欠損した部分は三方向から打ち欠いたものと思われ自然面がみられる。	no.1トレンチ B-4 IV層
	9	磨り石	半欠品	13.2 5.2 4.0 302	輝緑岩	磨り石である。表面はゆるく膨らみを持つが、右上から左下にかけて斜めに浅い溝状のへこみ部分がみられる。残存形態は側面からみると三角形を呈するが、打割で欠けている部分は縦断面のみで裏面は欠けた後に研磨を施したと思われ、面の部分的な箇所に磨りがみられる。	no.4トレンチ D-2 II層
	10	磨り石	半欠品	8.0 5.0 5.6 318	角閃岩	多面体の磨り石片である。残存面は三箇所みられる。欠損面も二箇所から大きく打ち割られており、自然面がみられる。磨り面は研磨が強く光沢もみられる。使い込まれた印象を受ける。石質は硬質のものである。	no.1トレンチ 不明
	11	磨り石	半欠品	8.3 8.3 3.3 291	輝緑岩	磨り石片である。表面は平たく見えるが磨り面が二箇所、面を持ち上面は裏面に向かいカーブする。下面は大きく打割されている。図上復元でも形状はよく把握できない。石質は輝緑岩である。	no.3トレンチ D-3 石列北 V層
	12	敲き石	破片	8.7 5.1 3.7 207	角閃岩	敲き石の破片である。加工された痕跡がみられるのは一面のみだが、打割によって破損した面は二面みられる。表面の残存箇所にみられる磨り面は石質の性質上研磨はよいが面がカーブする側面までは至らない。	no.1トレンチ B-4 IV層
	13	石球	完形	3.2 3.2 2.8 36	砂岩	石球である。形態は球状をなしており縦、横、厚みの計測値はほぼ同じである。裏面の一部と下部あたりに叩いて欠けた痕が残る。石質は砂岩であるが、俗にニービと呼ばれる細粒砂岩とは若干違い、含まれる鉱物に金雲母、と細かい白色粒、黒色粒と石英が確認できる。	no.1トレンチ C-4 IV層
	14	石球	完形	3.5 3.8 3.2 46	砂岩	石球である。前述のものと同じ形状であるが、計測値では少し大きくなる。大きな欠けが面で二箇所あり小さな欠けもみられる。使用により面取りされているようにみえる。角張った面もみられる事から完全な球状ではない。これも石質は砂岩だが、色は少し白色に近く含まれる鉱物は、やはり金雲母、白色粒、黒色粒、石英である。	no.2トレンチ B-1 I層
	15	石球	完形	5.4 4.3 3.9 129	砂岩	形状は卵型を呈す。前述の2点に比べ縦に長く上部に窄む。表面と上下面に叩きの痕が窺える。裏面にも数箇所に叩きの痕はみられる。鉱物は同じく金雲母、白色粒、黒色粒、石英である。	no.3トレンチ D-3 II層

第30表-2 石器観察一覧-2

単位 (cm/g)

挿図 図版	番号	器種	残存 状態	縦横 最大厚 重量	石質	観察事項	出土地
第41図・ 図版38	16	くぼみ石	完形	5.4 4.5 4.3 142	細粒砂岩	前後に薄く、だる磨のような形状で表裏面に指の納まりがよい、くぼみが認められる。上下左右の面は、角のとれたような平たい面をつくる。下の面は斜めで据わりが悪く、人為的でない自然のくぼみがみられる。	no.1トレンチ B-4 V層
	17	くぼみ石	半欠品	4.2 5.2 5.2 135	砂岩	くぼみ石の半欠品である。節理面の二箇所まで剥離しており、全体の形状は不明。前後の厚みから、さほど大型の製品ではないと思われる。くぼみは表裏面にみられ、叩きによるくぼみを形成している。下部にみられる叩きは磨りと併用しており、つぶれによる面をつくり稜線の範囲が確認できる。くぼみと叩き以外の箇所は浅い磨りによって研磨がみられる。	no.4トレンチ C-3 V層
	18	くぼみ石	完形	15.5 11.0 8.1 1.710	砂岩	くぼみ石の部類に含めたが、重量はかなりあり、表面の中央から下寄りに上下左右3.5cm程度のくぼみを有する。くぼみは6ミリほどである。裏面の広い範囲に打割の跡がみられるが周囲の風化で茶色に変色した面よりも、あきらかに新しい割れである。	no.1トレンチ I層
	19	砥石	破片	2.5 4.5 1.7 26	凝灰岩	砥石の破片である。残存部は長さ3cm程度、幅4.5cm、厚みは最大で1.6cm、最も薄い箇所が9ミリである。研磨面は破損した上下の部分以外の前後左右に確認できるが、特に表裏面は研磨が強く表面は角のある端部よりも中心部は使い込んだ感があり磨り減り具合が手触りでも実感できる。	no.3トレンチ D-3 IV層 (西石列)
	20	磨り石	半欠品	6.7 3.9 3.3 164	角閃石 安山岩	磨り石の破片で、表裏面に研磨が残されている。上下と両側面が打割によって大きく打ち割られており、全体の形状は不明。破損した表面左側が中心部にあたるとと思われる。表面右上、側面中央上、裏面下側は特に研磨が強く光沢も手触りも顕著である。	no.3トレンチ D-3 IV層
	21	砥石	完形	15.5 10.2 2.0 477	黒色 千枚岩	周辺は全体に角がとられている。表面の中央寄りに縦に指二本分ほどの幅で浅い溝を呈す。黒色千枚岩のため、硬質なものに比べ研磨が顕著ではないが、幅の細いものを研いだと考えられる。その他の部分は手を加えていない。裏面は全体に平たく、据わりのよように側面にかけて形成したものと思われる。両側面の周辺はスレート状の自然面がみられる。	no.1トレンチ 傾斜部 I層
	22	円盤状 石器	半欠品	5.5 7.1 2.0 103	黒色 千枚岩	残存部の状態から円盤状石器とした。扁平状で厚みはなく、おそらく上半分は折れており全体の形状、用途は不明。表面中央、縦方向に浅いへこみがあるが、研磨の方向は横方向に磨りがみられる。周辺の角をおとし、円く形成している。裏面は突起した部分のみ研磨したようで、くぼみの部分に研磨は及んでいない。	no.1トレンチ B-4 V層
	23	円盤状 石器	完形	7.8 9.4 1.4 155	黒色 千枚岩	前述のものと同じく扁平で側面周辺の角をおとしたような形状である。表裏面に僅かに研磨の痕が確認できる。平面形態は、へこみの部分のみみられるが黒色千枚岩の性質上、角をおとす際にくずれて剥離したものと考えられる。	no.2トレンチ B-1 II層
	24	円盤状 石器	完形	7.1 9.0 2.8 243	角閃石 安山岩	前述の二点と違う点は図の側面観で確認できるように側面上部が厚みを持ち側面下部に向かってゆるやかに薄くなることである。平面観は表裏面とも平たく全体に軽い研磨が施されているが、所々数箇所強い研磨がみられる。厚みのある上部は円く形成し、下部は表裏両側から打ち欠いた痕が並んだように認められる。手に握りやすい厚みと形状をしている。	no.1トレンチ C-4 石列 IV層
	25	砥石	剥片	1.3 1.1 0.5 0.98	黒色 千枚岩	剥片で全体の大きさも形状も把握できない。表裏両面と側面に研磨がみられる。厚みは最大で5ミリほど、下に向かって薄くなり石斧仕様にも捉えられるが、スレート状の石質では考えにくい。	不明

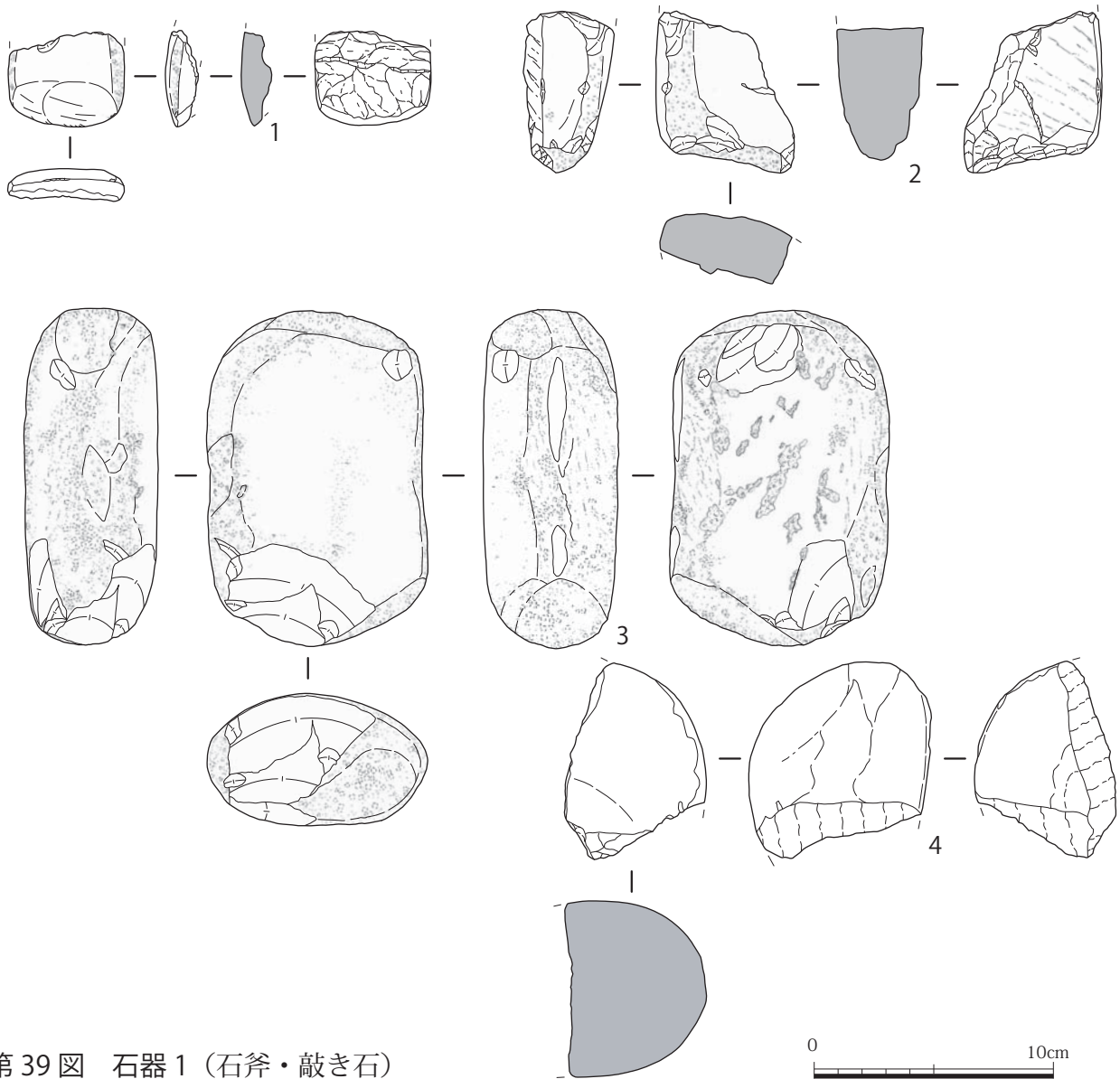
第29表 器種別石質出土量

石質 \ 器種	石斧	敲き石	磨り石	石球	くぼみ石	砥石	円盤状石器	石器片	石材	鋳物	合計
砂岩		3	1	8	3	2		7	1		24
片状砂岩								3			3
礫質砂岩			2								2
細粒砂岩					1						1
輝緑岩	1		3					1			5
黒色千枚岩						2	2				4
角閃岩		1	1								2
角閃石安山岩						1	1	1			3
輝石安山岩									1		1
安山岩			1								1
結晶片岩								1			1
斑レイ岩		1									1
凝灰岩						3					3
ひん岩		1	1								2
玄武岩		1									1
方解石										5	5
脈状石英										1	1
合計	1	7	9	8	4	8	3	13	2	6	61

<石球・石弾・瘤状石と呼ばれるものについて>

図版 39 で紹介するのは二つないし三つの石が瘤状になるもので、一見するとニービに線刻し人型に見えるような石が 24 点出土した。これは、那覇市の天界寺跡（2002）でも紹介されたが今回、分類等は割愛し出土したものを、大城逸朗氏に石器と同じく同定していただき下記のコメントをもらった。

「石球・石弾は砂岩が、何らかのもの（泥岩など）を核にしてノジュールになったと考えられる。石質は、すべて細粒砂岩そのもので岩球（ノジュール）は風化し表面が薄く剥げ、いっそう岩球に丸みをつける。その岩球は自然の可能性もある。表面的に人工の加工痕はみられず、城という条件下で利用したと考えられなくもない。本来ならば、地層の中か、あるいは崖下で出土するはずのものである。」



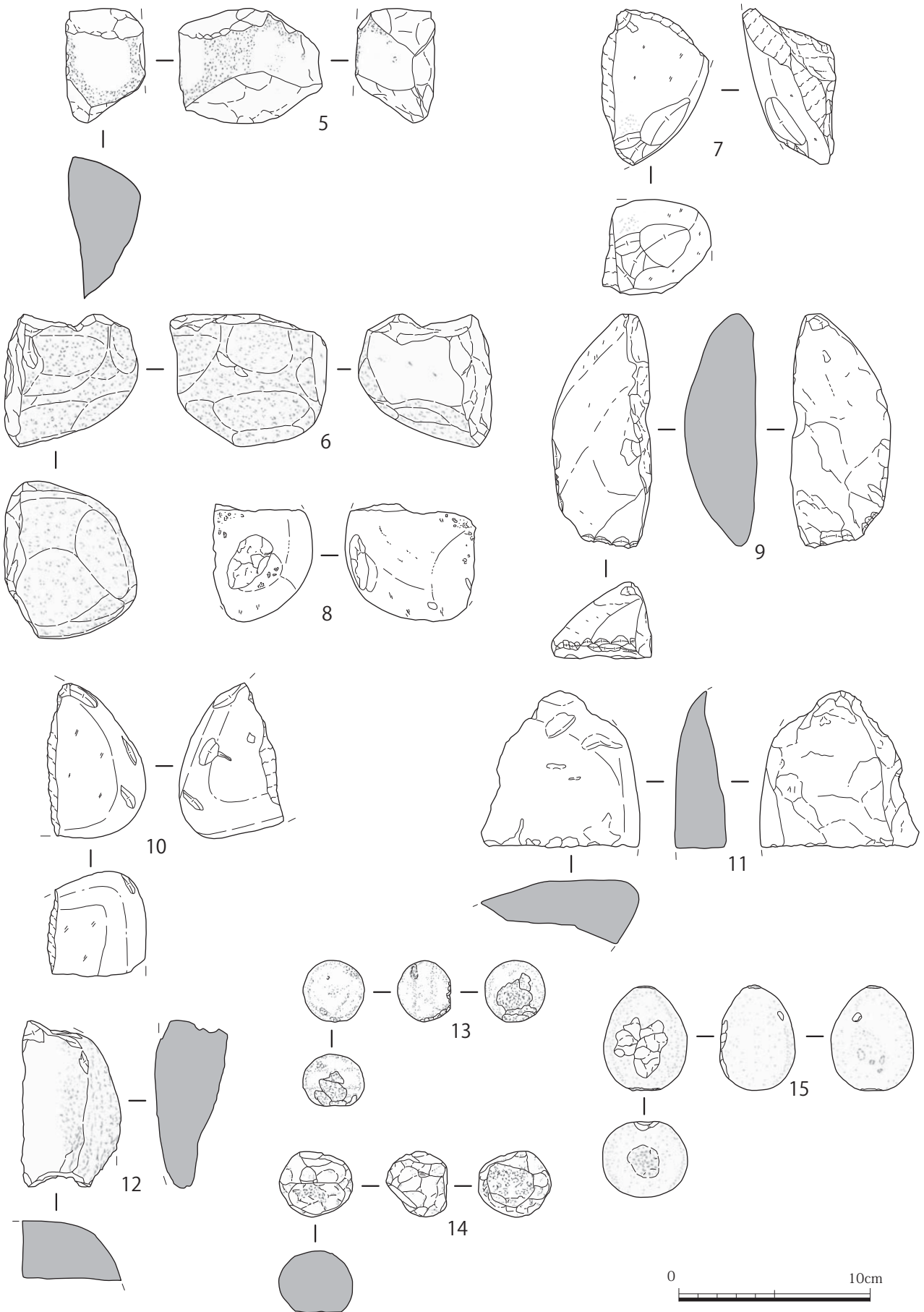
第 39 図 石器 1（石斧・敲き石）

<引用・参考文献>

- ・北谷町文化財調査報告書 第1集『北谷城 一北谷城第一次調査一』1984年3月 沖縄県北谷町教育委員会
- ・北谷町文化財調査報告書 第2集『北谷城第7遺跡 一瑞慶覧幹線移設工事に係る発掘調査一』1985年 沖縄県北谷町教育委員会
- ・北谷町文化財調査報告書 第11集『北谷城 一第六次調査一』1991年3月 沖縄県北谷町教育委員会
- ・北谷町文化財調査報告書 第12集『北谷城 一第七次調査一』1992年3月 沖縄県北谷町教育委員会
- ・北谷町文化財調査報告書 第14集『北谷町の遺跡 一詳細分布調査報告書一』1994年3月 沖縄県北谷町教育委員会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集『天界寺跡(Ⅱ) 一首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査一』2002年3月 沖縄県立埋蔵文化財センター



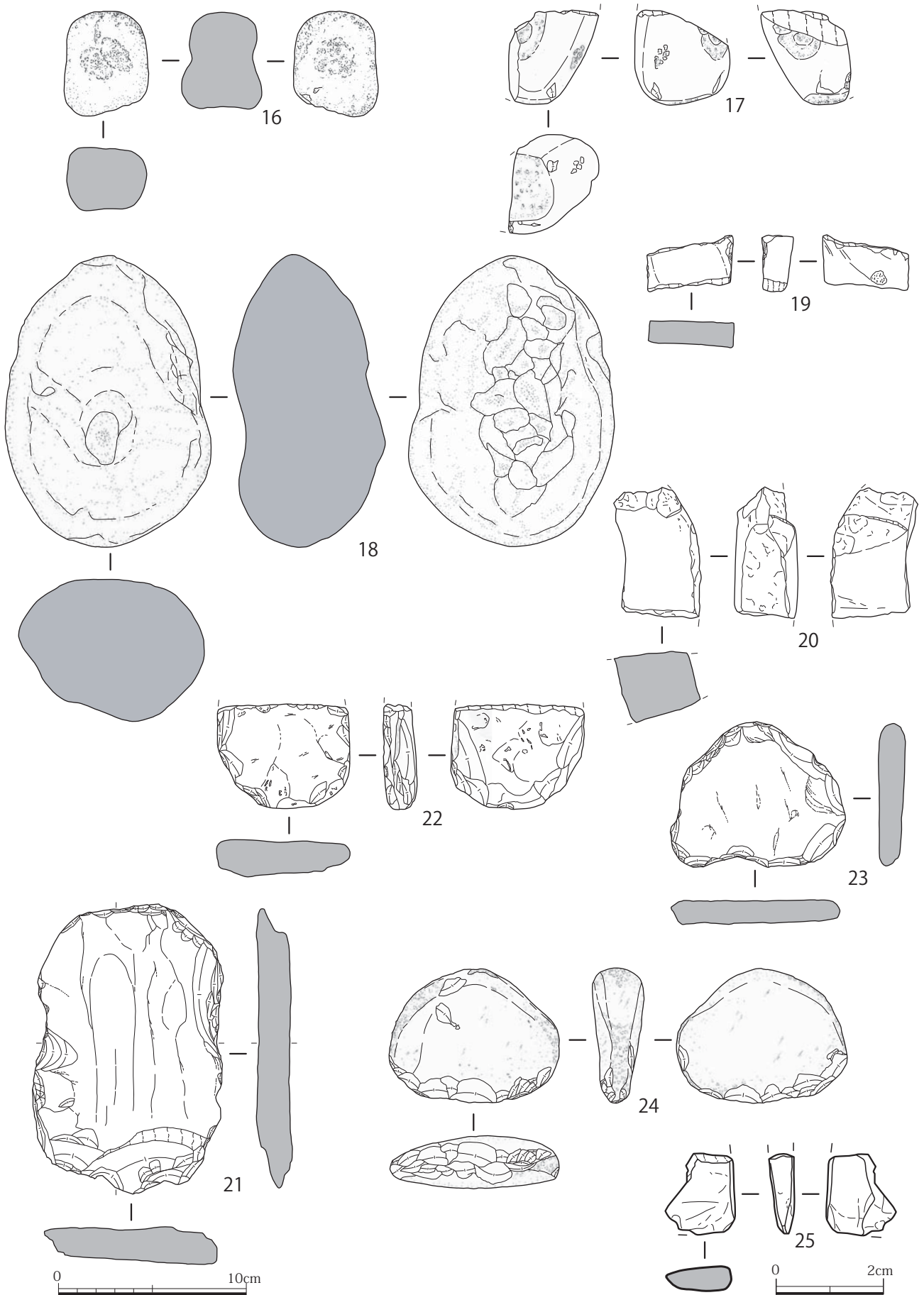
図版 36 石器 1 (石斧・敲击石)



第40図 石器2（敲き石・磨り石・石球）



図版37 石器2(敲き石・磨り石・石球)



第41図 石器3 (くぼみ石・砥石・円盤状石器)



図版 38 石器 3 (くぼみ石・砥石・円盤状石器)



図版 39 瘤状石(上：表面・下：裏面)

第16節 錢貨 (第42図)

洪武通寶 1点、寛永通寶 2点、無文銭 1点、字が摩滅して不明なものが2点の計6点の出土である。

図1は洪武通寶で、中国で1366年に初鑄造された。図2・3は日本ので寛永通寶は薄手、字も細身である。図2はno.4トレンチグリッド不明、図3はno.2トレンチB-2Ⅱ層で出土。図4・5は字が摩滅して不明であるが、図4は残りの字から中国銭の可能性が高い。

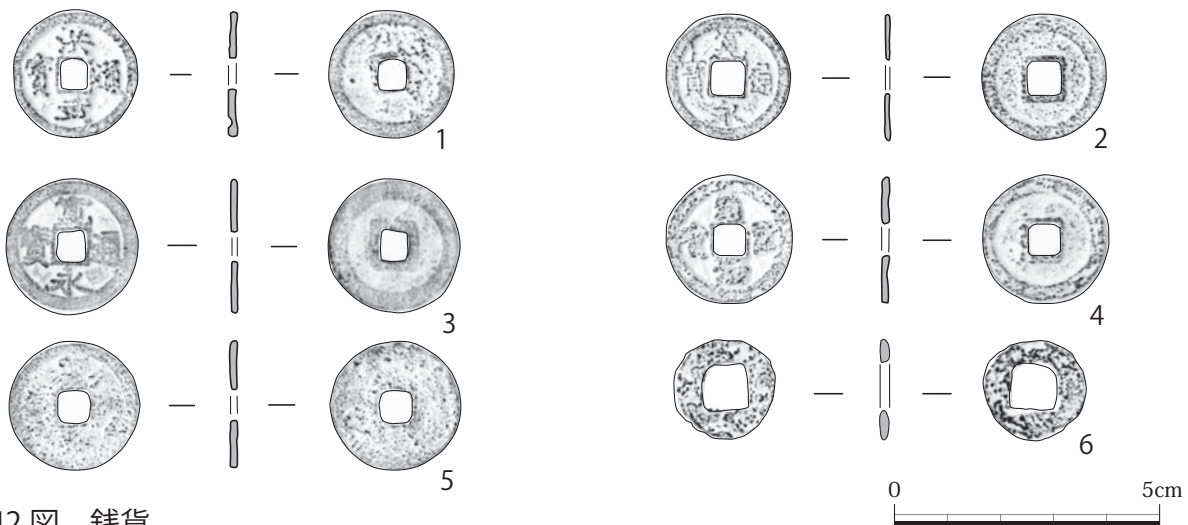
図6は無文銭である。属にいう「鳩目銭」で出土地も前5点と異なり、C-3Ⅳ層で北谷城の時期と関係すると思われる。

本遺跡出土の錢貨のほとんどはチンガー周辺で出土しており、同じような出土例は後兼久原遺跡の井戸状遺構の周辺、湧田古窯跡でも見られる。

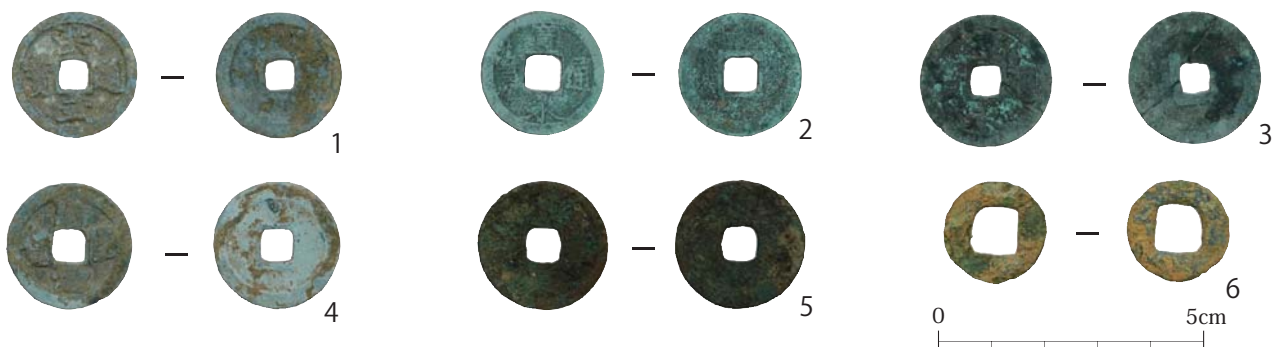
第31表 錢貨観察一覧

番号	表	裏	外径 (cm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	縁幅 (mm)	重量 (g)	加工	字体	色	出土地
1	洪武通寶	無文	2.39	5.5	1.5	1.9	2.72		字はやや太い	明るい青	no.2 トレンチ B-1 Ⅲ層
2	寛永通寶	無文	2.35	6.4	1.0		2.04	両面摩滅、字摩滅	細い	明るい青	no.4 トレンチ
3	寛永通寶		2.51	5.7	1.1	2.4	2.87	両面、摩滅	縁幅つぶれる。	暗い青	no.2 トレンチ B-1 Ⅱ層
4	□元通寶		2.38	6.1	1.5	0.3	3.27	両面摩滅、字摩滅		明るい青	no.2 トレンチ B-1 Ⅱ層
5	□□□□		2.45	6.5	1.2	0.2	2.56	両面摩滅		明るい青	no.2 トレンチ B-2 Ⅱ層
6	無文	無文	1.8	0.8	1.0	0	1.31			明るい青	no.3 トレンチ C-3 Ⅳ層

凡例：□→判読不可能



第42図 錢貨



図版40 錢貨

第17節 鉄製品 (第43図)

鉄製品は鉄釘 28点、鉄滓の可能性 5点、棒状 8点、板状 1点の計 42点出土した。出土地別には C-3 IV層 16点、C-4 IV層 5点が多い。以下、第43図・図版41に示し、観察一覧を第33表に示した。

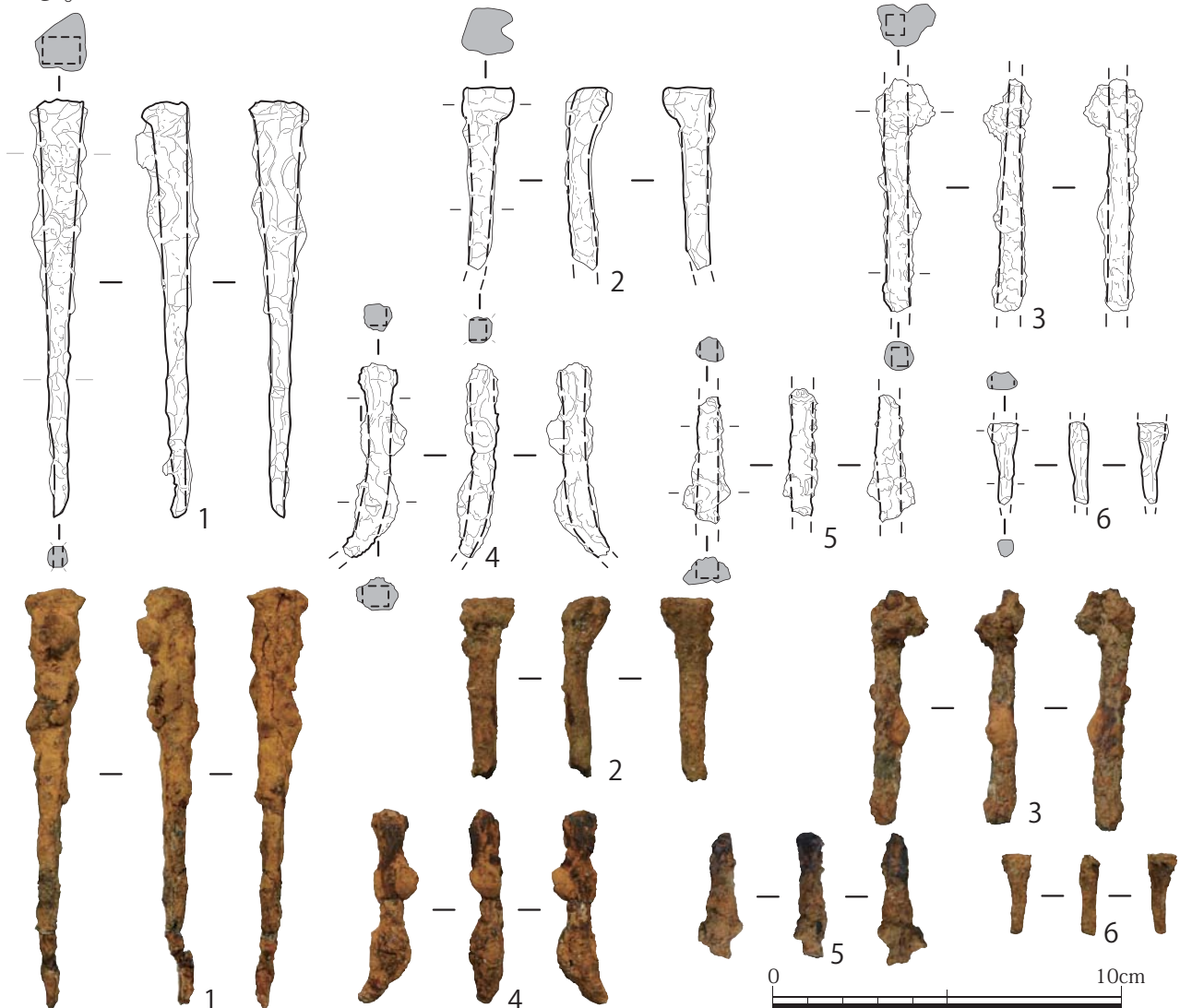
鉄釘は完形 3点、頭部 4点、胴部 10点、先端 5点、細片 6点の計 28点の出土である。頭部は横断面は 14mm、で若干 2mm ほど逆「L」字状を呈する。大きさは 11.5cm タイプ (図1・2) と 5.5cm タイプ (図4) の大小がある。図3~5は釘の胴部で、大きさは不明。鉄滓は 4点、明瞭でないものが D-3 V層で出土した。棒状としたのは横断面が四角でないもので、8点出土した。石列遺構の検出された周辺で多く得られた。鉄釘は勝連城跡・今帰仁城跡・浦添城跡で出土をしている。

第32表 鉄製品出土量

出土地	器種	釘					鉄滓?	棒状	板状	合計
		完	頭	胴	先	細片				
no.1	V						1			1
no.2	I			3			1		1	5
	IV					1				2
	不明					1				1
no.4	I				1					1
	II						1			1
no.3・4 トレンチ	C-3 III				1					1
	IV	2	1	4	2	2		5		16
	III			1						1
C-4	IV	1		1	1	1		1		5
	不明							1		1
D-3	II					1		1		2
	IV		3							3
D-4	V						1			1
	IV			1						1
合計		3	4	10	5	6	5	8	1	42

第33表 鉄製品観察一覧

図	器種	重量 (g)	出土地	
1	釘 (大)	27.79	no.1 トレンチ	C-4 IV層
2	釘 (大)	13.4	no.1 トレンチ	D-4 IV層
3	釘 (胴)	14.9	no.2 トレンチ	B-1 I層
4	釘 (胴)	8.76	no.2 トレンチ	B-2 I層
5	釘 (胴)	5.31	no.2 トレンチ	B-1 I層
6	釘 (大)	1.84	no.1 トレンチ	C-4 III層



第43図・図版41 鉄製品

第 18 節 羽口・焼土 (第 44 図)

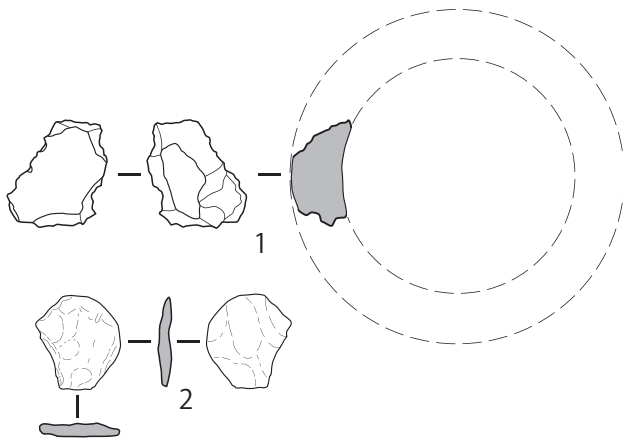
羽口と明瞭に確認できるのは第 44 図 1 に示した 1 点のみである。外径 8.8cm、内径 6cm で、厚さ 1.3cm、これまで出土した羽口に比べて厚さは薄く、内径が大きい。器色は外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈し、焼成は良好である。no.1 トレンチの人骨出土地の上位で出土した。これ以外に第 34 表に示したように焼土が 49 点出土している。全体的に C-D-3-4 で多く得られている。

第 34 表
焼土出土一覧

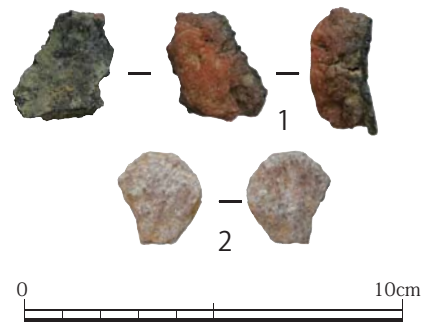
出土地		焼土
no.1	I	4
	III	1
	IV	2
no.2	I	3
	IV	1
	不明	1
C-3	I	1
	III	1
	IV	2
	V	2
C-4	I	2
	III	3
	IV	2
D-3	IV	3
	V	1
D-4	IV	1
不明	II	1
	不明	19
合計		50

第 19 節 滑石 (第 44 図)

滑石は第 44 図 2 に示した 1 点が出土した。剥片資料である。全体の色調は銀色及び淡紫色を呈する。形状は円形状で、一部欠損している。長さは最長で 2.4cm、厚さは最大厚で 0.3cm を呈する。加工は不明であるが、円形状になっていることから製品の可能性も視野にいれたい。本城からの出土は類例が今のところない。D-3 グリッド V 層出土。



第 44 図 羽口・滑石



図版 42 羽口・滑石

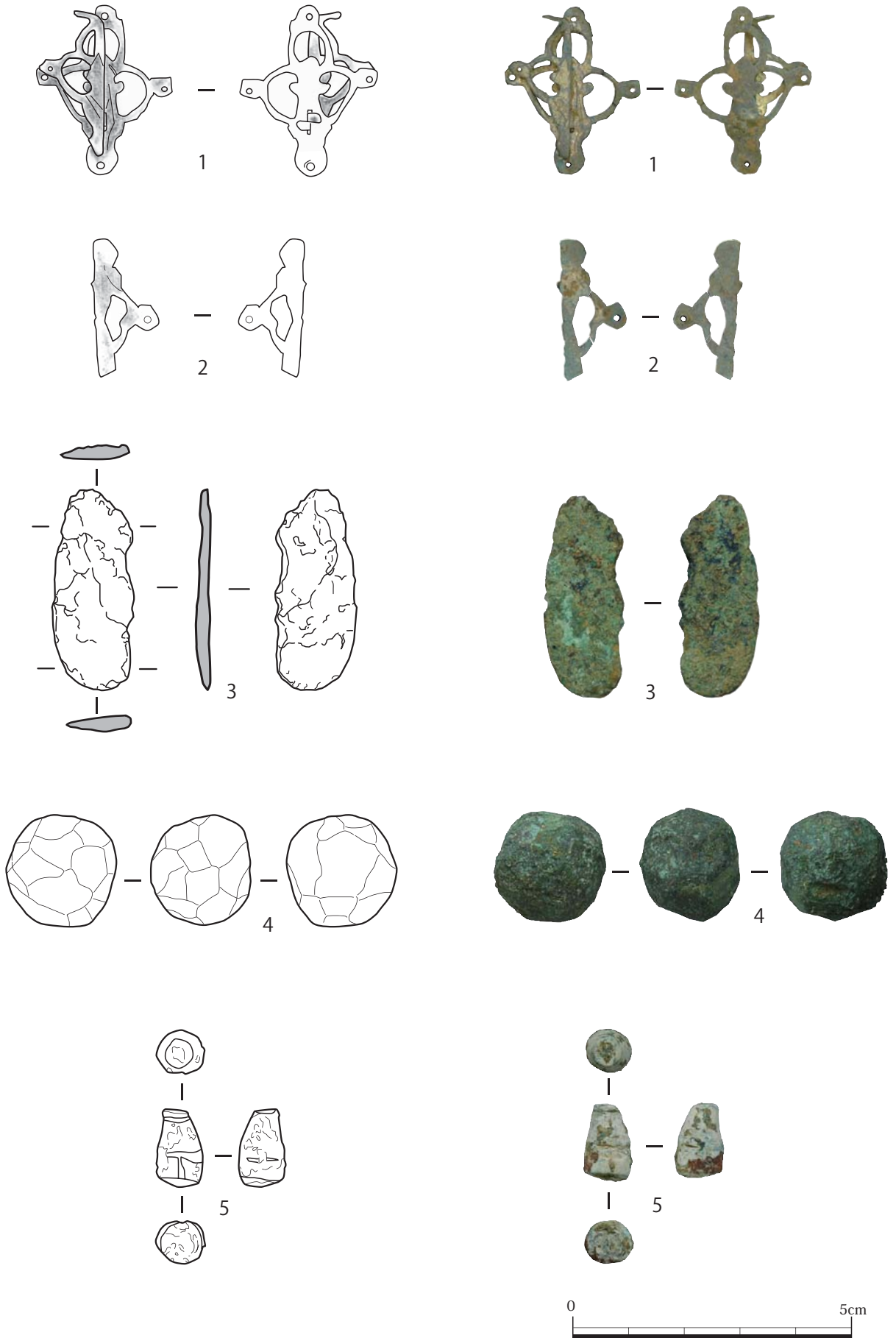
第 20 節 青銅製品 (第 45 図)

図 1 は幅 2.5cm の板状の青銅で菱形状象ったもので、一部に金箔が残る。薄手の金具で、リング幅 1mm、径 1mm の孔があり、ビスが 4 箇所確認され、図 2 も同じで、両者の一連の飾り金具と思われる。no.3 トレンチ C-3 側溝状遺構で出土。

図 3 は板状に加工されたもので、幅 1.4cm、長さ 3.6cm 厚さ 0.2cm、外縁は丸味を帯び、重さ 5.16g と大きさの割に重量感がある。刀の鐔の可能性も考えられる。no.3 トレンチ C-3 IV 層と V 層の境で出土。

図 4 は青銅の直径 19mm×18mm ほぼ円球状の製品である。重さ 29.82g を測り、ほぼ全面に面取りされている。大きさから鉄砲類の玉と思われる。no.1 トレンチの人骨サブトレの II 層で出土した。人骨と関連するか興味深い。

図 5 は大きさが縦 1.4cm、横は上位が 0.5cm、下位が 0.85cm とやや台形を呈するもので、重さは 3.83g を測り、大きさの割には重い。上位と中程に溝状痕が認められ、切り取るための痕と考えられ、未完成品と思われるが、類例が無く、用途は不明である。no.3 トレンチ C-3 V 層で出土。鳩目銭 (第 42 図 6) の近くから出土。



第45図 青銅製品

図版43 青銅製品

第21節 貝製品 (第46図)

貝玉1点、二枚貝有孔製品4点、ヤコウガイ加工品2点の7点が出土した。

貝玉 (図1) は小型イモガイの殻頂を利用したものである。上面は摩耗及下面の体層部分は円味を帯び、孔は径1.0mmと小さく、自然孔の可能性も否定できない。

二枚貝有孔製品としたのは、リュウキュウマスオガイ1点、リュウキュウサルボオ2点、メンガイ1点の計4点である。いずれも内殻→外殻に穿孔を施すが、孔の周縁はシャープで、腹縁も部分的に破損し、製品の可能性は低い。図5のメンガイは孔が整うものである。

ヤコウガイの最も肉厚の臍部の周縁を打ち割りしたものが2点出土した。打割部分は平らに整えられ、那覇市銘苺原遺跡 (1997) に見られるヤコウガイ切り取り残存部の類と思われる。第35表に観察一覧を示す。

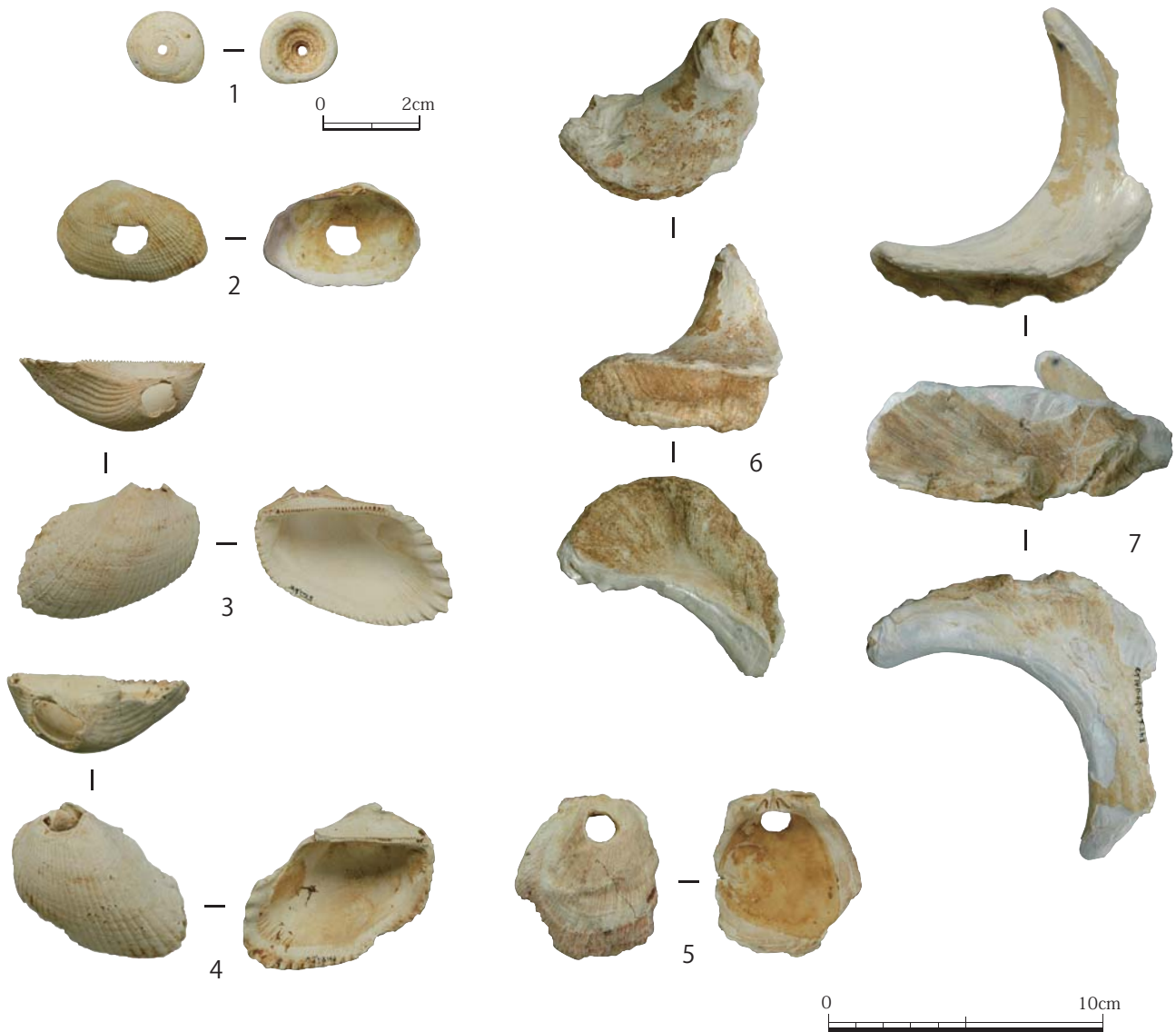


第46図 貝製品

第 35 表 貝製品観察一覧

単位：cm・g

図番号	種別	左右	縦(殻高)	横(殻長)	重さ	観察事項	出土地
1	マガキガイ		1.48	1.63	1.98	孔径0.18cm.	no.2 トレンチ B-2 I層
2	リュウキュウマスオガイ	L	3.8	5.55	9.24	孔径1.1×1.06cm、穿孔方向は内→外、孔は方形、孔の位置は中中、複孔。腹縁はやや剥離。	no.2 トレンチ B-1 II層
3	リュウキュウサルボオ	R	5.6	6.4	32.04	孔径1.33×1.64cm穿孔方向内→外、孔は楕円、位置は殻頂、複孔。腹縁は2箇所剥離。自然か？	no.3・4 トレンチ D-3 IV層
4	リュウキュウサルボオ	L	5	6.5	35.2	孔径0.97×0.86cm、穿孔方向内→外、孔は方形、位置は殻頂、複孔。自然に近い。	no.3・4 トレンチ C-2 III層
5	メンガイ	L	6.05	5.15	15.94	孔径0.99×1.05cm、穿孔方向内→外。孔は円形、位置は「上中」、単孔で腹縁は破損。	no.3・4 トレンチ C-4 I層
6	ヤコウガイ		6.78	7.08	86.98	臍部の体層側、外唇側打ち割りの痕が確認される。	no.3・4 トレンチ D-4 IV層
7	ヤコウガイ		9.7	9.9	130	上に同じ	no.3・4 トレンチ D-4 IV層



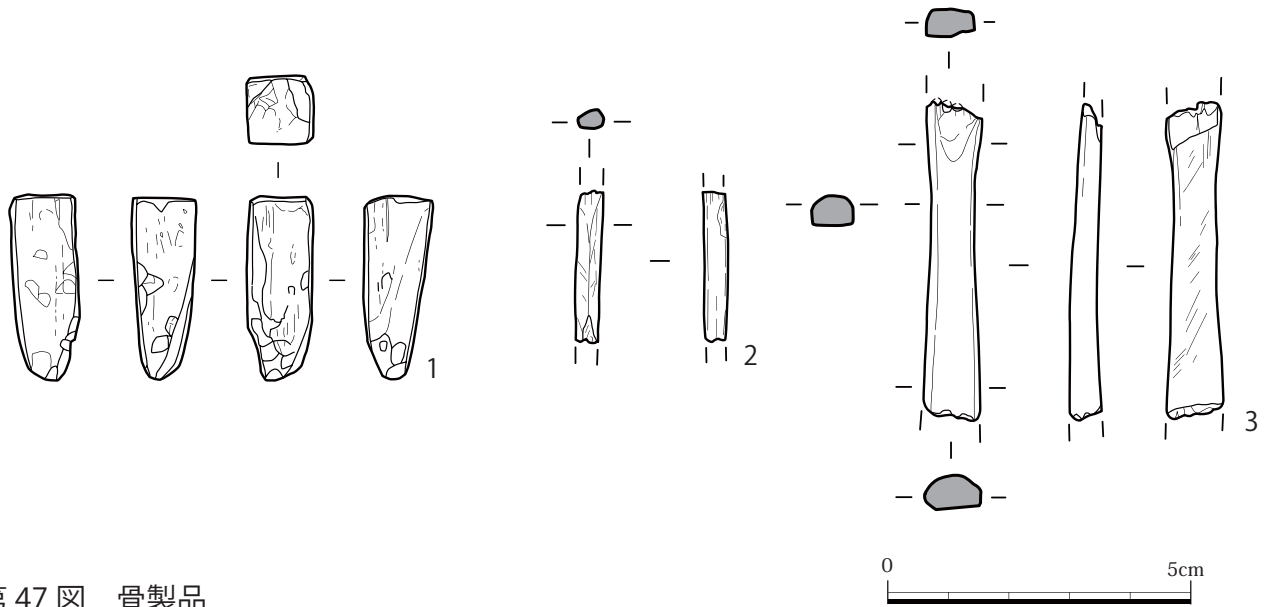
図版 44 貝製品

第22節 骨製品 (第47図)

図1は完形品で、長さ3cm、頭部は1cmの正方形を呈し、先端は荒削りに尖るものである。色調は乳白色を呈し、縦方向に筋が見られ、ウシかウマの四肢骨と考えられる。加工は4面とも研磨する。no.2 トレンチ B-1 のI層で出土。

図2は径0.3cmの棒状である。全体に光沢有り一部に削りがみられ、残部の長さは3cmである。加工は明瞭でなく、自然の可能性も考えられる。髓空がなく、イノシシの腓骨かトリの骨と思われる。no.3 トレンチ C-3 のIV層の出土。

図3は歯ブラシである。ブラシ部と柄の一部の部分である。加工は顕著で、光沢が見られる。ブラシ部は扁平の方形で、柄部はカマボコ状を呈する。ブラシ部の植毛痕の径は3mmで、孔の位置から4列想定される。残存部の長さは5.12cm、幅0.91cm、厚さ0.33cmを測る。no.2 トレンチ B-2 チンガー南側の出土。類例は那覇市天界寺跡で出土する。



第47図 骨製品



図版45 骨製品

第23節 円盤状製品（第48図）

今回の調査で出土した円盤状製品は計9点である。出土点数の少ない状況で素材ごとの割合やサイズによる一定の傾向は見出せなかった。

素材は器種として器ものと壺、甕類を用いており、第36表にあるように沖縄産無釉陶器4点、沖縄産施釉陶器2点、青磁1点、染付が2点である。出土地ごとの点数をみると no. 2 トレンチで5点の出土以外は各トレンチとも突出して多い地区はない。使用されている部位は胴部と底部で、そのうちの6点を図に示した。

以下、図版にある製品について略述するが、掲載されていない製品については第37表の観察一覧に法量と出土地を呈示した。

図1は沖縄産無釉陶器を利用したもので使用部位は胴部である。胴下部に近い部分を用いたと思われる断面の上下で厚みがやや違う。丁寧に打ち欠いてあるが、下部に角のある部分を残しており正円ではない。裏面には、ヘラナデがみられる。

図2は沖縄産施釉陶器の底部で、高台の部分を利用して丸く打ち欠いている。底径は直径6.5cmで大きめの碗の底部と思われる。

図3は沖縄産施釉陶器の碗の底部を利用したもので、内底及び外底に釉は掛けられていない。底径は直径6.8cm。半欠品のため円盤の状態が明確には判断できないが底部の高台部分を残して細かく打ち欠いており、円盤状製品と推測される。

図4は青磁の底部を利用したもので、高台の厚みから碗の底部と思われる。底径の直径は5.8cm。細かく打ち欠いている部分は一方向のみで、あとの四面には角が残されている。高台の畳付けの部分にまで釉は掛けられているが、所々剥がれている。内底部分には印花文が施されている。

図5は染付の碗で部位は胴部、厚みは約0.4cmと薄く全体に膨らみがある。小さい破片だが上下で若干厚みに違いがみられ胴部から腰部にかけての部分である。表には文様がみられるが図柄は不明。

図6は染付の皿で、部位は底部である。底径は直径4.6cmで破片の大きさは約四分の一程度の残存資料である。釉は高台の部分まで施されているが、畳付けと高台の内側の一部は掛けられていない。

第36表 円盤状製品出土量

出土地		素 材		沖縄産無釉陶器	沖縄産施釉陶器	青磁	染付	計
no.1トレンチ	傾斜部	I層				1		1
no.2トレンチ	B-1	I層	1				2	3
		清掃	1					1
no.2トレンチ	B-2	II層		1				1
		II層	1					1
no.3トレンチ	D-3	II層	1					1
no.4トレンチ	-	II層			1			1
	D-4	不明	1					1
合 計			4	2		1	2	9

<参考文献>

1. 沖縄県文化財調査報告書 第111集『湧田古窯跡（Ⅰ）—県庁舎行政棟に係る発掘調査—』1993年3月 沖縄県教育委員会
2. 沖縄県文化財調査報告書 第121集『湧田古窯跡（Ⅱ）—県庁舎議会議棟建設に係る発掘調査—』1995年3月 沖縄県教育委員会
3. 沖縄県文化財調査報告書 第136集『湧田古窯跡（Ⅳ）—県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査—』1999年3月 沖縄県教育委員会
4. 北谷町文化財調査報告書 第21集『後兼久原遺跡—庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書—』2003年3月 沖縄県 北谷町教育委員会
5. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集『渡地村跡 —臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告—』2007年3月 沖縄県立埋蔵文化財センター
6. 北谷町文化財調査報告書 第30集『小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成11から13年度）—』2009年3月 沖縄県 北谷町教育委員会

第37表 円盤状製品観察一覧

挿図 図版	番号	使用素材	部位	完形 破片	法量単位 (cm/g)				出土地
					長径	短径	最大厚	重量	
第 48 図 ・ 図 版 46	1	沖縄産無釉陶器	胴部	完形	5.8	5.7	1.2	49.98	no.3 トレンチ / D-3 / II層
	2	沖縄産施釉陶器	底部	完形	7.3	7.2	2.5	97.08	no.4 トレンチ / II層
	3	沖縄産施釉陶器	底部	破損	8.0	4.7	2.0	42.78	no.2 トレンチ / B-2 / II層
	4	青磁	底部	完形	6.7	6.7	2.6	127.00	no.1 トレンチ / I層
	5	染付	胴部	破損	2.5	1.7	0.4	2.68	no.2 トレンチ / B-1 / I層
	6	染付	底部	破損	2.8	2.2	1.3	5.76	no.2 トレンチ / B-1 / I層
	—	沖縄産無釉陶器	胴部	破損	5.8	4.5	1.2	46.47	no.4 トレンチ / D-4 / 不明
	—	沖縄産無釉陶器	胴部	破損	4.8	4.0	0.9	21.81	no.2 トレンチ / B-1 / I層
	—	沖縄産無釉陶器	胴部	完形	3.9	3.8	0.7	5.22	no.2 トレンチ / B-1 / 清掃



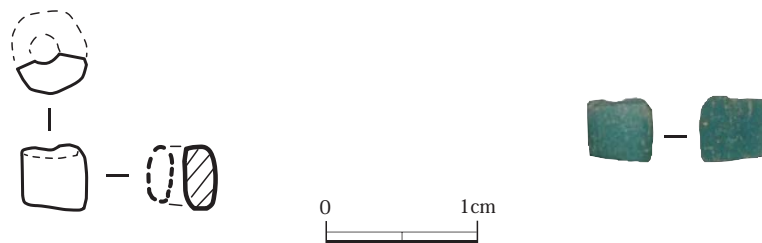
第 48 図・図版 46 円盤状製品

第24節 ガラス玉 (第49図)

1点出土した。

大きさは推定 5.5mm の筒状を呈する。高さは 4 ~ 3.5mm と一端は揃うが、他端は不揃いである。

内径は 2.0mm、残存の重さ 0.01g を測る。色は青緑色を呈する。no.1 トレンチV層より出土。



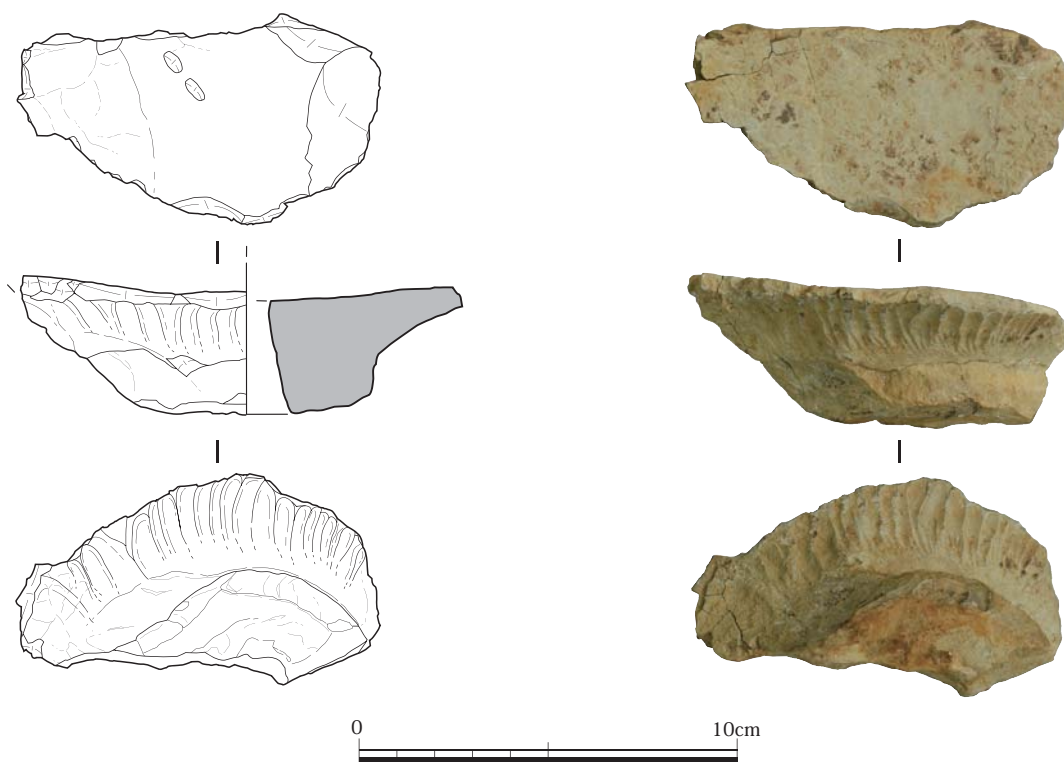
第49図 ガラス玉

図版47 ガラス玉

第25節 石製品 (第50図)

第50図 (図版48) は泥岩の塊を碗状に象ったものである。底面は径 6.5cm、厚さは最も厚いところで 3cm、薄いところで 1.5cm を測る。高台の高さは 1.5cm で、横断面は片側が高台のように明瞭な立ち上がり、その反対側は緩やかである。内面は平らで、中央よりに剥離が 2箇所見られる。外面の立ち上がり部分は先端の丸い工具で幅 0.6cm の深い削りがほぼ全面に施される。金属製の彫刻刀様なものと思われる。

用途は上面がほぼ平坦をなすことから器の未製品かあるいは蓋状のものと考えられる。沖縄産無釉陶器の壺の蓋は民俗事例で貝殻 (サラサバティラ) や木製のものがあり、本品の大きさも近いことから蓋の可能性が高い。本品は北谷城の資料整理中にコンテナに混じていたもので、厳密には時期及び出土地は不明である。類例のない資料なので紹介した。



第50図 石製品

図版48 石製品

第VII章 自然科学的分析

第1節 北谷城(城門地区)出土の脊椎動物遺体

樋泉 岳二 (早稲田大学)

はじめに

北谷城は沖縄県北谷町に位置するグスク遺跡である。本遺跡では平成9年～11・14年度に北谷町教育委員会によって実施された城門地区の発掘調査において、貝塚時代から近現代にいたる遺構や遺物包含層から多数の脊椎動物遺体(骨類)が採集された。ここではこれらの骨類の同定結果を記載し、その特徴について述べる。

1. 分析資料と分析方法

分析資料は、すべてピックアップ(発掘現場における目視確認と手による拾い上げ)で採集されたものである。骨類が出土した層準および共伴遺物などから推定される年代は、下位からV層(貝塚時代後期～グスク時代)、IV層(14～17世紀)、III層(漸移層)、II層(戦前の旧表土)、I層(米軍による盛土)である。I層の資料については、米軍による盛土中から出土したものであるため、資料の由来(どこから、どのような経緯でもたらされたものか)は現時点では不明である。

遺体の予備的な同定およびデータの集計作業は北谷町教育委員会の島袋春美氏によって行われ、筆者(樋泉)が同定結果の確認および最終的な図表の編集を行った。以下の記述はそのデータに基づくものである。

2. 結果

(1) 脊椎動物遺体群の概要

魚類、爬虫類(ウミガメ類)、鳥類、哺乳類が同定された。両生類は確認されなかった。

各層準からの遺体の出土数(NISP, 表12)をみると、IV層が120点と最も多く、I層が77点、III層が40点でこれに次ぐ。II層とV層からの出土数は少ない。

脊椎動物全体の組成(図1)は、ウシ・ウマとイノシシまたはブタ(以下イノシシ/ブタと表記する)を主とする獣骨が圧倒的に多く、魚類、ウミガメ類、海獣類が若干加わる点の特徴である。

(2) 魚類

出土数は少ない。同定結果を表1に示す。全資料の合計ではベラ科5点(いずれもシロクラベラまたはそれに近似するタイプ)、ハリセンボン科4点、フエフキダイ科とアオブダイ属が各1点である。資料数が少ないため、組成に層位的な変化傾向があるかは明確でない。

(3) 爬虫類・鳥類

爬虫類ではウミガメ類、鳥類では同定困難な四肢骨片がわずかに確認されたのみである(表2)。

(4) 哺乳類

今回の出土資料の大半を占める。同定結果を表3～表11に示した。全体的な組成(表12, 図1)としては、ウシ・ウマとイノシシ/ブタが大半を占めており、その他にイヌ、ネコ、ヤギ、ジュゴン、イルカ類が若干確認されている。

組成の層位変化をNISP比でみると(図1)、IV層～II層ではウシとイノシシ/ブタが多く、ウマがこれに次ぐ点で共通する。これに対しV層では、資料数が少ないものの、ウマが最も多くイノシシ/ブタが少ない点で傾向が異なるように思われる。海獣類(ジュゴン、イルカ類)は、少数ではあるが下層のV層

とIV層のみでみられる点で特徴的である。

イノシシ／ブタは若～成獣までが混在している。イノシシとブタの判別に関しては、II層出土資料は年代的にみてブタの可能性が高いが、下層の資料についてはイノシシが含まれる可能性があり、検討を要する。顎骨や歯が少ないため形質の特徴や年齢構成は不明確だが、年齢構成については四肢骨骨端の癒合状況の分析によって、さらに検討を進める必要がある。なお、IV層 no.1 トレンチ C-4 グリッド出土の上腕骨は短縮化が明らかであり、ブタと判定される。同資料はIV層出土とされているが、おそらく比較的最近のものとして推測される。その他に、IV層 no.4 トレンチ D-3 グリッド出土の橈骨もやや短縮化傾向が認められ、また近遠両骨端未癒合の若獣であることから、ブタの可能性が高い。

ウシは若獣から成獣までが混在している。解体痕（カットマークやスパイラルフラクチャーなど）をもつ資料が普通にみられた。なお no.1 トレンチ C-4 ～ D-4 グリッドでは同一個体と思われる上下の歯が多数採集されている（表7）。これらはおそらく「獣骨埋葬遺構」の埋葬個体由来のもので推定される。

ウマは成獣が主体であり、イノシシ／ブタやウシとは傾向が異なる。解体痕をもつ資料もみられるが多くのはない。

3. まとめ

沖縄の遺跡における出土骨の様相を概観すると、貝塚時代前期～後期には魚骨が圧倒的多数（ピックアップ資料では最小個体数比8割前後）を占め、イノシシがこれに次ぐパターンが一貫して認められる。これに対しグスク時代以降には、一般に魚骨の減少とイノシシ／ブタの増加およびウシ・ウマなどの家畜の出現と増加という明確な変化が認められる（樋泉 2002）。今回の結果も基本的にはこうした傾向と合致している。

また、本遺跡の北方に位置する伊礼原D遺跡では、第4トレンチ 4-5 ～ 4-6 グリッドでグスク時代の集落跡、4-7 ～ 4-10 グリッドで18世紀以降の遺物包含層が確認され、多数の骨類が検出されている（樋泉 2008）。これと今回の資料を比較しても、イノシシ／ブタとウシを主体とし、魚類・ウマ・ジュゴンなどが加わるパターンはよく一致している。

ただし、今回の分析資料が北谷城中心部ではなく、丘陵斜面下の城門地区から出土したものである点には留意が必要である。今帰仁城跡関連遺跡群では城内と城下集落（今帰仁城周辺遺跡＝今帰仁ムラ跡）とで出土骨の内容に明確な違いが確認されている（樋泉ほか 2009）。すなわち、今帰仁城主郭では魚類とイノシシ／ブタが多く、ニワトリも普通であり、少数だがジュゴンも城内のみから出土している。これに対して、城下集落（今帰仁ムラ跡）ではウシが多く、魚類、イノシシ／ブタ、ニワトリが少ない。今回の資料をこれと比較すると、魚類が少なく、ニワトリがみられない点、ウシが多い点では今帰仁ムラ跡に類似するが、イノシシ／ブタが比較的多く、ジュゴンがみられた点で今帰仁城主郭との共通要素も認められる。このように、今回の結果が北谷城における脊椎動物資源利用の全容を示しているかについては、こうした階層性の観点からもさらに検討する必要があるだろう。

<参考文献>

樋泉岳二（2002）「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」、『先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－』（木下尚子編）、熊本大学文学部、pp.47-66.

樋泉岳二（2008）「伊礼原D遺跡第3・第4トレンチ出土の脊椎動物遺体」、『伊礼原D遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査－』（東門研治・島袋春美編）、沖縄県北谷町教育委員会、pp.184-196.

樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009.3.31 「今帰仁城主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」、『今帰仁城跡発掘調査報告書IV』（玉城靖編）、沖縄県今帰仁村教育委員会、pp.179-238.

表1 北谷城から出土した魚類遺体

層	トレンチ	グリッド	フエフキダイ科		ペラ科 (シロクラペラ型)		アオブダイ属	ハリセンボン科	真骨類同定不可		合計
			主上顎骨 L	第1椎骨	下咽頭骨	椎骨	上咽頭骨 L	前上顎/歯骨	第1椎骨	棘	
I	no.1	C-4						1			1
I	no.2	B-2								1	1
I	no.3/4	B-3	1								1
III	no.1	B-4			1						1
III	no.1	C-4						1			1
IV	no.1	C-4			1			1			2
IV	no.2	B-1			1					2	3
IV	no.4	C-3			1				1		2
V	no.3	D-3						1			1
	不明			1			1				3
	合計		1	1	4	1	1	4	1	3	16

表2 北谷城から出土したウミガメ類・鳥類遺体

種類	層	トレンチ	グリッド	部位	残存位置	左右
ウミガメ類	I	no.2	?	縁骨板	fr	?
	V	no.4	D-3	指骨		?
	不明	no.1	D-4	不明	fr	?
鳥類	不明	?	?	上腕骨?	m	R?

表5 北谷城から出土したイノシシ/ブタ顎骨・歯の詳細

層	トレンチ	グリッド	部位		左右	数
			上顎骨	下顎骨		
I	no.1	人骨上	上顎骨	M1	L	1
			上顎骨	dm4	R	1
I	no.2	B-2	上顎骨	[dm3, dm4, M1]	R	1
			下顎骨	M fr	?	1
II	no.2	B-2	下顎骨	fr	?	1
III	no.1	B-4	下顎骨	fr	?	1
IV	no.1	C-4	下顎骨	M2	R	1
		D-4	下顎骨	M3	L	2
		D-3	顎骨	fr	?	1

fr: 破片

表3 北谷城から出土したイヌ・ネコ遺体

種類	層	トレンチ	グリッド	部位	残存位置	左右
イヌ	I	no.1	?	距骨		R
	I	no.2	B-1	肋骨		?
	III	no.1	B-4	尺骨	p	L
	IV	no.3	C-3	上腕骨	d	R
ネコ	不明	no.1	?	脛骨	(p-) ~ (d-)	R

表7 「獣骨埋葬遺構」埋葬個体のものと思われるウシの歯の詳細

上下	層	トレンチ	グリッド	L									R									備考					
				I1	I2	I3	dm4	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	dm4	P2	P3	P4	M1		M2	M3			
上顎	IV	no.1	D-4									1	1	1									1	1	1	1	すべて同一の可能性がある
下顎	I	不明	表探											1												1	
	III	no.1	D-4	1			1				1	1	1														
	IV	no.1	C-4																					1	1		
	不明	no.1	不明		1										1	1	1										
	不明	不明	不明																								

表8 北谷城から出土したウマ遺体

層	トレンチ	グリッド	上顎白歯	下顎白歯	切歯	臼歯	肩甲骨	橈骨				尺骨	中手骨	大腿骨		脛骨	距骨	踵骨	中足骨	合計				
			L	L	R	?	?	R	s	L	d	p	s	d	L	R	L	p	R		R	L	R	p
I	no.1	傾斜部																			1			
		?				2															2			
	B-1																				1			
	B-2	1		1																	2			
	?						1														1			
no.3	C-3				1																1			
	D-3					1															1			
?	?				1																1			
II	no.2	B-1																			1			
	no.3	D-3							1												1			
?	?								1												1			
III	no.1	C-4																			1			
	no.2	C-2										1									1			
	no.1	C-4																			1			
IV	no.1	C-4																			3			
	no.2	C-2	1		1											1	1				2			
	no.3	C-3		1															1		6			
V	no.3	D-3							1												4			
	?	?							1												3			
	?	?							2												2			
	合計		2	2	2	3	1	4	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	35

表10 北谷城から出土したヤギ遺体

層	トレンチ	グリッド	部位	左右
II	no.3	D-3	上顎骨	L
不明	-	D-3東	大腿骨	L

表11 北谷城から出土した海生哺乳類遺体

種類	層	トレンチ	グリッド	部位	左右	数
ジュゴン	IV	no.2	?	肋骨破片	?	1
			C-3	肋骨破片	?	1
		no.4	C-4	肋骨破片	?	1
			D-3	肋骨破片	?	1
イルカ	IV	no.4	D-3	椎骨	-	2
	V	no.4	D-3	椎骨	-	1
	不明	?	?	椎骨	-	1

表9 北谷城から出土したウシまたはウマ遺体

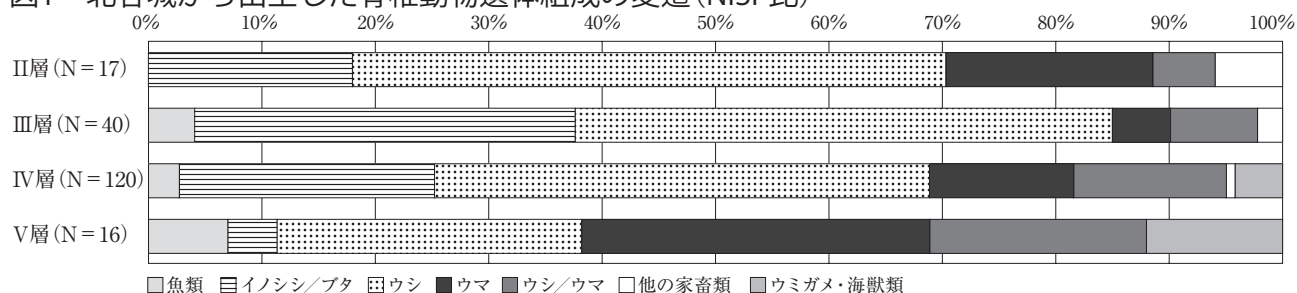
層	トレンチ	グリッド	頭骨	頸椎	腰椎	椎骨	肋骨	肩甲骨	上腕骨	寛骨	大腿骨	脛骨			手根/足根骨	四肢骨	不明	合計		
			fr	椎体	椎体	fr	fr	? fr	L s	? fr	? fr	? s	? d	? p					? s	? fr
I	no.1	A-1														1		1		
		AB-?															1	1		
		B-3															1	1		
		B-4															1	1		
		C-4				1										1		2		
		D-4				1		1			1							3		
	no.2	傾斜部									1			1			3		5	
		平坦部															2		2	
		?								1		1					3	1	6	
		B-1					1										4		5	
		B-1.2							1								2		3	
		B-2															3	1	4	
no.4	?														1		1			
?	?								1								1			
II	no.1	C-4														1		1		
	no.2	D-4															1	1		
	no.3	B-1										1				2	1	4		
	no.4	東側掘り下げ時														1		1		
?	?														1		1			
III	no.1	B-2															1	1		
	C-4	1				1										7		9		
IV	no.1	D-4				1												1		
		?-4					1											1		
		A-4							1								3		4	
		B-4																1	1	
		C-4	1	1	1			1			1					1	4		10	
		D-4				1											5		6	
	no.2	?									1								1	
		B-1															2		2	
		B-2															1		1	
		no.3	D-3														3		3	
		no.4	C-2														1		1	
		C-3				2					1					1	10		14	
V	no.1	D-3					1									2	1	4		
	?															1		1		
	no.2	?														1		1		
	no.4	D-3	1										1	1		1		4		
不明	no.4	D-3														1		1		
?	?					1									5		6			
合計	?																			
合計			3	1	1	7	4	2	1	2	5	1	1	1	2	1	3	75	9	119

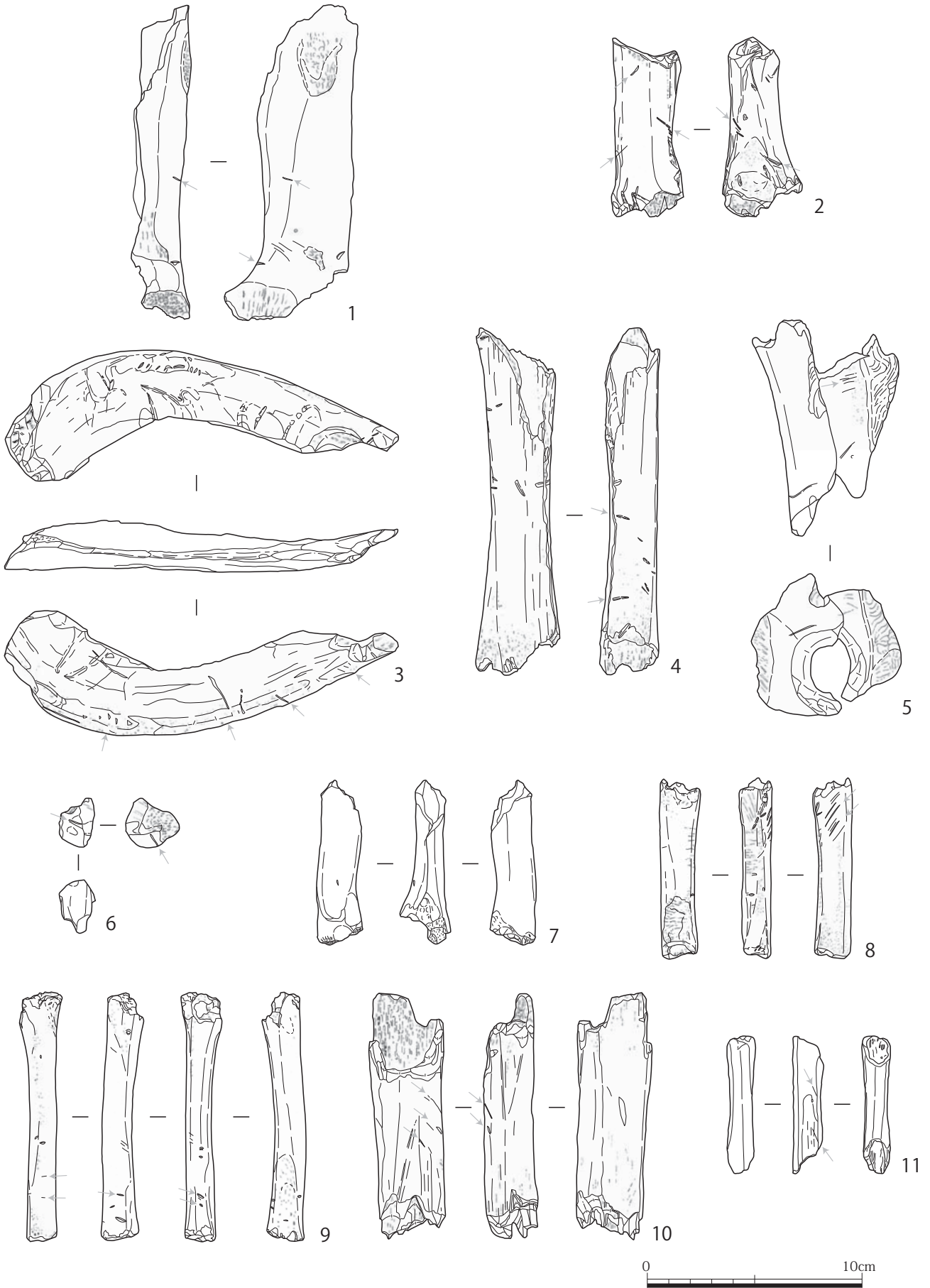
p: 近位, s: 骨体, d: 遠位, fr: 破片

表12 北谷城から出土した脊椎動物遺体の組成

種類	同定標本数(NISP)							最小個体数(MNI)					
	I層	II層	III層	IV層	V層	不明	合計	I層	II層	III層	IV層	V層	合計
フェウキダイ科	1					1	2	1					1
ベラ科			1	3		1	5			1	3		4
アオブダイ属						1	1						-
ハリセンボン科	1		1	1	1		4	1		1	1	1	4
ウミガメ類	1				1	1	3	1				1	2
鳥類・未同定						1	1						-
イヌ	2		1	1			4	1		1	1		3
ネコ						1	1						-
イノシシ/ブタ	26	3	13	26	1	1	70	2	1	1	4	1	9
ウシ	24	9	19	53	4	20	129	1	1	1	3	1	7
ウマ	10	3	2	15	5		35	1	1	1	1	1	5
ウシ/ウマ	12	1	3	15	3	1	35	-	-	-	-	-	-
ヤギ		1					2		1				1
ジュゴン				4			4				1		1
イルカ類				2	1	1	4				1	1	2
合計	77	17	40	120	16	30	300	8	4	6	15	6	39

図1 北谷城から出土した脊椎動物遺体組成の変遷(NISP比)



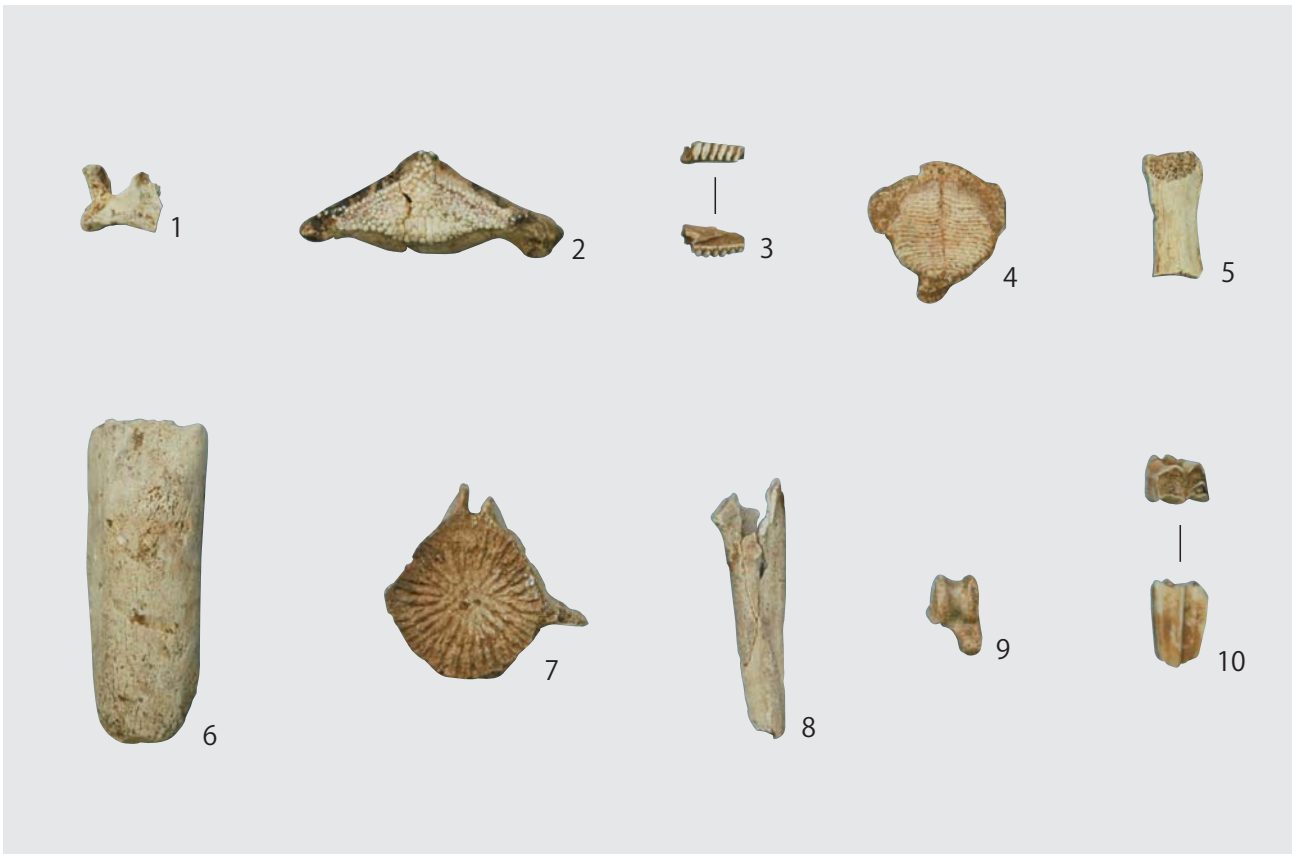


第51図 傷痕のある骨

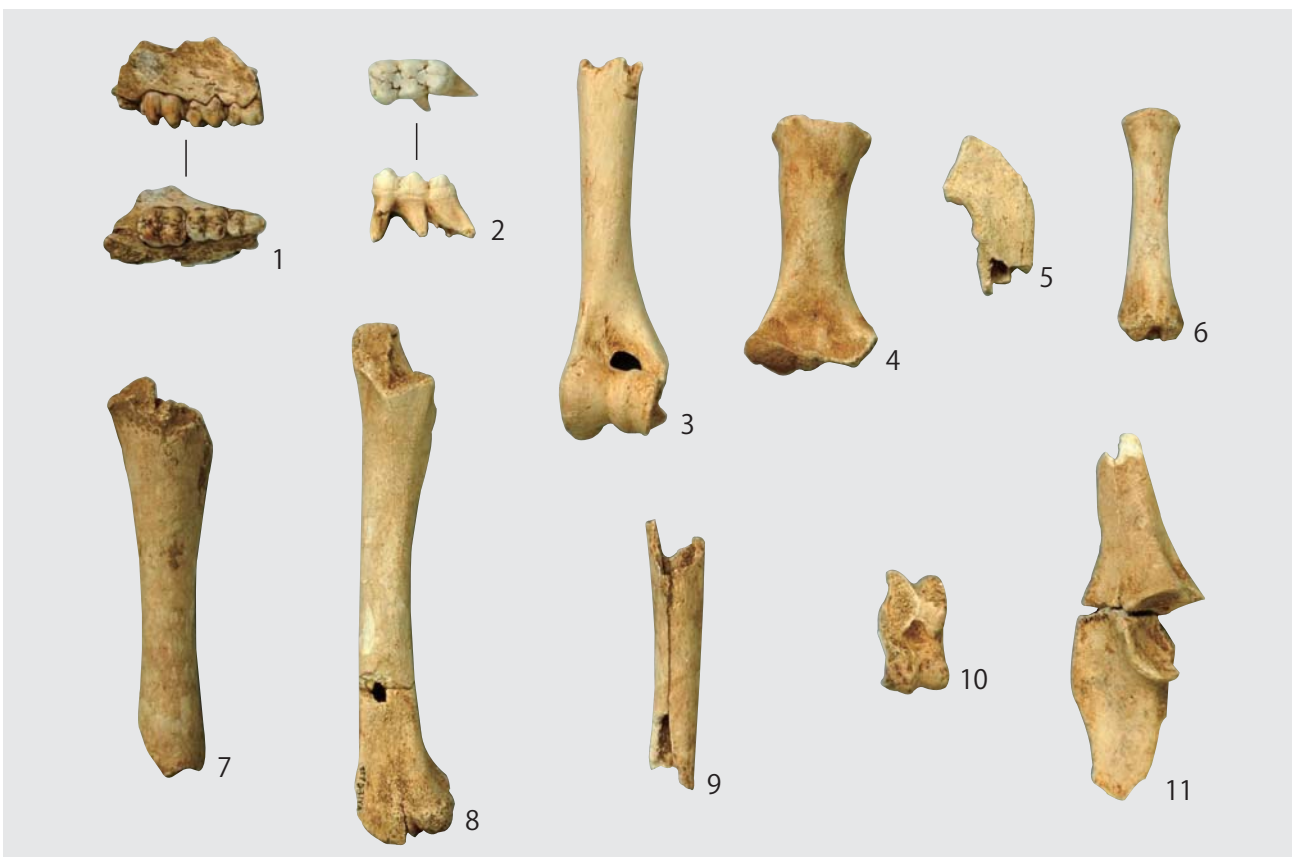


1. ウシ上腕骨 (R) 2. ウシ上腕骨 (L) 3. ウマ下顎角 4. ウシ脛骨 (R) 5. ウシ大腿骨 (R)
 6. イノシシ or ブタ上腕骨 (R) 7. イノシシ or ブタ上腕骨 (R) 8. イノシシ or ブタ大腿骨 (L)
 9. イノシシ or ブタ大腿骨 (R) 10. ウシ or ウマ脛骨 (R) 11. ウシ or ウマ脛骨
 12. イノシシ or ブタ大腿骨 (R)

図版49 傷痕のある骨



図版50 魚類(1.フエフクダイ科主上顎骨 2.ベラ科シロクラベラ型下咽頭骨 3.アオブダイ属上咽頭骨(L) 4.ハリセンボン顎骨) ウミガメ(5.指骨) ジュゴン(6.肋骨) イルカ(7.椎骨) イヌ(8.尺骨(L) 9.距骨(R)) ヤギ(10.上顎(L・白歯))



図版51 イノシシ/ブタ (1.上顎骨(R・dm3.dm4.M1) 2.下顎骨(L・M3) 3.上腕骨(L) 4.ブタ上腕骨(L) 5.尺骨(R) 6.橈骨(L) 7.大腿骨(L) 8.大腿骨(L) 9.脛骨(R) 10.距骨(R) 11.寛骨(R))



図版52 ウシ1 1.下顎骨(L[M1•M2•M3]) 2.下顎枝(R) 3.肩甲骨(R) 4.上腕骨(L) 5.尺骨(R) 6.大腿骨(L)



図版53 ウシ2 1.距骨(L) 2.踵骨(L) 3.基節骨(R) 4.中足骨(L) 5.中手骨 6.中足骨(L) 7.末節骨(R)



図版54 ウマ (1.上顎骨(L・白歯) 2.下顎骨(R・M3) 3.肩甲骨(R) 4.尺骨(L) 5.橈骨(R) 6.橈骨(R)
7.脛骨(R) 8.距骨(R) 9.踵骨(R) 10.中手骨(R))



図版55 ウシ(歯) (1. 上顎歯 (R) 2. 上顎歯 (L) 3. 下顎歯 (R) 4. 下顎歯 (L) 5. 下顎歯 (L・R) 6. 下顎骨吻部 (L・R))

第2節 北谷城の発掘調査で得られた貝類遺体

黒住 耐二（千葉県立中央博物館）

北谷城は、沖縄島中部西海岸の北谷町南部に位置する遺跡である。本城では、これまでに何回かの試掘調査等が行われてきた。今回報告するものは、平成10年から14年にかけて行われた調査時に現地で見視により得られた遺体群（ピックアップ法）であり、土壌資料の水洗選別等のサンプルを含んでいない。本地域では国指定史跡の伊礼原遺跡等、先史時代から連綿と各時期の遺跡が存在しており、今回の報告は人間の貝類利用を時代と遺跡の性格（権力者の居住域とされるグスク）から検討する基礎となるものである。

材料および方法

発掘調査で得られた貝類遺体は、北谷町教育委員会で分類・カウント・集計していただき、一部の同定の困難な標本について再同定を行った。これらの詳細な集計は、表1に示されている。最少個体数は、完形個体数にカウントされた部位のうち最も多かったものを加えて算出した。

結果および考察

今回の調査では、少なくとも海産腹足類22科88種、淡水産腹足類2科4種、陸産腹足類4科5種、海産二枚貝類15科35種の合計、132種が確認された。この種数は、近接した先史時代遺跡と比較すると、少ないものであった。

確認された貝類遺体のトレンチおよび層ごとの詳細を表1に示した。この表には、出土層位の明確なもののみを対象としており、1種のみであるが層位不明のものも含めてある。また、no. 2 トレンチでは、遺構が確認されており（チンガー）、これは別に表記した。

トレンチと層位で出土個体数に大きな差が認められ、I層ではno. 2 トレンチが最も多く、no. 1 トレンチも比較的多かった。II・III層はいずれのトレンチでも比較的少なかった。下部のIV層はno. 3 トレンチで極めて多く、no. 1 トレンチでも多かった。最下部V層の遺体はno. 2 およびno. 3 トレンチで確認されており、no. 3 トレンチに集中していた。

貝類遺体の生息場所類型と優占種を表2に示した。優占種は、出土個体数の少ないチンガー・III層・V層を除いたもののうち、各層等で全体の1%を超える種とした。また、種の同定が行えず、生息場所類型を示せなかったイモガイ類等は、この表の産出から除いた。そのため、表1と比較して、イモガイ類が僅かに過小評価になっている。

全体では、外洋—サンゴ礁域のイノー（礁池：I—2）が4920個体中の66.9%と2/3を占め、内湾—転石域（II）が11.5%、河口干潟—マングローブ域（III）が7.5%、陸域（V）が5.9%と続いていた。各類型の優占種では、イノー内（I—2）のマガキガイが55.2%と全体の半数を占めていた。陸域（V）のオキナワヤマタニシが5.2%、河口干潟（III）のアラスジケマンが4.1%、内湾（II）のカンギクが4%とやや多くみられた。

各層位でも、イノーのマガキガイが最も優占し、内湾・河口干潟がそれに続き、淡水域を除く他の類型は少数という全体と同様な傾向を示した。ただ、詳細に検討すると、上部から下部にかけてイノー内／マガキガイの割合が増加し、最下部のV層ではきわめて高い割合を占めていた。逆に、内湾・河口干潟は下部で低い割合であった。このことは、グスク時代になり、貝類の採集空間が外洋—サンゴ礁域から内湾—転石域あるいは河口干潟—マングローブ域に変化するという沖縄本島各地の状況に類似している。また、クワノミカニモリ（潮間帯上／下部）やイボウミニナ（河口干潟）のような小形で塔型の巻貝類の増加も

表1-1 北谷城からピックアップ法によって得られた貝類遺体のトレンチ/層別出土の詳細

出土地	1トレンチ								2トレンチ								3トレンチ								4トレンチ								生息場所 類型								
	I		II		III		IV		チンガー(B-2/I/II)		I		II		III		IV		V		I		II		III		IV		V		I			II		III		IV			
	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI	詳細	MNI					
海産貝類：腹足綱 リュウテン科	コシダカサザエ									7,1u	8																								I-2-a						
	チョウセンサザエ		1		1		5	1b,1f	2		1	2,1u,1f	4		1		1						5,4u,2b,4f	13			2	1u	1	1	1				I-3-a						
	同(フタ)	1u,1f		1u		2,3u		2u		1		4		1		1u							5,8u		1,1u									I-4-a							
	ヤコウガイ						1																	2f	1										I-4-a						
	同(フタ)					1f																														I-4-a					
	カンギク	1	1	1u	1	2,1f	3	1	1	3,2u,4f	5	126,9b,5f	135											14,12u,6b,7f	36			3u,3b	3	1	1		3,3b	6		4	4	II-1-b			
	同(フタ)	1								1														3u												I-4-b					
リュウテン																							1u	1											I-4-b						
オオウラウス	1	1																																	I-2-a						
ニシキウス科	ニシキウス							1b	1	1,1f	2			1b	1	4f	1					1f	1	1b	1										I-2-a						
	ギンタカハマ						1	1		1	1					1						2f	1												I-2-a						
	サラサバテイラ	3f	1	1u	1	1,3u,3b	4	1,4u,1b,3,4f	5	1,2f	2	2,7u,7f	9	1u,2f	1		1,3u,1b,4f	4					10,15u,8b,6,4f	25											I-4-a						
	オキナワイシダタミ							1	1																											II-1-b					
	アマオブネ科	アマオブネ							1u	1	1,2u	3			1	1	1,1u,2b,1f	3					5,1u,2f	6	1,2f	2										I-1-b					
マルアマオブネ							1	1									2b	2																	II-1-b						
アマオブネ科	アマオブネ科									2u	2																									II-1-b					
オニツノガイ科	オニツノガイ	1,11b,13f	12	2u,3b,11f	3	4u,5b,31f	5	10,8u,35b,37f	45	4,2u,1b,1f	6	6,10u,18b,5f	24	4u,1b	4	1u	1					1	1												I-2-c						
	オニツノガイ									1b	1																									I-2-a					
	クワノミカニモリ					1u,1b	1	1u,1b	1	3,3b	6	33,1u,11b	44	1u	1			6,1u,9b	15	1b	1	1b	1			1,1u,3b	2	1b	1		5,1u,1b	6		1	1		I-1-b				
ウミナナ科	リュウキュウウミナ									1	1																									II-1-c					
	イボウミナ							1,1b	2	2,2u,2b	4	17,69u,15b,95f	86			1		2u,2b				1	1													III-1-c					
ヘナタリ科	カワアイ									1,1u	2	1,5f	2																							III-1-c					
ゴマフニ科	ゴマフニ																																				I-0-a				
スィショウガイ科	ムカシタモト																																			1	1	I-2-c			
	ヤサガタムカシタモト																																			1	1	I-2-c			
	オハグロガイ																																			1	1	II-2-c			
	ヒダトリガイ																	1																		1	1	I-2-c			
	ネジマガキ			4u	4			4u	4	1	2	3,4u	7	1u	1			1u,1b	1					6u,3b	6	1u		1	1							1u	1	II-1-c			
	マガキガイ	3,169u,12b,31f	172	1,126u,15f	127	2,159u,22b,72f	161	28,541u,19b,91f	569	10,51u,3f	61	41,209u,3b,23f	250	27u,1f	27	1,1u,1f	2	10,116u,8b,21f	126	3,1f	4	4,9u,1f	13	3,3u	6	2,26u,3b,3f	28	58,825u,38b,47f	883	23,215u,16b,7f	238	2u	2	1,22u,8f	23	2f	1	1,20u,1b,4f	21		I-2-c
	イボソデ							1,1u,2f	2			1b,1f	1											3u,1b,2f	3														I-2-c		
	マイノソデ																																						I-4-c		
	スィショウガイ							1u	1																														II-2-c		
	クモガイ	2u,4b,12f	4	1u,5f	1	6u,9b,42f	9	2,12u,6b,48f	14	4u,2b,7f	6	1,8u,3b,5f	9	1u,1f	1			4b,9f	4			1u	1			1u,1f	1	1,12u,8b,42f	13	3u,1b,14f	3		2u,2b,5f	2	2b	2	1u,3f	1		I-2-c	
	スィジガイ																							2u,1f	2														I-2-c		
	スィショウガイ科	1f																																							
	タカラガイ科	ハナビラダカラ											1,1ol,3dL	5					1ol	1					1il,1dL	2														I-1-a	
		ハナマルユキ	1il	1					1dL	1			4,1ol,2il,5dL	11	1,1ol	2			2ol,2il,1dL	3					1il	1	1ol	1												I-3-a	
ヤクシマダカラ																								1ol	1																I-2-a
ホシキヌタ														1,1il,1dL	3																										I-2-a
ホシダカラ		2f	1					1f	1																											1f	1				I-2-c
タカラガイ科							1dL,1f	1			1ol,1il,1f						1u						1ol,1il,1f	1	2ol,1il,1f	2															
タマガイ科	ホウシュノタマ									2	2	1,1u	2																												II-1-c
	トミガイ			1u	1							1,1u	2					1	2					1b	1	1b	1		1	1										I-2-c	
	ヘソアキトミガイ							1	1			8	8					1u	2					1,2u	3																I-2-c
	シロヘソアキトミガイ							1u	1																																I-2-c
	リスガイ	1b	1			1,1u	2					6,1b	7					1b	1			2	2							1,1u,1f	2			2	2				I-2-c		
クワイロリスガイ																							1u	1																I-2-c	
フジツガイ科	シオボラ											3	3																							2b	1				I-2-a
	ミツカドボラ			1b	1			2f	1			3,1u,2b	5					2b	2			1b,1f	1			3b,1f	3							1b	1				I-2-a		
	シノマキ																																			1b	1				I-4-a
	フジツガイ科							1b	1																																
ホラガイ	1f	1																																						I-4-a	
オキニシ科	オキニシ																																								

グスク時代に顕著な傾向で、本遺跡でも上部のⅡ層まで両種の割合が高く、この出土傾向と一致していた。ただ、サンゴ礁域のマガキガイは多かったものの、同じ海域のシャコガイ類や干瀬（リーフ：Ⅰ－3）のチョウセンサザエ・礁斜面（Ⅰ－4）のサラサバテイラがかなり少なかったことも明瞭であった。同様に、各地のグスクから少数ながら出土することが多く、様々な用途に用いられるヤコウガイが本遺跡では得られていたものの極めてまれであったことや魚網の錘（貝錘）に用いられることのある中形タカラガイ類のハナマルユキも僅かしか認められない等の結果も特徴的であった。

また、図1に計測可能であったアラスジケマンの殻長組成を示したが、個体数が少なく明瞭ではないものの、30-35mmにピークを有する可能性が高いようであった。本種の沖縄島各地の遺跡出土個体のサイズに関しては、先に述べたが（黒住，2009）、グスク時代になると小形化する傾向があるものの、本遺跡では小形化はそれ程顕著でない可能性もあった。優占種がマガキガイであり、アラスジケマンには大きな捕獲圧がかからなかったためかもしれない。

今回の下部から上部にかけてのサンゴ礁域生息種の減少は、沖縄本島北部の今帰仁城跡（黒住，1991）で顕著であり、近接地域でも北谷町の伊礼原D遺跡でも示されている（黒住，2008）。さらに北谷町のグスク時代遺跡の後兼久原遺跡（黒住，2003）や伊礼原D遺跡（黒住，2008）と、本遺跡の上部の組成は極めて類似していることも指摘できる。逆に、北谷城跡に隣接した玉代勢原遺跡ではマガキガイは極めて少ない点で大きく異なっていた（黒住，1993）。今後、今回の発掘地点の内容等を加味して、他遺跡との比較を行うことによって、貝類利用の在り方をより詳細に議論できるものと考えられる。

謝辞：種々御教示下さった島袋春美氏、検討の機会を与えて頂き、また分類・集計等でもお世話になった北谷町教育委員会の方々には御礼申し上げます。本報告の一部には、文部科学省科学研究費（課題番号21101005）を用いた。

<引用文献>

- 黒住耐二．1991．貝類遺存体．In 金武正紀ら（編），今帰仁城跡発掘調査報告書，Ⅱ，今帰仁村文化財調査報告書，(14): 340-351.
 黒住耐二．1993．貝類遺存体．In 中村 愿（編），玉代勢原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(13): 287-293.
 黒住耐二．2003．貝類遺体．In 山城安生・島袋春美（編），後兼久原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(21): 264-268.
 黒住耐二．2008．伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体．In 東門研治・島袋春美（編），伊礼原D遺跡，北谷町文化財調査報告書，(28): 168-183, 197-200.
 黒住耐二．2009．小堀原遺跡から出土した貝類遺体．In 東門研治・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(30): 201-212.

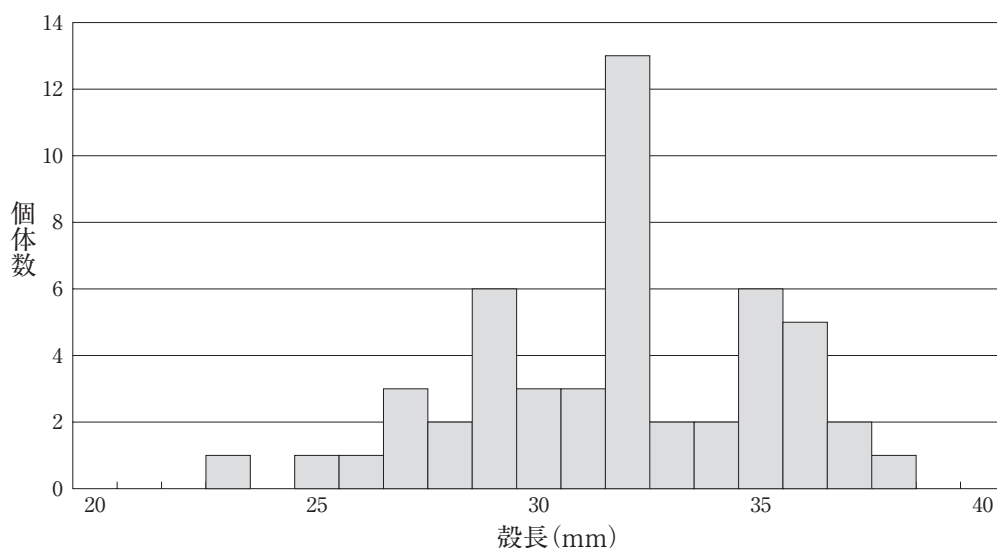


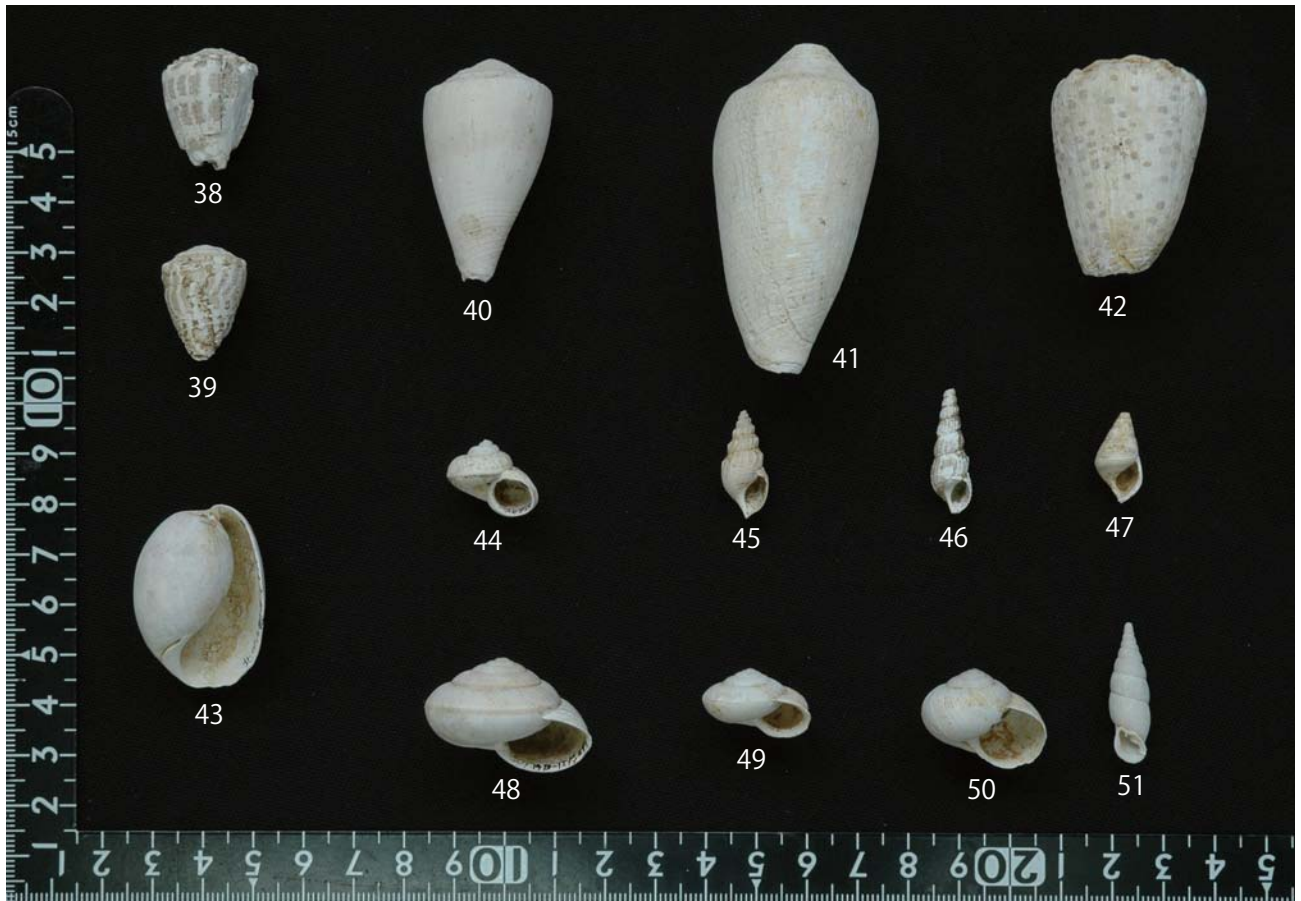
図1 北谷城のアラスジケマン殻長組成

表2 北谷城における生息場所類型および優占種組成

	全体 (N = 4920)		I層 (N = 1281)		チンガー (B-2G) (I / II層: N = 146)		II層 (N = 401)		III層 (N = 327)		IV層 (N = 2457)		V層 (N = 308)	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
外洋-サンゴ礁域/潮間帯上/中部 (I-0/1)	138	2.8	60	4.7	9	6.2	13	3.2	7	2.1	44	1.8	5	1.6
クワノミカニモリ		1.6		3.5		4.1		1.7		0.3		0.8		0.6
外洋-サンゴ礁域/イノー (I-2)	3291	66.9	591	46.1	88	60.3	222	55.4	236	72.2	1885	76.7	269	87.3
マガキガイ		55.2		34.1		41.8		45.6		58.7		65.1		78.6
オニノツノガイ		2.3		2.8		4.1		0.7		1.8		2.4		0.3
イトマキボラ		1.3		0.7		2.1		0.7		0.9		1.8		0.3
クモガイ		1.4		1.1		4.1		1.0		3.7		1.3		1.0
外洋-サンゴ礁域/干瀬 (I-3)	133	2.7	33	2.6	6	4.1	13	3.2	8	2.4	64	2.6	9	2.9
チョウセンサザエ		0.8		0.5		0.7		1.0		1.8		0.8		1.0
外洋-サンゴ礁域/礁斜面 (I-4)	75	1.5	17	1.3	2	1.4	4	1.0	6	1.8	44	1.8	2	0.6
サラサバテイラ		1.1		0.8		1.4		0.5		1.2		1.4		0.0
内湾-転石域 (II)	564	11.5	233	18.2	21	14.4	60	15.0	19	5.8	215	8.8	16	5.2
カンギク		4.0		10.6		3.4		1.7		0.9		1.8		0.3
リュウキュウサルボオ		2.2		1.4		1.4		3.2		2.4		2.6		0.3
スダレハマグリ		1.4		2.0		0.7		1.5		0.6		1.2		2.6
ヌノメガイ		1.0		0.7		2.7		1.5		0.6		1.2		0.3
ネジマガキ		0.5		0.6		1.4		1.2		0.0		0.4		0.0
リュウキュウシラトリ		0.1		0.2		0.0		1.5		0.0		0.0		0.0
河口干潟-マングローブ域 (III)	367	7.5	150	11.7	20	13.7	31	7.7	17	5.2	144	5.9	5	1.6
アラスジケマンガイ		4.1		4.1		8.2		6.0		3.1		4.2		1.0
イボウミニナ		1.9		6.8		2.7		0.0		0.0		0.1		0.0
シレナシジミ		1.2		0.5		1.4		1.7		1.5		1.5		0.6
淡水域 (IV)	55	1.1	32	2.5	0	0.0	10	2.5	8	2.4	5	0.2	0	0.0
カワニナ		0.7		1.4		0.0		2.2		1.2		0.2		0.0
陸域 (V)	291	5.9	162	12.6	0	0.0	47	11.7	26	8.0	55	2.2	1	0.3
オキナワヤマタニシ		5.2		11.3		0.0		9.2		6.7		2.0		0.3
シュリマイマイ		0.5		0.9		0.0		1.5		1.2		0.1		0.0
その他 (VI:化石)	6	0.1	3	0.2	0	0.0	1	0.2	0	0.0	1	0.0	1	0.3



図版 56 貝類 1 (巻貝)



図版 57 貝類 2 (上：巻貝 下：二枚貝)



図版 58 貝類 3 (二枚貝)

図版 56 貝類 1

1. チョウセンサザエ 2. チョウセンサザエのフタ 3. カングク 4. オオウラウズ 5. コシダカサザエ
 6. リュウテン 7. ニシキウズ 8. サラサバティラ 9. オニノツノガイ 10. クワノミカニモリ
 11. イボウミニナ 12. カワアイ 13. ネジマガ 14. マガキガイ 15. マイノソデ 16. オハグロガイ
 17. ムカシタモト 18. ハナビラダカラ 19. ハナマルユキ 20. トミガイ 21. ヘソアキトミガイ
 22. シロヘソアキトミガイ 23. リスガイ 24. ホウシュノタマ 25. ミツカドボラ 26. シオボラ 27. オキニシ
 28. シラクモガイ 29. ツノレイシ 30. アカイガレイシ 31. シロイガレイシ 32. フトコロガイ
 33. シマベッコウバイ 34. イボヨフバイ 35. イトマキボラ 36. ツノマタモドキ 37. オオミノムシ

図版 57 貝類 2

38. マダライモ 39. ゴマダライモ 40. ヤナギシボリイモ 41. アジロイ 42. ゴマファイモ 43. ナツメガイ
 44. オキナワヤマタニシ 45. トウガタカワニナ 46. ヌノメカワニナ 47. カワニナ 48. シュリマイマイ
 49. パンダナマイマイ 50. オキナワウスカワマイマイ 51. ツヤギセルガイ 52. エガイ 53. クロミノエガイ
 54. リュウキュウサルボオ 55. シュモクアオリ 56. トウキョウホタテ (化石) 57. イタヤガイ科 a
 58. イタヤガイ科 b (化石) 59. メンガイ 60. オハグロガキ 61. シロザル 62. キクザルガイ科

図版 58 貝類 3

63. ヒメジャコ 64. オオシラナミ 65. ナガジャコ 66. イソハマグリ 67. リュウキュウシラトリ
 68. マスオガイ 69. ヌノメガイ 70. アラヌノメガイ 71. アラスジケマンガイ 72. ユウカゲハマグリ
 73. トュデュマルハマグリ

第3節 沖縄県北谷町北谷城出土のグスク時代人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】：沖縄県、グスク時代人骨、仰臥屈葬、男性、中頭型、高顔、低身長

はじめに

沖縄県中頭郡北谷町字大村に所在する北谷城^{ちやたんぐすく}の1998年(平成10年)におこなわれた第14次調査で、人骨が1体(98-01人骨)出土した。城門から東側にノロ道やグスク南側にある北谷・伝道・玉代勢集落から上り下りした道の確認をおこなうためにグスクの中腹と丘陵麓の調査をおこなったところ、麓から平坦地に広がる部分でチンガーが検出され、その東側で1体の埋葬人骨が検出された。

沖縄県でグスクから出土した人骨としては、勝連城、浦添城のほかには北谷町の後兼久原遺跡^{くしかにくぼる}と大里村の大里城跡がある。勝連城からは幼児骨1体が、浦添城からは女性骨1体が、後兼久原遺跡からは4体の人骨が(松下、2003)、大里城跡からは男性骨1体が出土している(松下、2001a)。

1988年の伊礼原B遺跡の発掘調査で6体分の散乱骨が出土したが、1体は縄文人骨で、残りの5体はグスク時代(15～16世紀)の人骨であった。グスク時代人骨はすべて頭蓋片で、頭型や顔面の形態を知ることではできなかったが、1例(男性)は外後頭隆起が九州の武家層に属する近世人骨なみに、著しく発達していた(松下・他、1989)。

宮古八重山の例としては、石垣貝塚から15～16世紀の人骨が(松下、1993a)、平川貝塚から15世紀後半の人骨が出土している(松下、1993b)。

グスク時代は、『沖縄県史各論編2考古(264頁)』によれば、「グスクと称する考古学上の城塞的遺構を象徴して名づけられた時代をいう。この時代の開始期や終末期の年代についての見解は一致していないが、おおよそ12世紀後半から15、16世紀頃までを指し、日本本土の平安時代末から室町時代、安土桃山時代に相当する」という。本土(九州・四国・本州)では古代に属する人骨の出土例はきわめて少なく、保存状態も悪い。中世人骨は最近かなり出土例が多くなって来たとはいえ、やはり保存状態の良好な中世人骨は少ない。

今回、本遺跡から出土した中世人骨はほとんどの部位が残存しており、骨質はやや堅牢で、計測も可能で、沖縄県のグスク時代人骨と本土の中世人と比較してみたところ、興味ある所見が得られたので、その結果を報告しておきたい。

資 料

1998年の調査では埋葬人骨1体(98-01)と下顎骨1点出土した。前者はほぼ全身骨が残っており、埋葬姿勢は仰臥で、両側の膝関節は強屈状態で大腿骨が腹部の上に載った状態の屈葬である。右側肘関節は約45度に屈曲していたが、左側は調査時にその様態を確認することができなかった。

98-01人骨は後述している所見から熟年の男性骨で、考古学的所見から12世紀に属するグスク時代人骨である。98-MA-1は男性の下顎骨で、検出状況から近世人骨(風葬骨)と推測されている。なお、年齢区分は表2に示すとおりである。

*Takayuki MATSUSHITA、**Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

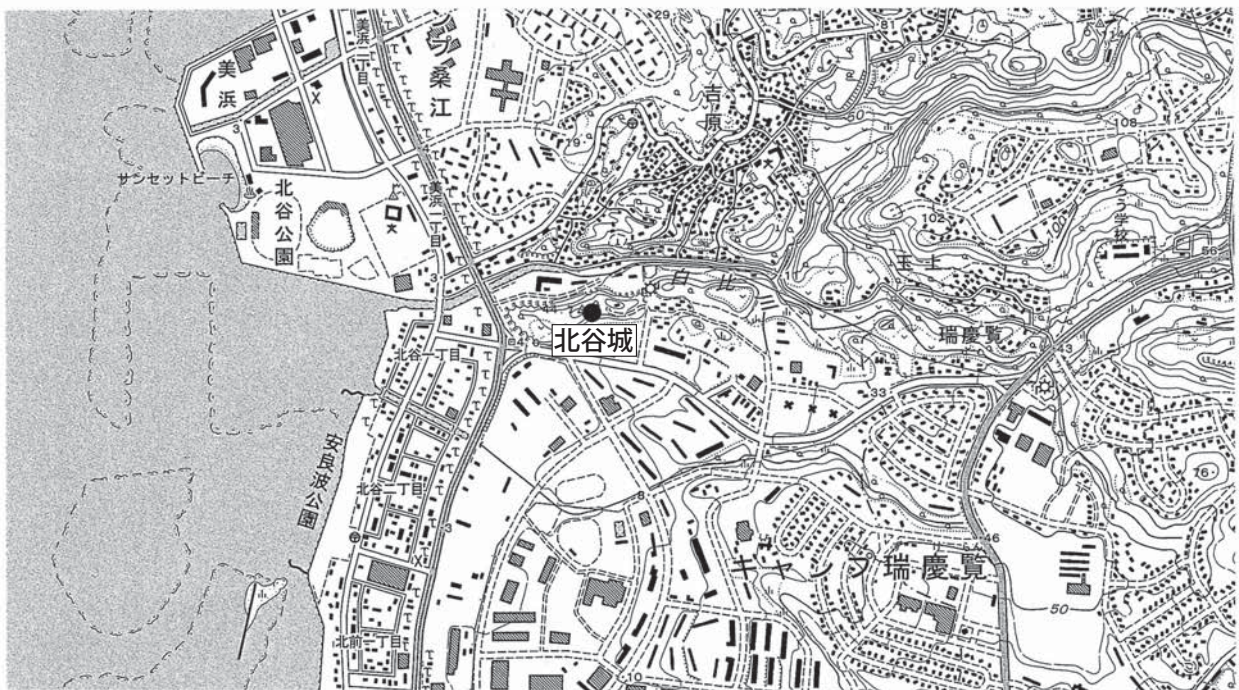


図1 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1 Location of the place of 14th excavation of the Chatan-gusuku, Chatan Cho, Okinawa Prefecture)

表 1 出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考 (時代、埋葬姿勢、推定身長値)
98-01	男性	壮年	12世紀、仰臥屈葬、154.20cm
98-MA-1	男性	不明	近世、下顎骨のみ

表 2 年齢区分 (Table 2. Division of age)

	年齢区分	年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌直前まで)
	小児	6才～15才 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所 見

98-01 人骨の残存部は図 2 に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

98-01 人骨 (男性・壮年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

ほぼ完全である。骨壁は厚くはないが、堅牢である。外後頭隆起の発達は良好で、乳様突起も大きい。外耳道は両側とも観察できたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合とも内外両板が開離している。また前頭縫合が認められる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が 178mm、頭蓋最大幅は 142mm であるが、バジオン・ブレグマ高は計測できない。頭蓋長幅示数は 79.78 となり、頭型は短頭に近い中頭型である。また、頭蓋水平周は 518mm、横弧長は 320mm、正中矢状弧長は 370mm である。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は右側上顎骨の一部を欠損しているが、ほとんど完全である。眉上弓はやや隆起している。鼻骨の隆起は弱く、鼻骨は広く、長い。鼻根部は扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が 141mm、中顔幅は 103mm、顔高は 121mm、上顔高は 69mm で、顔示数は 85.82 (K)、117.48 (V)、上顔示数は 48.94 (K)、66.99 (V) となり、顔面には高顔傾向が認められる。

眼窩幅は 44mm (右)、41mm (左)、眼窩高は 33mm (右)、32mm (左) で、眼窩示数は 75.00 (右)、78.05 (左) となり、右側は低眼窩 (chamaekonch) に、左側は中眼窩 (mesokonch) に属している。

鼻幅は 26mm、鼻高は 54mm で、鼻示数は 48.15 となり、中鼻 (mesorrhin) に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が 24mm、鼻根横弧長は 26mm、鼻根彎曲示数は 92.31 となり、鼻根部は扁平である。鼻骨最小幅は 12mm で広く、前頭突起水平傾斜角は 115 度を示し、前頭突起の向きは前額方向である。鼻根角は 140 度、鼻根陥凹示数は 13.33 で、鼻骨の隆起は弱い。鼻頬骨角は 152 度で、この角度は大きく、顔面扁平示数は 12.00 である。

側面角は、全側面角が 88 度、鼻側面角が 90 度、歯槽側面角は 79 度で、歯槽性突顎の傾向はほとんど認められない。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8	7	6	5	4	3	②	①	①	②	3	4	5	6	7	⑧
⑧	7	6	5	4	③	②	①	①	②	③	4	5	6	7	8

[○: 歯槽開存、番号は歯種類]

[1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯]

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) で、咬耗は弱い。なお、風習的抜歯は認められない。前歯群が死後脱落し、残存していないので、歯の咬合形式は不明である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①鎖骨

両側が残存していた。長さは長く、径も大きい。

②上腕骨

両側とも完全である。長さはそれほど長くない。骨体の径は大きく、三角筋粗面の発達も良好である。計測値は、最大長が 292mm(右)、296mm(左)、骨体最小周は 64mm(右)、62mm(左)、中央周は 72mm(右)、68mm(左) で、長厚示数は 21.92(右)、20.95(左) で、右側骨体はやや頑丈である。また、中央最大径は 26mm(右)、24mm(左)、中央最小径は 18mm(右)、17mm(左) で、骨体断面示数は 69.23(右)、70.83(左) となり、骨体には強い扁平性が認められる。

③橈骨

両側とも遠位端を欠損している。長さはやや長く、骨体も大きい。骨間縁はシャープである。

④尺骨

両側とも両端を欠損しているが、骨体は大きく、骨間縁の発達は良好である。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

左右とも恥骨を欠損している。寛骨臼は大きく、大坐骨切痕の角度は小さい。

②大腿骨

左右とも完全である。長さはあまり長くはない。粗線の発達は悪いが、骨体両側面の後方への発達は良好で、骨体上部の扁平性は弱い。

計測値は、最大長が 402mm(右)、405mm(左)、骨体中央周は 84mm(右)、83mm(左) で、長厚示数は 21.00(右)、20.75(左) となり、骨体はあまり頑丈ではない。骨体中央矢状径は 27mm(右)、28mm(左)、横径は 25mm(右)、24mm(左) で、骨体中央断面示数は 108.00(右)、116.67(左) となり、骨体両側面の後方への発達は良好である。また、骨体上横径は 29mm(右)、30mm(左)、骨体上矢状径は 25mm(右)、24mm(左) で、上骨体断面示数は 86.21(右)、80.00(左) となり、骨体上部の扁平性は弱い。

③脛骨

右側は近位端を、左側は両端を欠損している。長さは長くはないが、骨体は大きい。前縁はやや鋭く、ヒラメ筋線の発達は悪いが、骨体後面上部には稜がみられる。骨体の断面形は、右側はヘリチカのⅣ型を、左側はⅡ型を呈している。

計測値は、中央最大径が 29mm(左右)、中央横径は 21mm(左右)で、中央断面示数は 72.41(左右)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 81mm(右)、80mm(左)、最小周は 74mm(右)、73mm(左)で、骨体は太い。

④腓骨

左側が残存していた。長さは短い、骨体の径はかなり大きく、稜の発達は良好で、溝も深い。

4. 推定身長値

大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 156.88cm、(Pearson、右)、157.45cm(Pearson、左)、154.20cm(藤井、右)、154.81cm(藤井、左)となり、上腕骨最大長からは 155.15cm(Pearson、右)、156.30cm(Pearson、左)、154.71cm(藤井、右)、156.68cm(藤井、左)となり、いずれも低身長である。

5. 性別・年齢

性別は、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が小さいことから、男性と推定した。年齢は、三主縫合の内外両板がまだ開離していることから、壮年と考えられる。

98-M A-1(男性・年齢不明)

下顎骨のみである。右側下顎枝は大部分を、左側下顎枝は下顎頭と筋突起を欠損している。黄色混礫土層から出土したことから、近世人骨(風葬骨)と思われる。径は大きい、下顎体の高径は低い。下顎枝はそれほど幅広くなく、後傾している。咬筋粗面の発達はやや良好で、浅い角前切痕が認められる。下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② / / / ③ / ⑤ ⑥ 7 8

●: 歯槽開存 ○: 歯槽開存 /: 不明 番号は歯種

[1: 中切歯、2: 側切歯、3: 犬歯、4: 第一小臼歯、5: 第二小臼歯、6: 第一大臼歯、7: 第二大臼歯、8: 第三大臼歯]

咬耗度は、第一大臼歯は Broca の 2 度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)で、第三大臼歯は 1 度(咬耗がエナメル質のみ)である。

下顎骨の径が大きいことから性別を男性と推断した。下顎枝が後傾していることから、壮年とは考えがたいが、一応年齢は不明としておきたい。

考 察

グスク時代人骨は保存状態が良好だったので、沖縄本島のグスク時代人骨である大里城(大里町)、テラガマ洞穴(宜野湾市)、後兼久原(北谷町)、八重山の例として石垣貝塚(石垣市)のほかに本土の尾窪(熊本県城南町)、吉母浜(山口県下関市)、由比ヶ浜南(神奈川県鎌倉市)、材木座(神奈川県鎌倉市)と比較してみた。

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

表 3 は男性の脳頭蓋の計測値比較表である。本例の頭蓋長幅示数は 79.78 となり、頭型は短頭に近い中頭型に属している。頭蓋長幅示数は大里城よりも大きい、石垣 B より小さく、石垣 A にほぼ一致する。沖縄県内のグスク時代人骨の頭型をみると、大里城が長頭型に、石垣 B は短頭型に、北谷城と石垣 A が短頭に近い中頭型に属しており、一見変異が大きいように見えるが、石垣貝塚の中世人と本例が短頭に傾いているのに反し、大里城は長頭型である。熊本県の尾窪は中頭型に、山口県下関市の吉

母浜と神奈川県鎌倉材木座は長頭型に、同じく鎌倉市の由比ヶ浜南は長頭に近い中頭型であるが、日本本土の中世人の頭型は、基本的には長頭型か、長頭型に傾いていると考えてよい。現在のところ沖縄県で中世人の頭型がわかるものは4例しかない。そのうちの1例(大里城)は本土と同じように長頭型を示しているが、残りの3例は短頭に傾いており、日本本土の中世人の傾向と異なる様相が認められる。

(2) 顔面頭蓋

表3 脳頭蓋計測値 (男性、mm)(Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices)

		北谷城 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下・他)		大里城 グスク時代人 沖縄県 大里村 (松下)		石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)		石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)		尾 窪 中世人 熊本県 城南町 (内藤)		吉母浜 中世人 山口県 下関市 (中橋・他)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)		鎌倉材木座 中世人 神奈川県 鎌倉市 (鈴木・他)	
		98-01	1号	A	B	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	178	188	168	172	2	170.00	6	184.33	16	181.8	79	184.43	170	184.2		
8.	頭蓋最大幅	142	139	134	143	2	138.50	1	138	17	136.2	85	138.28	164	136.5		
17.	バジオン・プレグマ高	-	-	134	-	1	134	4	136.50	17	139.4	61	138.11	96	137.2		
8/1	頭蓋長幅示数	79.78	73.94	79.76	83.14	2	81.45	1	77.09	16	74.9	79	75.05	164	74.2		
17/1	頭蓋長高示数	-	-	79.76	-	1	79.76	4	74.80	16	76.8	58	74.59	94	75.0		
17/8	頭蓋幅高示数	-	-	100.00	-	1	100.00	1	99.28	17	102.5	61	99.78	93	99.8		
1+8+17/3	頭蓋モズルス	-	-	145.33	-	1	145.33	1	151.33	-	-	59	153.40	-	-		
23.	頭蓋水平周	518	-	-	513	1	513	2	513.00	16	517.2	71	524.80	151	516.9		
24.	横弧長	320	313	290	298	2	294.00	1	310.00	17	313.8	81	310.83	127	309.4		
25.	正中矢状弧長	370	395	354	-	1	354	5	384.40	17	377.5	62	379.56	111	373.7		

表4は顔面頭蓋の比較表である。頬骨弓幅は141mmで、石垣Bよりは小さいが、石垣Aよりは大きい。また、吉母浜、由比ヶ浜南、鎌倉材木座の各平均値よりは小さい。中顔幅は103mmで、石垣Aと大差ない。また、尾窪、吉母浜、鎌倉材木座よりもわずかに大きく、由比ヶ浜南に近い。顔高は121mmで、表4では最大値となり、顔の高さは高い。上顔高は69mmで、吉母浜と大差なく、他の資料よりは大きい。顔示数は、コルマンの顔示数が85.82で、石垣Aよりは大きく、吉母浜、由比ヶ浜南、鎌倉材木座と大差ない。ウイルヒョーの顔示数は117.48で、表4では石垣Bに次いで大きく、吉母浜に近い値である。上顔示数は、コルマンの上顔示数が48.94で、やはり石垣Aよりは大きい、吉母浜よりは小さく、由比ヶ浜南、鎌倉材木座と大差ない。ウイルヒョーの上顔示数は66.99で、表4では石垣B、吉母浜に次いで大きく、吉母浜と大差ない。すなわち本例の顔面のプロポーシオンは石垣A、尾窪とは異なり、吉母浜、由比ヶ浜南、鎌倉材木座に近い。ではそのプロポーシオンとは、どのようなものであるのかを、弥生人との比較でみてみよう。「高・狭顔」の例である土井ヶ浜弥生人と「低・広顔」の例である西北九州弥生人の示数値と比較してみると理解しやすい。コルマンの顔示数は、土井ヶ浜が88.5、西北九州は84.60で、本例は85.82であるから、後者に近いが、85.00を超えているので、高顔タイプの下限にあると判断してよい。コルマンの上顔示数は、土井ヶ浜が51.9、西北九州は49.31で、本例は48.94となり、この示数値も西北九州弥生人に近い。顔高が121mm、上顔高も69mmあり、この値はけっして小さくないが、頬骨弓幅が141mmもあり、顔の幅が広いので示数値が小さくなっている。本例の顔示数(K)と上顔示数(K)は吉母浜、由比ヶ浜南、鎌倉材木座に近いので、日本本土の中世人の顔のプロポーシオンも高顔タイプの下限で、上顔は低上顔である。

表5は鼻根部の比較表である。鼻根彎曲示数は92.31となり、表5では最大値を示し、前頭突起水平傾斜角は115度で、これも表5では最大値で、鼻根部はかなり扁平であることがわかる。また、鼻根角は140度で、テラガマ洞穴1号、由比ヶ浜南よりもわずかに小さく、鼻骨はわずかに両者よりも隆起している。

表4 顔面頭蓋 (男性、mm、度) (Table 5. Comparison of male facial measurements and indices)

		北谷城	テラガマ洞穴	後兼久原	大里城	石垣貝塚	尾 窪	吉母浜	由比ヶ浜南	鎌倉材木座					
		グスク時代人 沖繩県 北谷町 (松下・他)	グスク時代人 沖繩県 宜野湾市 (松下)	グスク時代人 沖繩県 北谷町 (松下)	グスク時代人 沖繩県 大里村 (松下)	中世人 沖繩県 石垣市 (松下)	中世人 熊本県 城南町 (内藤)	中世人 山口県 下関市 (中橋・他)	中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)	中世人 神奈川県 鎌倉市 (鈴木・他)	n	M			
		98-01	1号	2号	1号	A	B	n	M	n	M	n	M		
40.	顔長	-	-	-	-	97	-	4	97.50	14	100.6	43	100.86	66	102.0
45.	頬骨弓幅	141	-	-	-	135	[148]	-	18	135.2	35	137.74	96	134.8	
46.	中顔幅	103	-	-	-	[104]	[104]	2	100.00	19	100.3	53	104.19	107	101.8
47.	顔高	121	-	-	-	105	129	6	113.33	11	117.3	31	118.00	48	115.8
48.	上顔高	69	-	-	(65)	63	76	7	63.57	15	69.9	53	67.28	119	64.7
47/45	顔示数 (K)	85.82	-	-	-	77.78	[87.16]	-	11	86.4	17	85.53	37	86.1	
48/45	上顔示数 (K)	48.94	-	-	-	46.67	[51.35]	-	16	51.7	29	48.52	87	49.6	
47/46	顔示数 (V)	117.48	-	-	-	[101.00]	[124.04]	2	112.33	11	116.5	24	112.13	43	113.9
48/46	上顔示数 (V)	66.99	-	-	-	[60.58]	[73.08]	2	61.68	16	69.8	42	64.05	97	65.6
40+45+47/3	顔面モズルス	-	-	-	-	112.33	-	-	-	-	-	16	118.56	20	116.8
50.	前眼窩間幅	21	16	-	-	17	-	3	19.67	18	18.8	57	18.12	108	19.1
44.	両眼窩幅	98	-	-	-	-	-	1	95.00	19	98.7	43	100.02	101	100.0
50/44	眼窩間示数	21.43	-	-	-	-	-	-	-	-	-	44	18.12	90	19.2
51.	眼窩幅 (左)	41	-	(40)	-	39	-	-	18	42.0	57	43.37	111	43.1	
52.	眼窩高 (左)	32	-	33	-	31	-	-	18	34.4	58	33.31	99	33.7	
52/51	眼窩示数 (左)	78.05	-	(82.50)	-	79.49	-	-	18	82.1	51	77.30	96	78.2	
54.	鼻幅	26	-	-	-	24	-	6	26.50	17	26.0	52	26.12	122	26.6
55.	鼻高	54	-	-	-	48	-	7	49.00	16	51.4	58	52.07	121	51.1
54/55	鼻示数	48.15	-	-	-	50.00	-	6	54.04	16	50.4	50	50.87	113	52.1
72.	全側面角	88	-	-	-	78	-	6	83.08	15	82.5	51	83.55	73	81.7
73.	鼻側面角	90	-	-	-	82	-	6	92.00	15	87.0	54	86.24	79	88.6
74.	齒槽側面角	79	-	-	-	59	-	6	61.50	14	65.2	51	74.59	68	60.3

表5 鼻根部 (男性、mm、度) (Table 6. Comparison of male nasal root measurements and indices)

		北谷城	石垣貝塚	テラガマ洞穴	尾 窪	吉母浜	由比ヶ浜南	鎌倉材木座				
		グスク時代人 沖繩県 北谷町 (松下・他)	中世人 沖繩県 石垣市 (松下)	グスク時代人 沖繩県 宜野湾市 松下	中世人 熊本県 城南町 (内藤)	中世人 山口県 下関市 (中橋・他)	中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)	中世人 神奈川県 鎌倉市 (鈴木・他)	n	M		
		98-01	A	1号	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	24	17	16	3	19.67	3	18.7	58	18.09	108	19.1
50A.	鼻根横弧長	26	20	21	-	-	3	21.0	48	20.98	-	-
50/50A	鼻根彎曲示数	92.31	85.00	76.19	-	-	3	88.4	48	86.90	-	-
57.	鼻骨最小幅	12	7	10	-	-	3	8.0	52	8.00	108	8.0
44.	両眼窩幅	-	-	-	1	95.00	-	-	46	100.02	101	100.0
50/44	眼窩間示数	-	-	-	-	-	-	-	44	18.12	90	19.2
a.	前頭突起上幅 (右)	13	10	11	-	-	3	9.3	65	10.55	-	-
	(左)	13	9	10	-	-	3	9.2	62	10.29	-	-
b.	前頭突起水平傾斜角	115	-	-	-	-	3	96.3	53	95.74	-	-
c.	G-N投影距離	3	-	12	-	-	-	-	63	3.02	-	-
d.	鼻根角	140	-	142	-	-	-	-	35	145.00	-	-
e.	G-R距離	30	-	32	-	-	-	-	35	33.20	-	-
f.	垂線高	4	-	5	-	-	-	-	35	4.63	-	-
f/e	鼻根陥凹示数	13.33	-	15.63	-	-	-	-	35	14.11	-	-
77.	鼻頬骨角	152	-	144	-	-	-	-	64	148.23	-	-
Fa	f mo間距離	100	-	109	-	-	-	-	64	96.16	-	-
Fh	垂線高	12	-	18	-	-	-	-	64	13.78	-	-
Fh/Fa	顔面扁平示数	12.00	-	16.51	-	-	-	-	64	14.05	-	-

2. 四肢骨

①上腕骨

表6は上腕骨の比較表である。最大長は292mmで、表6では最小値となり、長さは短い。中央周は72mm、最小周は64mmで、中央周は表6ではテラガマ洞穴HU-4、後兼久原に次いで大きく、骨体は太い。長厚示数は21.92で、この示数値も表6では最大値であるが、吉母浜にもっとも近い値で、比較的骨体は頑丈である。骨体断面示数は69.23で、表6では最小値となり、骨体はかなり扁平である。

表6 上腕骨計測値 (男性、右、mm)(Table 7. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

		北谷城 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下・他)		テラガマ洞穴 グスク時代人 沖縄県 宜野湾市 松下		大里城 グスク時代人 沖縄県 大里村 (松下)		石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)		後兼久原 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下)		吉母浜 中世人 山口県 豊浦町 (中橋・他)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)	
		98-01	1号	HU-4	1号	n	M	1号	n	M	n	M	n	M	
1.	上腕骨最大長	292	-	-	-	2	302.00	-	16	295.8	19	309.21			
2.	上腕骨全長	289	-	-	-	2	298.50	-	16	291.4	21	302.95			
5.	中央最大径	26	19	29	23	4	22.75	27	20	22.9	41	22.22			
6.	中央最小径	18	14	21	18	4	16.00	19	20	17.3	41	17.10			
7.	骨体最小周	64	52	78	66	3	59.67	69	20	62.6	39	62.15			
7(a).	中央周	72	53	84	69	4	65.60	75	20	66.4	42	66.00			
6/5	骨体断面示数	69.23	73.68	72.41	78.26	4	70.29	70.37	20	75.6	(左)41	77.04			
7/1	長厚示数	21.92	-	-	-	2	20.88	-	17	21.2	19	20.13			

②大腿骨

表7は大腿骨の比較表である。最大長は402mmで、表7では最小値となり、長さは短い。中央周は84mmで、テラガマ洞穴FE-4、後兼久原1号、吉母浜よりは小さいが、テラガマ洞穴1号とFE-9よりは大きく、石垣、大里に一致し、由比ヶ浜南、鎌倉材木座とも大差ない。骨体中央断面示数は108.00となり、テラガマ洞穴FE-9、大里に一致し、この値は表7では最大値となり、骨体の両側面の後方への発達の中世人としては強い方である。上骨体断面示数は86.21で、表7では最大値となり、骨体上部の扁平性は弱い。

表7 大腿骨計測値 (男性、右、mm)(Table 8. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		北谷城 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下・他)		石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)		テラガマ洞穴 グスク時代人 沖縄県 宜野湾市 (松下)			大里城 グスク時代人 沖縄県 大里村 (松下)		後兼久原 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下)		吉母浜 中世人 山口県 下関市 (中橋・他)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)		鎌倉材木座 中世人 神奈川県 鎌倉市 (香原)	
		98-01	n	M	1号	FE-4	FE-5	FE-9	1号	1号人骨	2号人骨	n	M	n	M	n	M	
1.	最大長	402	-	-	-	-	-	-	-	-	18	417.1	27	415.85	10	417.10		
2.	自然位全長	400	-	-	-	-	-	-	-	-	15	418.7	26	411.62	9	406.11		
6.	骨体中央矢状径	27	4	27.26	25(左)	32	-	27	27	28	24	19	27.7	81	27.32	65	27.27	
7.	骨体中央横径	25	4	26.75	26(左)	31	-	25	25	29	29	19	27.5	81	26.27	65	26.50	
8.	骨体中央周	84	4	84.00	80(左)	100	-	81	82	90	84	19	87.5	81	84.90	64	84.50	
9.	骨体上横径	29	4	30.50	30(左)	-	34	-	29	33	-	19	32.1	80	31.01	57	31.31	
10.	骨体上矢状径	25	4	25.00	20(左)	-	26	-	24	25	-	19	24.6	80	23.95	57	24.20	
8/2.	長厚示数	21.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	21.1	26	20.59	9	21.89	
6/7	骨体中央断面示数	108.00	4	101.86	96.15(左)	103.23	-	108.00	108	96.55	82.76	19	100.6	81	104.49	65	104.94	
10/9	上骨体断面示数	86.21	4	82.46	66.67(左)	-	76.47	-	82.76	75.76	-	19	76.5	79	77.68	57	77.86	

③脛骨

表8は脛骨の比較表である。骨体周は81mmで、後兼久原、テラガマ洞穴TB-6、大里に次いで大きく、吉母浜、由比ヶ浜南と大差ない。中央断面示数は72.41で、後兼久原、テラガマ洞穴1号、TB-6よりは大きい、テラガマ洞穴TB-3、TB-2、大里よりは小さく、由比ヶ浜南、石垣、吉母浜に近い。

表8 脛骨 (男性、右、mm) (Table 9. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

	北谷城 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下・他)	テラガマ洞穴 グスク時代人 沖縄県 宜野湾市 (松下)				後兼久原 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下)	大里城 グスク時代人 沖縄県 大里村 (松下)	石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)	吉母浜 中世人 山口県 下関市 (中橋・他)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)		
	98-01	1号	TB-2	TB-3	TB-6	1号人骨	1号	n	M	n	M	n	M
1. 脛骨全長	-	-	-	-	-	-	-	2	340.50	14	335.8	23	332
1a. 脛骨最大長	-	-	-	-	-	-	-	2	345.50	13	345.2	25	338.52
8. 中央最大径	29	27(左)	25(左)	24	31(左)	34	29(左)	4	28.50	20	29.4	73	29.26
8a. 栄養孔位最大径	34	-	-	-	-	-	33(左)	4	32.50	20	34.1	70	33.34
9. 中央横径	21	19(左)	19(左)	21	22(左)	22	23(左)	4	20.50	20	21.5	73	21.05
9a. 栄養孔位横径	26	-	-	-	-	-	26(左)	4	22.50	20	23.9	70	23.50
10. 骨体周	81	73(左)	70(左)	70	84(左)	89	82(左)	4	78.50	20	80.2	73	79.63
10a. 栄養孔位周	93	-	-	-	-	-	93(左)	4	87.25	20	90.8	70	89.93
10b. 最小周	74	70(左)	66(左)	-	-	81	78(左)	4	70.75	20	74.2	68	72.88
9/8 中央断面示数	72.41	70.37(左)	76.00(左)	87.50	70.97	64.71	79.31(左)	4	73.03	20	73.3	73	72.12
9a/8a 栄養孔位断面示数	76.47	-	-	-	-	-	78.79(左)	4	69.57	20	70.1	70	70.65
10b/1 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	2	21.63	14	22.3	23	22.06

3. 推定身長値

表9は推定身長値の比較表である。本例の大腿骨からの推定値は156.88cmである。本例以外の沖縄本土のグスク時代人の身長値は不明である。石垣貝塚から出土した人骨では大腿骨からの推定値は算出できなかったが、上腕骨と橈骨および脛骨から算出が可能であった。3例中1例(B号)は上腕骨、橈骨、脛骨のいずれから算出しても161cmを超えることから、大腿骨から算出しても161cmを超えるものと思われる、これは高身長であろう。もう1例(2号)は上腕骨からは154.86cm、橈骨からは156.58cm、脛骨からは156.36cmとなることから、この例は157cm以下の低身長と思われる。残りの1例(A号)は上腕骨からは158.04cm、橈骨からは163.12cmとなる。上腕骨と大腿骨との長さの比が北谷城と同じと仮定すると、大腿骨最大長は41.3cmとなり、これからの身長値は158.95cm(約159cm)となる。ちなみに同じようにして推定したB号の大腿骨からの身長値は161.77cm、2号では156.13cmとなり、B号は高身長、2号は低身長である。従って、北谷城の身長値は、石垣2号とほぼ大差なく、尾窪の平均値より約1.5cm、吉母浜、由比ヶ浜南、鎌倉材木座より約2cm程度低い身長値である。

なお、参考までに98-01人骨の身長値(156.88cm)とほぼ同じ値を示すものを挙げれば、尾窪No.6(156.13cm)、尾窪No.39(155.75cm)、寺ヶ浴ST-0002(下関市豊北町)(156.51cm)、小倉城2号(北九州市)(156.69cm)がある。

表 9 推定身長値 (男性、右、cm) (Table 10. Comparison of estimated male statures)

この表は体数で平均値を算出、両側あるものは右側、を使用

	北谷城 グスク時代人 沖縄県 北谷町 (松下・他)		石垣貝塚 中世人 沖縄県 石垣市 (松下)		n	M	立石 中世人 大分県 宇佐市 (内藤)		尾窪 中世人 大分県 城南町 (内藤)		吉母浜 中世人 山口県 下関市 (中橋・他)		由比ヶ浜南 中世人 神奈川県 鎌倉市 (松下)		材木座 中世人 神奈川県 鎌倉市 (香原)		
	98-01	2	A	B			n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n
Pearsonの式	上腕骨	155.15	154.86	158.04	161.22	3	158.04	1	152.25	1	152.25	-	35	159.45	-	-	
	橈骨	-	156.58	163.12	166.39	3	162.03	-	-	-	-	-	13	162.52	-	-	
	大腿骨	156.88	-	-	-	-	-	1	158.01	5	158.44	18	159.7	41	159.64	10	159.72
	脛骨	-	156.36	-	162.77	2	159.57	1	(154.70)	1	159.21	-	42	157.96	-	-	
藤井の式	上腕骨	154.71	154.43	158.37	160.57	3	157.79	1	151.92	-	-	-	35	159.18	-	-	
	橈骨	-	154.06	160.52	163.75	3	159.44	-	-	-	-	-	13	160.33	-	-	
	大腿骨	154.20	-	-	-	-	-	1	155.68	-	-	-	42	157.76	-	-	
	脛骨	-	155.76	-	162.93	2	159.34	-	-	-	-	-	43	157.94	-	-	

要 約

沖縄県中頭郡北谷町字大村にある北谷グスクの第 14 次調査で埋葬人骨 1 体 (98-01 人骨) の他に下顎骨が出土した。人骨の保存状態は良好で、埋葬人骨は県内で出土例が少ないグスク時代人骨であった。人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 第 14 次調査で検出された人骨は、埋葬人骨 1 体とこれとは別個体の下顎骨であった。
2. 埋葬人骨 (98-01) はグスク時代 (12 世紀) 人骨で、下顎骨は近世に属する人骨と推測されている。
3. 埋葬人骨の埋葬姿勢は仰臥屈葬 (膝関節を強屈し、下肢骨を腹部の上に載せた状態) であった。
下顎骨は風葬骨の一部で、下顎骨のみが単独で検出された。
4. 埋葬人骨は壮年の男性骨、下顎骨は年齢不明の男性骨である。
5. グスク時代人骨 (98-01) の頭蓋長幅示数は 79.78 となり、頭型は短頭に近い中頭型である。
6. 顔面の計測値は、頬骨弓幅 141mm、中顔幅 103mm、顔高 121mm、上顔高 69mm で、顔示数は 85.82 (K)、117.48(V)、上顔示数は 48.94(K)、66.99(V) となり、顔面には高顔傾向が認められる。
7. 鼻根部は扁平であるが、歯槽性の突顎傾向は認められない。
8. 上腕骨と大腿骨の長さは短い。上腕骨は太く、骨体は扁平である。大腿骨体はやや細く、骨体上部の扁平性は弱い、骨体の後方への発達は比較的良好である。脛骨体も太く、骨体には扁平性は認められない。
9. 大腿骨からの推定身長値は 156.88cm(Pearson、右) で、低身長である。
10. 本グスク時代人は、頭型が短頭に近い中頭型で、顔面は高顔傾向を示し、鼻根部は扁平であるが、歯槽性突顎は認められず、四肢骨は短く、上腕骨と脛骨は太く、低身長であった。日本本土の中世人には、①頭型が長頭型、②鼻根部は扁平で、③強い歯槽性突顎を示すという特徴が認められる。本グスク時代人骨には中世人の特徴のうち鼻根部が扁平という特徴しか認められなかったが、顔面には高顔傾向が認められ、そのプロポーシオンは低・広顔である石垣 A や尾窪とは異なり、由比ヶ浜南、材木座、吉母浜に近い。沖縄の風葬骨の中には、長頭型、鼻根部が扁平で、歯槽性突顎を示す人骨が存在するが、この特徴はヒトの移動を示す根拠とはならない。長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は日本本土の中世人の時代的特徴であり、地域差ではない。

この 3 つの特徴は、鎌倉材木座出土の中世人骨の特徴として鈴木尚 (1963) が指摘したが、その後、熊本県尾窪遺跡出土人骨にも同じ特徴が認められ (内藤、1973)、この特徴は関東の中世人だけの特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴を示すことが判明した。その後も大分県の立石、山口県の吉

母浜をはじめとして多くの中世遺跡から出土した人骨に同じ特徴が認められている。この特徴は本土における日本人の小進化の過程で獲得した形質なのである。では同じ小進化が南西諸島では起きなかったのであろうか。中世的特徴は沖縄での小進化の産物なのか、それとも中世におけるヒトの移動を示すものなのかを明らかにするためには、まだ手続きが必要である。そのためにはまず、なぜ長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎が起きたか、その発生メカニズムを明らかにしておく必要がある。筆者らは10年以上にわたってこの発生機序について検討を続けている。しかし、まだ明快な解答を得るには至っていないが、おそらく咀嚼能力の弱体化が関係していると筆者らは考えている。この課題を解決するためには、沖縄県で各時代のヒトの形質を把握する研究も同時に進めていく必要がある。近世人骨の例は次第に増えてきたが、グスク時代人骨の出土例や報告例は依然として少ない。今後も出土人骨を資料化していく作業を継続し、沖縄での形質変化とその要因を明らかにしていきたい。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた北谷町教育委員会の皆様に感謝致します。

<参考文献>

1. 香原志勢、1956：四肢骨特に大腿骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、岩波書店：149-154.
2. Martin-Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag, Stuttgart：429-597.
3. 松下孝幸・他、1989：沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡（北谷町文化財調査報告書第8集）：39-48.
4. 松下孝幸、1993a：沖縄県石垣市石垣貝塚出土の人骨。石垣貝塚(石垣市文化財調査報告書第17)：31-50.
5. 松下孝幸、1993b：沖縄県石垣市平川貝塚出土の人骨。平川貝塚(石垣市文化財調査報告書第18号)：87-91.
6. 松下孝幸、2001a：沖縄県大里村大里城出土のグスク時代人骨。大里城—都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書(2)—：109-122.
7. 松下孝幸、2001b：シャレコウベが語る、日本人のルーツと未来、長崎新聞社(長崎新聞社新書)。
8. 松下孝幸、2002a：神奈川県鎌倉市由比ヶ浜南遺跡出土の中世人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ浜南遺跡〈第3分冊・分析編Ⅱ〉：1-99.
9. 松下孝幸、2002b：鎌倉市由比ヶ浜南遺跡集骨墓出土人骨の埋葬と個体数および受傷人骨。神奈川県・鎌倉市由比ヶ浜南遺跡〈第3分冊・分析編Ⅱ〉：101-134.
10. 松下孝幸、2003：沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨。後兼久原遺跡—庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書—(北谷町文化財調査報告書第21集)：385-399.
11. 松下孝幸、2004：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店
12. 松下孝幸、2006：宜野湾市嘉和テラガマ洞穴遺跡出土の縄文・グスク時代人骨。嘉和テラガマ洞穴遺跡(宜野湾市文化財調査報告書第35集)：81-102.
13. 内藤芳篤、1973：人骨。尾窪—熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査（熊本県文化財調査報告12）：62-78.
14. 内藤芳篤、1974：人骨。立石貝塚(大分県文化財調査報告第31輯)：39-45.
15. 中橋孝博・他、1985：人骨(山口県下関市吉母浜遺跡出土人骨)。吉母浜遺跡：154-225.
16. 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。
17. 鈴木尚・他、1956：頭骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨：75-148.岩波書店、東京。
18. 北谷町教育委員会、2009：小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成11~13年度)—<付篇> 北谷城の調査概要。

表 10 脳頭蓋 (mm)(Calvaria)

		北谷城 14 次 98-01 男性
1.	頭蓋最大長	178
8.	頭蓋最大幅	142
17.	バジオン・ブレグマ高	-
8/1	頭蓋長幅示数	79.78
17/1	頭蓋長高示数	-
17/8	頭蓋幅高示数	-
1+8+17/3	頭蓋モズルス	-
5.	頭蓋底長	-
9.	最小前頭幅	104
10.	最大前頭幅	123
11.	両耳幅	128
12.	最大後頭幅	-
13.	乳突幅	98
7.	大後頭孔長	-
16.	大後頭孔幅	-
16/7	大後頭示数	-
23.	頭蓋水平周	518
24.	横弧長	320
25.	正中矢状弧長	370
26.	正中矢状前頭弧長	125
27.	正中矢状頭頂弧長	132
28.	正中矢状後頭弧長	113
29.	正中矢状前頭弦長	107
30.	正中矢状頭頂弦長	118
31.	正中矢状後頭弦長	96
29/26	矢状前頭示数	85.60
30/27	矢状頭頂示数	89.39
31/28	矢状後頭示数	84.96

表 12 鼻根部 (mm、度)(Nasal root)

		北谷城 14 次 98-01 男性
50.	前眼窩間幅	24
50A.	鼻根横弧長	26
50/50A	鼻根彎曲示数	92.31
57.	鼻骨最小幅	12
44.	両眼窩幅	-
50/44	眼窩間示数	-
a.	前頭突起上幅 (右)	13
	(左)	13
b.	前頭突起水平傾斜角	115
c.	G - N 投影距離	3
d.	鼻根角	140
e.	G - R 距離	30
f.	垂線高	4
f / e	鼻根陥凹示数	13.33
77.	鼻頬骨角	152
F a	f m o 間距離	100
F h	垂線高	12
F h / F a	顔面扁平示数	12

表 11 顔面頭蓋 (mm、度)(Facial skeleton)

		北谷城 14 次 98-01 男性
40.	顔長	-
41.	側顔長	75
42.	下顔長	-
43.	上顔幅	109
45.	頬骨弓幅	141
46.	中顔幅	103
47.	顔高	121
48.	上顔高	69
47/45	顔示数 (K)	85.82
48/45	上顔示数 (K)	48.94
47/46	顔示数 (V)	117.48
48/46	上顔示数 (V)	66.99
40+45+47/3	顔面モズルス	-
50.	前眼窩間幅	21
44.	両眼窩幅	98
50/44	眼窩間示数	21.43
51.	眼窩幅 (右)	44
	(左)	41
52.	眼窩高 (右)	33
	(左)	32
52/51	眼窩示数 (右)	75
	(左)	78.05
54.	鼻幅	26
55.	鼻高	54
54/55	鼻示数	48.15
55 (1)	梨状口高	31
56.	鼻骨長	26
57.	鼻骨最小幅	11
57(1).	鼻骨最大幅	-
60.	上顎齒槽長	52
61.	上顎齒槽幅	64
62.	口蓋長	-
63.	口蓋幅	-
64.	口蓋高	18
61/60	上顎齒槽示数	-
63/62	口蓋示数	-
64/63	口蓋高示数	-
72.	全側面角	88
73.	鼻側面角	90
74.	齒槽側面角	79

表 13 下顎骨 (mm、度)(Mandibula)

		北谷城 14 次	
		98-01 男性	98-02 男性
65	下顎関節突起幅	122	-
65(1).	下顎筋突起幅	102	-
66	下顎角幅	-	102
67	前下顎幅	46	-
68	下顎長	-	-
68(1).	下顎長	107	-
69	オトガイ高	37	-
69(1).	下顎体高 (右)	-	-
	(左)	33	26
69(2).	下顎体高 (右)	28	-
	(左)	29	26
70	枝高 (右)	64	-
	(左)	-	-
70(1).	前枝高 (右)	65	-
	(左)	63	-
70(2).	最小枝高 (右)	52	-
	(左)	51	-
70(3).	下顎切痕高 (右)	16	-
	(左)	14	-
71(1).	下顎切痕幅 (右)	36	-
	(左)	39	-
71	枝幅 (右)	36	-
	(左)	37	36
71a.	最小枝幅 (右)	36	36
	(左)	37	-
79	下顎枝角 (右)	122	-
	(左)	122	-
66/65	下顎幅示数	-	-
68/65	幅長示数	-	-
68(1)/65	幅長示数 (右)	87.70	-
69(2)/69	下顎高示数 (右)	75.68	-
	(左)	78.38	-
71/70	下顎枝示数 (右)	56.25	-
	(左)	-	-
71a/70(2)	下顎枝示数 (右)	69.23	-
	(左)	72.55	-
70(3)/71(1)	下顎切痕示数 (右)	44.44	-
	(左)	35.90	-

表 15 鎖骨 (mm)(Clavicula)

		北谷城 14 次	
		98-01 男性	
1.	鎖骨最大長 (右)	-	-
	(左)	-	-
2 a	骨体彎曲高 (右)	-	-
	(左)	-	-
2(1)	肩峰端彎曲高 (右)	-	-
	(左)	-	-
4.	中央垂直径 (右)	12	
	(左)	12	
5.	中央矢状径 (右)	13	
	(左)	12	
6.	中央周 (右)	42	
	(左)	40	
6/1	長厚示数 (右)	-	
	(左)	-	
2 a /1	彎曲示数 (右)	-	
	(左)	-	
4/5	鎖骨断面示数 (右)	92.31	
	(左)	100	
2(1)/1	肩峰端彎曲示数 (右)	-	
	(左)	-	

表 14 肩甲骨 (mm)(Scapula)

		北谷城 14 次
		98-01 男性
12.	関節窩長 (右)	35
	(左)	37
13.	関節窩幅 (右)	27
	(左)	27
14.	関節窩深 (右)	4
	(左)	4
13/12	関節窩長幅示数 (右)	77.14
	(左)	72.97
14/12	関節窩彎曲示数 (右)	11.43
	(左)	10.81

表 16 上腕骨 (mm)(Humerus)

		北谷城 14 次
		98-01 男性
1.	上腕骨最大長 (右)	292
	(左)	296
2.	上腕骨全長 (右)	289
	(左)	292
3.	上端幅 (右)	50
	(左)	49
3(1).	横上径 (右)	53
	(左)	52
4.	下端幅 (右)	58
	(左)	57
5.	中央最大径 (右)	26
	(左)	24
6.	中央最小径 (右)	18
	(左)	17
7.	骨体最小周 (右)	64
	(左)	62
7(a).	中央周 (右)	72
	(左)	68
8.	頭周 (右)	-
	(左)	136
9.	頭最大横径 (右)	-
	(左)	41
10.	頭最大矢状径 (右)	46
	(左)	45
11.	滑車幅 (右)	21
	(左)	21
12.	小頭幅 (右)	16
	(左)	17
12(a).	滑車幅および小頭幅 (右)	43
	(左)	43
13.	滑車深 (右)	28
	(左)	27
14.	肘頭窩幅 (右)	28
	(左)	27
15.	肘頭窩深 (右)	13
	(左)	14
6/5	骨体断面示数 (右)	69.23
	(左)	70.83
7/1	長厚示数 (右)	21.92
	(左)	20.95

表 17 橈骨 (mm)(Radius)

		北谷城 14 次 98-01 男性
1.	最大長 (右)	-
	(左)	-
1 b.	平行長 (右)	-
	(左)	-
2.	機能長 (右)	-
	(左)	-
3.	最小周 (右)	44
	(左)	43
4.	骨体横径 (右)	17
	(左)	16
4 a .	骨体中央横径 (右)	16
	(左)	16
4(1).	小頭横径 (右)	-
	(左)	-
4(2).	頸横径 (右)	14
	(左)	14
5.	骨体矢状径 (右)	12
	(左)	12
5 a .	骨体中央矢状径 (右)	13
	(左)	13
5(1).	小頭矢状径 (右)	-
	(左)	-
5(2).	頸矢状径 (右)	15
	(左)	15
5(3).	小頭周 (右)	-
	(左)	-
5(4).	頸周 (右)	45
	(左)	46
5(5).	骨体中央周 (右)	47
	(左)	45
5(6).	骨下端幅 (右)	-
	(左)	-
3/2	長厚示数 (右)	-
	(左)	-
5/4	骨体断面示数 (右)	70.59
	(左)	75
5 a / 4 a	中央断面示数 (右)	81.25
	(左)	81.25

表 18 尺骨 (mm)(Ulna)

		北谷城 14 次 98-01 男性
1.	最大長 (右)	-
	(左)	-
2.	機能長 (右)	-
	(左)	-
2(1).	肘頭尺骨頭長 (右)	-
	(左)	-
3.	最小周 (右)	35
	(左)	35
6.	肘頭幅 (右)	-
	(左)	-
6(1).	上幅 (右)	-
	(左)	-
7.	肘頭深 (右)	-
	(左)	-
8.	肘頭高 (右)	-
	(左)	-
11.	尺骨矢状径 (右)	15
	(左)	13
12.	尺骨横径 (右)	16
	(左)	16
S	中央最小径 (右)	13
	(左)	13
L	中央最大径 (右)	17
	(左)	16
C	中央周 (右)	52
	(左)	50
3/2	長厚示数 (右)	-
	(左)	-
11/12	骨体断面示数 (右)	93.75
	(左)	81.25
S/L	中央断面示数 (右)	76.47
	(左)	81.25

表 19 大腿骨 (mm)(Femur)

		北谷城 14 次 98-01 男性
1.	最大長 (右)	402
	(左)	405
2.	自然位全長 (右)	400
	(左)	400
3.	最大軀子長 (右)	388
	(左)	391
4.	自然位軀子長 (右)	378
	(左)	377
6.	骨体中央矢状径 (右)	27
	(左)	28
7.	骨体中央横径 (右)	25
	(左)	24
8.	骨体中央周 (右)	84
	(左)	83
9.	骨体上横径 (右)	29
	(左)	30
10.	骨体上矢状径 (右)	25
	(左)	24
15.	頸垂直径 (右)	32
	(左)	-
16.	頸矢状径 (右)	25
	(左)	25
17.	頸周 (右)	92
	(左)	-
18.	頭垂直径 (右)	46
	(左)	46
19.	頭横径 (右)	-
	(左)	46
20.	頭周 (右)	-
	(左)	146
21.	上顆幅 (右)	81
	(左)	-
8/2	長厚示数 (右)	21.00
	(左)	20.75
6/7	骨体中央断面示数 (右)	108.00
	(左)	116.67
10/9	上骨体断面示数 (右)	86.21
	(左)	80.00

表 21 腓骨 (mm)(Fibula)

		北谷城 14 次 98-01 男性 左
1.	最大長	-
2.	中央最大径	18
3.	中央最小径	12
4.	中央周	52
4 a.	最小周	39
4 b.	頸横径	13
4 c.	頸矢状径	11
4(1).	上端幅	24
4(1 a).	上端矢状幅	31
4(2).	下端幅	-
4(2 a).	下端矢状幅	-
3/2	中央断面示数	66.67
4 a /1	長厚示数	-

表 20 脛骨 (mm)(Tibia)

		北谷城 14 次 98-01 男性
1.	脛骨全長 (右)	-
	(左)	-
1 a.	脛骨最大長 (右)	-
	(左)	-
1 b.	脛骨長 (右)	-
	(左)	-
2.	顆距間距離 (右)	-
	(左)	-
3.	最大上端幅 (右)	-
	(左)	-
3 a.	上内関節面幅 (右)	-
	(左)	-
3b.	上外関節面幅 (右)	-
	(左)	-
4 a.	上内関節面深 (右)	-
	(左)	-
4 b.	上外関節面深 (右)	-
	(左)	-
6.	最大下端幅 (右)	-
	(左)	-
7.	下端矢状径 (右)	38
	(左)	-
8.	中央最大径 (右)	29
	(左)	29
8 a.	栄養孔位最大径 (右)	34
	(左)	33
9.	中央横径 (右)	21
	(左)	21
9 a.	栄養孔位横径 (右)	26
	(左)	25
10.	骨体周 (右)	81
	(左)	80
10 a.	栄養孔位周 (右)	93
	(左)	91
10 b.	最小周 (右)	74
	(左)	73
9/8.	中央断面示数 (右)	72.41
	(左)	72.41
9 a /8 a	栄養孔位断面示数 (右)	76.47
	(左)	75.76
10 b /1	長厚示数 (右)	-
	(左)	-

表 22 膝蓋骨 (mm)(Patella)

		北谷城 14 次 98-01 男性 左
1.	最大高	39
2.	最大幅	43
3.	最大厚	20
4.	関節面高	29
5.	内関節面幅	19
6.	外関節面幅	29
1/2	膝蓋骨高幅示数	90.70

表 23 推定身長値 (cm)(Stature)

		北谷城 14 次 98-01 男性	
P e a r s o n の式	上腕骨 (右)	155.15	
	(左)	156.30	
	橈骨 (右)	-	
	(左)	-	
	大腿骨 (右)	156.88	
	(左)	157.45	
藤井の式	上腕骨 (右)	154.71	
	(左)	156.68	
	橈骨 (右)	-	
	(左)	-	
	大腿骨 (右)	154.20	
	(左)	154.81	
	脛骨 (右)	-	
	(左)	-	

表 25 中央周の比

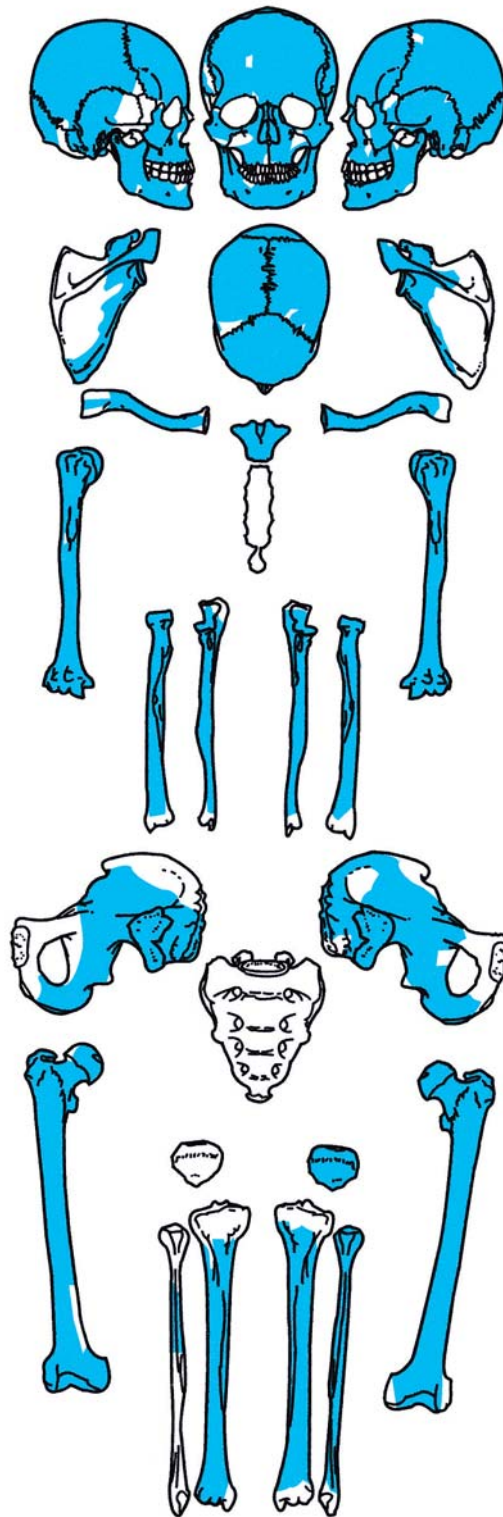
		北谷城 14 次 98-01 男性	
橈骨 / 尺骨	(右)	90.38	
	(左)	90.00	
橈骨 / 上腕骨	(右)	65.28	
	(左)	66.18	
鎖骨 / 上腕骨	(右)	58.33	
	(左)	58.82	
上腕骨 / 大腿骨	(右)	83.33	
	(左)	81.93	
上腕骨 / 脛骨	(右)	88.89	
	(左)	85.00	
脛骨 / 大腿骨	(右)	96.43	
	(左)	96.39	
腓骨 / 脛骨	(右)	-	
	(左)	65.00	

表 24 最大長の比

		北谷城 14 次 98-01 男性	
橈骨 / 上腕骨	(右)	-	
	(左)	-	
橈骨 / 尺骨	(右)	-	
	(左)	-	
橈骨 / 大腿骨	(右)	-	
	(左)	-	
橈骨 / 脛骨	(右)	-	
	(左)	-	
上腕骨 / 大腿骨	(右)	72.64	
	(左)	73.09	
上腕 / 脛骨	(右)	-	
	(左)	-	
脛骨 / 大腿骨	(右)	-	
	(左)	-	
腓骨 / 脛骨	(右)	-	
	(左)	-	
鎖骨 / 上腕骨	(右)	-	
	(左)	-	
上肢骨 / 下肢骨	(右)	-	
	(左)	-	

表 26 形態小変異 (Non-metoric crania variants)

		北谷城 14 次 98-01 男性	
		右	左
1.	Medial palatine canal	/	/
2.	Pterygospinous foramen	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging	-	-
4.	Clinoid bridging	/	/
5.	Condylar canal absent	-	-
6.	Tympanic dehiscence, Foramen of Huschke (>1 mm)	+	+
7.	Jugular foramen bridging	/	/
8.	Precondylar tubercle	/	/
9.	Supra-orbital foramen (incl. frontal foramen)	/	-
10.	Accessory infraorbital foramen	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	+
12.	Aural exostosis	-	-
13.	Metopism		+
14.	Os incae	-	-
15.	Ossicle at the lambda		-
16.	Parietal notch bone	-	-
17.	Transverse zygomatic suture (>5 mm)	/	/
18.	Asterionic ossicle	/	+
19.	Occipitomastoid ossicle	/	/
20.	Epipteric ossicle	/	-
21.	Frontotemporal articulation	/	-
22.	Biasterionic suture (>10 mm)	-	-
23.	Mylohyoid bridging	-	-
24.	Accessory mental foramen	-	+
25.	Mandibular torus	-	-
26.	滑車上孔	-	-

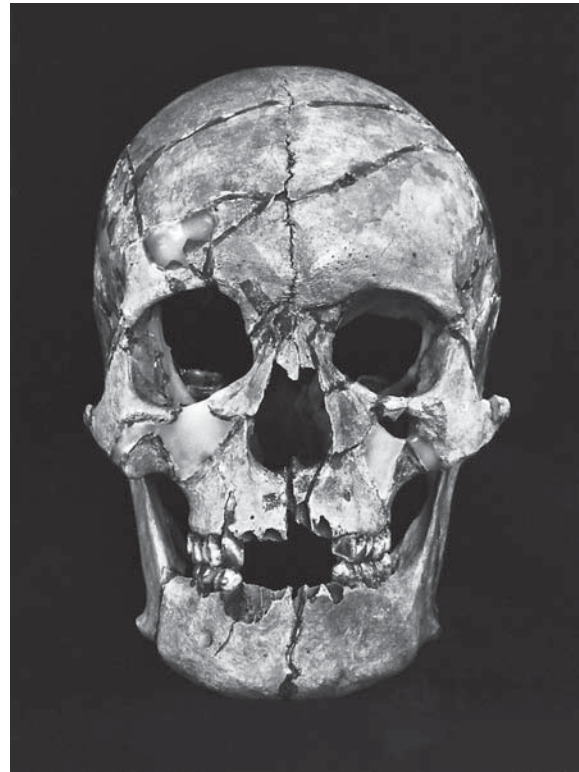


北谷城 98-01 (男性・壮年)

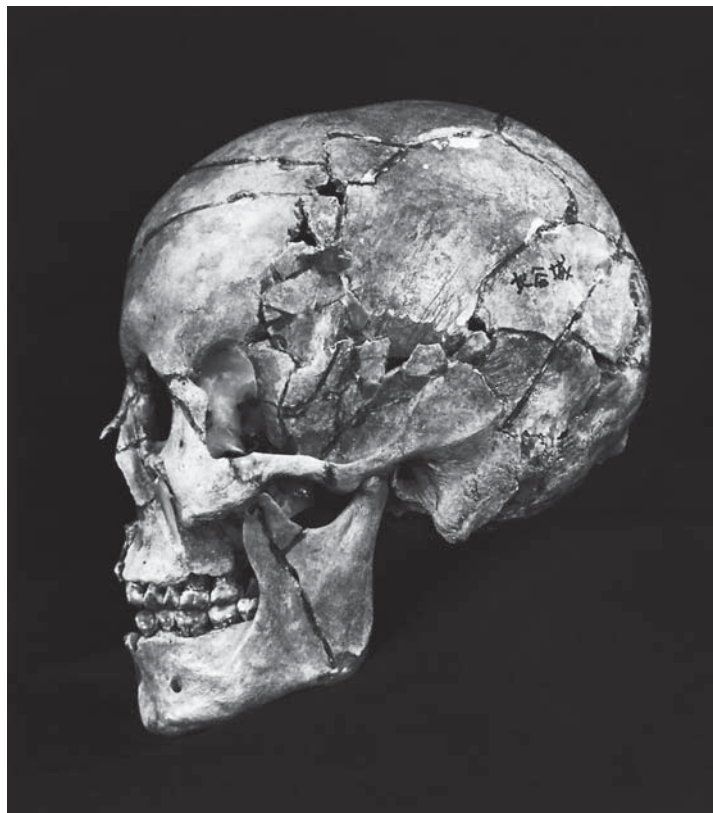
図2 人骨の残存図 (アミかけ部分)
(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

北谷城 98-01 (男性・壮年)
(The Chatan-gusuku 98-01, young adult male)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

北谷城 98-01 (男性・壮年) (The Chatan-gusuku 98-01, young adult male)



下肢骨 (Bones of the lower limb)

北谷城 98-01 (男性・壮年) (The Chatan-gusuku 98-01, young adult male)

図版 2 下肢骨・上肢骨

第4節 北谷城出土遺物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

琉球石灰岩 (琉球層群那覇層碎屑性石灰岩 (氏家・兼子, 2006)) からなる段丘上に築かれた北谷城の発掘調査では、炭化した遺物が検出されている。これらは、城における人間活動の痕跡を示すものという所見から、これらの放射性炭素年代を測定することにより、北谷城に関わる年代資料が得られることが期待された。本報告では、それらの測定結果を述べる。

1. 試料

試料は、試料番号 98、507 および 578 とされた炭化物試料 3 点である。試料番号 507 は D-3 グリッド IV e 層より採取され、試料番号 578 は土坑内から採取されている。各試料には、炭化種子や炭化材あるいは骨などの異なる種類からなる炭化物の混在が認められたため、ここでは、各試料中に含まれる炭化物の種類を明らかにし、それらの中から適当と判断される炭化物を選択した。確認は、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実や炭化材を抽出した。抽出された種実は、現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等の図鑑との対照から、種類と部位を同定する。炭化材は、木口 (横断面)・柁目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡下で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。各試料の確認結果を表 1 に示す。

試料番号 98 からは完形で確認された炭化したコムギの胚乳、試料番号 507 からはヒルギ科の可能性のある炭化材片、試料番号 578 からはヤシ科またはタコノキ科とされる炭化材片をそれぞれ選択した。

表1. 試料確認結果

試料番号	層位・遺構など	分類群・部位	個数	樹種同定結果	個数	備考	測定対象	重量 (g)	
98		コムギ (炭化胚乳完形)	2				●	0.04	
		マメ科 (炭化種子破片)	1						
		炭化材	30	マツ属複雑管束亜属	19	リュウキユウマツ			
				コナラ属アカガシ亜属	1				
				イスノキ?	2				
				広葉樹 (散孔材 1)	1				
				広葉樹 (散孔材 2)	2				
				広葉樹 (散孔材 3)	3				
不明	1								
観察不能	1								
507	D-3 グリッド IV e 層	炭化材	1	ヒルギ科?	1		●	0.35	
578	土坑内	炭化材	10	ヤシ科またはタコノキ科	5		●	0.02	
				不明	5				
		動物遺存体 (骨片)	2						

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC 1 により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC 1 によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔 (硫化物を除去するため) を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃ (30 分) 850℃ (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差

を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表2に示す。3点の試料のうち、試料番号98は360±30BP、試料番号507は430±30BPであり、互いに近接する年代を示すが、試料番号578は950±30BPであり、他の2点に比べて有意に古い年代を示す。

表2. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	層位・遺構など	種類	補正年代BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代BP	Code No.
98		炭化種実	360±30	-25.67±0.39	380±30	IAAA-90879
507	D-3グリッドIVe層	炭化材	430±30	-28.44±0.59	490±30	IAAA-90880
578	土坑内	炭化材	950±30	-12.55±0.61	740±30	IAAA-90881

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

各試料の較正暦年代を表3に示す。測定誤差を σ の年代で見ると、試料番号98は15世紀中頃～17世紀前半、試料番号507は15世紀の中頃となる。一方、試料番号578は11世紀中頃～12世紀中頃の暦年が示される。15世紀の中頃という年代は、グスク時代は終焉し、すでに第一尚氏による琉球王朝が成立している年代に相当する。また、11世紀中頃～12世紀中頃という年代は、安里(1999)のいう原グスク時代に相当する年代であり、大型城塞的グスク出現以前の生産経済時代とされている時代である。

表 3. 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.	
		σ	cal AD 1,461	-	cal AD 1,521	cal BP 489	-			429
98	363± 30	σ	cal AD 1,577	-	cal AD 1,582	cal BP 373	-	368	0.039	IAAA-90879
			cal AD 1,591	-	cal AD 1,621	cal BP 359	-	329	0.330	
			cal AD 1,450	-	cal AD 1,529	cal BP 500	-	421	0.525	
		2σ	cal AD 1,544	-	cal AD 1,548	cal BP 406	-	402	0.008	
			cal AD 1,550	-	cal AD 1,634	cal BP 400	-	316	0.467	
			cal AD 1,435	-	cal AD 1,471	cal BP 515	-	479	1.000	
507	428± 31	2σ	cal AD 1,423	-	cal AD 1,511	cal BP 527	-	439	0.953	IAAA-90880
			cal AD 1,601	-	cal AD 1,615	cal BP 349	-	335	0.047	
		σ	cal AD 1,031	-	cal AD 1,051	cal BP 919	-	899	0.247	
cal AD 1,081	-		cal AD 1,127	cal BP 869	-	823	0.549			
cal AD 1,135	-		cal AD 1,152	cal BP 815	-	798	0.203			
578	945± 30	2σ	cal AD 1,024	-	cal AD 1,157	cal BP 926	-	793	1.000	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

<引用文献>

安里 進、1999、「沖縄の考古学的時代区分をめぐる現状と問題点」 安里 進・土肥直美(共著)『沖縄人はどこから来たか—琉球=沖縄人の起源と成立—』 .ポーターインク p 127-133.

石川 茂雄、1994、『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 p 328.

中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志、2000、『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 p 642.

氏家 宏・兼子尚知、2006、「那覇及び沖縄市南部地域の地質」 『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』 産総研地質調査総合センター p 48

第Ⅷ章 まとめ

ここでは今回、北谷城南側丘陵麓の試掘調査の成果についてまとめることにする。

今回調査対象となった北谷城南側丘陵麓は、本城の城門に登る幾つかのルートの一つであるノロ道を探す目的で、古集落である伝道村が存在していた丘陵麓を候補地として調査を実施した。調査は斜面地から平坦地にかけてトレンチを設け調査を行った。その際、no.1 トレンチと no.2 トレンチを設けた。その後、斜面地に於いて遺構が確認されたことから no.1 トレンチと no.2 トレンチの斜面地に C・D-3・4 グリッドを設け実施した。

先ず、no.2 トレンチの成果を述べることにする。本トレンチは城門へのルートへの第一候補地として調査を行った。平坦地において伝道集落で使用していた井戸が確認された。戦前、伝道集落に存在することは確認されていたことから、道は周辺で確認できると思われたが、平坦地及び斜面地においても確認することはできなかった。井戸は米軍によって埋められ、井戸内の上部に米軍による廃材等や井戸に使用していた切り石が廃棄され、下部には伝道村の人々が利用した金属製の桶が数点出土した。井戸の全体構造は米軍に破壊されている部分もあり定かではないが、現存状況から、南側に洗い場が設けられ、西側に庭のような空間が設けられていた。井戸口も本来は数段石が積まれていたと考えられる。直径は約 1 m で南側より汲み上げていたことが縁石の紐ずれ痕から推察できた。深さは約 4 m で掘り抜き井戸（チンガー）であった。井戸内の調査途中より水が湧き出るようになり、一日経つと満杯になるほどに回復した。調査後は米軍と調整し復元を行い保存した（巻首図版 7）。

no.1 トレンチは斜面地でグスク期の石積み遺構（石列遺構 1）が確認され、その後の継続調査で本トレンチ西側斜面地に C・D-3・4 グリッドを設け掘削した。北側と西側を地山が見られることから、南東側を掘削し平地を設け、そこに、北側の岩盤と西側に礎石を設け 6 本端による建物を構築したようである。建物についての性格は不明であるが、城門へ上る際に関連する施設の可能性が想定される。施設が機能しなくなった後に、石列を廻らすようである。石列の機能については東側が未調査であるため判然としないため今後の調査に結論をゆだねたい。一方、平坦地では落ち込み状の地形を呈している状況が確認された。落ち込みは B-4 グリッドの北側から A-4 グリッドの北側の間にみられる。この落ち込みは米軍によるものではなく、グスク期に存在していたと思われる。no.2 トレンチでは近世期の層で調査を終えているが、B-2 グリッドライン直下の断面においても落ち込みの状況が観察できるので西側に及んでいる可能性がある。この落ち込みについては、過去に調査した北谷城第 7 遺跡では丘陵南西端にある井戸（塩川）の低湿地帯が丘陵の中央部まで及び、グスク丘陵は西側洋上に突出した状況であると報告されている。今回の調査では未調査であるため詳細は不明であるが、その落ち込みが前回の第 7 遺跡に該当するのであれば当該地域まで低湿地を形成し、丘陵南側もやや急峻であったと思われる。その状況は恐らく 12 世紀以前の頃までで、本グスク丘陵の更に南に小丘陵が存在し、その丘陵とグスク南側の丘陵との間が低湿地となる地形を呈していたと思われる。その後、低湿地は両丘陵からの土砂の堆積が進み平坦地を形成していったのではないかとと思われる。このように地形の変遷が追える状況が窺えたことはグスクと集落形成を考える上で貴重である。

このような地形の変遷のなか、この窪地において土壙墓が確認された。両丘陵からの土砂の堆積が進んだ段階の 12 世紀頃に、土壙を形成したことが判明した。埋葬人骨（第 9 図）は 1 体検出された。人骨は残存状況の良い状態で、仰臥屈葬であった。また、埋葬地層部がある程度、低湿地を保っていたため、土壙内部に木片が検出された。木片は頭部を覆うように木棒が 3 本、両肩部に平行して 1 本、足を曲げた大腿骨と腰部との間に 1 本残っていた。頭部に覆う理由は不明だが、肩及び大腿骨と腰部の間にある棒は屈

葬する際に固定するためではないかと思われる。このような検出例は無いため、埋葬方法を考慮する上で大変貴重な事例といえよう。

次に出土遺物についてみていきたい。出土遺物は近代資料から貝塚後期の資料のものである。近代及び近世の遺物は、主に第ⅠからⅢ層までで、井戸（チンガー）周辺も該当する。これらは伝道集落の存在に起因すると考えられる。遺物は沖縄産陶器や近代磁器、瓦などが出土する。また、第Ⅱ層より出土する古銭はチンガー周辺より多く出土している。このような状況は伊礼原B遺跡で検出した井戸でも見られる。グスク時代の主体層は第Ⅳ・Ⅴ層で、出土する遺物はくびれ平底土器・グスク土器・中国産陶磁器・本土産陶器・鉄製品など多種類ある。

土器が最も多く出土している。その中でも後期土器であるくびれ平底土器が約86%を占めている。後期土器は壺形と鉢形が得られ、第Ⅳ層から出土する傾向がある。青磁や白磁などとの時間差がある。このような傾向はグスク丘陵上でも見られるようである。また、本調査地の中腹の調査ではくびれ平底土器の堆積層が確認されているが、中腹斜面地に堆積が見られるためそこからの流れ込みの可能性も考えられる。青磁や白磁は14世紀後半から15世紀後半頃の資料である。青磁の蓋の撮みである獅子型が確認された。本遺跡からの出土は初例である。出土事例としては首里城がある。馬上杯の出土例も初例で、火炉の出土も見られることから、建物施設は祭祀関連も視野に入れておきたい。白磁は1点土壙墓の周辺より出土した玉縁口縁碗がある。他は斜面地からの出土であり、斜面地の遺構と土壙墓の時期は差があると判断している。鉄製品は釘の出土が見られる。建物遺構に関すると思われる。青銅製品の出土で金箔が残る装飾品と思われる資料が得られた。自然遺物は魚骨の出土の減少が見られ、イノシシ・ブタの増加、そしてウシ・ウマなどの家畜の出現が他のグスク時代の出土傾向と類似するようである。今回の調査対象地となった地域には伝道集落の一部の調査であるため、集落より出土する動物遺体の種類は把握できていないため、今後、グスクと集落とでの動物遺体の差が認められるかは今後の調査結果にゆだねたい。

埋葬人骨は出土状況がほとんどの部位が残っていたため諸特徴が得られている。埋葬方法は仰臥屈葬で人骨は熟年男性骨である。頭型は短頭に近い中頭型で、顔面は高願傾向、鼻根部は扁平、歯槽性の突鰐傾向は認められず、四肢骨は短く上腕骨と頸骨は太く、低身長である。日本本土中世人骨の特徴のうち類似したのは鼻根部が扁平であったことであった。まだまだ、本土の中世人骨の形質と南西諸島との形質を明らかにするにはグスク時代の人骨の出土例や報告例が少ないようで、今後の調査による資料の増加による研究が待たれるようである。

以上、今回の調査における内容について簡単に述べてきたが、斜面地における6本柱建物の遺構の解釈については不明な点が残るが、上述したように、城門に上る前に関わる施設または、祭祀に関する施設などが考えられる。しかし、小規模のしかも調査区が離れた状況であることから丘陵上のグスク関連の各構造物の性格が現段階では関連しているかどうかは判然としない。しかし、今後、未調査である東側の確認調査を行うことにより関連性が判然としなかった今回の遺構が明確にされることに期待し、グスクの全体像の解明と集落との関連性を明らかにしていきたい。

<引用・参考文献>

- 大城慧（編）『「我謝遺跡」西原町の文化財第5集 西原町教育委員会 1983年
- 金武正紀（編）『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村文化財調査報告書第9集 今帰仁村教育委員会 1983年
- 中村愿 『「北谷城第7遺跡」北谷町文化財調査報告第2集 北谷町教育委員会 1985年
- 當眞嗣一・上原静ほか『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集 浦添市教育委員会 1985年
- 上原 静（編）『勝連城跡—北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査—(1)』1990年
- 島袋洋（編）『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集 1996年
- 金城亀信（編）『首里城跡—京の内跡発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第132集 沖縄県教育委員会 1998年
- 島袋洋（編）『天界寺跡Ⅰ』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年
- 山城安生（編）『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書第21集 北谷町教育委員会 2003年

	no.2 トレンチ (B-1 B・C・D-2)	no.3・4 トレンチ
17c 以後の遺物	<p>骨製品 沖無 沖無 石器</p> <p>第47図3 第35図17 第35図16 第40図14</p> <p>瓦 第38図2</p>	<p>本磁 沖無</p> <p>第31図12 第34図8</p>
17c ~ 16c の遺物	<p>寛永通寶 瓦</p> <p>第42図3 第38図1</p> <p>瓦質土器 第37図1</p>	<p>染付 白磁</p> <p>第26図1 第20図31 第26図13</p>
15c 後半 ~ 14c の遺物	<p>青磁 白磁 褐釉陶器</p> <p>第20図26 第28図1 第29図25 第29図19</p> <p>洪武通寶 第42図1</p>	<p>青磁 青磁 青磁</p> <p>第25図83 第24図74 第24図73 第22図34</p> <p>青磁 本土産陶器 青銅製品</p> <p>第24図80 第30図1 第45図1</p> <p>0 5cm</p>
13c ~ 10c の遺物	<p>青磁 白磁</p> <p>第21図1 第19図2</p> <p>カムイヤキ 第18図9</p>	<p>白磁 カムイヤキ</p> <p>第19図1 第18図10</p>
10c 以前の遺物	<p>骨製品・古銭 沖繩産施釉陶器 その他の遺物</p> <p>0 5cm 骨製品・古銭 0 10cm 沖繩産施釉陶器 0 10cm その他の遺物</p>	<p>土器 土器</p> <p>第12図5 第12図2</p> <p>土器 土器</p> <p>第15図64 第16図88</p>

第52図 北谷城変遷図

(C・D-3)

no.1 トレンチ (A・B・C・D-4)



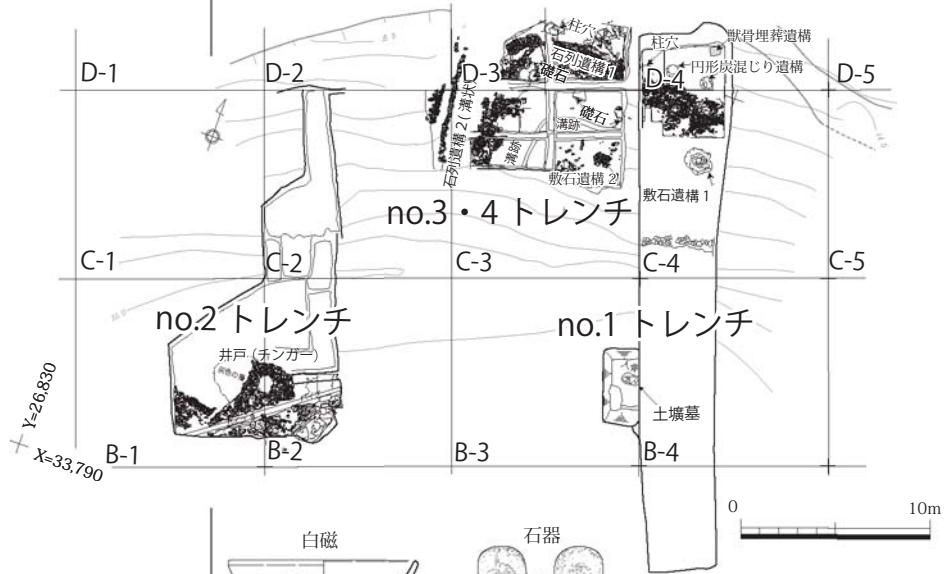
第 41 図 20



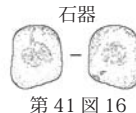
第 45 図 4



第 42 図 6



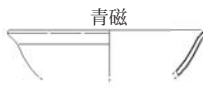
第 19 図 3



第 41 図 16



第 29 図 22



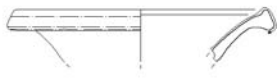
第 22 図 27



第 25 図 87



第 29 図 13



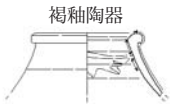
第 29 図 27



第 21 図 5



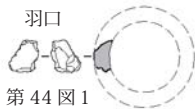
第 28 図 3



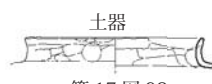
第 28 図 9



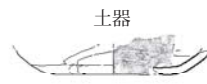
第 13 図 25



第 44 図 1



第 17 図 92



第 17 図 98



第 12 図 3



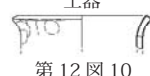
第 13 図 21



第 16 図 90



第 16 図 76



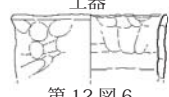
第 12 図 10



第 16 図 85



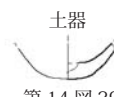
第 15 図 51



第 12 図 6



第 16 図 77



第 14 図 29

<付篇> 拾得遺物—伊礼原遺跡調査区内—

第1節 拾得の経過

ここで扱う陶磁器は、キャンプ桑江北側返還前の平成12年度に実施した伊礼原遺跡の低湿地区調査時の調査区内に中国産等の陶磁器が納められたダンボール箱が遺棄されていたのを本教育員会で保管していたものである。当時は、米軍基地が機能している状態で調査区は安全対策のためのフェンスを設定していた。箱は調査区入り口のフェンス内に置かれ、中を確認したところ青磁や褐釉陶器などが納められていた。

伊礼原遺跡の調査中、幾度か米軍関係者の見学者があった。憶測であるが、恐らく米軍関係者か基地従業員によって、我々の休日の日に遺棄したものと考えられる。そのため、遺棄した人物も不明であるので聞き取りさえできない状況であった。よって、本資料が何処から得られたものかが全く不明であることから「拾得遺物」として扱うこととした。

第2節 遺物

1. 青磁

青磁は碗・皿・盤・酒会壺・瓶の5種類ある。器種ごとに分け、個々の詳細は第1表の観察表に記した。

(1) 碗 (第2～4・6図)

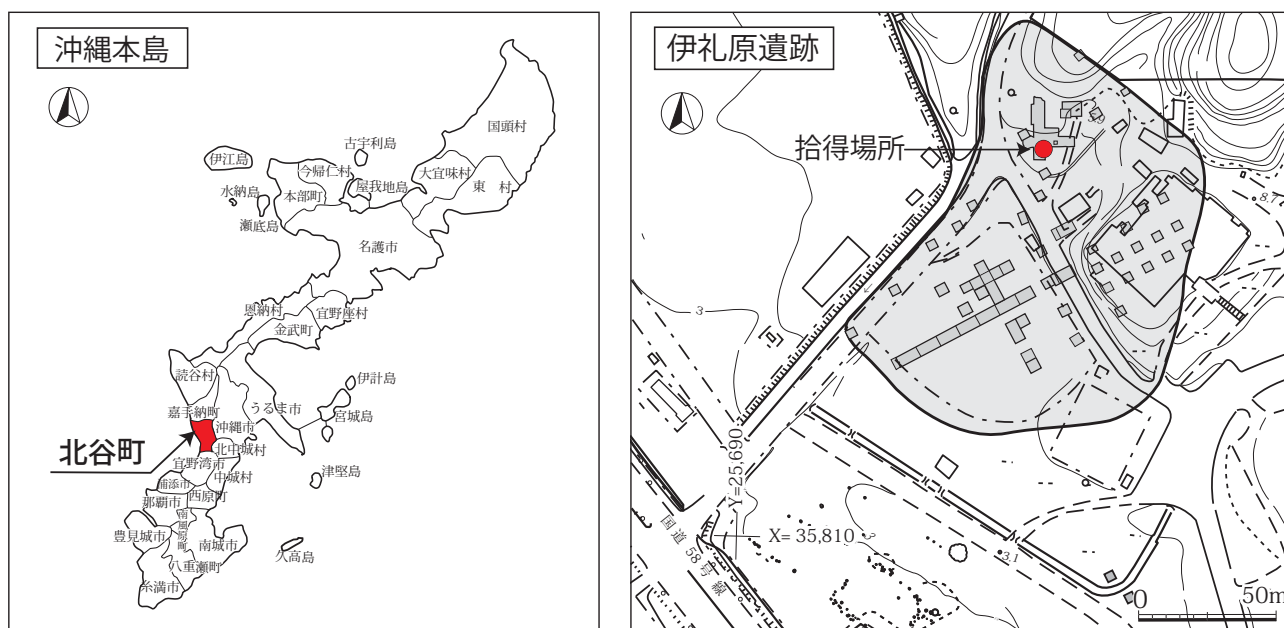
碗は文様については蓮弁文・雷文帯・刻花文・無文に大別することができる。文様別に紹介する。

I類：蓮弁文碗 (図1・2・6・10～16・21・48)

蓮弁文は全て無鎬蓮弁文碗である。器形は、口縁部は直口口縁 (図1・2) とやや内彎気味 (図6) が見られる。底部は高台が低く、高台の下部を面取りする。文様は無鎬蓮弁文で内面に草花文 (図2) を施す資料もある。見込みは圏線内に印花文を施す (図10～16・21・48)。

II類：雷文帯碗 (図3～5・8)

口縁部は直口口縁である。底部は高台は低く、高台外面下部を面取りする。文様は外面に雷文帯と草花文、内面にも草花文を施すもの (図3・5・8) と外面のみに文様を施すのがある (図4) が見られる。見込みは印花文と思われる (図8)。



第1図 拾得場所 (伊礼原遺跡内)

Ⅲ類：無文碗（図7）

大振りの碗である。口縁部は、直口口縁である。

Ⅳ類：刻花文碗（図9）

大振りの碗で胴部片である。文様は内外面に草花文を施す。口縁部が無いいためここで扱ったが、雷文帯碗の可能性もある。

〈底部〉

碗底部は外面に文様の特徴を有するものは上述に含めた。見込みの文様は花文を施すもの（図17～21・23・48）と無文（図22・43）がある。底部は施釉方法により以下のとおりに分けた。

A種：外底が蛇の目釉剥ぎである（図17・20）。

B種：外底が全釉である（図18・19・43・48）。

C種：外底が無釉である（図22・23）。

(2) 皿（第4～6図）

皿は口縁部1点、他は底部資料である。皿は器形の特徴からⅠ～Ⅲ類に分けた。

Ⅰ類：腰部は丸く立ち上がり口縁端部を外側に折り曲げる口折皿である。外面に蓮弁文を施す（図25・30・32・49）。

Ⅱ類：腰部で窄めて胴部を外側へ開く外反皿である（図26・28・29）。

Ⅲ類：腰部で屈曲し外反する腰折れ皿である（図27・33）。

〈底部〉

皿底部は上述のような器形の特徴が曖昧なため、ここでは施釉方法により以下のとおりに分けた。

A種：外底が蛇の目釉剥ぎである。見込みは印花文を施すものと施さないものがある。外面の文様よりさらに2種類に細分した。

a：蓮弁文を施す（図31・34・38・39）。

b：無文である（図24・35～37・40～42・44・45）。

B種：外底は無釉である。見込みは印花文を施すものと施さないものがある。外面の文様よりさらに2種類に細分した。

a：外面に蓮弁文を施す（図47・52）。

b：無文である（図46・50・51）。

(3) 盤（第7図）

盤は鐔縁口縁である（図53・54）。図55・56は底部資料で図56の口縁部は鐔縁口縁と思われる。図55の口縁部は不明。文様は内面に篋描きによる幅広の蓮弁文を施す（図53・54・56）ものと外面に蓮弁文を施す（図55）がある。図53の篋の幅は約2cm、図54・56は約1～1.3cmである。図55は鎬蓮弁文である。

(4) 酒会壺（第8・9図）

酒会壺は蓋と身がある。器形は、口縁部は立ち上がり口唇部は口禿げとなる。肩部から胴部は張り底部で窄まる。高台の暈付は露胎（図64・65）で底部は落とし底である（図66）。文様は無文（図62）と肩部に圈線が廻る（図61）、蓮弁文を施す（図60・64・67・68）がある。蓋は図58・59・63の3点ある。図63は蓮弁文を施す。図58は蓋径25cmである。図59は外面に文様が施されるが構図は不明。撮み部は段を有し器壁が厚くなる。

(5) 瓶（第7図）

図57は把手をもつ瓶と思われる。肩部最上部に花文を施し、その直下に圈線を廻らす。さらにその下部に花文を施す。

第1表-1 青磁観察一覧

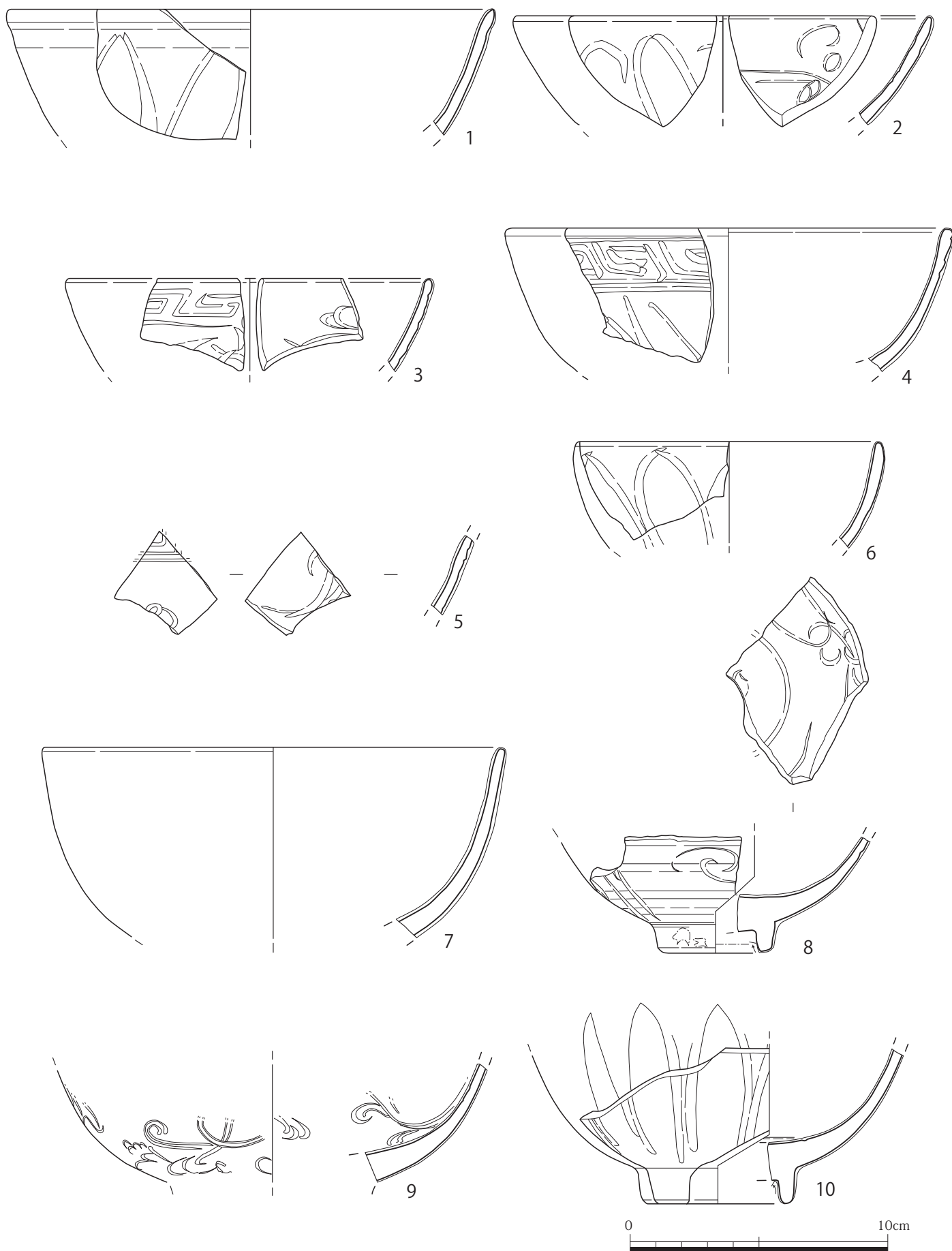
第図版	番号	器種	名称	分類	口径 底径 器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項
第2図・図版1	1	碗	蓮弁文	I	19.0 — —	淡灰白色の微粒子	淡緑色	なし	直口口縁。口唇部は舌状を呈す。片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施す。
	2				16.0 — —	淡灰白色の微粒子	明緑色	なし	外面は片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施す。内面は片切り彫りによる草花文を施す。
	3		雷文帯	II	14.4 — —	白色の微粒子	淡灰緑色	あり	口縁下部に雷文帯、その下部に片切り彫りに草花文を施す。内面も同様に草花文を施す。
	4				16.4 — —	淡灰白色の微粒子	明緑色	なし	口縁下部に雷文帯、その下部に圈線を廻らす。内外面胴部に片切り彫りに蓮弁文を施す。
	5				— — —	白色の微粒子	淡緑色	なし	口縁下部に雷文帯、内外面胴部に片切り彫りによる草花文を施す。
	6		蓮弁文	I	12.0 — —	淡灰色の微粒子	明緑色	なし	片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施す。
	7		無文	III	17.8 — —	灰色の微粒子	緑色	あり	外面はアバタ状である。大振りの碗である。
	8		雷文帯	II	— 4.0 —	灰色の微粒子	明緑色	なし	内外面とも片切り彫りによる草花文を施す。高台内面まで施釉する。
	9		刻花文	IV	—	淡灰白色の微粒子	緑色	なし	内外面に片切り彫りによる草花文を施す。大振りの碗で鉢の可能性もある。
	10		第3図・図版2	蓮弁文	I	— 5.4 —	淡灰色の微粒子	淡緑色	あり
11	— 5.9 —	淡灰色の微粒子				深緑色	なし	外面腰部に片切り彫りによる蓮弁文が施される。見込みは圈線がみれる。	
12	— 6.0 —	淡灰色の微粒子				緑色	なし	外面は片切り彫りによる幅広の蓮弁文を描く。見込みは花文を描く。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
13	— 6.0 —	灰色の微粒子				淡緑色	あり	外面は片切り彫りによる幅広の蓮弁文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
14	— 5.6 —	灰色の微粒子				淡灰緑色	あり	外面に蓮弁文の弁尻が僅かにみられる。見込みに花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
15	— 6.6 —	淡灰白色の微粒子				淡オリーブ色	なし	外面は蓮弁文を施す。蓮弁はやや稜がある。見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
16	— 5.4 —	灰色の微粒子				淡灰緑色	あり	外面は蓮弁文を施す。蓮弁はやや稜がある。見込みは花文を施す。暈付のみ露胎する。	
17	底部	A	— 6.0 —	白色の微粒子	明緑色	なし	見込みに花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎ。		
18			— 5.2 —	灰色の微粒子	緑色	なし	見込みに花文を施す。外底は全釉である。		
19			— 5.8 —	灰色の粗粒子	淡緑色	なし	見込みに花文を施す。外底は全釉である。		
20			— 7.6 —	淡灰色の微粒子	緑色	なし	見込みに花文を施す。外底は目跡釉剥ぎである。		
21	第4図・図版3	底部	C	— 5.5 —	灰色の微粒子	淡緑色	なし	外面に蓮弁文の弁尻が見られる。見込みは花文を施す。外底は一部釉がかかる。	
22				— 5.6 —	灰色の微粒子	淡灰色	なし	外底は無釉で、暈付内面途中まで施釉する。	
23				— 6.0 —	白色の粗粒子	淡青緑色	あり	見込みに花文を施す。外底は露胎である。	

第1表-2 青磁観察一覧

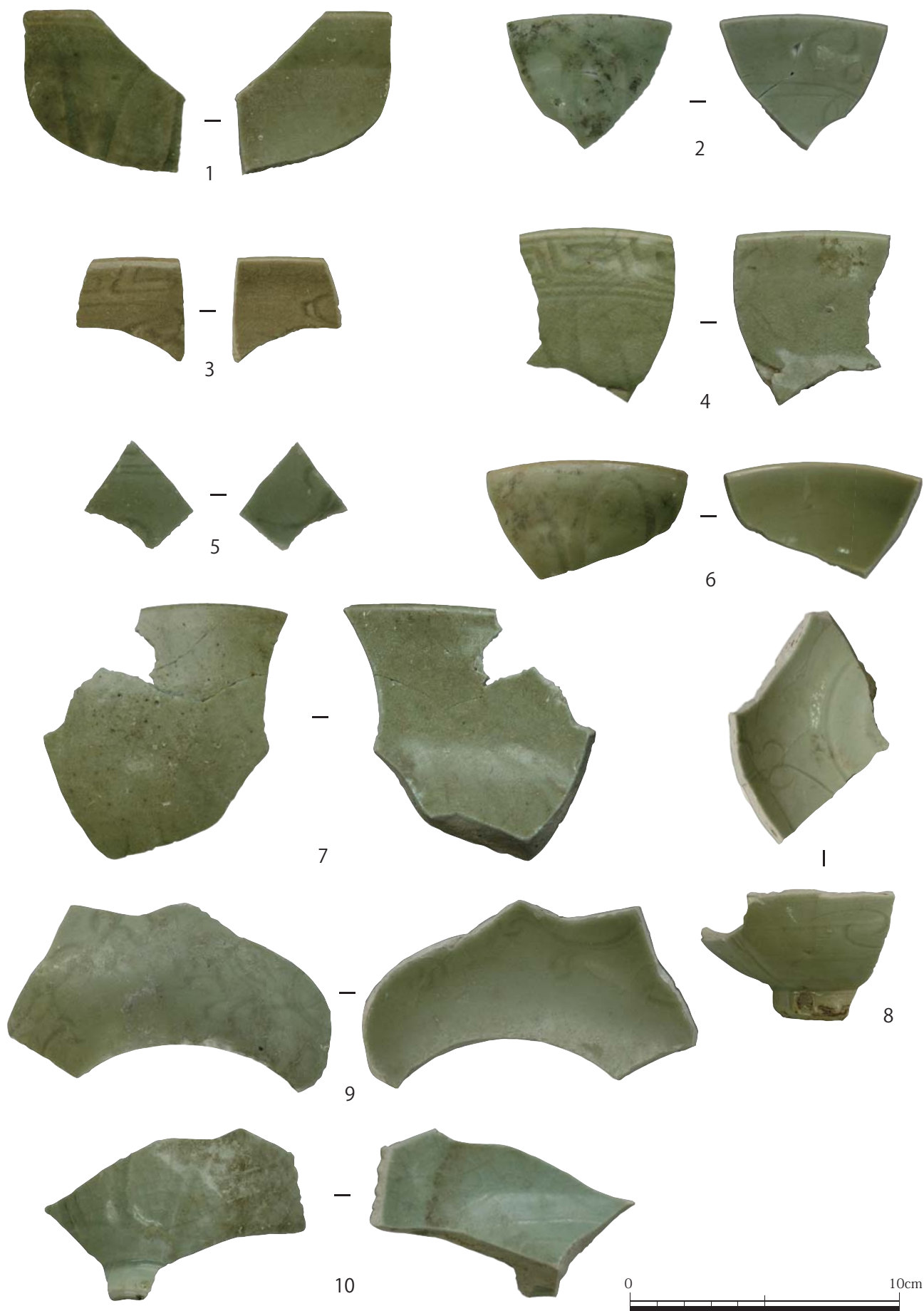
第図版	番号	器種	名称	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観 察 事 項	
第4図・図版3	24	Ⅲ	底部	Ab	6.4	灰色の微粒子	灰色	なし	見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	25		口折	I	7.6	淡灰色の微粒子	緑色	あり	内面に草花文を施す。見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	26		外反	Ⅱ	12.2	淡灰色の微粒子	灰緑色	あり	腰部で窄まり胴部は開き口縁部は外反する。釉の発色が悪い。	
	27		腰折	Ⅲ	6.8	淡灰色の微粒子	淡緑色	なし	腰部が屈曲することから腰折れ皿と思われる。内外面に花文を施す。見込みは文様が不鮮明である。外底は目跡釉剥ぎである。	
	28		外反	Ⅱ	6.6	淡灰色の微粒子	緑色	あり	腰部で窄まり胴部は開き口縁部は外反する。	
	29				6.2	淡灰色の微粒子	淡緑色	あり	腰部で窄まり胴部は開き口縁部は外反する。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	30		口折	I	5.6	灰色の微粒子	深緑色	あり	口折皿と思われる。外面は幅広の蓮弁文を施す。見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
第5図・図版4	31	Ⅲ	底部	Aa	5.8	白色の微粒子	淡灰緑色	あり	外面は蓮弁文が施される。外底は目跡釉剥ぎである。	
	32		口折	I	5.8	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	外面は蓮弁文が施される。外底は全釉で中心部に砂痕が残る。	
	33		腰折	Ⅲ	7.2	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	外面は蓮弁文が施される。見込みは花文と思われる。外底は目跡釉剥ぎである。	
	34		底部	Aa	7.1	淡灰色の微粒子	淡緑色	なし	外面は蓮弁文が施される。見込みは花文を施す。見込みは目跡釉剥ぎである。	
	35			Ab	8.6	白色の微粒子	明青色	あり	見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	36				7.0	白色の微粒子	明青色	なし	見込みは花文を施す。外底は目跡釉剥ぎである。	
	37				6.0	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	見込みに花文が施されている。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	38			Aa	5.4	淡灰白色の微粒子	淡青緑色	なし	外面に文様が施されるが不明。見込みは双魚文が施される。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	39				6.0	灰色の微粒子	淡青緑色	あり	釉の発色が悪い。外面は蓮弁文の弁尻が見られる。見込みは花文を施す。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	40			Ab	8.4	淡灰色の微粒子	深緑色	なし	見込みに花文を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎである。高台を有する盤の可能性もある。	
	41				6.2	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	見込みは菊花文が施される。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
42	6.2	淡灰色の微粒子			緑色	なし	釉の発色が悪い。外底は蛇の目釉剥ぎである。			
第6図・図版5	43	Ⅲ	碗	底部	B	7.0	灰色の微粒子	オリーブ釉	なし	外底は全釉と思われる。
	44		底部	Ab	4.8	淡灰色の微粒子	淡緑色	なし	見込みは双魚文とおもわれる。外底は蛇の目釉剥ぎである。	
	45				5.6	灰色の微粒子	深緑色	なし	見込みは花文を施す。外底は目跡釉剥ぎである。	
	46				Bb	7.1	淡灰色の微粒子	淡緑色	なし	外底は無釉である。

第1表-3 青磁観察一覧

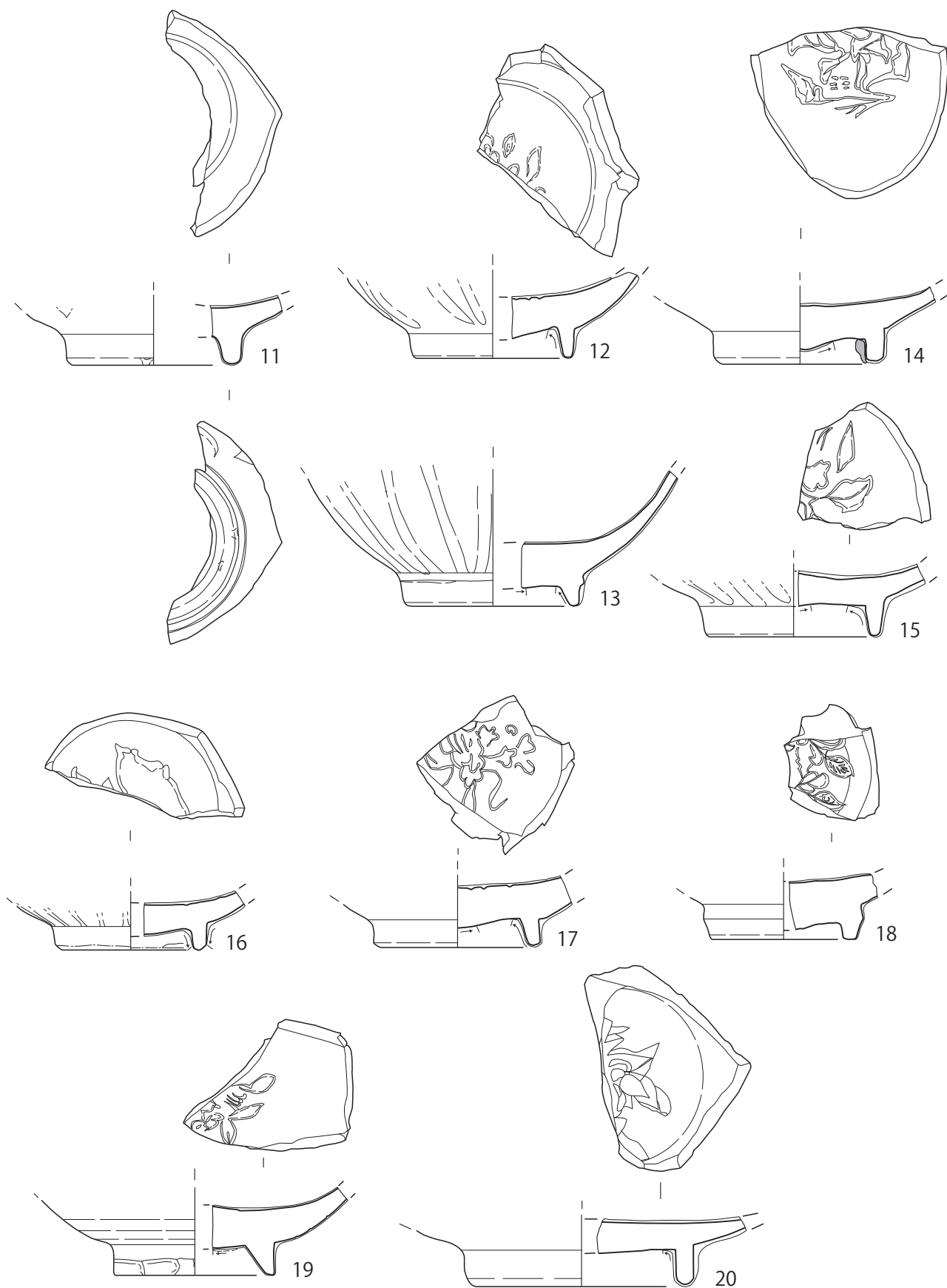
図版	番号	器種	名称	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	観察事項
第6図・図版5	47	皿	底部	Ba	6.2	淡灰白色の微粒子	緑色	あり	外面は蓮弁文が施される。見込みは花文を施す。見込みは無釉で畳付外面まで施釉する。
	48	碗	蓮弁文	B	6.0	白色の微粒子	淡緑色	あり	内面に草花文?を施す。見込みは圏線と花文を施す。外面は蓮弁文である。
	49	皿	口折	I	5.0	淡灰色の微粒子	淡緑色	なし	外面は蓮弁文を施す。見込みは花文を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎである。
	50		底部		5.8	白色の微粒子	淡灰緑色	あり	外底は無釉である。
	51			Bb	4.6	灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	見込みに花文を施す。外底は無釉である。
	52			Ba	7.6	淡灰色の微粒子	明緑色	なし	外面は窠彫りによる蓮弁文が施される。外底は無釉である。
第7図・図版6	53	盤	口縁部		24.0	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	あり	窠描きによる幅約1cmの蓮弁文を施す。
	54				24.0	灰色の微粒子	茶色	なし	窠描きによる幅約2cmの蓮弁文を施す。
	55	底部		11.6	白色の微粒子	淡灰緑色	あり	外面に窠彫りによる蓮弁文を施す。蓮弁稜を有する。	
	56			11.5	白色の微粒子	深緑色	なし	内面に窠描きによる幅約1cmの蓮弁文を施す。外底は目跡若しくは蛇の目釉剥ぎと思われる。	
	57		瓶	胴部	-	白色の微粒子	淡青緑色	あり	肩部に把手痕が残る。頸部に花文?を施し、その下部に圏線を廻らす。内面も施釉する。
第8図・図版7	58	蓋	口縁部		25.0	白色の微粒子	明緑色	なし	蓋の端部は若干上部に反る。釉は内面端部の部分まで施釉する。
	59		胴部	-	灰色の微粒子	灰色	なし	撮みの部分は段を有す。文様が施されるが不鮮明ではっきりしない。内面は露胎である。器壁が厚い。	
	60	酒会壺	口縁部		-	淡灰色の微粒子	淡灰緑色	なし	肩部に圏線を廻らし、その下部に窠彫り蓮弁文を施す。
	61				21.5	淡灰色の微粒子	緑色	なし	口縁部は直立し、口唇部は尖り露胎である。肩部に圏線を廻らす。
	62			24.2	淡灰色の微粒子	緑色	あり	口縁部は直立し、口唇部は尖り無釉である。	
	63		蓋	胴部	-	灰色の微粒子	緑色	なし	窠彫りによる蓮弁文で稜をもつ。内面は無釉である。
第9図・図版8	64	酒会壺	底部		18.2	灰色の微粒子	淡青色	なし	片切り彫りによる蓮弁文を施す。高台は露胎である。内面も施釉する。
	65				14.0	淡灰色の微粒子	明緑色	あり	底部の落とし底が残る。畳付は露胎となる。
	66				-	灰色の微粒子	緑色	なし	底部。外底に窪む。落とし底で見込みは蛇の目釉剥ぎである。外底は全釉に近く部分的に露胎がある。
	67			胴部		-	灰色の微粒子	緑色	あり
	68				-	灰色の微粒子	淡オリブ釉	なし	文様の構成は胴上部は花文?で、その下に圏線を廻らし、さらにその下部に片切り彫りによる蓮弁文を施す。内面も施釉する。



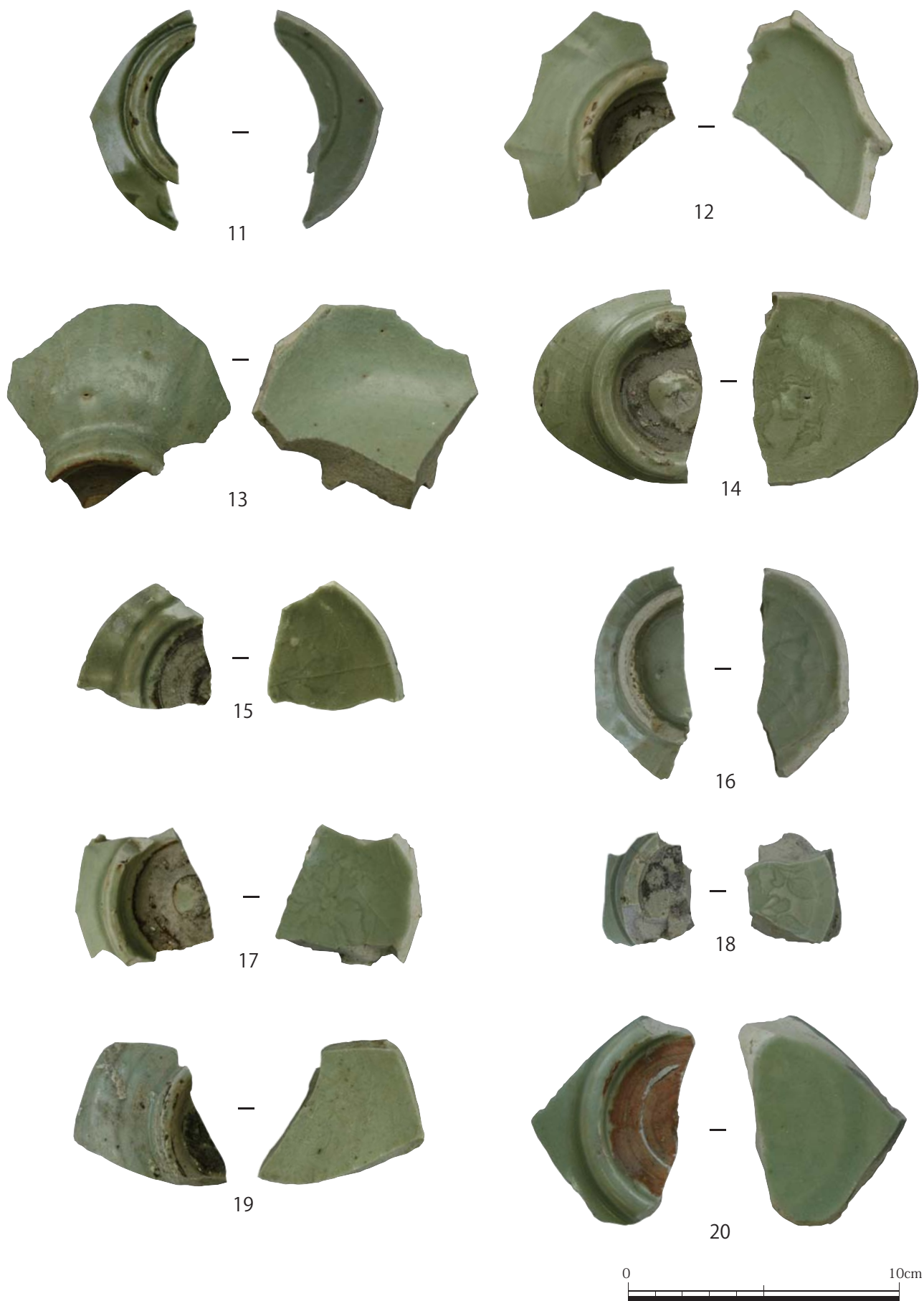
第2図 青磁1 (碗)



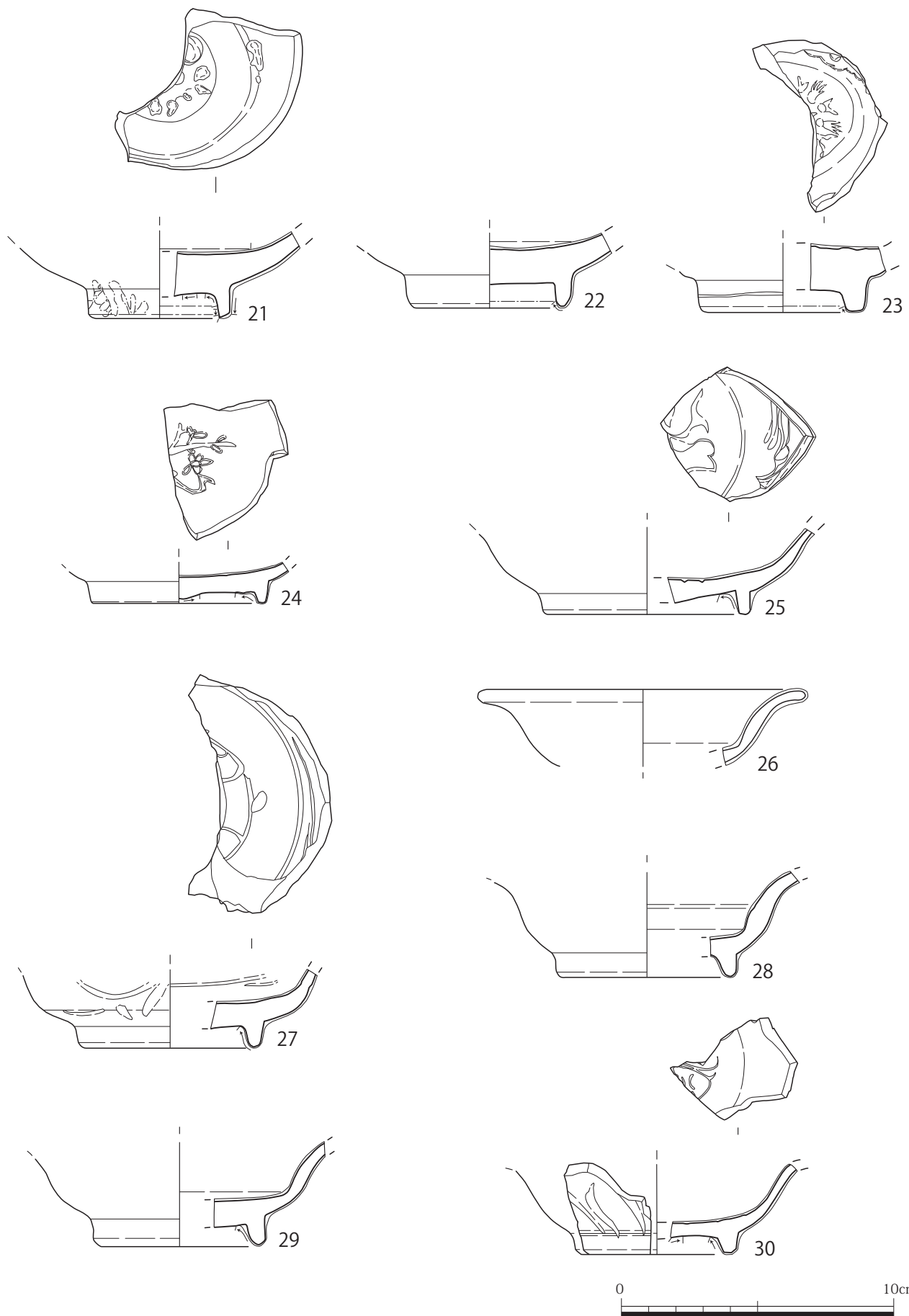
図版1 青磁1 (碗)



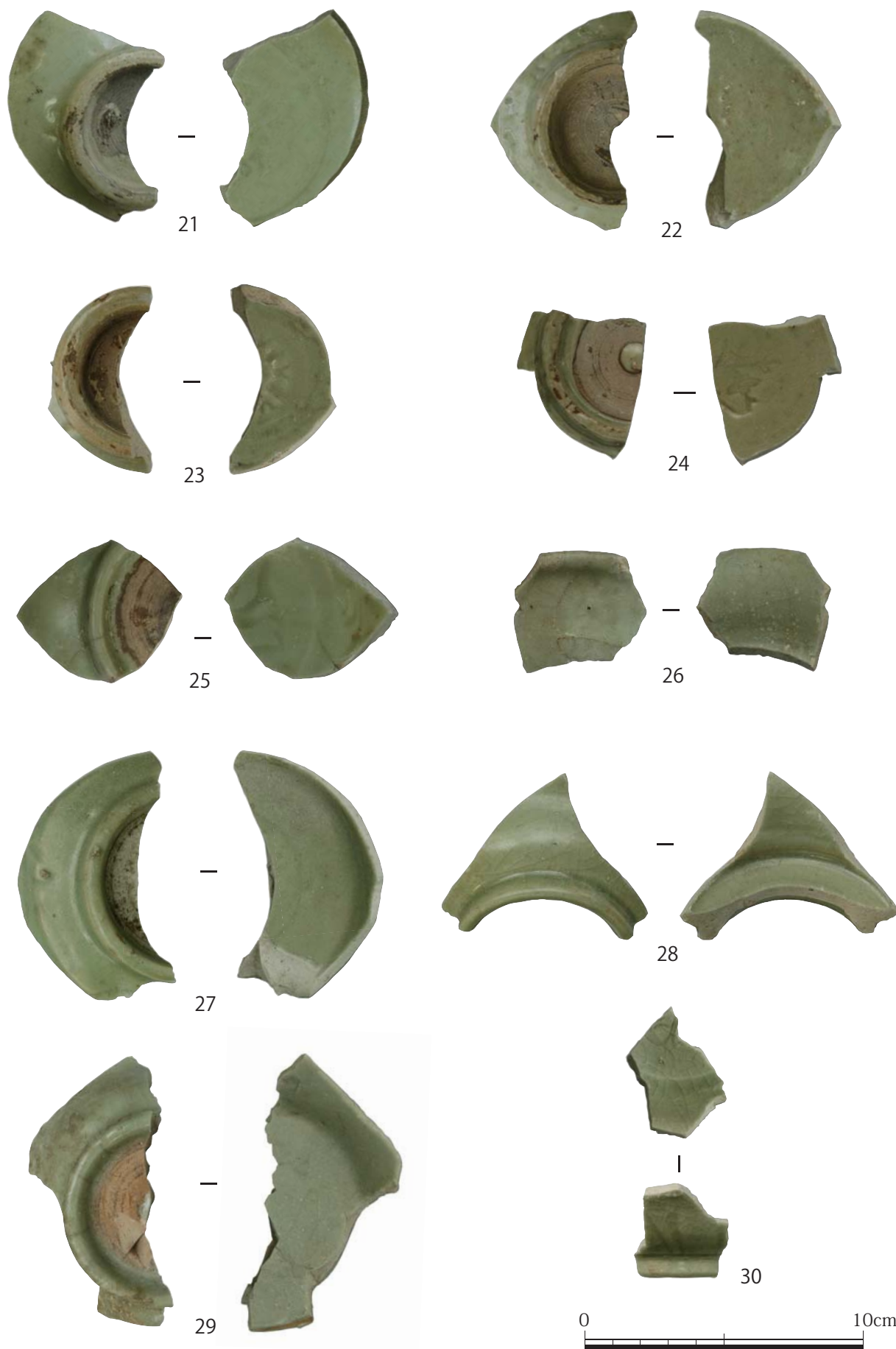
第3図 青磁2 (碗)



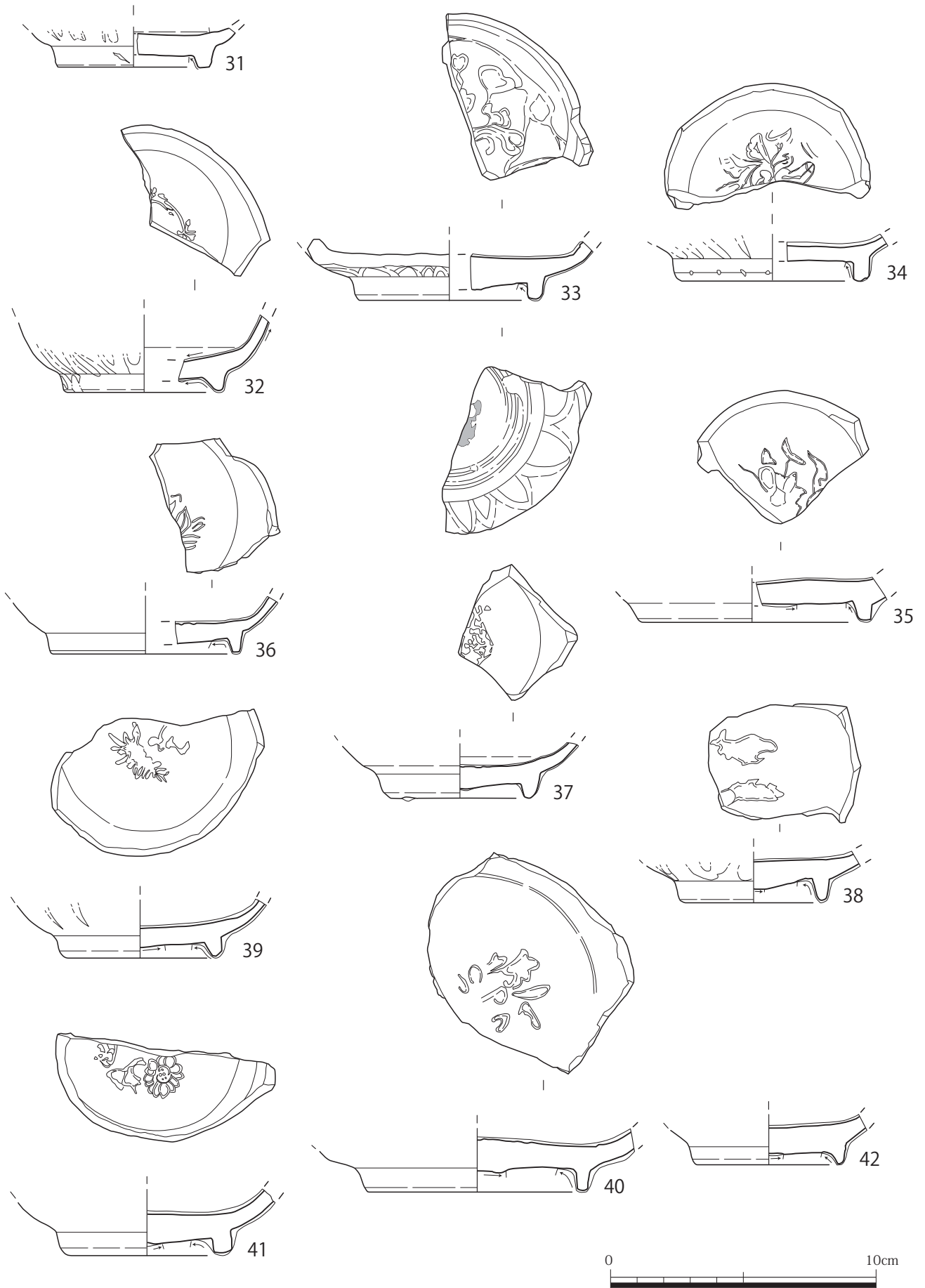
図版2 青磁2 (碗)



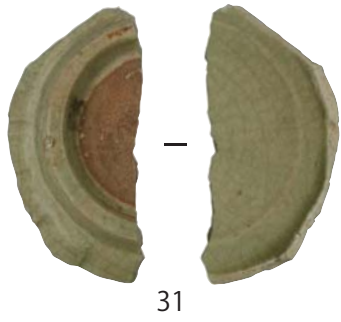
第4図 青磁3 (碗・皿)



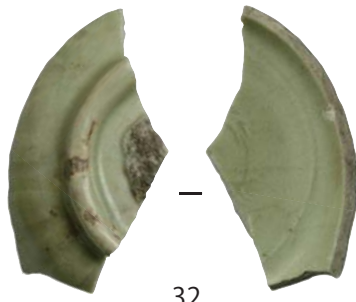
図版3 青磁3 (碗・皿)



第5図 青磁4 (皿)



31



32



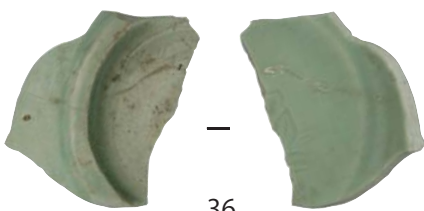
33



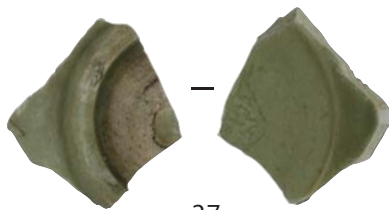
34



35



36



37



38



39



40



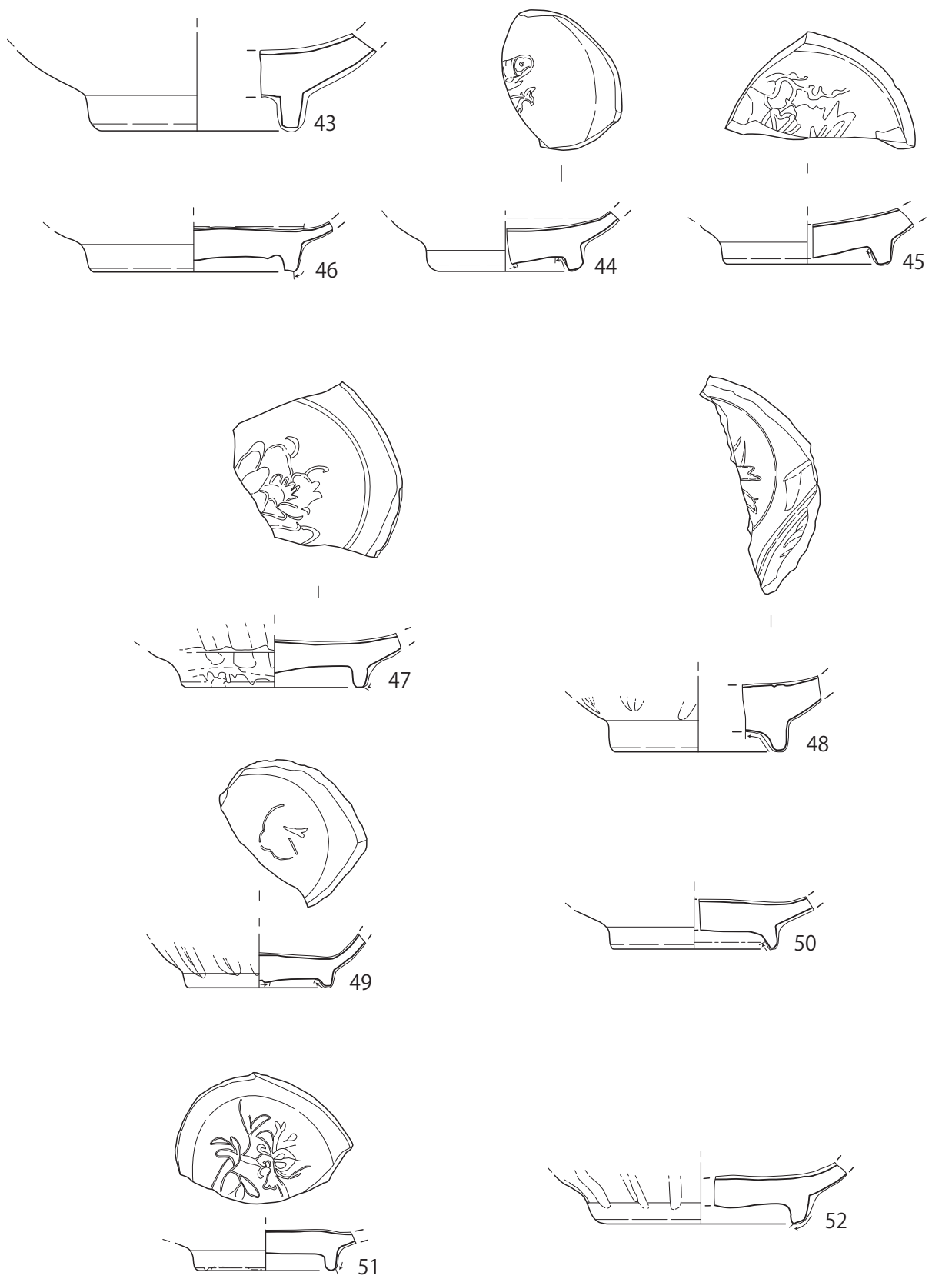
41



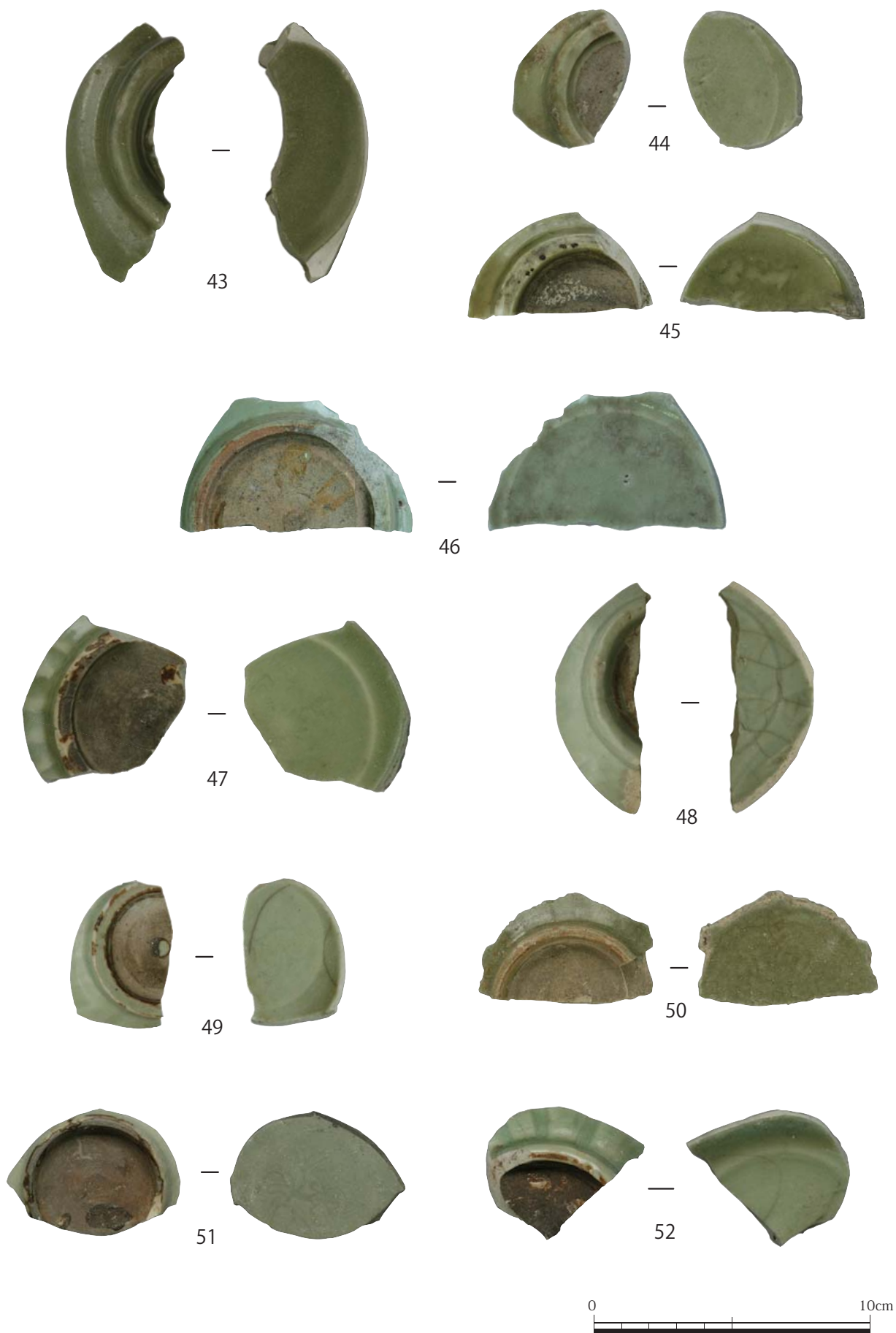
42



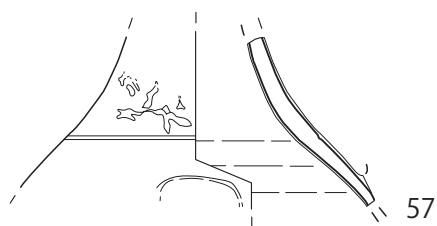
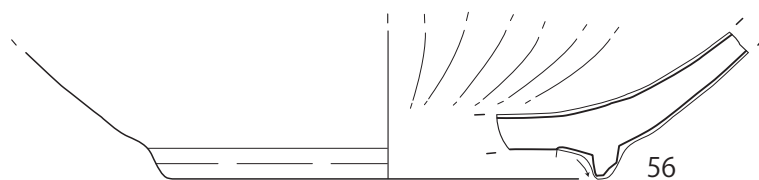
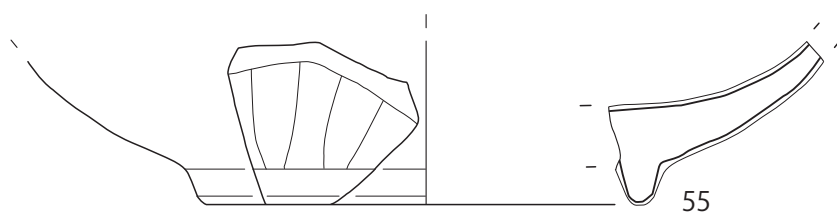
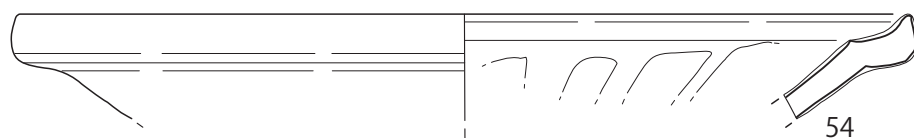
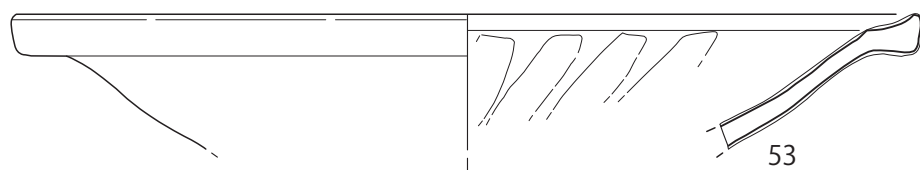
図版4 青磁4(Ⅲ)



第6図 青磁5 (碗・皿)



図版5 青磁5 (碗・皿)



第7図 青磁6 (盤・瓶)



53



54



55



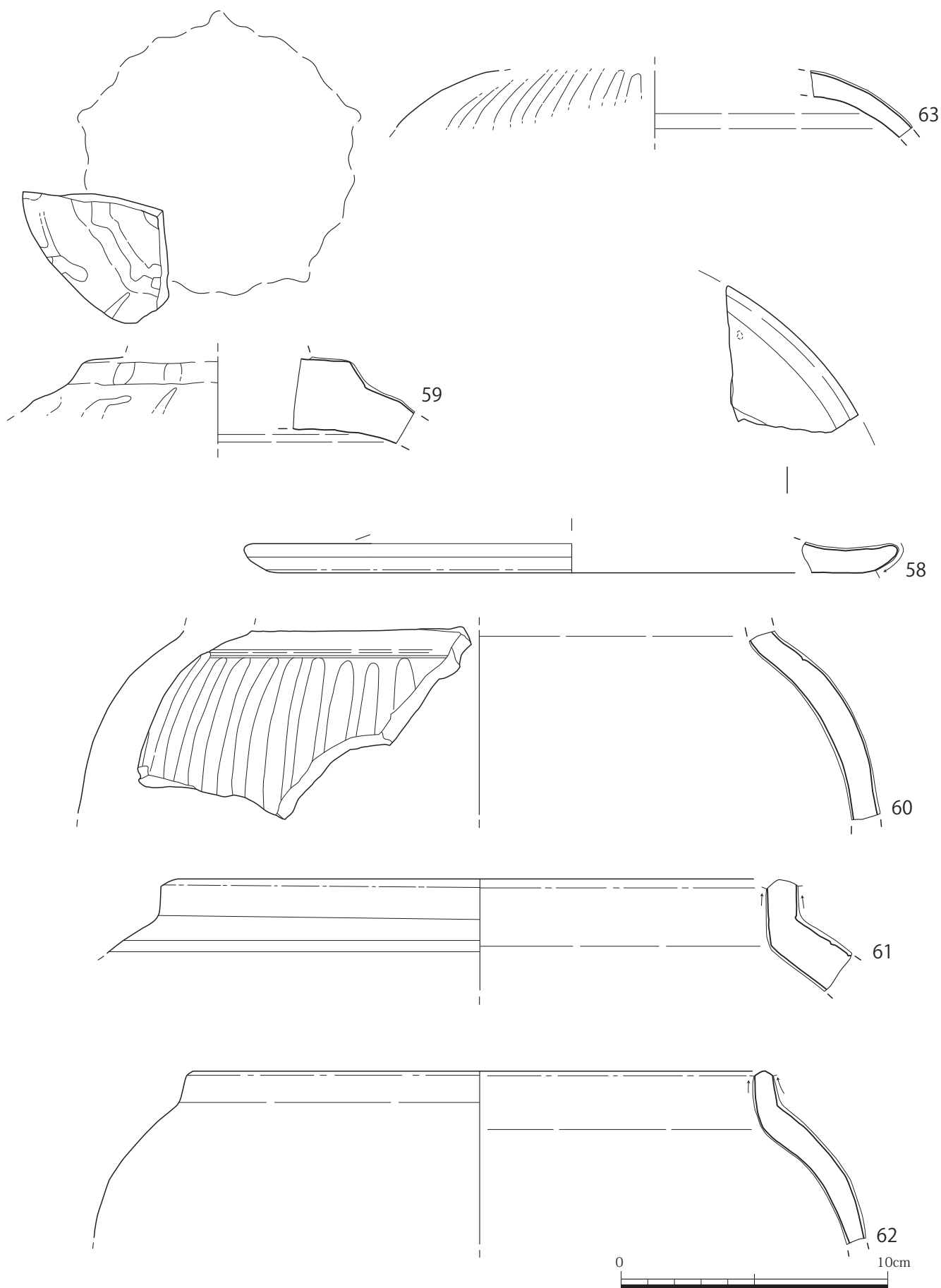
56



57



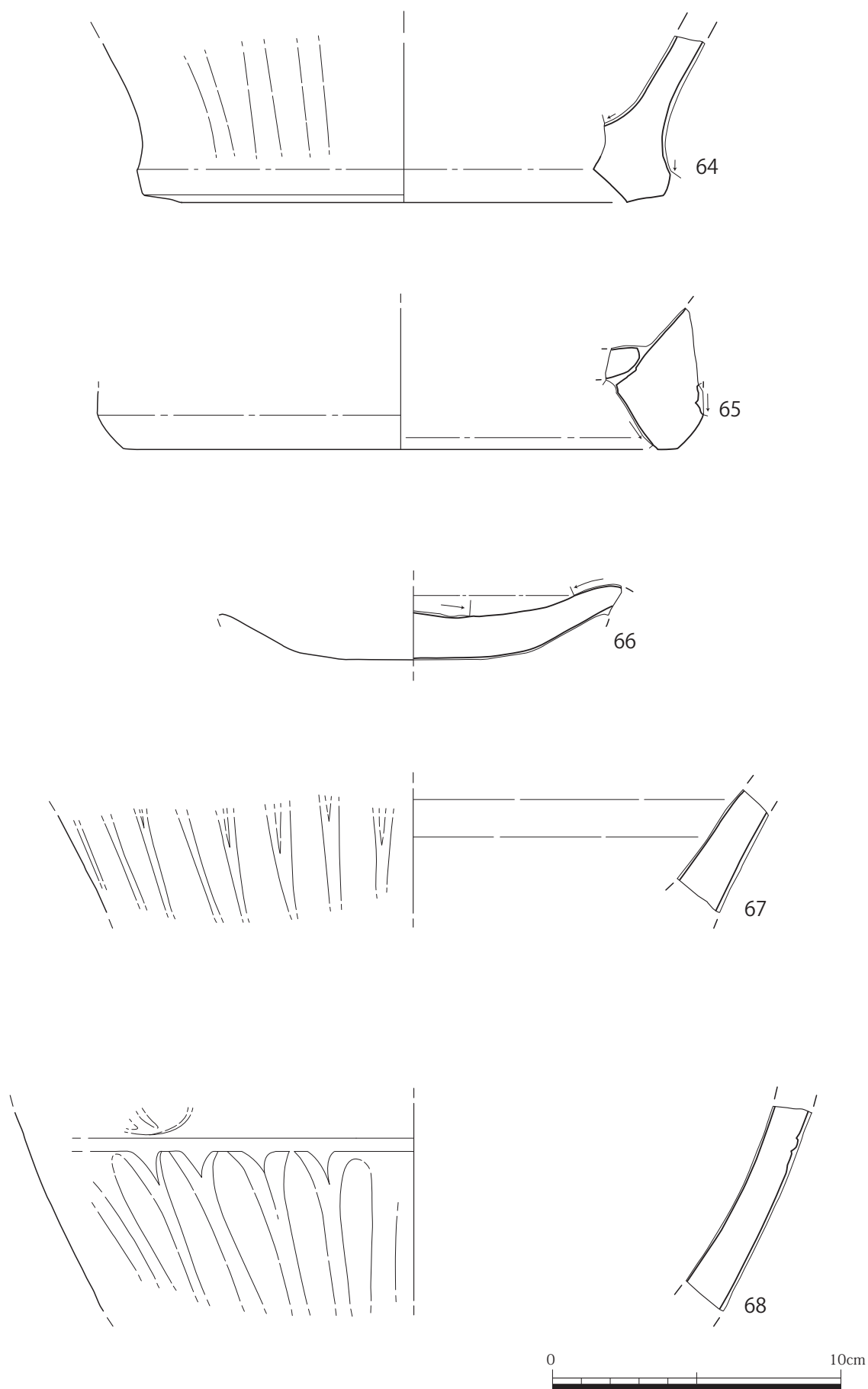
図版6 青磁6 (盤・瓶)



第8図 青磁7 (酒会壺(身・蓋))



図版7 青磁7 (酒会壺(身・蓋))



第9図 青磁8 (酒会壺・大瓶)



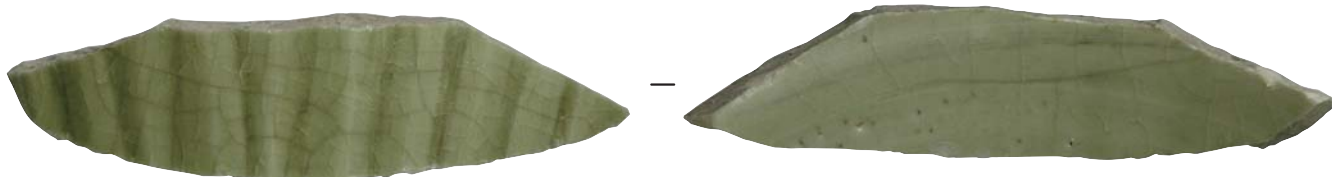
64



65



66



67



68



図版 8 青磁 8 (酒会壺・大瓶)

2. 染付 (第 10 図)

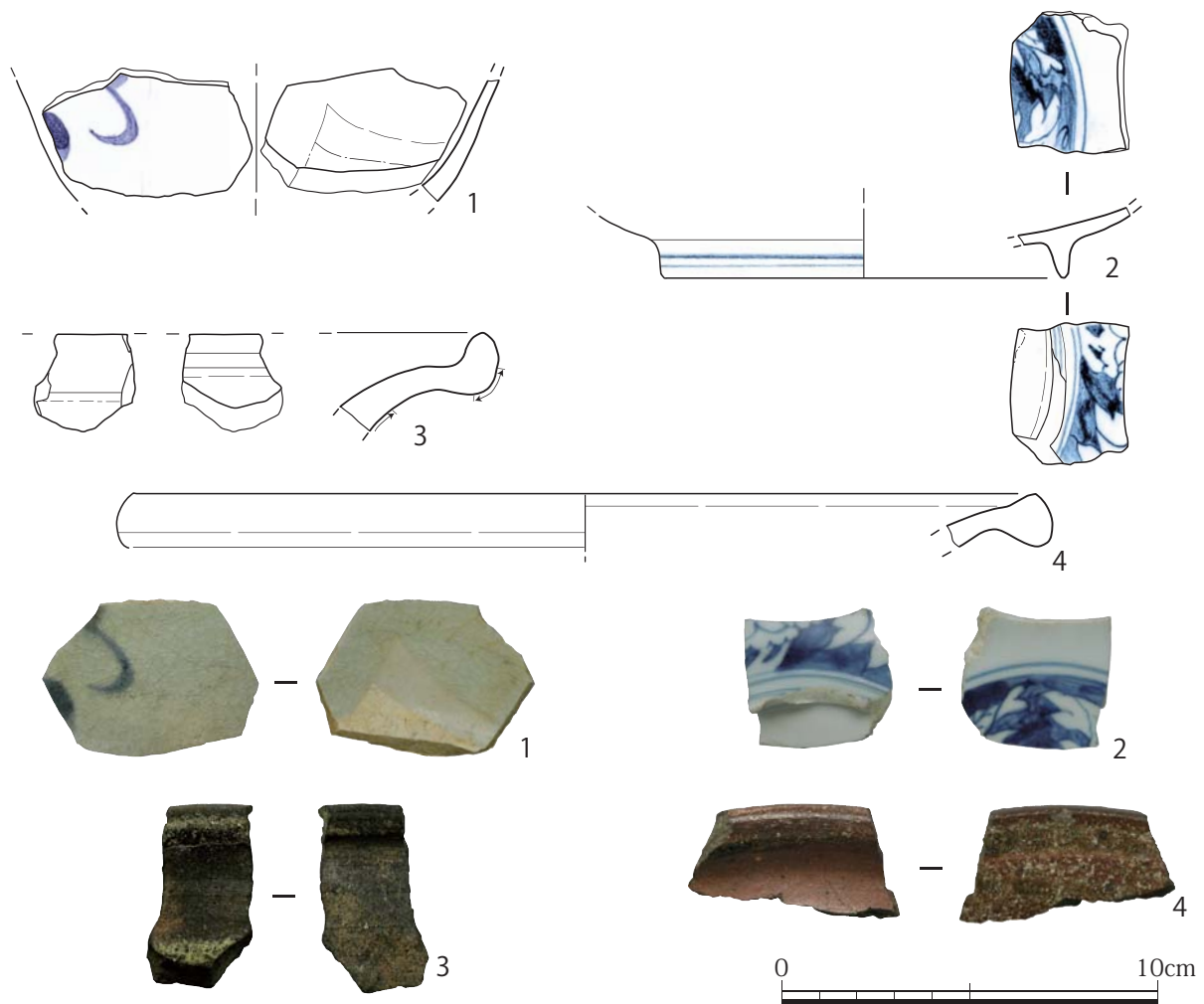
図 1 は腰折れのタイプの碗の胴部である。外面に文様が施されるが、破片のため、全形は窺えない。呉須の発色は悪く、釉は貫入が見られ、青みを帯びる。見込みまでは釉が施されてなく、胎土は乳白色で、陶器に近い。最大胴径 12.8cm を測る。

図 2 は皿の底部である。文様は外面に草花文、高台に 2 本の圈線、内面は見込みに外面と同じような草花文を施す。呉須の発色は鮮やかである。畳付は研磨され、素地は白色で、器厚 0.3cm と薄く、前者に比べて良質である。底径は 10.8cm を測る。

3. タイ産褐釉陶器 (第 10 図)

壺の口縁部が 2 点出土した。図 3 は外反口縁で、やや厚手である。口縁は唇近くで、「く」字状に屈曲するもので、口唇はやや丸味を帯びる。小破片で口径は不明。釉は外面の口唇と頸部に暗黒褐色を施す。焼成良好である。器厚は 0.7 ~ 0.8cm を測る。

図 4 も前者と同じく口縁部は外反し、口径 24cm を測る。口縁部の断面は三角状に肥厚する。釉は明茶褐色で内面と外面の頸部に部分的に見られ、外面の釉は厚く、暗灰褐色を呈する。焼成は良好である。器厚は 0.6cm と前者より薄い。口縁部の形状は首里城跡京の内出土のものと酷似することから 14 世紀後半 ~ 15 世紀の時期のものと思われる。



第 10 図・図版 9 染付・タイ産褐釉陶器

4. 褐釉陶器 (第 11 図)

壺の大小が採集された。

図 1 は器厚 0.4cm と薄く小振りの壺である。ナデ肩で、口唇は丸味を帯びるもので、口径 9cm を測る。釉は白釉で外面の全面、内面の頸部ではまだらに施し、口唇は無釉である。また、外面の肩部に暗緑釉で草花文を施す。器面調整は内面に轆轤痕が見られ、胎土は紫灰褐色を呈し、緻密である。

図 3 は頸部が最小径 17cm、最大径 29.8cm を測るもので、頸部に縦耳が貼り付ける。胴径から 4 個と推定され、径 0.9cm の丸い粘土紐を内側から巻き上げるように貼り付けている。釉は内外面に施され、釉色は暗灰緑褐色を呈する。焼成良好で、器厚 0.5cm の薄手である。

図 5 は膨らみのある壺の胴部である。外面に沈線文を 1 本施す。焼成は良好で、内面はハケ目が顕著に見られる。釉は外面に暗褐色、内面は部分的に黒釉を施す。素地は明灰褐色を呈し、胎土は他の褐釉陶器に比べて、質が良い。器厚は 0.5cm、最大胴径 30.3cm を測る。首里城京の内出土の茶壺 (第 74 図 15) に類似する。

図 6 は器厚 0.5cm、径 10.0cm の小振りの壺の底部で、やや開くタイプである。釉は外面に茶褐色釉を底面より約 5cm 上部まで施されている。焼成は良く、器面調整は内面に轆轤痕が見られる。

図 2・4・7 は口縁部断面が方形を呈するいわゆるルソン壺と呼称されるタイプの胴部と底部である。

図 4 は底径 14cm の上げ底で、図 7 よりはくびれが強い。内外面に暗灰褐色で施釉する。焼成良好である。器面調整は表裏面に轆轤痕が見られるが、特に底部近くは明瞭である。器厚 0.6cm とやや厚い。

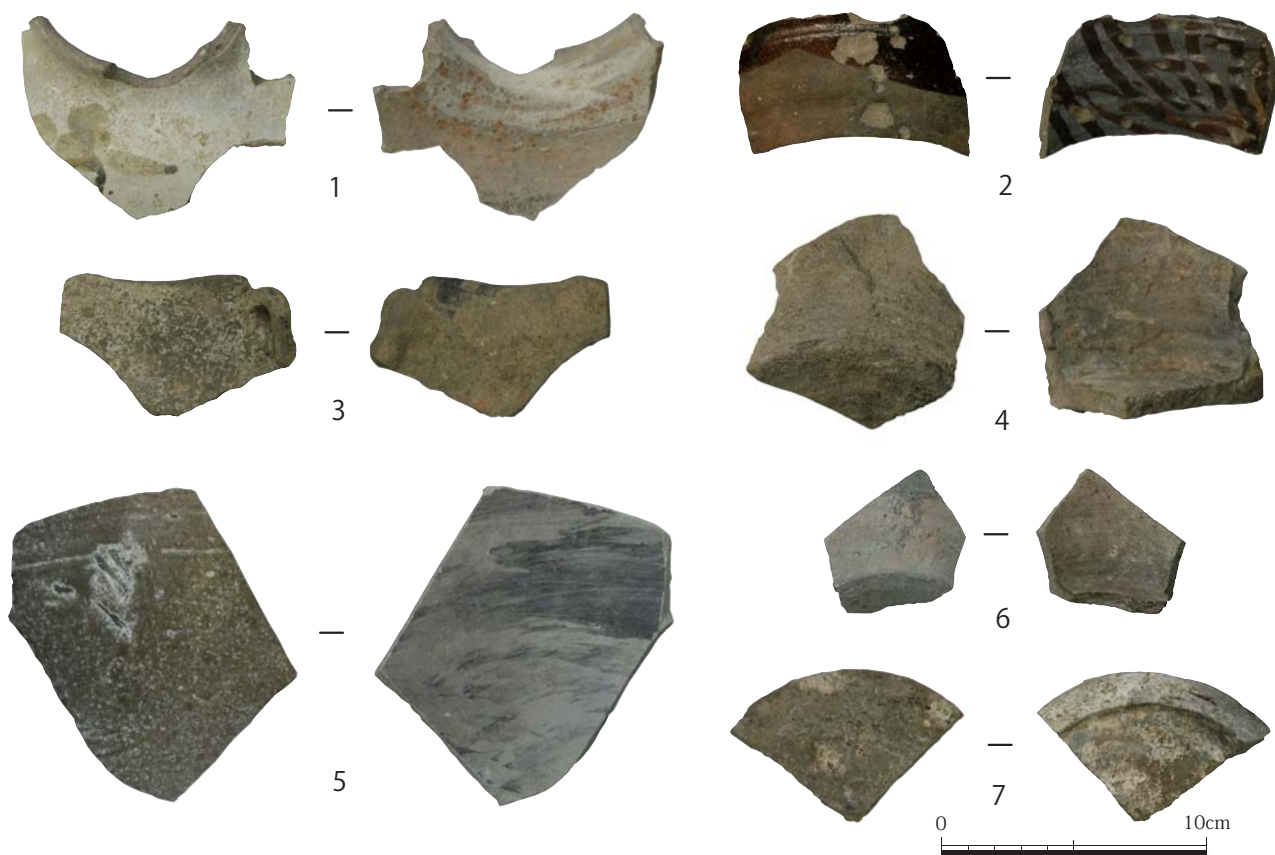
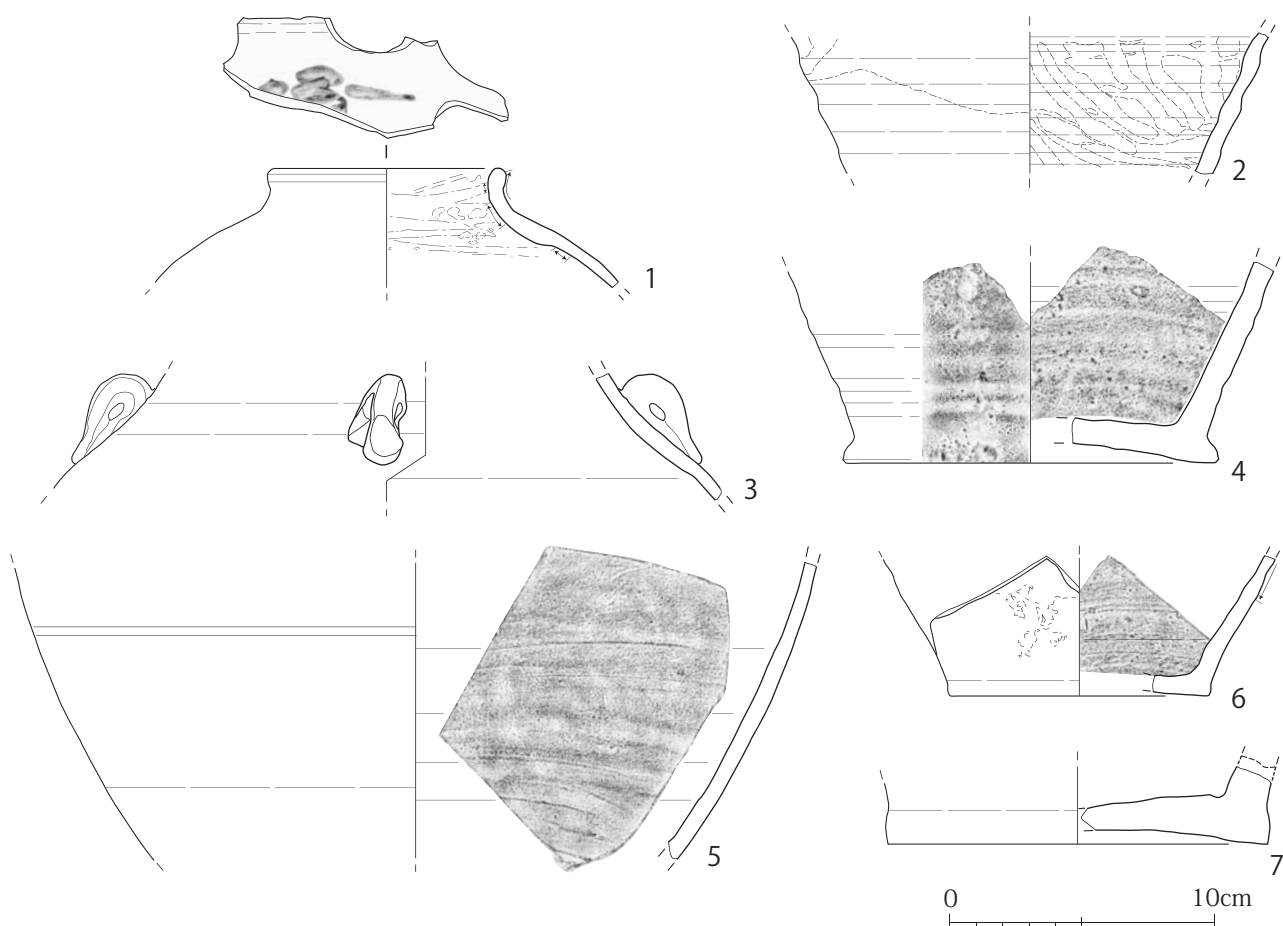
図 7 は底径 14.6cm のやや上げ底で、立ち上がりはわずかにくびれる。内外面に暗灰緑色釉を施す。焼成は良く、素地は暗灰褐色で、1mm 大の石英を若干混入する。

<引用文献>

金城亀信 (編) 1998.3 「首里城跡一京の内跡発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書』第 132 集 p.208 沖縄県教育委員会 :

第 2 表 拾得遺物出土一覧

種類 部位	カムイヤキ 壺	青磁											染付		褐釉	タイ	合計
		碗			皿				盤	瓶	酒会壺		碗	皿	壺	壺	
		①	②	③	①	②	③	不明	鈔縁		身	蓋					
口		3	2	2		1			2		2	1			1	2	16
胴	1	1	2							1	4	2	1		4		16
底		6	8	18	3	5	6	32	2		3			1	3		87
合計	1	10	12	20	3	6	6	32	4	1	9	3	1	1	8	2	119



第11図・図版10 褐釉陶器

5. カムイヤキ (第 12 図)

今回、紹介する資料はカムイヤキ 1 点である。残存資料から大型の壺と想定される。肩部から胴部にあたる部位で口縁部の形状は破損のため不明だが、おそらく長頸の壺の口縁部と推測される。

胴径は残存部、最大直径 24cm、器厚は 0.8cm。素地の色調は表面が茶褐色を帯びた灰色を呈し、断面は灰色から赤味のある灰色に移行する。内面は灰色の色味が強い暗灰色である。焼成は良く硬質。文様は沈線文が一条、胴下部を圍繞すると思われる。カムイヤキの文様は波状沈線文が多く代表的だがその大体が中型の壺で、無文のものもカムイヤキを大量に出土する遺跡では多くみられる。

器面調整は表面全体にヘラナデの痕が、微かにみられる。内面は轆轤痕と叩きの痕が、明瞭に残されている。出土地不明。本遺跡近郊の後兼久原遺跡 (2003) では 649 点のカムイヤキが出土しており参照されたい。

<参考文献>

新東晃一 青崎和憲 (編) 鹿児島県大島郡 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 I - 昭和 59 年度重要遺跡確認調査 -』 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (3) 1984 年

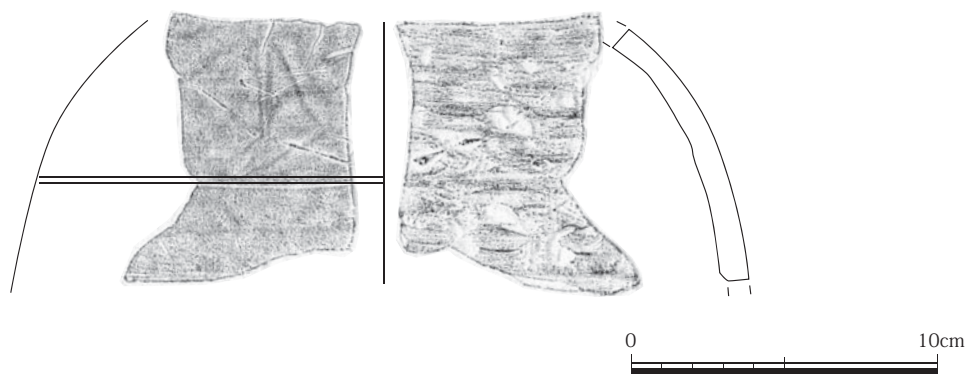
大西智和 「南島須恵器の問題点」 『南日本文化』 第 29 号 鹿児島短期大学附属南日本文化研究所 平成 8 年

山城安生 (編) 沖縄県北谷町教育委員会 『後兼久原遺跡 - 庁舎建設に係る文化財発掘調査報告 -』 北谷町文化財発掘調査報告書 第 21 集 2003 年

池田栄史 「類須恵器と貝塚時代後期」 『考古資料大観 第 12 巻 - 貝塚後期文化 -』 小学館 2004 年

鹿児島県大島郡 伊仙町教育委員会 『カムイヤキ古窯跡群 IV - 平成 13 年度から平成 16 年度 カムイヤキ古窯跡群発掘調査等事業 -』 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 (12) 2005 年

新里亮人 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」 『東アジアの古代文化』 130 号 編集：古代学研究所 大和書房 2007 年



第 12 図 カムイヤキ



図版 11 カムイヤキ

北谷町文化財調査報告書 第32集

ちや たん ぐすく
北 谷 城

—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—

〈付篇〉 拾得遺物 —伊礼原遺跡調査区内—

編 集：北 谷 町 教 育 委 員 会

発行年：2010年（平成22年）3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3490

印 刷：光 文 堂 印 刷 株 式 有 限 公 司

〒901-1111 沖縄県南風原町字兼城577番地

TEL 098-889-1131
